

# 黄前久美子、最後の夏

ろっくLWK

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「本物の特別になりたい、麗奈と同じように」

全国大会金賞を目指す久美子達は最上級生となり、ついに最後の年を迎える。春になり実力派の新生入部したことで部の空気はさらに熱を帯びるが、久美子は天才肌の一年生・芹沢雫の存在に自分のユーフォプレイヤーとしての立場を脅かされ、激しい競争の渦中にあつた。三年生として進路に、恋に、そして部活に、熱く燃え輝く少女達の夏がまた、やって来る――

・「響け！ユーフォニアム」二次創作小説。

・アニメ版の設定等をベースに、アニメ2期最終回の約1年後から物語は始まります。

・性質上、原作のネタバレ、オリジナルキャラクターの複数名登場、独自の設定などがあります。また設定の一部は、原作小説・アニメ版の混成となっております。

・原作小説「北宇治高校吹奏楽部、波乱の第二楽章」以降の設定とは異なる、パラレル設定となっております。

目次

プロローグ	1
一. さんどめファンファーレ	6
二. かなでるカンタービレ	56
三. もがくよアツファンナート	99
四. みつけるフェリチータ	162
エピローグ	245

## プロローグ

「続きまして、結果発表に移ります」

その言葉に場内のざわめきは収まり、ぴんと張り詰めた静寂が降りる。

「では一番、」

一つ一つ、学校の名と賞とが読み上げられ、その度に歓声やため息があちこちから漏れた。

久美子はその間ずっと両手を握り顔を伏せ、ただひたすらに祈り続けている。

何に祈っているのか、それは久美子にもわかっていない。

何を祈っているのか、それだけは明確だった。どうか金賞を獲れまじょうように。ただそれだけを念じ続けていた。

隣で同じ姿勢を取りながら震える息遣いをしているのは、麗奈だ。彼女もまた一心に何かを念じ続けている。

「十二番」

その言葉に、久美子達の周りの空気が一瞬にしてぞわりと固まる。「神様っ」

小さく呟いたのはきつと葉月だろう。久美子の心臓は今にも張り裂けそうなほどぎゅうぎゅうと締め付けられていた。もうすぐ結果が出る。出てしまう。『北宇治高等学校』と読み上げられるその言葉が、やけに遅く響いて感じられる。

どうか、金賞を、金賞を。

久美子の、いや北宇治吹奏楽部全員のその願いは、

「銀賞」

スピーカーから響いたそのたった一言で、呆気なく打ち砕かれてしまった。

コンクールの会場である名古屋のホール前広場には既に、北宇治の一同が整列していた。

そのどこにも笑顔は無い。みな目元を泣き腫らし、あるいは悔しさを滲ませ、しかし視線は毅然として部長である彼女のその一身に注いでいた。

「ええと、まず、今日までみんな本当にお疲れさまでした」

そう言つて、部長である吉川優子は軽く一礼をした。

「今年こそは全国金賞を獲ろうと部員全員が一丸になって一生懸命頑張ってきましたが、結果は銀賞でした。正直とても悔しいです。もう一度コンクールがあるなら、やり直したいと思うくらい」

優子の目元にもまだ乾ききらない涙が滲んでいる。それを見つけた久美子はやり場の無い思いに唇を固く結んだ。

「でも、後悔はしていません」

優子はそうはつきりと口にする、部員全員の顔を見渡した。

「皆この日のために全力でやり切ったと思います。そして未熟な私を始め三年生について来てくれて、全国の大舞台で自分達の出来る最高の演奏が出来ました。結果は銀賞だったけれど、私が北宇治に入ってから三年間で一番、部全体が一つにまとまれた年だったと思つています」

「何それ、自画自賛つてやつ?」

横から口を挟んだのは副部長の中川夏紀だ。

「ああもう、せつかく最後の締めはキツチリやろうと思つてるんだから、あんたはしゃしゃり出て来ないでよ!」

さつきまでの凜とした姿勢はどこへやら。優子がいつもの調子で声を荒げると、一様に暗い顔をしていた部員達からも僅かな苦笑が漏れてくる。

「とにかく、結果は銀賞でも今年は最高の一年だったと思つています。私からは以上つてことで、次は副部長。あんたも何か一言くらい言いなさいよ」

水を向けられた夏紀は「げ」とあからさまに面倒臭そうな顔をした。そのまま優子に引つ張り出されるようにして部員達の前に立つと、

「えーっと、まあ、私は相変わらずこういう時に喋るのは向きじゃないけど」

夏紀はぼつが悪そうに頭をぼりぼりと掻き、それから部員たちへ真つすぐに向き直った。

「正直を言えば、悔しいって思いは私も部長と同じです。そしてそれはここにいる皆も感じてることだと思う。他の人からは全国来れただけでもすごいって言われるかも知れないけど、今年の私達は全国金賞を目標にここまでやって来たわけなんで、それが実現できなかったのはやっぱり悔しいです」

そんな夏紀の真摯な面持ちに、久美子は昨年彼女の姿を思い返す。

一年前の春、まるでやる気のある素振りを見せなかった夏紀は、秋のコンクール終了と同時に副部長に就任してから目を見張るほど練習熱心になっていた。朝練から居残り練習までこなし、時には傘木希美や鎧塚みぞれとも一緒に特訓を続け、自分の後輩である久美子にまで上達のコツを聞きに来ることもしばしばあった。その甲斐もあつて見る見るうちに上達し、今年の春になる頃には立派に三年生として恥ずかしくない演奏ができるまでになり、オーディションでは遂に久美子と共にコンクールメンバーの座を勝ち取り、二人並んで全国大会までを戦い抜いてきたのだった。

そこまでの姿を見て来た久美子だからこそ解る。夏紀の『悔しい』という言葉が、痛いくらい本気の言葉なのだということ。その悔しさは久美子にとっても我が身の事のように感じられた。

「けど、もうコンクールは終わってしまったので、この悔しさは晴らせません。だからこれからの事は新体制で動く二年生に任せます。プレッシャーかけるみたいで悪いけど、来年は必ず全国で金を獲って下さい」

「はー。」

久美子達は夏紀に力強い返事をする。それを見て夏紀は「よし」と唇を緩ませ、

「それでは私からは以上ですが、最後に今ここで、新部長・副部長の指名をします」

と高らかに宣言した。

「ええっ!？」

部員達に動揺が走る。それについては部長の私から、と優子が前に出てきた。

「本来、北宇治の部長・副部长指名は三年生の仮引退が終わってから、新三年の会議で発表されるのが伝統でした。でも私と中川とで話し合って、今年はコンクールが終わったこの場で次のリーダーを指名しておこうという事になりました」

部長指名。その一言を久美子はぼんやりと心の中で反芻していた。

例年、部長指名を受けるのは概ね一年生の時に学年代表を務めた人になる。自分達の代でそれに該当するのは塚本秀一だ。正直、秀一はあまり部活のリーダーという人柄ではない気がするけれど、それなりに演奏技術も上昇志向もあるし周囲とのコミュニケーション能力もある。勉強に関しては中の上、いや中の中くらいなのだが、何より既に学年代表を一年間務めた実績があるのだから、ここは秀一が指名される事は間違いないだろう。

では副部长は？ 秀一がトロンボーンで金管だから、木管の瀧川君あたりが選ばれるだろうか。いやでも、今年のように部長・副部长が両方とも金管から選出される例もある。そうなるともしかして麗奈？ いやいや麗奈は演奏の腕や学力はともかく、部内で人をまとめる立場はちよつと難しいものがあるかも知れない。まして秀一とは水と油みたいなものだ。流石にこの線は無さそうである。

逆に、周りをぐいぐい引っ張っていくのに向いていそうなのは葉月あたりか。いやちよつと待て、幾らなんでも秀一と彼女を組ませるのは流石に不味い。大体、二人の間の事情を知っている夏紀先輩がそんな指名をするとは思えない。すると緑輝？ いや彼女は確かにパワフルではあれど、正直言って大所帯の吹奏楽部をまとめていくのは合っていない気がする。と言うより、勢いで部員達を引っ張っていくのはいつか果てしなく大暴走してしまいかねない。そんな人選を果たして優子先輩がするだろうか？ じゃあ一体誰が副部长に……。

そんな事を考えているうちに、夏紀の声が聞こえてきた。

「それでは発表します」

優子と夏紀は珍しく顔を合わせて意味深な笑みを浮かべると、その視線を久美子へ向けた。

「えっ」

「次の新しい部長は、黄前久美子さんです！」

## 一・さんどめファンファーレ

宇治川沿いの土手の道にはもう、桜の花びらが積もっている。四月に入ってすっかり暖かくなった春の陽気を、久美子は鼻ですうっと吸い込んだ。

ふうーっ。

そのまま溜め息とも何ともつかぬような息を吐き、空を見る。花びらが舞い散る空の向こうには雲がたなびき、微かにまどろむように、その白い身をよじらせているようにも見えた。久美子はそれを、春の雰囲気にはまるで似つかわしくない気だるげな表情を浮かべながら眺める。

「三年生かあ……」

誰にでも無しにそう呟くと、久美子はその視線を足元へと落とし、二年前、新生としてこの道を歩いていたあの日から時は過ぎ、気付けば今はもう最上級生としてこの道を歩いている。今日は北宇治高校の入学式。それはつまり、新しく入ってくるであろう新入生達が今まさに久美子と同じように、学校への道を歩いていることを意味していた。部長として、私ちゃんとうまくやれるかな。今年の吹部はどうなるだろう。漠然とした不安と期待を胸中にぐるぐると渦巻かせながら、久美子は昨秋の部長就任劇を思い返していた。

\*

「え、えっ」

寝耳に水とばかりたじろぐ久美子に、優子と夏紀は畳み掛けた。

「これも昨年までは学年代表が部長に指名される事が半ば慣例でしたが、黄前さんはなんでか知らないけど他人のいろんな問題に首を突っ込んで解決する能力が高いらしいから、沢山の人がいる吹奏楽部の部長としてきつと良い仕事をしてくれると考え、選びました」

『なんでか』の部分にやや語気を強めながら、優子が推薦の理由を述べる。

「私も、久美子ちゃんならきつと部長として大活躍してくれると思っています。この選出に賛同する人は、拍手をお願いします」

夏紀がそう言うのと、部員達からはこれでもかどばかりに高らかな拍手が打ち鳴らされた。

どうしよう。反応に窮した久美子が麗奈を見やると、麗奈は拍手の手を止めニヤリと笑って、

「おめでとう『部長』。頑張つてね」

と、冷やかしくも激励ともつかぬ態度である。これでは麗奈からのヘルプなど期待できそうも無かった。

「あ、あああの、私、部長なんてとてもとても」

両手を肩の高さに上げ首を振る久美子を、夏紀は「ストップ！」と掌で制した。

「久美子ちゃんの不安な気持ちはとても良く分かるよ。私達も、一年前はホントそんな感じだったからね。けれど私達が久美子ちゃんが適任だ、久美子ちゃんならやれるって認めたんだから、自信持つて」まるで芝居がかった所作で夏紀に両肩をがっちり掴まれ、こちらの反論は完璧に封じられてしまった。

「一、二年の皆も、新しい部長をちゃんと支えてあげてね」

「ハイ！」

全員の元気な声が再び名古屋の空に響く。ちよつと待つて下さいよ、お願いですから……という久美子の嘆きにも似た声を置き去りにして。

「それじゃ、次は副部長の発表です——」

完全に抜け殻と化した久美子の耳には、それ以上の言葉はもう何も入って来なかった。ただ一つだけ、傍に寄つて来た鎧塚<sup>よろいづか</sup>みぞれの「がんばつて」という一言を除けば。

\*

就任してから分かったことだが、部長の職務というものは実に多岐に渡る。

まずは日々の練習スケジュールの取りまとめ。毎日練習が始まる前に顧問のところへ行き、その日の練習メニューなどを聞いて部活開始前のミーティングで部員達に伝達する。次に、合奏のある日は全体チューニングを行うのも部長の仕事である。学校によつてはチュー

ニングは顧問や学生指揮者の仕事と定められている場合もあるが、北宇治では伝統的に部長が、部長不在の時は副部長がチューニングを行い、学生指揮者はこの両名が揃っていない場合に限りチューニングを受け持っていた。

次に、種々の事務作業。これはほぼ一手に部長の仕事として回される。コンクールを除く殆どのイベント、学内での催し物や合宿などがある場合には、参加の為の申込書や施設の使用許可申請など各種書類の提出が求められる。これら書類の作成は多くの場合は顧問および副顧問などが担当することもあるが、北宇治ではこれも部長の仕事として対応することとなる。

そして週一回のパートリーダー会議。部長は会議中、議長の立場も務めなければならぬ。パートごとに異なる要望や意見を取りまとめて採決を下すほか、時には部長提言で方針を打ち出さねばならないこともあるため、部員の自主性が重んじられている北宇治では責任重大と言える。

他にも出演用衣装の決定や予算繰り、備品補充のチェック、諸々の雑務など、挙げ始めればキリが無いほどに、北宇治吹奏楽部の部長というものは激務を極めていた。

『みんな、あすかが部長だったら良かったって思ってる』

二年前、部長を務めていた小笠原晴香おがさわらはるかがそんなことを言っていたのを時々思い出すことがある。当時はネガティブな彼女の姿にこちらまで不安を駆り立てられたりもした。直接当たり散らされたこともあったし、正直を言えば心底呆れ返ったことさえもある。部長なんだからもつとしっかりすればいいのに、と。

果たして自分が部長となった今、久美子は晴香の心境が痛いほど理解できるようになってしまった。これほどの仕事量をこなしながら七十人を超える部員達をまとめていく、というのは並大抵の業ではない。ましてや『田中あすかたなか』という傑物まで膝元に抱え込んでいる状況でのプレッシャーは今の自分の比では無かつただろう。昨年までの部長であった優子ともども、よくぞこの大役を果たしたものだ、今となってはありつたけの賛辞を送りたい気分なのである。

「それじゃ、歓迎演奏のメンバーはこの後楽器を持って校門前に集合です。新入生は九時には登校して来ると思うので、その前後に合わせで演奏を開始します。いい？」

「はい」

吹奏楽部の活動拠点、つまり部室である音楽室の指揮台前には十数名のメンバーが集まっていた。久美子の言葉にメンバーが凜々しく返事をする、それ以外の朝練をしていた部員達はホームルーム出席のため楽器を片付けて部室を出ていく。

はあー、と一息をつく久美子に、

「お疲れー久美子。まだ慣れないの？」

と声を掛けて来たのは、同級生であり同じ低音パートのメンバーでもある加藤葉月だ。

「うん、まあ、元々人前に出るの得意じゃないからね」

「そんなこと無いですよ！ 久美子ちゃんかなり部長らしくなってます。何と言うかこう、『板について来た』って感じですよ！」

そんな風に久美子のフォローを試みているのは、葉月と同じく同級生でコントラバス担当の川島緑輝<sup>かわしまきいふあひあ</sup>。もう説明の必要も無いのだろうが、緑輝はこの『サファイヤ』という自身の呼び名に相当コンプレックスがあるので、あえて周囲には自分の名前を『緑』<sup>みどり</sup>と呼ばせている。「きつと新入生の子たちも沢山入ってくれますよ」

目をらんらんと輝かせ、緑輝は鼻息を荒くしている。そう、今日の歓迎演奏は単に新入生の門出を祝福する為だけのものでは無い。北宇治に吹奏楽部があること、そして全国で金賞を狙う意思と実力があること、それを新入生にアピールして有望な新入部員を獲得すること、それが歓迎演奏の真の狙いなのだ。

「ホラ、そろそろ行かないと。私スーザ準備してから行くから、二人は先に行つてよ」

「分かった」

「早く来てくださいね、葉月ちゃん」

葉月に頷きを返したあと、久美子は自分のユーフォニアムを抱え、緑輝と共に玄関へと向かった。

玄関で外履きに履き替え表に出ると、そこには既に歓迎演奏のメンバーが何人か音出しやチューニングをして自分の楽器のチェックを行っていた。その中にはトランペットを構えた麗奈の姿もある。近付く久美子に気付いた麗奈がトランペットを下ろすと、黒く艶のある長い髪が春風に揺れ、さらさらと空中に優雅な波を描き出した。

「調子はどう？」

久美子が尋ねると、麗奈は軽くピストンを押下しながら返事をした。

「まずまず、かな。そっちは？」

「じゃあ、私もまずまず、かな」

悪戯っぽい笑みを浮かべながらそう返すと、麗奈は軽く呆れたように唇の端から息を漏らし、真つすぐに久美子の瞳を覗き込んだ。

「普段通りってことね。じゃあ、気合い入れていこう」

久美子は黙って頷いた。ユーフォニアムを構えて軽く息を吹き込みピストンを動かす。——うん、今日の感触も上々だ。次に唇を震わせ、B♭の音を長く豊かな音で吹き鳴らす。辺りに響き渡る柔らかく明るい音色。それを見て、麗奈は満足気に頷いた。

「今日も綺麗に音出てる」

「ありがとう」

少しはにかんで、久美子は楽器の管内に溜まった水をウォーターキイから地面に放った。ぽたりと落ちた滴は地面に黒い染みを作り、砂埃にまみれて消えてゆく。

「そろそろ新入生が来ますーす！」

後輩の声にメンバー一同が向き直る。

「ありがとう」

久美子は後輩にねぎらいの言葉を掛けてから、

「それじゃ私達もそろそろ階段に整列します。昨日のりハ通りの立ち位置で並んで下さい。指揮者の副部長はちゃんと新入生に声掛けしてから指揮を始めてね。いい？」

と指揮棒を握る秀一を一瞥した。

「うっさいな。大丈夫だよ」

少しふてくされてみせた秀一は、けれどすぐに気を取り直し、てきぱきと段取りの確認を取り始めた。

「それじゃ昨日のリハと同じように二拍振ってから入りますんで、出だしはちゃんとこっち見てください。それとパーカスは走らないよう注意な。木管は屋外だけど音を響かせるよう意識して。後は練習通り行きましょう」

そんな彼の横顔に久美子はほんの少しだけ、誇らしいような安堵するような、そんな気持ちを抱いていた。

玄関広場に高らかな演奏の音が鳴り響く。新入生歓迎用に久美子達を選んだ曲は『デイキシー・オン・スーザ』。J・P・スーザが作曲した数点の行進曲を佐々木邦雄が一まとまりのメドレーとして編曲したこの曲は、最初から一貫して快活なマーチのテンポで進行してゆく、各曲それぞれの変化に富んだ表情が特徴的な楽曲である。ソロパートもそれなりにあるため、バンドの実力を見せやすいとの理由から採択された。果たしてその効果は狙い通りだったようで、道行く新入生たちが続々足を止め、久美子達の演奏に聴き入っている。

その中に一人、やや短髪の女子生徒が久美子達の演奏を、真摯な眼差しでずつと見つめ続けていた。その色は希望、畏れ、期待感、そのどれとも違う。まるで獲物を射止めようとする狩猟者のような、そんな鋭く強い色を帯びた眼。演奏に集中し続けていた久美子は最後まで、その眼差しが自分へと向けられていることに気付けるはずも無かった。

「お疲れ様でしたー」

歓迎演奏を終えたメンバー達は互いに互いを労いながら、部室へと戻るべく玄関へと向かっていた。

演奏終了と同時に新入生達は一足早く校内に入っていったため、残念ながら直接勧誘の時間は無い。後は入学式を終えた新入生達が、これから正式入部までの二週間の間に一人でも多く入部してくれることを願うばかりだ。

「最低でも二十人は欲しいですよ」

「去年の勢いだったら三十は行けるんじゃないかなー。それに二年連

続全国行ったからさ、今年は全国目当ての子も去年より増えてるかも知んないし」

緑輝と葉月がやいのやいの言っている背中を眺めながら、久美子はその一歩後ろについて廊下を歩いていった。

確かに部員が一人でも多く増えることは、今の北宇治吹部にとって最重要課題である。何より久美子自身、部長に就任したばかりの昨年秋にそれを痛感していた。三年生が抜けて減ったパートの音というのは、どうやっても残りのメンバーで賄えるものではない。もちろん新入生が加わったからといってすぐさま取り戻せるようなものでもないのだが、それでも人が増えれば増えただけ音の厚みはかなり補われる。優秀な奏者が入ることでレギュラー競争こそ熾烈にはなるものの、全体の音楽がレベルアップすることには確実に繋がるだろう。そしてそれは、部全体の悲願である『全国金賞』という目標への第一歩にして最大のステップなのである。

だからこそ、今日の歓迎演奏は絶対に手抜きできない。そういう思いで久美子を始めとした演奏メンバー達は全力で臨み、そしてベストな演奏をやり遂げた。新入生達はどうかだろう。どのくらい的人数が吹部に入りたいと思ってくれただろうか。経験者もそうでない子も「こんな風にうまくなりたい」と思ってもらえたらいいな。……そんなことを久美子はぐるぐると考えていた。

「ねえ、久美子聞いてる?」

突如浴びせられたその一言で、久美子はハッと我に返る。そこには呆れ返ったように肩をすくめる葉月の姿があった。

「あ、ごめん。聞いてなかった」

「もー、何かさつきからずっとボーっとしっ放しだよ? しっかりしてよ部長」

「ごめんごめん。それで何?」

「今日さ、入学式とホームルーム終わったら午後から部活だから、その前に新入生達にチラシ配りするんでしょ? 私と緑は一年の教室回るから、久美子は玄関前でキャッチしてよ、って」

「キャッチってそんな、怪しいお店じゃないんだから」

苦笑いを浮かべる久美子に、葉月はいたずらっぽい微笑みを返してきた。

「いやいやー意外と間違ってるないかもよ？ 練習キツいし、遊ぶ時間無いしで、『最初の話と違うー！』ってなったり」

「それは、ちよつと嫌だなあ」

その光景を想像して久美子は首を捻る。

「そうですね。緑達は全国金を目指してますから、練習は大変ですけど頑張ってるって来てくれる子達に沢山入って欲しいです！」

「だね」

腕をぶんぶん振り回す緑輝に久美子も同意する。騙されて連れ込まれた、などというのは互いにとって不幸な話である。

「それじゃホームルーム終わったら一旦部室集合、んでチラシ持って移動ね。ノルマは一人、三名獲得で！」

葉月のその宣言に、久美子と緑輝は声を揃えて慄いた。

「ノルマはちよつと、きついですう」

かくして前言通り、ホームルーム終了後の久美子は『入部歓迎！』と大きく描かれたチラシの束を抱え玄関前に立っていた。もちろん久美子だけではなく、他数名の部員達も一緒だ。

「吹奏楽部です。よろしくお願いします」

「初心者の方も歓迎です。興味のある人は体験入部に是非どうぞー」

めいめい声掛けをしながらチラシを配っていく部員達。通りすぎる新入生のうち何名かは興味本位なのか積極的に手を伸ばしてくれるものの、後のほとんどは軽く会釈をする程度でその場を後にする状況が続いていた。そんなこんなで数十分経つが、全員分を合わせてもまだ十枚も掃けていない。その状況には流石の久美子もげんなりしてしまい、

「はー、なかなか捕まんないなー……」

とうっかり口から洩れてしまった。これではまるでさっきの怪しいお店みたいな話じゃないか。久美子は自分の思考が葉月の言葉に染まりそうになっていることに気付く。しつかりしなくちや。かぶ

りを振って背筋を伸ばした、その時。

「すいません、そのチラシ見せてもらってもいいですか？」

突然後ろから掛けられた声。「あ、はいー」と振り返りチラシを渡そうとして、久美子はその人物が良く見慣れたものであることに気付いた。

「あれ、さつちゃん？」

「やっぱりー、くみ姉だ！ 久しぶり」

さつちゃん、と呼ばれたその女子はセミロングの髪を後ろでアップに留め、人懐っこそうな笑みを浮かべていた。身長は久美子よりはやや低く、麗奈と同じぐらいだろうか。北宇治の制服を着ているということは、当然ながら北宇治の生徒であることに疑いの余地は無い。その制服の胸にかかるリボンの色は、新一年生達の学年であることを示す紺色をしていた。

「さつちゃん北宇治に入ったの？ 全然知らなかったよ」

「だって叔母さんに話して無かったもん。お父さんにもお母さんにも、私が言うまで絶対に喋らないでって口留めしてたからね。くみ姉が知らないのも無理ないよ」

「そうだったんだ。じゃあ改めて、ご入学おめでとうございます」

「ありがとうございます」

うやうやしく頭を下げてみせた久美子に、深々とお辞儀を返すさつちゃん。二人は同時に顔を上げてくすくすと笑い合う。その様子を見ていた部員の一人が、怪訝な表情を浮かべながら久美子に尋ねてきた。

「部長、この子、ご親戚……ですか？」

「あ、ごめんね」

こほんとか払いをしてから、久美子は後輩達の質問に応えた。

「この子は『東中幸恵』ちゃん。親戚っていうか、まあ、私のお母さんのお兄さんの妹さんの子供で——」

「ああもう違うでしょ。正しくは、くみ姉のお母さんのお兄さんの奥さんの妹があたしのお母さん、でしょ」

「ああそうだった。本当ややこしいよね」

へらりと苦笑を浮かべた久美子に、全くもう、とぼやきながら幸恵が部員達へと向き直る。

「そんなわけで血の繋がりは無いですけど、くみ姉、あ、今は先輩か、久美子先輩の遠い親戚です。小さい頃から先輩とは何度か行き会ってるのでお互いに面識はあります。中学時代は三年間トランペットやってました」

幸恵の口から流暢に出てきた自己紹介の弁に久美子は少々面食らう。小さい頃はあんなに大人しい、というか少々引つ込み思案ですらあったあの幸恵が、しばらく会わぬ内にこんなにも高いコミュニケーション能力を獲得していようとは。積もる年月の恐ろしさを垣間見た思いがする。

「経験者ってことは、即戦力？　じゃあ吹部に？」

「はい！」

幸恵が元気に返事すると、部員達は口々に「やったあ！」「入部おめでとう！」と祝辞を述べながら次々と幸恵の周りを囲い込んだ。

「ちよつと皆、正式入部はまだ二週間先だよ」

「えー、だって本人入る気満々じゃないですか。これもう確定ですよ部長」

「さあ部長、新入部員を音楽室までご案内して下さい！　残りのチラシは私達で配りますから」

そう言って後輩達は久美子の手からチラシを筆取り、『いつてらっしゃい』とばかりにひらひらと手を振ってみせた。何となくぼつの悪い感じを感じつつも、久美子は気を取り直して幸恵の案内役に徹することにした。

「それじゃ早速だけど部室行こっか、さっちゃん」

「うんっ」

幸恵は口の端に八重歯を覗かせながら、満面の笑みで頷いた。

東中幸恵は今しがたの説明にもあった通り、久美子の遠縁の親戚に当たる。直接の血縁こそ無いものの、母の兄、つまり伯父の家で行き会うことが時々あり、互いの母親同士が仲良くなったこともあって昔は良く遊んだりもしたものだ。とは言えそれほど頻繁というわ

けでもなく、久美子が中学に上がる頃には部活が忙しくなったこともあって年に一度会うかどうか、という程度になっていた。

「さっちゃん最後まで会ったのって、いつだっけ？」

「あたしが中学一年の時かな。くみ姉が中三になった春くらいの頃」

「そっか。じゃあもう三年くらい会ってなかったんだね。それにしても……」

「ん？」

「吹部やってるなんて知らなかったよ。それもトランプペット」

「まあね。くみ姉もやってるって聞いたから、中学入った時に吹奏楽やってみようかなあって思って入ったの。入る前の想像とは全然違ったけどね」

「だろうね」

二人は顔を見合わせ互いに苦々しい表情を浮かべる。吹奏楽の活動は世間が思っている以上にハードスケジュールだ。平日は朝練から始まり居残り練習に終わり、休日も学校に出てきて朝から晩まで練習に励む。そして一年間を通じて何らかの大会や発表会があり、基本的にオフシーズンという概念が無い。テスト期間中の休みを除けば年間休日数が一桁という学校もあるぐらいだ。さらには先輩後輩の上下関係も厳しいし、部員同士の派閥争いや確執、軋轢もまま生じる。とりわけ大所帯な学校の吹部なら、これはもう避けては通れない道と言っても過言ではないだろう。

「でもなんで北宇治に？ 家からちよつと遠いんじゃない？」

久美子はふと浮かんだ疑問を口にした。幸恵が乗るであろう電車の乗車駅は、北宇治高校を挟んでちょうど久美子の家の最寄り駅とは反対方向にある。それも久美子が通う距離よりずっと遠い。近場には他に高校なんて幾らでもあるし、わざわざこんな遠い学校まで来なくても。そう考えてから久美子は自分が人の事を言えない立場であることを今更ながらに思い出し、手で口を覆った。幸恵はそんな久美子の様子を見てクスリと吐息を零す。

「知り合いがない学校に行きたかったから、かな」  
「え」

「知り合いのいないところで、新しく始めたかったの。何もかも最初から」

久美子の背中にぞわりと冷たいものが滴り落ちる感触。それはまるで、二年前の自分の思惑を言い当てられたみたいな心地だった。

見られて、いや知られていたのか？ 久美子はまず最初に母親の口の軽さを疑ってみたが、しかし久美子は母親にすら北宇治を選んだ理由を明確には告げていなかった。当然、このルートから幸恵が真実を知る由も無いだろう。知っているのは恐らく佐々木梓くらいのもんだが、その梓にしたって幸恵とは中学校すら違うのだから接点などある筈も無い。では誰が？ という久美子の混乱ぶりを見て幸恵がけらけらと笑い出した。

「——なんてね。そんな大人な理由じゃないよ」

大人。そう言われて久美子はなんだか頬のあたりがかあつと熱くなった。幸恵もまた照れ隠しするようににはにかんでいる。

「去年、地区の定期発表会でね、北宇治の演奏聴いたの」

「あー。そう言えばあつたなあ、何年かに一回のやつ。サンフェスのすぐ後で準備大変だったんだよね」

「でね、その時トランペットソロの人の演奏聴いて、それが超上手くて。音もすごく綺麗で、もう何て言うか、今まであたしが思ってたトランペットの音と全然違う！ って」

「あー……」

恐らくそれは麗奈のことだろう。間違いない。その時の発表会でトランペットソロを吹いたのは、麗奈ただ一人だったのだから。

「んで、あたしもこんな風に上手になりたい！ って思ってたさ。それからはもう北宇治一本に絞って必死に勉強して、この度めでたく合格しましたという訳なのよ」

「北宇治ってそんなに勉強大変だった？」

久美子は首を傾げる。一応進学も目指せる普通高校であるとは言え、北宇治の偏差値は決して高くは無い筈なのだが。

「それは物の例えってもんだよ、くみ姉」

幸恵はチツチツと指を振ってみせる。

「ともかく、北宇治に来たらあのぐらい上手くなれるって思ったの。ねえ、あの時のトランペットの人、まだ卒業してない？」

これは幸恵と麗奈を会わせたら面白いことが始まりそうだ。久美子は自分の顔がにやけそうになるのを必死に堪えながら頷く。

「うん、居るよ」

「ほんとに!？」

「今部室にいると思う。チラシ配りとか得意じゃないタイプだから、部室で新入生の案内するって言ってたし」

「そうなんだ、じゃあ早く部室行こうよ。あたし一度あの人とお話してみたかったんだあ」

幸恵はあどけない少女のように瞳を輝かせながら、久美子の背中をぐいぐい押してきた。

「わかったわかった。ところでさっちゃん、入部は——」

「勿論、する!」

決然とした口調で、幸恵は入部を宣言したのだった。

「あの時の麗奈の顔、超面白かった」

帰宅途中の電車の中で、久美子は喉からくつくつと愉悦の音を漏らす。隣に座る麗奈は『やめてよ』とでも言いたげに、鬱陶しそうな表情を浮かべた。

「だってしようがないじゃない。あんなの、慣れてなかったし」

「それはそうだろうけどさ」

今思い返して見ても笑いが込み上げてくる。部室に到着するなり幸恵はまず辺りを見渡して、麗奈の姿を見つけるや否やずかずかと近づいてからの開口一番、

『ずっと憧れてました! 私を弟子にしてください、師匠!』

「——だもんねえ」

ついに堪えきれず、久美子は笑い声を上げてしまった。

「麗奈、鳩が豆鉄砲食らったような顔してたよ? 目を真ん丸にして」

あまりにも突然の出来事に、あの瞬間は麗奈はもちろん周囲の部員達もすっかり固まってしまっていた。状況を見かねた久美子が割って入って麗奈に事の次第を説明し部員達を落ち着かせ、いきり立つ幸

恵をなだめて新入生用の見学席に座らせるまで、実に十分ばかりの時間を要したのだった。

「やっばさ、麗奈の持つてるカリスマのせい？」

「もう。これ以上茶化さないでよ」

笑い種にされたことが流石に少し不愉快だったのか、口元をへの字に曲げた麗奈がゲンコツで久美子の額を小突いた。それはとても軽いもので、こっん、という乾いた音が車内に響く。

「へへ、ごめんごめん」

調子に乗り過ぎたか、と久美子は乱れた前髪を手で整える。

「でも、新入生、結構来てたね」

「うん」

久美子の言葉に麗奈も頷く。当初、入学式直後ということもあって、せいぜい十人も見学に来れば十分だろうと久美子達は考えていた。ところが一転、蓋を開いてみれば見学者は倍の二十人ほど。しかもその大半は経験者らしく、特定のパートの近くに移動しては先輩達に質問を試みたり、合奏の様子を真剣な面持ちで眺めるなどしていた。恐らくこのまま入部してくれることは間違いないだろう。正式入部までの二週間の間にさらに決心する生徒が増えることを考えれば、目標の二十人はおろか理想の三十人、いやそれ以上も夢ではないかも知れない。

「歓迎演奏、上手くできたからかな？」

「かもね」

「経験者の上手い子も沢山入ってくれたら良いんだけど」

「それはわからないけど、でも上手い子が増えればそれだけ部のレベルアップになる。そしたら全国金賞もきつと近づく」

「うん」

返事をして、久美子は右の掌をぎゅつと握り締める。

「全国金賞、ずっと私達の目標だったもんね」

「私達にとっては今年が最後のチャンスだから、絶対に油断は出来ない」

麗奈は何かを決意するように顔を上げ、久美子の方を向く。

「獲ろう、今年こそ。全国金賞」

「うん。絶対、獲ろう」

そのまま少しの間、久美子と麗奈は互いの瞳を見つめ合った。互いの決意を今一度確認し合うように。

翌日、放課後。

新入生達は今日から二週間の間、部活の仮入部期間となる。彼らはこの間に色々な部活を見て回ったり、入部する部活を心の中で決めたり、あるいは放課後と同時に友達と街に繰り出して楽しい高校生ライフを満喫したり、入学おめでどうテストの結果を受け取ってひっそり勉学に励むことを誓ってみたり、と各々の時間を過ごすのだ。

もちろんやる気のある子達は早々に入部する部活を決め、入部届を出した後は一刻も早く部の雰囲気にならんと努力をし、先輩達とコミュニケーションを図り、経験者の子なら自分の経歴と実力をアピールして担当楽器の選考で有利を得ようと動く。いわゆるロビー活動の時期、とも言えるわけである。

「しかしこれは、さすがに凄いなー」

葉月はその光景を見て他人事みたいな一言を漏らした。

「十、二十……三十人近いですねこれは。目標達成間違い無しですー」  
更にその隣では緑輝が無邪気にカウントを取っている。彼女達の目前には読んで字の如く、長蛇の列が出来上がっていた。

「はいはい、入部届は順番に受け取るから。こっちから順に並んで一人ずつお願いします」

久美子と言えば部長らしく、希望者が提出する入部届を受け取る役をやっていた。一人一人の顔と名前を確認しながら入部届を受理していき、後でそれを纏めてから顧問である滝たきに提出する。本来であれば正式入部の日に入部届を出してくれば良いのだが、今年の新入生達はそれまでとはやる気がまるで違うらしく、用紙を受け取るとすぐに記入を済ませ久美子に提出して来た。それが一斉にわつと来たもので久美子はすっかり混乱してしまい、ひとまず葉月と緑輝に手伝って貰って列を作らせた、という所までが今現在の状況である。

「——はい、皆さんの入部届は確かに受け取りました。じゃあ再来週

の正式入部の日、十九日の放課後はここ音楽室で入部式となりますので、その日は必ず集まって下さい。入部式の後でそれぞれの担当楽器を決めることとなりますので、希望する楽器がまだ決まっていないという人は仮入部のうちに色々な楽器を見て回っておいて下さい」

一年前、部長であつた優子の立ち振る舞いを思い出しながら、久美子は必要事項を新入生達へと告げる。その中には昨日いきなり麗奈に面食らわせた、あの幸恵の姿もあつた。

「今日はこれで一旦解散です。まだ仮入部期間ですからこの後は自由に見学して行って下さい。それと、もしこの期間中に気持ちが変わつた人がいたら、遠慮なく私のところに言いに来て下さい」

「はいー」

ぞろぞろと新入生達が散っていく。はー、と大きい溜め息をついたところで、麗奈が久美子の傍に歩み寄つて来た。

「お疲れ様、久美子」

「ああー、大変だつた」

どつと疲れが来て、肩の荷を下ろすように久美子は指揮台上の椅子へ座り込んだ。

仮入部の初日からあれだけの大勢が押し寄せてくる、というのは昨年にも無かつた光景であり、ちよつとした珍事だつた。部室内の部員達からも、期待と興奮の入り混じつた声があちこちから洩れている。

「大漁だつたねえ」

ぐったりしている久美子をからかつたのは葉月だ。

「こんなに一斉に来るなんて思わなかつたよ。正式入部の時でも良かったのにねえ」

「それだけ今年の一年生はやる気なんですよ」

これぞ望み通りの展開、とでも言わんばかりに緑輝は目を輝かせた。久美子とて同意はできるがしかし、いかんせんそこに実務が関わってくれば無邪気に嬉しがるばかりではいられない、と青息吐息の心境だ。

「二年連続で全国行つてますし、今年も全国！　つていう気持ちで入つて来てくれてる人が沢山なんです、きつと」

尚も熱の籠る声を張り上げる緑輝を葉月がどうどう、と宥めにかかった。

「けど、やる気があるのはうちらにとっても嬉しいよね。遠慮なくピシバシ行けるし」

「そうだねえ」

久美子は目の前に溜まった入部届の束を眺めながら、もう一度「ふう」と疲労の籠った息を吐く。

そうなのだ。北宇治はもう二年前の春とは違う。楽しく部活が出来れば良い、という生温い環境ではなく、本気で全国を目指す人達の為の部活へと完璧に変貌を遂げている。その事自体は少なくとも久美子にとっては喜ばしい事に違いない。違いないのだがしかし、一方でそれを望まない者にとってはどうかなのか、ふと考えてしまう事もある。

『三年なんて、あつという間だから』

かつて退部を宣言した斎藤葵がいつだったかの去り際に放った言葉。それが久美子の脳裏をよぎる。あの時、あの頃の部活の空気は、葵にとって居心地の良いものだったのだろうか。恐らくそうではなかった、だからこそ葵は部活を辞めるといふ選択を取ったのだろう。久美子はそう考えていた。そこに至るまでにどんな事情があったにせよ、葵にとつての吹部は次第に彼女の思うような居場所ではなくなっていくって、そしてとうとう退部を決断するまでになっちゃったのだ。

それにしても、と久美子は考える。あの時の葵の言葉通り、三年間のうち二年はあつという間に過ぎ去ってしまった。気付けばもう三年生であり、部活に完全燃焼できる時間も残すところあと半年ほどと差し迫ってしまったている。それが終わればとうとう自分も、将来の進路を決めなければいけない時期を迎えるのだ。

「それじゃあ緑、このことを低音パートの皆にも知らせてきますね」

嬉々として音楽室を出て行く緑輝を、久美子はひらひらと手を振って送り出す。進路と言えば、既に麗奈は海外の音大に志望を決めていると言っていた。それはきつと三年になった今でも変わることは無

いだろう。何より麗奈の能力を思えば不可能などあろうはずも無い。それは外国で暮らすことも、音楽に関してもだ。

そう言えば、葉月と緑輝はもう進路を決めているのだろうか。久美子は未だはつきりと二人の口から進路について聞き出したことが無かった。今度、学校の帰りにでもそれとなく聞いてみることにしよう。

「あの」

不意打ちで浴びせられたその聞き慣れない女子の声色に、久美子の全身は雷を撃たれたように硬直した。

「は、はいー」

慌てて面を上げると、そこに広がるは一枚の紙。『入部届』と書かれた紙面には、それを差し出した人物のものと思しき名前などが記されていた。

「吹奏楽部に入部します。よろしくお願いします」

その声は透き通る氷のようにきんと冷たく尖っていた。久美子はそこでようやくやつと、言葉の主の姿を視認する。短く切り揃えられた艶やかな黒髪。整った顔立ち。どこか鋭さを帯びた切れ長の瞳。その眼光の奥に何か殺気めいたものを感じて久美子は総毛立つ。まるで女剣士。彼女への最初の印象がそれだった。いつまでも無言の久美子に居心地の悪さを覚えたのか、彼女は硬い表情を崩さぬまま口を開いた。

せりざわしずく  
「芹沢雫です」

「あ」

そこで我に返った久美子は取り繕うように、

「はい、入部届、確かに預かりました。じゃあ十九日の正式入部までに希望する楽器を、」

と喋り出したのだが、それは雫の次の言葉によって遮られた。

「希望楽器はユーフォニアムです」

無表情の雫から放たれた矢のようなその一言に、久美子の胸は射貫かれる。

「よろしくお願いします。今日はこれで失礼します」

一礼した雫は踵を返し、するすると緩やかな足取りで音楽室を去っていった。

「やったじゃん久美子！ ユーフォの後輩、ゲットだぜ！」

突然の後輩誕生を祝福してくれた葉月に、しかし久美子は困惑の表情を向ける。

「うん、でも……」

「どうしたの、嬉しくないの？」

「いや嬉しくないってわけじゃないんだけど、何て言うかその「何？」

先ほどの雫の視線を思い出し、久美子はぶるりと震える。

「まるで、狙われてるみたいっていうか、そんな感じだった」

久美子の言葉の意味が解らず、葉月と麗奈は顔を見合わせていた。久美子は目の前の入部届にもう一度目を落とし、書かれた名を読み上げる。先程の彼女の名乗りを反芻するように。

「芹沢、雫」

久美子の胸の内にスウツと黒い霧のようなものが立ちこめる。何となくだがこの先、何か良くないことが起こるのではないか。あるいは、自分がこれまで経験したことのないような事態が起こってしまうのではないか。そんな漠然とした心のもやは、その日の活動を終えて家に帰ってから掻き消えることは無かった。

かくて二週間後、入部式の日。

部室の中には多数の新入部員達がごった返している。不安そうな面持ちの者もいるが、ほとんどの生徒はそうではなく、むしろこの日を待ち望んでいたと言わんばかりのやる気に満ち溢れた笑顔を浮かべていた。

「それじゃそろそろ、入部式を始めたいと思います」

一つ咳ばらいをしてから、久美子は整列した新入部員達の前に立った。

「まず初めに、私は吹奏楽部部長の黄前久美子です。楽器はユーフォニアムを担当しています。皆さん、吹奏楽部によろこそ」

新入部員達と、彼らを囲むように立っている二、三年生達から拍手

が上がる。

「既に知っている人も多いと思いますが、私たち北宇治吹奏楽部はここ二年、全国大会に出場しています。結果は残念ながら一昨年が銅賞、去年が銀賞という状況ですが、一昨年から私達の目標が全国大会出場、そして金賞であることは変わっていません」

新入部員達の顔付きに緊張の色が浮かぶのを確認しつつ、久美子は続きを述べる。

「私達の今年の目標は、今度こそ全国で金賞を獲ることです。当然、練習もとても厳しいものになります。まだ高校に入ったばかりで慣れない中、学校生活と部活を両立させるのは大変だと思いますが、私達上級生も出来る限り皆さんを引っ張っていきますので全力でついて来て欲しいと思っています」

と、ここまで一息に喋ってから、久美子はこほんと一度咳払いをした。

「では今日のこの後の日程ですが、まずは皆さんの担当楽器を決めることになります」

その言葉と同時に、各パートのリーダー達がそれぞれ自分の楽器を持って音楽室に入って来た。

「これから各パートリーダーに楽器紹介をしてもらいます。その後、希望する楽器が決まった人はパートリーダーまでその希望を伝えて下さい。ただし、希望する人が多いパートはオーディションで人数を絞ることもあります。全員が希望する楽器を選べるわけではないので、もしオーディションに落ちてしまった人はすぐ次の楽器に移って下さい」

楽器決め。それは新入部員にとっては最も緊張する瞬間の一つである。強豪校ともなると、中学校までやって来た楽器があっても必ずしも継続できるとは限らず、振るい落とされれば別の楽器に移らざるを得ない時もある。特に花形であるトランペットなどではそれが顕著なのだが、人数が集中すればどの楽器でも起こり得ることであり決して油断はできない。自分が希望する楽器を担当できるかどうか、その為には同じ新入生同士で蹴落とし合わなければならぬ場合すら

もある。かくの如く、吹奏楽部とは常に競争し続ける部活なのだ。『体育会系文化部』とはよく言ったものである。

かくして楽器紹介も終わり、一年生達はそれぞれ希望楽器がある場所へと散っていった。ふとトランペットの方を見ると丁度オーディションをすることになったらしく、一年生が順番に楽器を吹いている姿が見える。その列の中には幸恵もいた。彼女の順番は、どうやら今吹いている子の次らしい。

「じゃあ、次は東中幸恵さん」

「はいっ！」

麗奈の前に幸恵が楽器を構えて立つ。やや緊張しているのか、その手が僅かに震えているのがこの距離でも分かった。さっちゃん頑張れ、と久美子は視線で幸恵にエールを送る。きゅっ、と息を吸い込み、幸恵は音を奏で始めた。久美子の耳で聞く限り、特別下手という事は無い。それどころか、久美子が想像していたより幸恵はずっと上手だった。彼女は麗奈を心の師匠と仰いでいたようだが、それが功を奏しているのか、それとも幸恵の中学三年間の努力の賜物なのか。

「はい。それじゃあ次——」

演奏を終えた幸恵に軽く頷くと、麗奈は次に待っていた子へと声を掛けた。あの様子なら他の子がよほど上手くない限り、幸恵はトランペットパートの一角に肩を並べられるだろう。本人的にも手応えがあったらしく、幸恵は満足気な笑みを浮かべてほっとしている。その笑顔に久美子も心が綻んだ。

そして我らが低音パートには、男子が一人に女子が二人。新入生は今のところこれだけだった。相変わらずの不人気っぷりに久美子はもう落胆する気力さえ起らない。代わりに、その中の一人へと視線が引き寄せられる。

「芹沢さん」

「……………どうも」

先日、入部届を手渡して来た雫の姿がそこにはあった。希望楽器はユーフォニアム、という彼女の言に嘘は無かったのだろう。こちらを見て軽く会釈をしてきたものの、雫の表情は依然硬いままだ。という

よりまるで慥然としているようですらある。それにしても不思議だったのは、その隣に緑輝の姿があり、その上とても嬉しそうにしている事だった。

「あ、久美子ちゃん」

緑輝は久美子を見つけると雫の袖をぐいっと引つ張り、興奮したようにまくし立てた。

「凄い戦力が来ましたよ！ この子、私と同じ聖女出身なんです」

「へー、じゃあそれで緑はこの子の事知ってたんだ」

それを聞いて、隣に立っていた葉月もようやく事の次第を納得した、という顔をしている。

「それだけじゃないんですよ」

緑輝の興奮は未だ冷めやらない様子で、さらに語気を強めてくる。

「雫ちゃん、聖女で一年生の頃からユーフォオでコンクールメンバーだったんです。しかも！ 緑と同じで、三年間ずっと全国金賞だったんですよ」

この一言に、久美子は突如自分の心臓がぎゅうっと握り締められるような痛みを覚えた。

「それじゃあ激ウマってことじゃん。ね、早速ちよっと吹いてみせてよ！」

葉月は雫に、見本用に立てかけてあったユーフォオニアムのマウスピースを手渡す。

「はい」

それを受け取ると、雫は見本のユーフォオニアムをそつと抱き上げた。ごく自然な手つきでマウスパイプにマウスピースを差し込み、軽く息を吹き込みながらピストンを動かす。いったん口を離し、呼吸を整えるように息を吸い込んでから、雫はもう一度マウスピースへと唇を付けた。そして、音を奏で始める。

あまりにも綺麗だった。一切淀みの無い、研ぎ澄まされた美しい音色が部室中に響き渡る。出だしのゆったりしたフレーズを丁寧に吹きこなし、速いパッセージからは一転して小気味良いリズムミカルな刻み、さらに高音低音が目まぐるしく入れ替わるフレーズも事も無げに

吹きこなし、最後にハイトーンの長音まで豊かな響きを保ったまま、雫の独奏は静かに終わる。その曲は久美子も良く知っている、ユーフォがメインの四重奏のものだった。

気付くと部室の誰もが無言で低音パートを、いや雫を見つめていた。ふとしてから誰かが手を打ち鳴らし始め、それにつられる様に拍手の波は次第に広がり、部室中でいっぱいになった。その中で一人、久美子は雫に拍手を送ることが出来ずにいた。肺が潰れてしまったかと錯覚するほどの息苦しさを感じながら、何事も無かったかのように涼しい顔で楽器を下ろす雫をただじつと見つめていた。

「うっまー！」

他の者がそうであるように、葉月もまた力強い拍手を雫に送る。でしよう？ と緑は両手を叩いた。

「雫ちゃん、緑が聖女にいた頃から部内でもトップクラスに上手かったんですよ。当時、緑と同じ三年生だった子を押しのけてソロに選ばれるくらいでしたから」

眩暈がする。足元がぐらぐらして、何かに掴まってないと膝から崩れ落ちて、そのまま立ち上がれなくなるかも知れない。ふと麗奈の方を見やると、麗奈もまた雫の方を見つめていた。麗奈は今の雫の演奏をどう感じただろう。麗奈ならあれをどう評価するだろう。麗奈は今、何を思っているのだろう。何故だか急にそんなことが気になった。

「——だから、もう雫ちゃんはユーフォで決まりですよ！ いいですよね、久美子ちゃん？」

「えっ」

唐突に緑輝から話を振られて、久美子は無理やり口角を上げる。緑輝の方を向く首の動きが錆びついたようにぎこちなかった。

「雫ちゃん、ユーフォで良いですよね？」

「あ、うん。そりやもう、大歓迎」

喉から絞り出すように、そう喋るのが精一杯だった。

雫のあまりにも上手すぎる演奏に大きな衝撃を受けてしまった久美子だったが、しかし入部式の最中に潰れているわけにもいかない。

自分は部長なのだ。そう自分に言い聞かせ、ひとまず目の前のことに集中しようと気持ちを入れ替えた頃には、すっかり全てのパートでメンバーが決まったようだった。それを見計らったかのように、音楽室の引き戸がガラリと開けられる。

「各パートとも、新入生の担当楽器は決まりましたか？」

戸口から姿を現したのは顧問の滝昇たきのぼるだった。途端、部室のあちこちから『きやあつ』という黄色い声上がる。イケメンで痩せ型の高身長、という滝の容姿から受ける第一印象だけならばそれも無理からぬことだろう。彼の指導中の姿を知っている上級生の中で、そんな桃色めいた感情を抱けるのは今や麗奈ぐらいのものだけけれど。

「はい、ひとまず全員決まりました。今年は三十六人で、経験者の子が沢山入ってくれました」

「それは何よりですね」

久美子の返答に滝は相変わらずの柔和な笑みを湛えながら頷き、そして黒板の前へと歩み出る。

「新入生の皆さん初めまして。顧問の滝昇です。二年前からこの北宇治高校に赴任して、吹奏楽部の顧問を務めています。担当教科は音楽です。どうかよろしくお願いします」

深々と頭を下げた滝に、新入部員達から拍手が送られる。

「さて、既に部長から聞いているかも知れませんが、私達のここ数年の目標は全国大会出場、そして全国金賞となっています。しかし一応の慣例として毎年新たに部員が入る度、皆さんにその意思確認をします」

滝は黒板に白のチョークで、やはりいつもの整った字で大きく『全国大会金賞』と書いていく。

「上級生は既に分かっていると思いますが、全国を目指す為の練習は並大抵のものではありません。朝から晩まで厳しい練習漬けの毎日になってしまう為、学業や進路の事を考えて退部してしまう人も残念ながら居ます。個々に事情がありますのでやむを得ない場合もあるのですが、出来うる限りは皆さんにはつきりと目標を見定めて部活動に取り組んでほしいと私は考えています。ですから、ここで改めて全

員の意思を確認するための多数決を採りたいと思います」

滝の言葉に、新入部員達の何人かがざわついた。

「もちろん同調圧力をかけるつもりは毛頭ありませんので、皆さんの正直な気持ちで答えて下さって結構です。全国大会金賞を目標とするか、しないか、どちらかに手を上げてください」

では部長、後はお願います。そう言つて滝は下がった。久美子は麗奈に頷き、麗奈も頷き返して二人は前へと出る。

「それでは多数決を採ります。全国大会金賞を目標にする人」

自分で言いながら久美子は真つ先に右手を高々と掲げた。隣にいる麗奈も上級生達も真つすぐ天に向かって手を挙げる。新生生はそんな彼らの姿を横目で確認してからおずおずと挙手したり、最初からきつぱり手を伸ばしていたり、どっちにしようか迷っているようだったり、様々のようだ。

ふと雫の方へと目を向ける。雫は、やはり高々と手を挙げている。その強い視線は何故かこちらへと向けられているように感じられた。周囲を見渡すふりをして、久美子は無理矢理に雫から視線を外す。

「では、全国大会を目標にしたくない人」

そう尋ねて手を挙げるものは誰もいなかった。仮にいたとして、この状況で手を挙げるには相当な勇気の要ることだろう。全国を目標にする方に手を挙げたのは久美子の目から確認する限り、ほとんど全員だった。双方の挙手を数える役目だった麗奈も「間違いない」と頷く。

「決まりですね」

結果を受けて滝が再び前が出る。

「多数決という形なので異論もあるかも知れませんが、これは皆さんが決めた目標です。私はそれに全力を持って応えますが、目標を実現するのは皆さん自身であり、一重に皆さんの努力次第です。今決めた目標の為に部員一人一人が精一杯努力して下さい。いいですね？」

「はいー」

部員全員が力強く返事をする。

「では、本格的な練習は明日から開始ということになります。今日は

もう遅いのでこれで解散としましょう。皆さん気をつけて帰ってください。それから、」

滝は一呼吸置いてから、次のように述べた。

「これも慣例ですが、今週末の土曜日に練習曲を使って合奏を行います。楽器初心者以外の一年生にも参加して貰いますので、各パートリーダーから練習曲を受け取って吹きこなしておいて下さい」

やっぱりか、と久美子は思った。例年通り、今年も春一発目の『試し合奏』をやるのだと。

「試し合奏って何ですか？」

帰り道、葉月達と並んで歩く久美子のところへ割って入った幸恵が尋ねてきた。

「毎年の恒例行事みたいなもんで。まず新一年も加わって各パートで曲練やって、それで合奏して感触を掴むの。最初から滝先生飛ばしてくるから、ちゃんと練習してないとズバズバ言われちゃうよ」

「はあ」

葉月に半ば脅されても、幸恵には今一つピンと来てないようだ。無理もない。あの柔和な滝の振る舞いを見ただけでは、ズバズバと言われてもその光景を正しくイメージできないことだろう。ちょうど二年前、滝との初めての合奏に臨んだ自分達がそうであったように。

「言つとくけど、トランペットはパート練からズバズバ行くからね」

「はい！ 師匠、改めて明日からよろしくお願いします！」

釘を刺すような麗奈の宣言にも、言われた側の幸恵はむしろ嬉しそうにすらしていた。その無垢な反応に却って調子が狂ったのか、麗奈はなんとも複雑そうな表情を浮かべる。やっぱりこの二人は絡ませると面白い。久美子は腹の底から笑い転げたい衝動を懸命に抑え込む。

「でもあのユーフォの子、超うまかったですねえ」

幸恵の何気ない一言で、先ほどまで温まっていた久美子の腹にシンと冷たいものが降りてくる。それに気付きもしないであろう葉月が「だねー」と幸恵に同意を示した。

「さつき緑が言ってたけど、あの子って聖女出身らしいよ」

「へええ」

「そうなんです。しかも一年生の頃からずっとレギュラーで全国金賞なんですよー!」

幸恵も流石に聖女の事はよく解っているらしい。緑輝の説明に「凄いですね、」と驚き顔で応えた。

「あれだけ上手かったらもう、北宇治でもレギュラーになりそうですね」

「あーそうかも。でもそうになったら、相楽はレギュラーどうなっちゃうんだろ」

顎に手を当て、葉月は何やら考え込むような仕草をする。『相楽』とはユーフォニアム担当の二年生、『相楽康広』の事だ。小中学校までは合唱部に所属していたり、趣味でベースを弾いたりするなど音楽の知見はあるし、センスもやる気も一応あるので来年は低音パートを引っ張る存在になるのでは、と久美子は見ていたのだが、いかんせん楽器経験は高校からなので技術的にまだまだな点も多い。そこに雫のような超高校級の奏者が入ってきたら、彼のレギュラーの座はどうなるのか。こればかりは久美子にも予測は出来なかった。

「ユーフォが三人入る可能性も無くは無いですし、分からないですよ」  
「んー、でも去年もそう言ってて相楽は結局落とされちゃったしなあ。滝先生って意外と低音多めに取ってくれるけどさ、それでもユーフォは二人までって感じもするし」

緑輝のフオローも虚しく、葉月的には望み薄といったところのようだ。実際、吹奏楽コンクールでの標準的な構成を考えると確かに、ユーフォ三本が同時に並ぶのはなかなか難しいものがあるかも知れない。

「まあ、まだレギュラー選抜は先の話だし、相楽君もこれからは今まで以上に練習頑張るんじゃないかな。どっちにしたって決めるのは滝先生だし、わかんないよ」

何となく場の空気が冷え込んだような気がして、久美子はどうか場を取り繕ってみようとする。

「でも上手い人が選ばれるのは間違いないですよ。私も頑張つて

レギュラー取れるように練習しなくちゃ」

「その意気だよ東中さん！ 冬に凍死するギリギリスのようにならない為にも、今からレギュラー取るつもりで頑張るのだ！」

ばたばたと大仰に手を振りながら、先輩風を吹かせた葉月が新人に檄を飛ばす。その言葉について「それ、誰の受け売りなんだっけ」と、久美子はくすくすと笑ってしまった。

緑輝と幸恵は電車の方向が反対なので、学校の最寄り駅となる六地藏駅の改札口で別れた。葉月もいつも通り途中の黄檗駅で下車し、今は久美子と麗奈の二人だけが電車のシートに座っている。隣で本を読んでいる麗奈の様子を横目に見ながら、久美子はどうしても尋ねてみたいと思っていたことを彼女に尋ねることにした。

「麗奈、芹沢さんの演奏聴いたよね」

本から視線を外した麗奈が、ゆっくりと久美子を向く。

「うん」

「どうだった？」

久美子の問いに、麗奈は微かに小首を傾げた。

「どう、って？」

「上手かったかどうかって事」

「ああ」

ここで合点がいったらしく、麗奈は読んでいた本を閉じて膝の上に置く。そしてきっぱりと言いつつ切った。

「上手かった」

その言葉に久美子がショックを受けることは微塵もなく、むしろ安堵すら覚える。麗奈ならあの演奏は必ず『上手い』と評するに違いなかった。そしてそれを久美子にも隠さず言うだろう。麗奈は音楽に關してはいっただって厳正で、その判断には久美子が見る限り間違いが無い。だから次の問いにもきつと私情を挟まず正しい答えを返してくれる筈だ。そう、まるで鏡のように。

「私よりも？」

麗奈はすぐに答えを返さず、ただじつところらの瞳を覗き込んだ。いま自分の瞳には何が映っているだろう。不安。焦り。嫉妬。怯え。

あるいはそのどれでもない何か。自分の中に渦巻く感情を麗奈に見透かされるような、そんな気分になってどこか落ち着かない。しばらく沈黙のまま凝視を続けた後、やがて麗奈は口を開いた。

「技術だけなら、今の久美子と同じぐらいだと思う」

それはこれ以上ない正当な答えだった。やはりそうか。心の中にあったもやもやの正体は何なのかを、久美子はようやく理解する。一言で言えばそれは不服の念だった。この二年間、必死に練習に明け暮れてきた久美子から見ても、雫の技量は明らかにその自分と同等かそれ以上だった。久美子はそれを耳で、肌で感じ取りながらも、しかしその現実を受け容れたくなくて、頭の中で雫の上手さを否定できる要因をずっと探し続けていた。一年生がこんなうまい演奏ができるわけがない。きつと自分の聞き方に何か間違いがあつて、見せかけのうまさに騙されているだけに違いはない、と。けれど麗奈の評価を聞いたことで、いよいよ自分もその現実を受け容れざるを得なくなったのだ。

「そうだよね」

ぽつりと漏らした久美子の声色には、不思議なほど落胆の感情は無かった。

「私ももつと練習、頑張らなくちゃ」

それは自分でも不思議な感覚だった。昔の自分ならこういう時はすぐ落ち込んでいたのに。今は何故だろう、目の前のハードルが高いことを認識したその瞬間から、そのハードルを超える事を考え始めている。嫉妬というその感情はこの時、とても心地良い物だった。雫に勝ちたいと素直に思える至って前向きな感情だった。私も麗奈に似て来たのかな。久美子は少しくすぐったい気持ちになっていた。

「でも」

麗奈は何かを言いかけて、そのまま口をつぐんだ。「何？」と久美子が聞き返すも、麗奈はどうすべきか逡巡した様子を見せている。ひそめた眉は今日も細く綺麗に整っていた。

「私の感覚の話だから、久美子がどう思うかは分からないけれど」「うん」

「芹沢さんの演奏、何か欠けてるような、そんな気がした」

麗奈が良く分からないことを言っている。久美子は率直にそう思った。つい今さつき、雫のことを上手いと評したばかりではないか。

「何かって、何が？」

自分の耳で聴く限り、雫の演奏は完璧の一言だった。それこそ技術面では、久美子が『特別の中の特別』だと信じるあの人の演奏にも匹敵するかも知れない程に。表現性も豊かで様々な音色を曲調に応じた的確に使い分けていたし、それでいて十分な響きは常に保たれていた。そんな雫の演奏に一体何が欠けていたというのか？ 雫の演奏上の欠点など、久美子には到底思い当たる節が無い。

「それは私にも分からないんだけど、何となくね」

麗奈も少し困ったような表情を浮かべている。きつとこれ以上掘り下げてもこの質問の解は出て来そうに無い。そう思った久美子はそれ以上の追及を止め、前へと向き直る。

「でも、上手な後輩が沢山入って来れば、コンクール金賞はもつと近づくよね」

「うん」

久美子の言葉に麗奈も同意する。

「負けたくないな」

それが何になのかは分からない。コンクールの強豪校に？ 雫に？ あるいは麗奈に？

自分が呟いたその対象が誰なのかを考えているうちに、電車はゆるゆると速度を落とし始めていた。

麗奈と別れ自宅に着くと、食卓には既に夕食が並んでいた。キッチンで洗い物をしていた母が声を掛けてくる。

「お帰りなさい。今日は早いよね」

「ただいまー」

だらりと間延びした声で母にそう告げ、久美子はソファの脇へと鞆を置いた。

「今日は新入生の楽器決めもあったし早めに終わったの。明日から本

格的に練習始まるから、また遅くなると思う」

「そうなの」

目線を上げずに応えた母は、ややあつて洗い物の手をいったん止め、冷蔵庫に引っかけてあるハンドタオルで手を拭いた。

「そう言えば来週、三年生になつて最初の三者面談らしいじゃない」

げ、と久美子は心の中で声を上げてしまう。そう言えば先週担任から渡された案内のプリント、母に提出するのを今の今まですっかり忘れていた。忙しい日々にかまけて肝心なことを見落としていた自身がこの上なく忌々しい。母から見えない角度で、久美子は音を出さないように舌を打つ。

「秀一君のお母さんから聞いたわよ。あんたもう三年生なんだから、そういうところはしつかりしなくちゃ駄目じゃない」

「は〜い、ごめんなさい」

足元に置いた鞆をもう一度引つ掴み、ごそごと探つて四つ折りにしたプリントを見つけ出す。それを久美子の手から受け取った母は文面をじつと見据え、それから冷蔵庫の脇に貼つてあるカレンダーと睨めつこを始めた。

「じゃあこの日の四時から五時までで書いとくから、ちゃんと先生にそれでいいか聞きなさいね」

ボールペンで丸を付け、母はプリントを久美子に返却した。わかつた、とそれを受け取つてそのまま鞆にしまい込み、久美子は自室へと足を向ける。

「あ、ちよつと」

母親に呼び止められ、「何?」と久美子は振り向いた。

「久美子、あんた進路はもう決めたの?」

進路。その一言が頭の上にならずと押し掛かる。三年生にもなればそろそろ担任から具体的な進路を訊かれる時期であり、それに向けての回答を用意しなければならぬ。これまでのところ久美子は『一応、進学』ということにしており、短大や専門学校も視野に入れた進学先を考えていることにしているが、それは全くの方便だった。

本当にやりたい、この道に進みたい、と思うものは他にちゃんとあ

る。ただ、それを周囲に告げることには久美子なりの迷いがあった。何より自分自身、本当にその道へと進むのが良いかどうかを決めあぐねている。こんな事なら先週のうちに葉月達の進路を聞いておけば良かった。そうすれば多少はこの場を誤魔化せる文句の一つでも思いつけたかも知れないのに。

「そろそろ進路の事を考えてちゃんとしないと、どんな道に行くにせよ間に合わないわよ」

「ああもう分かったから。来週までにはちゃんと考えておくって」

答えが出ずにしどろもどろしている娘を見かねたか、母は呆れたように小言を言い始めた。とにかく先に着替えさせてよ、と久美子は逃げ腰の姿勢になる。

「もう」

溜め息をつき、母は洗い物の作業へと戻った。その姿勢のまま母がぼつりと漏らす。

「麻美子のこともあるから強くは言わないけど、あんたの人生なんだから、あんたが自分で良く考えなさいね」

それは母なりの、精一杯の気遣いの言葉だったのだろう。久美子は返事の出来ぬまま頷き、それからようやく自分の部屋へと向かった。

夕食を済ませ今日の分の宿題を終えた後、久美子はヘッドフォンを掛けて曲を聴きながら、その曲のフルスコアに目を通す。ここ最近の彼女の日課である。『音楽を理解するにはとにかく沢山の曲に触れて楽譜に目を通すのが一番良い』と麗奈に助言されたからなのだが、今以上に上達するには楽器の技術ばかり追っついては駄目だ、と久美子自身が痛感していたからでもあった。

こうして音楽辞典や楽典を手元に置きながら曲を聴いていると、今まで多くの情報を見落としがちであった事に気付かされる思いがする。特に自分以外の他の楽器の動きなど大まかには把握出来ていても、それが音楽的にどんな意味を持つものなのか、複数の楽器同士の連携がどのような音を生み出していくのか、その中で自分はどう立ち回るべきか等、分かっているようで分からなかったことがまだまだ山程ある。音楽の深みを知るにつれ、久美子はその深遠さをますます欲

するようになっていた。

一連の作業がちょうど一区切りついた時、久美子の携帯が振動する。曲を止めて携帯の画面を開くと、一通のインスタントメッセージが届いていた。差出人は……秀一。『今、ちよつといいか?』とだけ書かれている。携帯の画面を操作し「何?」と返すと、少し間を置いて返事が来た。

『急ぎじゃないんだけどさ。メッセージでつてのも何だし、今ちよつと会えるかなつて』

秀一からこんな風に誘いが来るのも珍しい。「いいよ」と返して久美子はいそいそと外出の用意を始める。そのうちにまた返信が来て、『じゃあいつもの公園で』と書かれてあった。支度を終えて部屋を出た久美子に、洗面所から顔を覗かせた母が声を掛けてくる。

「久美子、こんな時間にどこ行くの」  
「ちよつと散歩。すぐ戻る」

もう春だし靴でなくてもいいか。そう考え、久美子はサンダルを突っ掛けて玄関の扉を開けた。

秀一とは一年の冬に彼からの告白を受け、それからずっと恋人同士の関係である。この事は両家の家族や部内には絶対秘密……にするつもりだったのだが、目敏い緑輝と葉月の目を誤魔化すことは出来ず、とうとう二人には去年の定演前に秘密を暴露する形となつてしまった。一応二人とも義理堅く他の者には喋らずに居てくれるように、部内でこの事を知っているのは麗奈を含め三人だけ、ということになつている。特に葉月にはそれ以前の経緯などもあるので、もう色々と頭が上がらないというのが久美子の本音だった。ちなみに葉月達に二人の関係を知られている事は、秀一には伝えていない。何となく、秀一が気まずく思うだろうという、これは久美子なりの配慮でもあった。

それにしても、と脇を流れる宇治川の煌めきに目を取られながら、久美子は考える。

付き合っているはずの秀一とは、久美子が部長に就任した昨年秋以来、ほとんどまともに行動出来ていない。一応、恋人らしいことはそ

れなりにしているのだけれど、それでも二人の関係は昨今の高校生にしては至って初心なものと言えるだろう。去年のクリスマスですら互いの家族に事が知れてはいけないということでも出掛けられず、当日夜にこうしてこっさり会ってプレゼント交換をした程度だ。

後はたまたまに携帯の通話やインスタントメッセージでやり取りをしたり、夜に二人で散歩するぐらい。だったのだが、次第に久美子が部活の事で忙しくなるにつれその回数も激減していった。先月などは卒業式、学年末の進級テスト、立華高校との合同演奏会、そして新生の受け入れに関する諸々の準備などで忙しく、ついに夜の密会ですら一度も出来なかったほどだ。

ひよつとして秀一はその事で、何か自分に言いたい事があるのではないのだろうか？ 久美子の中に少しだけざわつきが生まれる。夜風はもうすっかり温かくなっているのに、今日に限ってはやけに肌寒い。何となく気持ちが落ち着かなくて、久美子は公園までの道のりを早足に進んでゆく。

かくして歩くこと十数分。『さわらびの道』と呼ばれる風情豊かな小道を抜けた先、公園の街灯の下に置かれたいつものベンチには、既に秀一の姿があった。

「ごめん、遅れた」

少し乱れた息を整えるように、久美子は大きく息を吐く。秀一は座ったまままでゆっくりと顔を上げた。

「よう」

秀一の表情には切迫した色などは特になく普段通りに見える。そのことに久美子は心なしか安心して、ほう、ともう一度大きく息を吐いた。

「どうしたの、急に呼び出すなんて。珍しいじゃん」

「忙しかったか？」

「ううん。宿題も終わったし、部屋でゆっくりしてたところ」

「そっか」

秀一は一瞬だけこちらに視線を向けすぐに戻すと、座れよ、と隣の

スペースを手でぽんぽんと叩いた。そこには秀一が持つてきたらしいスポーツタオルが敷いてある。「ありがと」と一礼して、久美子はそこへ腰掛けた。

しばしの沈黙。生温い風がさわさわと辺りの木々を揺り鳴らし、その後の静寂を際立たせる。秀一が何か言ってくるのを待っていたのだが、沈黙に堪えかねて自分から何か喋ろうとした、その時。

「最近さ、部活とか色々忙しくて、こういう時間も作れなかったから」  
秀一から切り出してきて、久美子は開きかけた口を閉じた。

「うん」

「入部式も終わって一応ちよつと落ち着いたし、今なら会えるかなってさ」

そんな秀一の言葉に、久美子は体の芯がじんと熱くなったのを感じた。

「そうだね。私の方もなかなか時間取れなくて、ごめん」

何故かそんな言葉もすらりと覚えてしまう。普段なら絶対に言わないのに。

「いや仕方ないって、部長だもんな。練習以外にもやる事多いし、居残り練習もしてるし、その上勉強もしなきゃいけないんだから。そういう時間なんて作れないだろ」

そんな風に、秀一は手を振って笑ってみせた。

「それにしても、今年は新入生も沢山入ったな」

「だね。経験者もいっぱいいるし。トロンボーンはどうなの？」

「それがさ、今年は南中出身のすげー上手い経験者が来てさ。二年のやつらなんてレギュラー獲られるかもって超びびっちゃって。ちゃんと練習してりや大丈夫なのにな」

肩をすくめる秀一の所作には自信というものを見て取ることが出来た。目の前の恋人に対して覚えた頼もしさの片鱗に、久美子は自分の胸がちよつぴりくすぐられるのを感じる。

「そっちは？」

「あー、うん」

久美子の表情が曇る。その様子を見て、秀一もすぐに何かを察した

らしかった。

「もしかして、あの超上手い演奏した子？ 何か問題でもあった？」

「いや、そういうことは無いよ」

久美子は手の平を振って否定する。

「でも本当に上手い子だね。私も負けられないな、って思ってる」

「そんなに？ 久美子だって今じゃ相当上手い方だろ」

秀一に面と向かって言われると、何だか気恥ずかしい。自分なりにそれ相応の努力は積み重ねてきたつもりだったけれど、それを秀一が認めてくれていることは、純粹に嬉しかった。

「まあ上手い子が増えてくれる分には、全国行ける確率上がるから素直に嬉しいけどね」

「だよな」

言葉を重ねるにつれ、二人の空気はすっかりいつもの調子に戻っていた。さっきまでの肌寒さも今はもう感じない。そうして他愛の無い話を続けているうちに、気付けば三十分近くが経っていた。このままもう少し話し込んでいたいけれど、あまり遅くなってしまうと双方の家族が心配してしまう。

「もうだいぶ遅いし、そろそろ帰るか」

「うん」

秀一に促され、久美子も腰を上げる。敷いていたタオルを丁寧に折り畳み、それを秀一へ返す。

「これ、ありがとね」

「おう」

少しはにかみながら、秀一はタオルを受け取った。

「またそのうち来ようね」

「ああ」

それじゃ、と久美子が先に歩き出そうとした時、あのさ久美子、と後ろから秀一が呼び止めてきた。

「何？」

振り返ると、秀一は少し離れた距離からこちらを見つめていた。街灯から少し離れたせいで、秀一の表情は暗闇に覆われ良く解らない。

「いや、やっぱ何でもない」

後から行くから、と言って秀一は久美子を見送った。変なの、と小首を傾げて、久美子の影は家路の暗がりへと溶け込んでゆく。

公園にぽつんと佇む秀一の影は、その後も暫くそこに残ったままだった。

翌日。

音楽室に集まった部員達の群れを前にして、久美子は教壇に立っていた。

「今日から一年生も加わって、吹奏楽部の本格始動です。まず初めに一年生にはそれぞれパート毎にまとまって貰って、自分の使う楽器を決めて貰います。四時からはパーカッションとコンバス以外の一年生は中庭に集まって腹式呼吸の練習です。その後また各パートに戻って個人練、パート練と進めていきます」

予め用意しておいたメモ用紙に時々目を配りながら、久美子は今日の活動の流れを説明する。

「——以上、こんな感じですよ。腹式呼吸の練習は今週いっぱいありますが、来週から初心者の方は別に集まって貰って毎日一時間、合同基礎練です。明日には一度部員同士で合奏をして、土曜日の合奏では練習の成果を滝先生に見て貰います。毎日の練習終了時間は七時頃の予定です、六月に入る頃には八時まで延びます」

部室のどこかから「うげえ」という声が聞こえる。恐らくは一年生のものだろう。

「ですので、塾などの予定があつてその時間まで残れないという人は予めパートリーダーに伝えておいて下さい。お家の人にも説明をして、もし無理だという時は私や副部長の塚本まで相談に来て下さい」

吹奏楽部未経験者にとつて、この練習時間の長さは結構なハードルとなるのが時々ある。暇な放課後をそれなりに楽しく過ごそうというつもりで入った部員が、あまりに夜遅くまで練習することに驚き、やがて耐え切れなくなって辞めてしまう例も珍しくは無い。時には親からの同意が得られなくなり泣く泣く退部する者もいる。だからこそ、こういう話は一番最初しておくに越したことは無いのであ

る。

「それじゃ、この後は各パート毎にまとまってパートリーダーの指示通り動いて下さい。解散！」

一通りの説明を終えた久美子はメモ用紙を畳み教壇を降りた。自分の席に戻ると、低音パートの部員達がまとまって何やら話をしていった。

「これからみんなの使う楽器を決めるけど、その前に低音パートは練習場所が近いんで、先にそこでお互いの自己紹介をやっちゃいます。他のパートが大体決め終わった後で楽器選びをするから、まずは私の後について来てね」

一年生達に説明をしているのはパートリーダーの緑輝……ではなく葉月であった。別にこの場面、葉月がしゃしゃり出てきたという訳ではない。昨年秋に緑輝がパートリーダーに就任した直後から、表立ってパートをまとめる役は葉月が担っていた。元々運動部に所属していたこともあってか、葉月は進行役や牽引役に非常に向いていた為、緑輝自らの推薦によって葉月がこういった役回りを担う事になったのだ。

ならばパートリーダーとしての緑輝の役割はと言うと、パートリーダー会議で決まった事項をパートに持ち帰り伝達する、その日のパート練習の内容決めや練習中の指導をしたりする、といった部分に集中している。要はパートリーダーとしての役割のうち、人的な部分の取りまとめを葉月が、音楽面の指導を緑輝が担っているという格好だ。おかげで久美子は低音パートの中では一先輩、一奏者というポジションであり、部長職の激務に追われる中でパート練習の場だけが唯一心安らげる空間となっていた。

音楽的な知識と技術、そして経験が豊富な緑輝にとって指導はお手の物だが、ごちゃごちゃした調整役はあまり得手とは言えない。一方、二年前まで初心者だった葉月は音楽面での知見や指導力こそ不足しているが協調性が高く、周囲の空気を読み取って適切に振る舞う能力は緑輝や久美子よりも優れている。そして部長である久美子がパートリーダーの役割までもを全て負えば、その余りの多忙ぶりに疲

れ果ててしまったことだろう。何よりパート単位で活動している時ぐらいは自分の技術向上に時間と余力を費やしたい、と久美子は常々考えていた。三人がそれぞれの持ち味を活かしつつ、それぞれの負担を減らす。言ってみればこれは適材適所というものである。

「この三年三組が、私ら低音パートの練習場所です。部室から割と近いんで迷ったりしないうと思うけど、パート練をやる時は楽器持ってここに集合でよろしくね」

簡単に説明をした後、「んじゃーそろそろ始めますか、自己紹介」と葉月は拳を握った。

「まず、トップバッターは新生の男子から行ってみよう！」

葉月に押されて前に躍り出た一年生の男子は、ややふくよかな体形をしていた。雰囲気から察するに穏やかな性格のようであったが、どうも経験者らしく場慣れしているような印象を受ける。

「二年四組の星田計喜ほしだかつぎです。中学でチューバをやっていました。よろしくお願ひします」

ペこりと頭を下げた星田に拍手を送りつつ、内心予想通りだなあ、と久美子は思う。男子、体格が良い、低音、と三拍子揃えば殆どの場合は経験の有無を問わずチューバ、という図式が何故か吹奏楽部にはある。たまにそうでないケースに遭遇すると逆にこっちが驚くほどだ。もつともチューバだと思つて話しかけてみたら全然違う楽器だったという場合もあるので、この先入観はあまり当てにはならないのだが。

「さっぱりした挨拶で好感が持てるね！ それじゃ次はその隣の女子、君だ！」

葉月に指差され、すらりと高身長的女子が緊張したように頬を紅潮させながら頭を下げた。目線を合わせた感じ、久美子よりもけっこう身長が高いのがわかる。後ろに纏めて縛った髪型からは清廉な印象を受けた。

「二年一組の里中真帆さとなかまほです。吹奏楽部も音楽も初心者ですが、昔から楽器の演奏に憧れて、それで高校に入ったのをきっかけに入部を決めました。楽器はコントラバスを担当することになりました。上手

「かなりたいのでご指導よろしく願います」

「ぱちぱち、と周囲からの拍手を受けた真帆が慌てたように再び頭を下げる。どうやらこういう場にはあまり慣れていないらしい彼女の初心な振る舞いには、素直に好感を持つことが出来た。」

「うちは初心者大歓迎だから問題無し！　うちのコンバスは超上手いからガンガン教わってね。それじゃ最後の太トリ、どうぞ！」

そう言っつて、葉月が手で示したのは雫だ。

「二年六組、芹沢雫です。聖女でユーフォニアムをやっていました。よろしく願います」

いたって淡白に挨拶をし、会釈のようにカクンと一礼する雫。その表情は依然として綻び一つ無く、まるで鉄の仮面を被っているみたいだ、と久美子は思った。この子には果たして感情というものがあるのだろうか。それぞれの時とはまた別の意味で、彼女の人間性を読み取ることが出来ない。

「昨日の演奏は超上手かったね。もちろん経験者も大歓迎だからよろしく！」

一年生の自己紹介が一通り終わって、今度は二、三年生の紹介の番だ。

「えーっと、それじゃまずは三年の私から。三年一組、加藤葉月です。担当はチューバで、低音パートの仕切り役やっています。部活の事で分かんない事があれば何でも教えるから気軽に話しかけてね。これからよろしく！」

そつ無く喋り切って、葉月は手の平を額の前でかざす『敬礼』のポーズを取ってみせた。敬礼にしてはやけに手首が曲がっている気もするのだが、そんなものだろうか？　前から疑問に思っているのだが、何度尋ねてみても葉月からは今一つ納得できる答えが返ってこない。もしかしたらあれは葉月のオリジナルなのかも知れない、と久美子は考えることにしている。

「三年四組、低音パートリーダーの川島緑みどりです」

続いて緑輝が挨拶をすると、すかさず「嘘つくな！」と葉月から突っ込みが入る。

「言わないで下さい！ 言わなかったらバレなかったのに」

「いやいや、流石にいつかはバレるっしょ」

もう、と頬を膨らませて、緑輝はもう一度自己紹介をやり直した。「川島緑輝せきふみあです。グリーンの『緑』に輝くの『輝』と書いてサファイア、ですけど、覚えにくいですし緑も『みどり』と呼ばれた方が気持ち楽なので、どうか皆さんも『みどり』と呼んでください」

担当楽器はコントラバスです、と最後に付け加えて緑輝の自己紹介は終わった。じゃあ次は久美子！ と葉月に促され、久美子は一歩進み出る。

「えっと、もう入部式の時にも言ったと思うけど」

前置きをして、久美子は自己紹介を始めた。

「三年三組、部長の黄前久美子です。楽器はユーフォニアムです。普段は部長の仕事もあるのでパートに顔を出せないこともあると思うけど、朝練や居残り練もしているので見かけたらいつでも気軽に声を掛けて下さい」

それから、と久美子はさらに続ける。

「私個人の目標は、全国大会で金賞を取る事。そして、演奏者として『特別』になることです」

一息に言い切った。全員が息を呑む。その只中で、雫はまっすぐ久美子を見つめた。

「全国金賞は、私ひとりの力では達成できない目標です。だからみんなの力を借りなくちゃいけません。練習は厳しくなると思うけど、どうかついて来て下さい」

そこまでを告げて、久美子はぺこりと頭を下げる。それは久美子なりの宣戦布告だった。全国で金賞を取るのもそうだが、演奏者として『特別』になるということ、それはつまり、雫にも負けないという事をこの場で宣言したに等しい。雫は依然黙ったままだが、他の部員達は温かい拍手をもって久美子の言葉に応えてくれた。

「ダラダラやるより大きな目標に向かって真剣にやった方が絶対楽しいからね。皆も一緒に頑張って行こう！ それじゃ、次は二年生の番ね」

てきばきと進行の音頭を取る葉月に従う形で、二年生がそれぞれ自己紹介をしていく。その合間、久美子はちらりと雫を見る。二年生たちの挨拶を眺める雫の表情は、一貫して全く変わらぬままだ。むしろ冷たささえ感じるほど、彼女の顔に感情の色は浮かんでいない。ひとまず久美子の言葉を敵対的と受け取った風ではなかったが、逆に意にも介してないという態度であるなら、それはそれで悔しい思いもある。負けたくない。改めて、久美子はそう思った。

自己紹介の後は楽器室に移動し、それぞれが自分の楽器を決めていった。

星田が選んだのは、去年まで在籍していた卒業生の後藤卓也ごとうたくやが使っていたチューバだ。あちこちに凹みはあるけれども、後藤が三年間大事に手入れしてきたこともあって状態はすこぶる良い。経験者である星田もそれを感じ取ったらしく、幾つかあるチューバのうち最終的には卓也のチューバを「これにします」と手に取った。

次に、コントラバス初心者我真帆は右も左もわからない状況のため、緑輝に選んでもらった楽器を使うことになった。

「真帆ちゃん身長もありますし手も大きいですから、きっとすぐにコントラバス上手くなりますよ」

緑輝の激励にも、真帆はきよんとして、

「身長大きいと、コントラバス上手くなるんですか？」

と、今一つぴんと来ない様子だ。

「まあ楽器が大きいからね。弦の上の方を押さえるのも、身長があった方が楽だと思っし」

「そうです！ それに手が大きいと、指を大きく開いて弦を押さえられますよ」

久美子の解説に緑輝も補足を加える。実際のところ、コントラバスのように大きい楽器に関しては、奏者の手指が長かったり身体が大きいが有利というのが定説である。緑輝のようなケースは例外中の例外であり、それには不利を覆すほど本人の弛まぬ努力があったであろうことは言うまでも無いのだが。

「そうなんですか……。私中学まで部活に入ってたし、身長大

きいのちよつとコンプレックスだったので、意外です」

真帆はちよつとだけ、きらきらした瞳で目の前のコントラバスを眺めている。彼女にとってこの出会いは運命のそれとなり得るのだろうか。久美子はそんなことを思った。

「私は、これにします」

その一言と共に、ケースからユーフォを取り出したのは雫だ。銀メッキ仕上げの管体は鈍く輝き、四番ピストンを小指で操作するタイプののもので、昨年まで誰も使っていなかったので少々傷みも見える。その銀色のユーフォニアムを腕に抱く雫の姿に、久美子は一瞬あすかの姿を重ねてしまった。何より彼女から醸し出される雰囲気があすかのそれとあまりにも似ている。そう感じてしまった自分自身に、久美子は少なからずショックを受けていた。

「こうやって銀ユーフォ持っていると、あすか先輩みたいだねー」

葉月も自分と似た何かを感じ取ったのか、隣にいる緑輝にひそひそと耳打ちをする。それを聞き留めた雫が葉月に尋ねた。

「あすかせんぱい?」

「あ、いや、二年前に卒業したユーフォの先輩なんだけどさ。めっちゃくちゃ上手かったんだよ」

慌てて葉月が説明すると、緑輝もそれに続く。

「技術だけじゃなくて知識もあつて、おまけに勉強もすごい出来て、卒業式の答辞もしたんですよ」

へええ、と下級生達から感嘆の声が漏れる。

「さらに超美人でナイスバディっていう、ありやもう完璧超人の域だったよね」

「はい。時々こわいこともありましたけど、緑はあすか先輩、好きでしたよ」

好き、という緑輝の言葉に、久美子の胸がとくとんと跳ねた。あすかの詳しい事情を知っているのは吹奏楽部の中でも、ひよつとしたら先輩達を含めても自分だけかも知れない。詳しい事情を知らない他の部員達には不気味がられたり、近寄りがたい超越的な存在、と思われていた節さえもあった。本当はそんなこと無かったのに。だからこ

そ、緑輝があすかの事をストレートに『好き』と発言したことに、久美子はちよつとだけ嬉しきを感じたのだった。

「色々な意味で特別な人だったよね、あすか先輩」

噛み締めるように久美子がそう言うと、雫は少し俯き加減にぽつりと呟いた。

「特別……ですか」

特別。そう、久美子にとっては今でもあすかは特別な存在だ。卒業後はほぼ全く連絡も取っておらず、他の先輩達から噂話すらも聞こえてこないの、今あすかがどう過ごしているのか、楽器を続けているのかどうかも久美子には分からない。けれど自分もあんな風に上手くなりたいと思うし、あすかの奏でる音は耳の奥に鮮烈に焼き付いている。あすかから託されたあの曲を時々吹いていると、脳内で流れるあすかの音色との比較が始まり『自分はまだまだ追いついていない』と感じるばかりで、だからこそ一日も早くあの音に追いつき、追い越せるようにと日々の練習にも熱が入った。久美子の思い出の中にあるあすかは現在進行形で久美子の目標であり、そしてあすかの存在と思い出こそが久美子を『特別』へと、より強く向かわせている。

「さって、それじゃ全員の楽器も決まったところで時間も大分押しちやってるし、一年は中庭で腹式呼吸の練習だからそっちに行つてね。戻ってきたら経験者の二人にはさっそく合奏用の楽譜渡すから。それと初心者の中ちゃんには緑ががつつり初心者レッスンしてくれるっていうから、楽しみにしてて」

ウヒヒ、と葉月が意地悪げな表情を浮かべる。真帆がすっかり恐縮した様子で「お手柔らかにお願いします」と緑輝に頭を下げ、一同に笑いが起こったところでその場は一時解散となった。

「やー、今年是将来有望な新人がたくさん入って、我が低音パートも安泰ですなあ」

学校の帰り道、葉月がしたり顔で唸りを上げる。

「星田はやっぱ経験者だから、基礎練は難なくこなしてたよね。ありや美佳もうかうかしてられないな」

くつつくと笑いながら葉月が名を挙げたのは、二年生のチューバ担

当、吉田美佳子の事だ。もともと吹奏楽初心者だった彼女は葉月と馬が合うらしく、入部してからはずっと二人で熱血しながら今日に至るまで練習に明け暮れていた。結果、当時三年生だった卓也と長瀬梨子も認めるほどの上達を遂げており、現在では目下レギュラー候補の一角となっている。ちなみに中学時代は水泳部だったそうで、葉月と毎度の如くスポ根世界を繰り広げているのもそのあたりに所以があるのかも知れない。

「そんな言い方したら、美佳子ちゃんかわいそうだよ」

久美子がたしなめると、平気平気、と葉月はあっけらかんとして答えた。

「美佳、この一年ですっごい上達してるし。それに『あの洗礼』を潜り抜けたんだから根性もあるもん」

「あー。あれねー……」

久美子は目線を脇に逸らして、去年の事を思い返す。

『私、トランペットとかサククスがやりたいんです』

という当時新入生の美佳子を『雰囲気的にぴったり』などと言いくるめ、無理矢理低音パートに連れ込んで来た葉月は、

『君の楽器はそのマウスピースが決めてくれる！ さあ、運命のお相手を探したまえ』

などと半ば腕づくでチューバ用マウスピースを美佳子に手渡したのだった。そりゃあ運命の相手がチューバになってしまうのも自明の論理というものだろう。かくして二年前に葉月自身がやられたのと全く同じ手法で、美佳子は葉月に転がされ、今はこうしてチューバを担当しているというわけだ。

「まあ、水泳部だったってことで肺活量が元々あったし、チューバ向きだったのはあったよね」

「そう！ 私けっこう勘が鋭いからさー。一目見て『この子はチューバ！』って確信したんだよね」

「すごいです、さすが葉月ちゃん！」

自分としては美佳子をフオローするつもりだったのだが、それに葉月は何故か鼻高々といった表情を見せ、緑輝はそんな葉月を意味不明

に持ち上げる。そうだったならわざわざ仕組む必要なんて無かったと思うんだけど、と久美子は独りごちた。

「ところで、里中ちゃんの方はどうなの？」

初心者である真帆はさぞかし苦労しているに違いない、と思ったのだろう。ほんの少し心配そうな表情を浮かべながら、葉月は緑輝に尋ねた。

「すっごく有望だと思います。今日教えたことはだいたい覚えちゃってましたし、今週の合奏は流石に無理だと思いますけど、コンクールのレギュラーも、もしかしたらあるかもです！」

ご満悦とばかり、緑輝は小さな鼻をふんふんと鳴らす。とは言うものの、である。緑輝が今日真帆に教えたことと言えば、本当に初歩的な楽器の扱い方、手入れの仕方、ボウイングの動きぐらいだ。音階練習にはちよつと触れた程度だし、本格的な演奏技術もまだまだこれからという状況では、まだレギュラーになれるかどうかというのはちよつと分からないのではないだろうか。こう見えて緑輝にはけっこう親バカの素質があるのかも知れない。

「あとは雫ちゃんか。あの子は本当、すごいよね」

葉月の言葉に、久美子は雫の練習風景を思い出す。基礎練が始まるや否や、雫は美しく乱れの無い音でロングトーンやスケール練習、リップスラーからタンギングまでを難なくこなしていた。ここまではしかし久美子の予測の範疇でもあった。問題はそこからである。「まさか今日渡した楽譜をほぼ初見で、あんなに吹きこなせるなんてねえ」

感心する葉月の言った通り、雫は渡された練習曲に一通り目を通すとすぐにそれを軽々と吹きこなしていた。初見の楽譜を吹きこなす能力を音楽の世界では『初見力』と呼ぶのだが、その能力の養成には膨大な量の基礎練習と音楽的知識、様々な楽曲を演奏することで培われる経験が必要となる。それらが無ければ一瞥した程度の楽譜に書かれてあることを正確に読み取り、正確に音へと換えて演奏することは出来ない。その点、雫の初見力の高さは驚異の一言に尽きるものであった。同じパートを担当する久美子から見ても殆どミスや手落

ちが見当たらない。一体この子は中学時代、どれだけの練習を積み重ねてきたのだろう。久美子にはまるで想像がつかなかった。当の雫は相も変わらず涼しい表情で、まるで『こんなの出来て当たり前』と言わんばかりだったのが、今も目に焼き付いている。

「雫ちゃん、中学校の時よりもっともっと上手くなりました」

部内トップクラスの実力を持つ緑輝ですら、雫の事を掛け値なしに褒め称えている。彼女の實力はこの二日の間で吹部の誰もが認めるところとなっていた。

「あんなとんでもない子が入って来るなんて、久美子も負けてられないね」

「そうだね」

炊き付けるようなことを言つて来た葉月に、久美子は短めに、しかしはつきりとした口調で答えた。久美子の中で結論はもう出ている。雫のような化け物じみた奏者が相手でも、それを超えていかなければ自分の思う『特別』には届かない。ならば後はやるだけだ。昨日の麗奈との会話以来、久美子の心は妙に晴れ晴れとしていた。

「何にしても凄腕のメンバーも増えだし、私達も負けてられないしで、今年の吹部はマジで全国金賞行けるかもだね」

うん、と三人が揃って頷く。ちようど会話が切れたところで、今がチャンス、とばかりに久美子は切り出した。

「ところでなんだけど、二人とも、もう進路のことって決めてるの？」  
出来るだけ自然に、久美子は二人に尋ねる。先日の反省も踏まえ、皆が進路をどうするつもりなのか、なるべく聞いておきたいと思っていたところである。

「うん、決めてるよ」

最初に答えを寄越したのは葉月だった。

「私、勉強あんまり得意じゃないからさ。去年ぐらいから大学はもう諦めてて、保育系の専門学校に行こうかなって思ってるよ」

「へー」

澄まし顔で相槌を打ちながら、久美子は密かに狼狽していた。まさか、というのも失礼だが、葉月が既に進路を決めていたとは。心のど

こかで『葉月だけは自分と同じ』と思っていたさつきまでの自分を、猛烈に呪わしく感じる。

「けっこう、小っちゃい子の面倒見るの好きなんだよね。うち弟もいるし、割と慣れてるっていうか」

「それ分かります。緑も妹がいますから」

そう言えば緑輝の妹のことは話に聞くばかりで、まだ実際に会ったことが無かった。葉月とは以前に顔を合わせているらしいのだが、その詳細までは何故か語ってくれなかった。まるで緑輝の生き写しのような子だとのことで、前々から一度見てみたいものだと思味を持つてはいたものの、中々その機会は訪れなかった。今度緑輝にお願いしてみよう。久美子はそんなことを考える。

「じゃあ緑ちゃんは？ 前は確か、服飾の学校に行きたいって言ってたよね」

「はい、緑お洋服好きなので。今はどこの学校に行こうかなって、あちこち探してます」

こちらにも既に具体的な進路を定めつつあるようだ。こうして目標がブレないのは、ある意味とても緑輝らしい。

「久美子は？」

葉月に話を振られ、久美子は「ん、」と言葉を濁す。久美子にも思い描く進路が無いではない。ただ気軽に他人に語れる内容でも無いので、言うべきかどうかを未だ迷っていた。

「もしかして、まだ決まってるんです？」

緑輝の言葉に、いやそうじゃないんだけど、と久美子はうつかり返してしまう。

「じゃあどこ行くの？」

葉月にも突っ込まれ、いよいよ久美子は逃げ場を失ってしまった。緑輝もこちらに身を乗り出している。二人の姿勢はもはや、久美子の進路を聞き出すまでは収まらない、という体だ。運の悪いことに駅までの道のりにもまだ幾分か距離がある。これはもう、観念して打ち明けるしか無いだろう。

「じゃあ言うから、笑わないで聞いてね」

一応前置きしてから、久美子はすうつと深呼吸した。

「あ、進路のことはまだ誰にも言っていないんだけど、親にも」

「高坂さんにも、塚本にも？」

葉月の問いに「うん」と久美子は頷く。

「それに行けるかどうかもわかんないし、それこそ絵空事みたいなものかもだけど——」

「ああもう、早く教えてくださいー！」

緑輝がたまりかねたように両手をじたばたさせる。ごめんごめん、と緑輝の拳を手の平で受け止めながら、久美子は切り出した。

「私ね、ユーフォのプロになりたいって思ってるんだ」

その告白に、葉月と緑輝は二人揃って目を丸くした。

「もつとユーフォ上手になりたいし、ユーフォ好きだし、音楽も好きだから。だから、プロになってもつともつと音楽に関わっていたいって思ったら、じゃあ音大かなって考えてて」

思い切って喋ってから、久美子は急に顔がかあつと熱くなるのを感じた。自分の本当の希望進路を他人にはつきりと喋ったのはこれが初めてのことだ。二人にはどう思われただろう。それこそ馬鹿な絵空事と思われただろうか。葉月と緑輝はさっきのままの表情でしばし硬直していたが、やがて二人とも堰を切ったように口を開いた。

「すごいー！」

緑輝が感心の言葉を漏らすと、葉月も満面の笑顔で大きく頷いた。

「なんだ、もうすっかり進路決めてるんじゃない！ 久美子ならきつと行けるよ」

「でも、音大の試験って難しいっていうし。みんな中学ぐらいの頃から専属の先生についてもらって教わってるっていうから、入れるかどうか本当にわかんないよ」

「大丈夫です、久美子ちゃんならきつと行けますよー！」

緑輝ほどの実力者がそう言うってくれるのは悪い気はしなかった。仮にそれが、音大入学の現実を何一つ知らない上での言葉であったとしても。

「でも、うちの親が何て言うかだなあ。お姉ちゃんの時も進路関係で

相当に揉めたし、私が音大行きたいなんて言ったら、発狂して飛び掛かって来るかも」

「いやいや、流石にそれは無いっしょ」

葉月は苦笑しながら手を振ってみせたが、葉月ちゃんはその親を知らないんだよ、と久美子は唇を尖らせる。二年前、姉の麻美子の件で父親が見せた険しい表情、そして言動を、自分は今でも忘れていない。普段は温和で物静かな父があればほどまでに激昂したのを、あの時初めて目の当たりにした。母親もなんだかんだで安定志向の人間だし、音大への進学など二つ返事で許してくれるとは到底思えない。自分がプロを目指したい、音大に行きたいなどと親に面と向かって言えば、あの二人がどんなことを言ってくるか。容易に想像できるような、想像したくないような、と久美子は身震いした。

「でも親にはきちんと言つとかなくちゃね、どっちに行くにしても」

葉月は久美子から視線を外し、それにしても、とおもむろに空を見上げると、

「私達もとうとう、進路とか言い出す時期になっちゃったかー」

と一人ごちるように呟いた。

「こないだまで入学したばかりだと思っただけで、三年生になるまであつという間でしたね」

時の流れの速さを感じているのは葉月だけではないらしい。緑輝もまた、過ぎ去った二年間を懐かしむようにしみじみと言う。

「頑張ろうね。部活も、進路も」

葉月がそう言うのと、緑輝も「はい！」と拳を天に突き出す。

「久美子もね。私ら応援してるから」

葉月の微笑みに、久美子もまた顔を綻ばせ「ありがとう」と返す。この二人と友達になれて本当に良かった。久美子は心の底からそう思った。

## 二・かなでるカンタービレ

「いよいよ合奏の日になりました。皆さんの練習の成果を見せてもらいます」

音楽室の壇上には滝が立っている。既に日付は土曜、入部式で滝が言った『試し合奏』の日となっていた。試し合奏では初心者を除く全員が楽器を持ち、簡単な練習用の曲を吹くことになる。

今回選ばれた『ロマネスク』はゆったりしたテンポで進行するのが特徴の曲だが、それ故にハーモニーがきつちり合っていないと美しい響きが生まれない。さらにテンポが遅いからこそ音の出だしがばらけるとすぐに目立つ等、バンド全体の基礎技術が演奏に表れやすい曲でもある。久美子を始めた低音パートは全員、滝の本性を一年生達に叩き込みつつ、簡単な曲でもしっかり演奏できるようにと油断なく練習を行っていた。それは他のパートも同じことだろう。二週間前はまだ朗らかな笑顔だった幸恵も、今はトランペットパートに混じって緊張と集中の色に包まれている。

「それではまずは全員で、一度通しましょう」

滝が指揮の手を構えると、全員が楽器を構えて静止した。場の空気が整ったのを確認するように頷いてから滝はゆっくり二度手を振り、そして演奏が始まる。部員達の奏で出す音が部室全体に鳴り響き、曲は穏やかに進行し続ける。途中ハーモニーが怪しい箇所も幾つかあったが、大きな破綻は無く丁寧に演奏が続けられていった。終盤の音量が大きくなる区間も十分なダイナミクスを確保して、厳かに曲は終わる。

指揮の手を降ろした滝はまず最初に、

「皆さん、よく練習してきました。個別に言いたいことは無数にありますが、ひとまずは合格です」

と告げ、それと同時に部員達からは安堵の溜め息が漏れた。

「もうすぐサンフェスもありますし、時間があるとは言え油断はできません。コンクールに向けての練習も含め、一つ一つの課題を迅速確実にこなして行って下さい」

はい、と部員達は大きな返事で応える。

「ですがその前に、今やった『ロマネスク』はきちんと仕上げてください。この合奏が終わり次第サンフェス用の曲を配りますが、今はまずこちらに集中してください」

そう言うのと、滝は今しがたの合奏での問題点を次々と各パートに突き出していく。

「クラリネット、ここは大隅さんの音程が合っていません。きちんと周りの音を聞いていましたか？」

「は、はい……」

「でしたら、ちゃんと合わせて下さい。あなた一人がここのハーモニーを崩しています」

「はい」

「トランペット、ここは東中さんの音が上擦り気味でかすれています。もっと美しく通る音で」

「はいっ」

こういった具合に、滝はただ一度の合奏から全員の音の乱れを聞き取り、手厳しい指示を飛ばしていった。それを受ける一年生達の空気からもどこか浮ついていたものを取り去られ、上級生達と同じ緊張感が次第に湧いてくる。中には泣き出しそうになるほど責められる子もいたが、それでも決壊はせず必死に涙を堪えながら滝に返事をしていった。既に全国二連続出場校となった北宇治にあえて入部してくるだけあって、今年の一年生は意外と根性の据わった子が多いのかも知れない。何にせよ、滝が決して柔和で優しいだけの教師ではないという事は、この試し合奏で存分に伝わったことだろう。

その後も何度か曲を合わせ、滝が指示をし、生徒達はそれによって音をどんどん修正していく。こうして全体の音がだいぶ改善されたところで、滝は譜面台の楽譜をぱたりと閉じた。

「それでは今日はこのぐらいで終了します。この後サンフェス用の楽譜を配りますので、各パートリーダーは職員室まで取りに来て下さい。午後からは個人練、パート練を中心に進めてもらいます。いいですね？」

「はいー！」

「明日からは副顧問の松本先生まつもとも来て下さいますので、サンフェス用の行進練習も本格的に行っていきます。詳しいことは後ほど部長から説明してもらいますので、皆さんは練習と準備を怠りないように」  
そう言い残して滝が音楽室を去ると、部員達は一斉に「うへえ」とへばったような息を漏らした。

「超きつかったあ」

「あんなに厳しいとは思ってませんでした」

「何言ってるの、あれでもまだ優しい方だよ？」

「げ、まじですか」

「コンクール前なんかあの十倍は厳しいから。あたしも泣かされたことあるし」

こんな声が部室のあちこちからどよどよと聞こえて来る。ここ二年の状況を知っている久美子達からすれば、今日の演奏は十分及第点と言えるだろう。どことなく機嫌が良さそうな滝の雰囲気それぞれを雄弁に物語っていた。出来が悪ければ二年前のように合奏を放り出して中座してしまっていただろうし、去年の試し合奏では出来ていないパートだけが全員の前で延々と演奏し続ける、通称『公開処刑』を喰らい、最後には「時間の無駄」とバツサリ切り捨てられ泣き出してしまふ部員もいた。そんなことが無かっただけ、今年はまだマシというものだ。

「はいはい、みんな静かにして」

部長らしく心を掛けつつ、久美子は手を鳴らしながら前に出る。

「それじゃこの後はお昼を挟んでから、パートごとにまとまって練習時間にします。各パートのリーダーはお昼の前に楽譜を取りに職員室に集まってください。サンフェスまでは時間が無いですし、行進しながらの演奏中は楽譜を見ることもできないので、一日も早く曲を覚えてね」

「はいー！」

全員の返事に久美子が頷いたところで、部員達はひとまず解散となった。久美子が席に戻ると、真っ先に葉月が声を掛けてきた。

「久美子、お疲れ〜」

「今日は滝先生、かなり優しくかったですね」

緑輝もそこへ合流してくる。と、それを聞いていた星田がげんなりした表情で会話に混ざって来た。

「あれでですか？　口調は丁寧ですけど、言ってることは超厳しかったですよ」

「相手手ぬるい方だったぞ」

星田に答えたのは二年生のユーフォ担当、相楽だ。ピストンをカタカタと弄りながら、相楽は仰々しく溜め息を吐く。

「あたしらの時はもう、一日中合奏し通しだったんだから」

楽器持たずにと座ってるのもしんどかったなあ、とチューバ担当の美佳子も遠い目をして答える。

「言い方は柔らかいんですけど棘があるっていうか、ズバズバ来る感じでしたね」

こちらは今回合奏に参加しなかった真帆の言だ。少し怯えたような表情を見せる彼女はきつと、いつかあれが自分に浴びせられる日が来ることを想像しているに違いない。

「コンクール前はもつとキツくなるよ、レギュラーになったからって喜んでられないぐらいにね」

したり顔で後輩達を相手に語る葉月は、どことなく嬉しそうに見える。自分達が通って来た道を後輩達も順調に踏んでいるのが嬉しいのか、はたまたもつと険しい道が先にあることを知っているからこそ愉快さなのか。いずれにしろ久美子には、乾いた笑いをこぼすより他には無かった。

「私達が一年生の頃は、一回合奏やめちゃって、それからもう大変だったんだよ」

「そんなことがあったんですか」

久美子の言葉に星田が驚く。

「コンクールで全国行くような学校だから、そういうトラブルって無いのかと思ってました」

「全然！　そりやもう語り出したら止まらない、波乱万丈の時代が

あつたわけよ」

本来なら自慢話にもならない事なのだが、何故か葉月はそこで得意げに胸を張った。

「まあその話は今度ゆっくりするとして、まずはお昼だね」

そう言つて、久美子はふと雫の方に目を向ける。雫はいつも通りの無表情で楽譜を睨んでいた。合奏中一度も滝の指摘を受けなかったのが不満だったのだろうか？ それとも雫には曲のレベルがあまりに低すぎて物足りなかつたか。雫が何を考えているのかは未だに量りかねるところがある。まずは最初のキツカケを。そう思い、久美子は雫に声を掛けた。

「芹沢さん、よかつたら私達と一緒に食べない？」

「すみません。お昼は一人で食べたいので」

事前の想像よりも、雫の返答はずっと冷淡なものだった。彼女はするりと楽器を置き、久美子に一礼する。

「午後の練習時間までには戻ります。失礼します」

そつけなく告げるや否や、雫は部室から出て行ってしまった。その一部始終を、低音パートの全員が唾然とした表情で見送る。

「せつかく黄前先輩が誘ってくれてるのに」

「まーまー、芹沢さんにも何か用事あるかも知れないからさ。あんまり無理に誘つても、かえつて窮屈かも知れないし」

美佳子が眉間に皺を寄せながらこぼしたのを、すかさず葉月がなだめにかかる。

「じゃあ緑、楽譜を貰いに職員室に行つてきますので、皆さんは先に教室に行つててください」

緑輝も自分の楽器を置き、手を振りながら部室を出ていく。それを合図に一旦その話題は打ち切りとなった。頑なに距離を置こうとする雫の姿勢に得体の知れないもやもやを抱えながら、久美子は葉月達と一緒に部室を後にした。

「これがサンフェス用の曲かー……」

お昼用のパンをかじりながら楽譜を眺めていた葉月が「うーん、」と唸る。今回、サンフェス用に滝が選んだ曲は『ミスディー・ファンタ

ステイツク・イリユージョン』。ミスデューとは大きなテーマパーク施設もある著名なエンターテインメント企業の名称なのであるが、この曲は同社が手掛ける数々のアニメーション作品などの楽曲が散りばめられており、誰もが一度は耳にしたことのあるものばかりが詰め込まれた愉快的な行進曲だ。華やかなパレードを飾るにはこれ以上ない選曲と言えるがそれだけに難易度も高く、特に野外での演奏となるサンフェスでこの曲を響かせるには相当の技術が必要になるだろう。もつとも本番の行進に用いるためにはテンポの調整や繰り返しなど、多少の編曲は行われることになる筈だが。

「これ、残り日数でモノにできるんですかねえ？」

お弁当をつつく美佳子も訝しげな視線を楽譜に向けている。

「まだ時間もありますし、今から一生懸命練習したらきつと大丈夫ですよ！」

緑輝は目をらんらんと輝かせ、鼻息を荒くしている。こんなにもテンションが高いところを見るに、もしかして緑輝はミスデュー愛好家だったりするのだろうか？ そう思い、久美子は緑輝に尋ねてみる。

「はい！ 緑、ミスデュー大好きです！」

溢れる笑顔で緑輝はぴょんぴょん飛び跳ねた。恐らく全身でミスデューへの愛を表しているのだろう。

「でも今回もガードなので、演奏できないのが残念ですけど」

やはり本心ではコンバスを演奏したかったらしい。ちよつとしよんぼりした様子の緑輝に、初心者我真帆が怪訝な表情を浮かべながら尋ねてきた。

「ガードって何です？」

確かに、初心者にいきなりガードなんて言っても何のことか分からないか。そう思い、久美子は解説を試みる。

「ガードっていうのは、今回みたいにパレードする時に楽隊の中で旗とかを持ってパフォーマンズする役のことだよ。正式にはカラーガードって言うんだけど」

それを聞いて、隣にいた星田がへええ、と納得の声を上げる。

「そんな役もあるんですね。俺、今まで座奏しかしたこと無かったん

で、マーチングのことは全然分からなかったです」

星田が言うように、一口に吹奏楽部と言ってもマーチングをする学校もあればしない学校もある。例えば北宇治の場合、マーチングはサンフェスや立華との合同演奏会が例外なくらいで、後はほとんど座奏が主体だ。逆に立華のようにマーチング主体で活動をしている学校もあり、それによって知識や経験の幅や量は随分と変わる。中学校や高校への進学を機に全く新しい分野を覚えるという事も、決して珍しくは無いのである。

「じゃあ、私もガードをやるんですか？」

真帆は相変わらず不安そうな表情を浮かべている。吹奏楽未経験の彼女にとっては何もかもが新鮮であり、裏を返せば何もかもが未知なのだから、当然と言えば当然だろう。

「どうだろ、北宇治だと初心者はステップ係やることも多いから。私も一年の時はステップ係だったし」

「ステップ係、ですか？」

また一つ知らない用語が増えたことで、真帆の混乱はますます深まってしまったようだ。葉月の一言で彼女の眉尻がぐにやりと曲がったのを、久美子はしっかりと見てしまった。

「ああ、ステップ係っていうのはね——」

その後もひとしきり久美子が真帆達へ解説を加えているところへ、雫がいつも通りの無表情で教室へ戻ってきた。

「すみません、遅くなりました」

「ああ芹沢さん、丁度良かった。はいこれ、サンフェス用の楽譜ね」

葉月はくわえていたパンをもぐもぐと咀嚼し飲み込むと、雫にユーフォニアム用の楽譜を手渡した。雫は渡された楽譜をじっと眺め、それからのろりと動き出し、教室の端の方の席に陣取る。

「もう譜読み始めてるんだね」

久美子が声を掛けると、雫はちらりと視線を向け、

「当然です。少しでも早く吹けるようになっておきたいので」

とだけ言って、それからまた楽譜に視線を戻した。練習熱心、といえばそうなのだが、何だろう。久美子は雫の後ろ姿に鬼気迫るものを

感じ取っていた。もつと上手になりたい。いや違う。一瞬たりとも気を抜かない、まさに真剣を抜いた侍のような、そんな気迫だ。いったい何がこの子をそこまで貪欲にさせているのだろう。けれど、そんな事を問い質しているような余裕は久美子にも無かった。

「じゃあ私も個人練始めようかな。みんなは時間までゆつくりしてて」

そう言い残し、休憩もそこそこに久美子は弁当のカラを片付け始める。

「え、もう?」

「うん。芹沢さんも頑張ってるんだし、三年の私だって負けてられないもん」

呆気に取られる葉月に、久美子は少々おどけてみせた。無論それは孤立しがちな雫を気遣う意味もあったのだが、当の雫は目線すらくれず黙々と譜読みを続けている。そうだ、負けてられない。久美子は楽譜を掴み取り、「それじゃまた後で」と教室を出た。

一旦部室に戻って楽器と譜面台を用意し、渡り廊下に出る。音楽室のある棟と本校舎を繋ぐこの露天の廊下は部員達にとって馴染みの深い光景の一つであり、久美子にとってはお気に入りの個人練の場所でもあった。ここからは通学路や駅など、校舎周辺の街並みがすっきり見渡せる。そこに立って自分の音を響かせると、まるでここから街の人たちに自分の音を届けているような、そんな愉快的気分になることが出来た。

所定の位置に譜面台を下ろし、楽器に軽く息を吹き込む。昼休憩上がりの一発目なので、まずはロングトーンやリップスラーなどの基礎練習から。今の久美子を取り組んでいる基礎練習のメニューはそれだけでなく、各調ごとのスケール練習、曲の一部分を切り取ったフレーズ、様々な場面で出てくるパッセージ、など多岐に渡る。それらをすらすらとこなして、楽器がすっかり温かさを取り戻したところで、最後にはいつもあの曲を吹くことにしていた。

「行きますか」

誰にともなく呟いて、出だしの音を鳴らす。一年とちよつと前、当

時一年生だった久美子が、卒業していったあすかから手渡された一冊のノート。そこに書かれていた曲を久美子は今でも毎日一度は目を通し、こうして練習の度に吹いている。本当は既にすっかり頭の中に入っているのに楽譜を確認する必要など無いのだけれど、何とというかこのノートにはそれだけではない、この曲を書いた者とそれを大事に持ち続けていた者の思いが込められているような、そんな気がしていた。

あすかが奏でていたその曲の音色は本当に美しく、切なくて、温かくて、この世界に存在する全ての感情を音に替えて演奏しているような、そんな豊かな音色だった。初めてこの曲を自分で吹いた時には、そんな音色を奏でるのがいかに難しい事かを痛感させられたものだった。一見しておっとり優雅に進行するかに見えるその曲は、実はハイトーンや低音への動きも多く、十分に響かせるには一つひとつの音をしっかりと鳴らすことが求められる。

久美子は最近になって、あすかがマウスピースで音階を奏でた時、何故あんな綺麗な音が出せたのかをようやく理解出来るようになってきた。つづつあった。そもそも楽器を付ける前のマウスピースだけの音がしっかりと響いていなければ、楽器で吹いた時の音だって響くはずがない。それはひとえに基礎中の基礎であるバズイングの技術の確かさに由来する。加えて音の表情。微細に変化する音の揺れを自在にコントロールする技術。音量を緻密に調整する技術。一つずつの要素がことごとく極めて高いレベルを持っているからこそあの美しい音色が成立するのだ。

そして、さらにもう一つ。最近になって久美子にも解って来たことがある。この曲を本当に美しく響かせるにはこうした技術の面だけではない、別の何かが必要なのだということを。それが何なのかはまだ久美子にも解っていない。だからこそ久美子はそれを求めて毎日ノートを眺め、毎日この曲を吹き続けている。

一通りを吹き終えてふうつと楽器を離れたところで、渡り廊下の入り口に立つ観客の存在に、久美子はふと気が付いた。

「今日もきれいに響いてるね」

そこにいたのは麗奈だ。彼女もまた自分の楽器と譜面台を持つている。おそらく久美子と同じで、昼食後の個人練に来たのだろう。

「まだただだけどね」

久美子は謙遜しながら、自身の胸に抱かれたユーフォニアムをじつと見つめる。

「まだ理想の音には届いてないから。もっと上手くならなくちゃ」

その緊迫感を感じ取ったのだろうか、麗奈は譜面台を置くと久美子の前髪に手を伸ばし、さわさわと掻き分けた。

「そんなに根を詰めると体に毒だよ。大丈夫、久美子すごく上手になってる」

「本当?」

「本当」

麗奈はふふつと薄く笑い、それからトランペットを構えて基礎練習を開始した。その仕草に、久美子は二年前のことを思い出す。

二年前、麗奈は『特別』になるために、当時の自由曲のソロパートを賭けて三年生だった中世古香織なかせこかおりと対峙した。結果ソロパートは麗奈が務めることになった訳だが、あの時の経験を通じて麗奈は自分の為だけでない音楽があることを知ったように思う。

それから更に二年の月日を経て、麗奈は本当に変わったと久美子は思っていた。進路の関係もあって部内の役職にこそ就いてはいないけれど、部長に就任した久美子を影から支えてくれたり、パーティーダー会議でも麗奈の視点から色々指摘をして改善を図ってくれる。久美子達以外の部員と話す機会もかなり増えた。『特別になる』という麗奈自身の目標、目線は変わっていないけれど、それでいて周りの人達との距離感はずっと縮まっている。こんな麗奈の現在も、二年前の彼女からはまるで想像がつかない事だ。

二年。あつという間に過ぎ去ったようで、この上なく濃密だった二年間は、あの麗奈でさえも大きく変えるほどのものだった。自分はどうだろう。久美子は考える。人間関係がいろいろ変わったり部長になつたりはしたけれど、あの頃憧れた『特別』に、自分は少しでも近づけているだろうか。

「そろそろ時間」

そう呟いて、麗奈が手元の腕時計を見やった。

「じゃあ、パート練習に戻ろっか」

貴重な練習の時間はひと時たりとも無駄に出来ない。久美子も楽器から口を離し、場の片付けに入った。

翌日、日曜日。

今日は校庭で、サンフェスに向けた行進の練習をすることになっていた。今日が最初ということもあって楽器は持たず、足踏みや歩行の動作だけをひたすら練習する。マーチングでは基礎中の基礎と言えぬ動きだが、未経験者にとってはなかなか難易度が高い。歩幅やつま先の角度などを決められたものに保ちながら歩き続けるだけでも結構な負荷がかかる。とりわけ吹部の練習は普段から運動することなど滅多に無いので、体力的には余計にしんどいのである。

「はい、もつと横の動きを意識して。歩幅ずれてくるから、きっちり合わせる！」

本日の練習、全体に指示を飛ばしているのは秀一だ。副部長と学生指揮者を兼任する秀一は、マーチングの際にはドラムメジャーという役割を担う。ドラムメジャーも平たく言えば指揮者なのだが、楽隊全体の挙動を統率あるいは管理する役という意味合いが強いらしく、ことマーチングの際には日頃の行進練習からも他の生徒達の指導を担当することが多い。このため部長である久美子もサンフェス用の練習では基本的に一演奏者として、他のメンバーに混じって行進練習をしている。

「八歩で五メートル、っていう感覚をもつと体に叩き込んで。一歩一歩の形が固まらないとすぐずれるから、全員意識しながら歩いて！」

まだ五月にもなっていないというのに、澄み切った空からは夏場かと錯覚するほどの直射日光がぎりぎり照り付けている。しかも練習中はなかなか休憩にならず、全員が完璧に揃うまでひたすら歩き続けなければならない。何度もこの練習をやってきた久美子でさえ、一時間も経つ頃にはすっかり息が上がってしまっていた。

「おつかしいなあ。私運動部だったし、体力には自信あるつもりだっ

ただけど、」

隣にいた葉月も肩でせいぜい息をしながら、絞るように愚痴をこぼす。

「なんつかマーチングって、全然疲れ方が違うってというか、毎度しんどいんだよねえ」

「決まった動きでずっと歩き続けるからね。使う筋肉が違うのかも？」

久美子も額に溜まった汗を袖で拭う。この晴天のせいで気温もだいぶ上がり、行進練習はかなりそのハードルを上げていた。他の部員達にも一様に疲れが見て取れ、中には中腰の姿勢でグロッキーになりつつある者もいるほどだ。

「お前ら、まだ一度もまとも合ってないぞ！ 列を乱さず直立しろ！！」

ここで雷のような一喝を飛ばしたのは、副顧問の松本美知恵だ。彼女の大音声で怒鳴られれば、それまで疲労に折れ曲がりそうだった背筋もぴしりと元に戻ってしまう。マーチングの特性上こうした場面での指導は『軍曹先生』の渾名を持つ彼女の性に合っているようで、特に基本の動きの部分に関しては顧問の滝に代わって辣腕を振るう場面も多い。この通りとても厳しい教師なのだが、それが愛情の裏返しであることを知っている久美子たち上級生には、叱咤の言葉も力強い激励のように聞こえるのだから不思議なものである。

「ほら、そこ一年！ 踏み出しの足はバタバタさせないでもっと早く出す！」

「意識が甘い！ 列が乱れるのは集中を欠いているせいだ。やる気はあるのか!?!」

秀一の指示と美知恵の怒号が交互に飛び交う。それからさらに一時間ほどして、ようやく列がきちんと整い始めたところで、

「それでは十分間休憩とする。十分後に再びこの場所に整列するように。列が完璧に揃うまで何度でも繰り返し練習するからな。覚悟しろ！」

美知恵からのお達しに全員が「はい！」と力の限り声を振り絞って

返事をしたところで、一旦解散となった。

「うあく、もうダメ」

久美子と葉月はフラフラと木陰に向かい、置いてあった水筒を二人同時に手に取ると、一気に半分ほどをぐいぐいと飲み干す。

「つぷはー！ 生き返るぜえ」

口元に手を当てて大げさなりアクションをする葉月の姿に、まるでおっさんみたいだ、と久美子は密かに思った。見渡すと、他の生徒達も日陰のある校舎脇などでへたり込んでいる。その中には幸恵の姿もあつた。校舎の壁にもたれかかり脱力しているとところを見るに、きつと幸恵はマーチング未経験だったのだろう。弛緩しきつた顔で天を仰ぐその姿からは、『こんなはずじゃなかった！』という彼女の心の声が聞こえて来そうだった。

「ありやー。あの様子だと東中ちゃん、今夜は筋肉痛だね」

葉月も久美子の視線に気付いたのか、幸恵の方を見やっている。

「だねえ」

とその時、木陰に向かってくる人の群れの中、雫の姿に気付いた久美子は咄嗟に「芹沢さん」と声を掛けた。雫もちちに気付き、そのままスタスタと近付いてくる。その歩き姿にはまるで疲れらしきものが見当たらない。多少汗はかいているものの、表情はいつもと同じでいたって落ち着いたものである。

「お疲れえ。なんか割と平気そうな感じだね」

ジャージの裾をぱたぱたさせながら葉月も雫をねぎらう。

「はい。中学の時からマーチングをやっていたので」

雫の返答に、確か聖女はマーチングの大会にも参加しているらしく、以前に緑輝が『ガードは久しぶり』と言ったたっけな、と久美子は過去の記憶を思い浮かべた。

「じゃあマーチング慣れてるんだ？」

「それなりにです」

久美子の尋ねに、雫が珍しくテンポよく答える。

「あと、毎日ランニングしてるので。朝五時から一時間ぐらい、ですけど」

何気ない雫の言葉に、葉月と久美子は「えっ」と目を見開いた。

「すごいね、めっちゃ早起きじゃん！」

「私も朝は大体同じくらいに起きるけど、そんな朝早くからランニングなんてとても出来ないよ。芹沢さん、すごいね」

久美子のその一言に、雫は、

「……大したことありません。楽器演奏にも基礎体力は必要ですから」

と言い残して軽く会釈をすると、自分の水筒を置いてあるところへと行ってしまった。

「うーん、そっかー！ やっぱ上手い子は人の見てないところでも頑張ってるんだね。私もこれからちよつと早起きして朝ランしようかな？」

葉月は雫の言葉に純粋に感心したらしく、腕組みをしながら早起きを検討し始めている。久美子はこの時、言葉に出来ない違和感、というよりは不自然さを覚えていた。去り際の雫の姿に何か普段と違うものがあつたような……。それが何なのかを掴みたくて必死に考えを巡らせるが、これといった回答には辿り着けない。

「そろそろ練習再開です。元の位置に戻って整理してください」

秀一の鷹揚な声で久美子は我に返る。考えても分からないものは分からない。今は気にしないことにしよう。そう思つて久美子は水筒を置き、再び日なたへと戻つていった。今しがた感じ取つたものが何だったのか、このときの久美子には分からずじまいだった。

「うあー、もう足痛い……歩くの辛いよ〜」

今日一日きつちりと酷使してしまつた自分の足をさすりながら、幸恵が呻く。行進練習が終わる頃には日もとっぷりと暮れていた。夜灯に彩られた駅までの帰り道を、久美子は幸恵と二人並んで歩く。

「確かに今日は初日からキツかつたね。天気良かったせいで暑かつたし」

「キツイどころじゃないよ、今日一日で五十キロは歩いた気がする。足の裏じんじんするし、太ももまで血管全部切れてるんじゃないかってくらい痛いもん」

「でも今日はまだマシンな方だよ？ 明日からは楽器持って実際に音出しながら行進練習だし、滝先生も来れば曲練習も始まるから、そつちのダメ出しも凄いことになるよ」

くたびれきつている幸恵に、久美子はさらなる追い打ちをかける。頑張れさつちゃん、私達も通って来た道なんだ、と心の中でほくそ笑みながら。

「えー、もう絶対無理い。中学の時マーチングなんてしなかったもん」  
幸恵はすっかり青息吐息といった様子である。北宇治はマーチングの大会には出場しないので本格的な練習はサンフェスまでということになるが、そのわずかな期間でも練習の内容は濃密だ。とりわけ受験上がりのなまった体にこの運動量は、相当堪えていることだろう。

「そう言えばさつちゃん、中学の時の同級生ってほとんど北宇治に来てないんだよね」

久美子はふと思いついた疑問を幸恵にぶつける。かつての自分自身がそうだったから、というのもあるが。

「高校で友達ってもう出てくる？」

「ん？ あーうん、結構出来たかな」

幸恵はスカート裾から露出した太ももを手で揉みほぐしながらそう答えた。むにむにとした皮膚の動きになんだかいけないものを見てしまったような気がして、久美子は咄嗟に目を逸らす。

「クラスの子とは大体全員と一回ずつ以上は話したし、部活の一年生も顔と名前はもう一致したよ。トランペットパートの子達とは学校帰りにファスト寄ったりするし、他のパートの子とも時々一緒に帰るかな」

「え、もうそんなに？ ずいぶん多くない？」

あまりに多くの人数を挙げるもので、本当に友達なの？ と久美子は訝しがる。

「失礼だなー、こう見えても中学の頃から友達作りは得意な方なんだよ」

幸恵はぶうと頬を膨らませて不満げにしている。

「あ、でも」

「でも?」

「低音パートの芹沢さん。あの子とは、まだあんまり喋ってないかな」  
唐突に雫の名前を出され、久美子は足を止めてしまった。気配を察した幸恵がこちらへと振り返る。

「あ、別に嫌ってるとかそういうのは無いよ。こっちから話しかけてもリアクション薄いっていうか、あんまり長く話したこと無いっていうか」

久美子の表情に何か不穏なものを感じ取ったのか、幸恵は早口でひとしきりまくし立てた後、切り口を変えてきた。

「芹沢さんって、低音パートでもあんな感じなの?」

「うん、まあ、人懐っこい感じではないかな……」

久美子の脳裏に、ひとり教室の隅で譜読みを続ける雫の姿が一瞬よぎる。同じ低音パートの一年生同士でも雫が他の子と喋っているのは事務連絡的な短い会話程度で、その頻度も他の子達と比べてよっぽど少ない。雫本人はそれを気にしたり、逆に強がったりするでもなく、まるで他人と会話などしないのが当たり前という空気で過ごしていた。それは以前の麗奈とも違う種類の『孤高』だ。

「そうなんだ、やっぱりねえ」

得心したようにそう言つて、幸恵が久美子のところまで戻ってくる。久美子は自分の足が止まっていることに気付き、再び幸恵と並んで歩き出した。今夜の空気は生温いを通り越していつそ半袖でも過ごせるのではというくらいに暖かい。そんな空気に浮かされているように、夜空の月はぼんやりと輪郭を滲ませている。

「芹沢さん、あたしなんか全然眼中に無いって感じだからね。でも他の子にも聞いたけど、芹沢さん教室でも一人でいること多いらしくて」

「そうなの?」

「うん。同じクラスの子も気を利かせて色々誘ってたみたいんだけど、最近じゃもう来ないのわかってるからあんまり誘ってない、ってこないだ言ってた」

クラス外の人間とも交流を深めているとは、幸恵のコミュニケーション能力はどれだけ凄いのか。久美子など、申し訳ないが既に一年次のクラスの顔ぶれすら半分以上はまともに思い出せなくなっている。こうして振り返ってみると案外自分は薄情かも知れない。久美子は自信を失いはじめた。

「ひよっとして友達っていう友達、いないんじゃないかなあ」

そう言えば、と久美子は思い出した。雫が通っていた聖女は緑輝の母校でもあるが、北宇治からはそれなりに距離があるはずだ。今年の吹奏楽部には聖女から来た子も何人かはいるけれど、その中に雫と親しかった友達がいらないとすれば、高校に入った雫にはまだ仲良く付き合える友達はいないという可能性だってあるだろう。

「くみ姉は高校入った時、どうだった？」

幸恵も同じことを考えていたのか、唐突にそんな事を聞いてくる。距離で言えば久美子の家だって北宇治からは遠い方だからだ。

「私の時かあ……」

呟いて、久美子は自身の記憶を探り直す。高校に入ってから間もない頃、最初に声を掛けてくれたのはたまたま同じクラスになった葉月だった。続けて緑輝とも親しくなり、以降は何かとこの三人で行動することが多かった。思えば自分の高校生活はこの二人と知り合えたからこそ、かなり順調に滑り出せたと言える。そんなことをぽつぽつと語ると、それに幸恵も大きく頷いた。

「うんうん、やっぱり高校入って最初の友達って大事だよー」

雫には今、そう言えるような友達はあるのだろうか。もし孤独を感じているなら、ちよつと気に掛けてあげた方が良いのかも知れない。そんなことを考えながら進めていった歩みは、間もなく駅に着こうとしていた。

翌日。放課後から運動場の一角で、楽器を持つての行進練習が始まった。天気は相変わらずの快晴。今日も秀一と美知恵は声を漕らしながら指導をしている。

「ほらそこ、音がぶれてるぞ！ 基本は座奏と同じ、腹筋で息を支える！」

「吹くことに意識を削がれ過ぎだ、姿勢が崩れている！ 隊列も絶対に崩すんじゃない！」

こうした注意の声を浴びる部員達は皆、基本的な練習曲を吹きながら必死に足を動かし続けていた。昨日までの行進練習に楽器演奏が加わっただけだと思われがちだが、実際にやってみると『歩きながら演奏をする』というのは並大抵の所業ではないことがすぐに解る。まず単純な話、歩けばその振動で音も乱れやすいし息も切れやすくなるのだ。さらに疲労で姿勢が崩れると楽器が下向きになり、端的に言うて非常にかっこ悪い。現時点ではまだ本番用の曲を吹く段階でないとは言え、本番では一キロほどの距離を整然と歩きながら一つの曲を吹き続けなくてはならないことを考えると、姿勢、歩幅、周りの動き、自分の出す音、これらを完璧に合わせられなくては練習にならない。それには相当な集中力と体力を要するものである。

「はあー、はあー……」

幸恵の表情は既に限界を通り越してすっかりヤバくなっている。目は上を向き、汗だくの顔はすっかり土気色で、その口から洩れるのは今にも途切れそうな細かい呼吸音だけだ。楽器を構える腕が少しでも下がると美知恵からの一喝が飛んでくるため、楽器を下ろして休むことすらままならない。もはや彼女をその場に留めているのは雀の涙ほどの気力だけなのだろう。それは他の部員達も同じで、特にマーチング経験が無いと見られる部員の多くは立っているのもやっとなという有様だった。

久美子も当然疲労を感じてはいるのだが、一年の時ほどガタガタという訳ではない。三年目の功ということもあるだろうが、この二年の間にマーチングの強豪・立華高校と遊園地でのパレードを始め、数々の合同演奏をこなしてきたことが一番大きな要因になっている。一つ一つの経験は、確実に自分達の全体的なレベルを押し上げているのだ。

「頑張っていますね」

練習の区切りを見計らったかのように、いつの間にか後方からやって来た滝がねぎらいの声を掛ける。「姿勢を正せ！」という美知恵の

発破に、一同はビシツと直立不動になった。

「構いませんよ。姿勢を崩して楽にして下さい」

涼しい微笑を保ったままで、滝は持っていた分厚い紙の束を部員達へと配っていく。久美子の手に渡されたそれを見てみると、二つの長い直線の間小さな丸がたくさん並んでいた。それは数ページに渡り、丸同士が固まって三角の形を取ったり大きな四角になったりしながら、最終的には二列になって『終了地点』と書かれた所へと矢印を向けられている。

「何ですか、これ」

麗奈が紙から視線を上げ、滝に尋ねる。

「実は今年が行進の際に、フォーメーションを組もうと思いましたが」

思いがけないその発言に、部員達からざわつと驚きの声上がる。

「ここ数年、北宇治は立華高校と合同で活動する機会が増えています。立華は皆さんもご存知の通り、聴衆をあつと言わせるパフォーマンスが得意です。そこで私達も演奏だけでなく動きのパフォーマンスで聴衆を驚かせることをしたいということで、私と松本先生で相談してコンテを組んだんですよ」

コンテとはマーチングにおける各員の動きや振り付けを記した、言わば設計図のようなものだ。これに従って奏者達はフォーメーションを組んだり、一列になった状態から十字になり、さらにそこから十字を回転させたり交差したり、といったように統率的に動く。久美子達に手渡されたそれは、コンテとしては比較的難易度が低いようではあるが、それでもただ行進するよりもかなり複雑さが増すことになる。加えて本番までの練習の期間を考えれば、今後の練習がかなりの強行スケジュールになることは容易に想像できた。

「そんなに心配することはありませんよ」

ぱんぱん、と滝が手を打ち鳴らす。

「明日と明後日は運動部がここを使うので、私達は学校内での曲練習になります。これを活用して演奏を明後日までに仕上げ、残った期間が動きの練習に宛がえばいいのです。皆さんの練習がきちんと機能していれば、これぐらいの曲を二日間で仕上げる事はそう難しくあり

ません」

そして滝はいつものようににっこりと笑う。『不可能だ』なんて言わせないとでも示すように。

「動きも含めて全体のパフォーマンスも、残された時間を最大限有効に使うことが出来れば本番までには十分間に合うでしょう。運動部の練習日程と調整して、連休中は体育館も使わせてもらえることになりましたので、これから一日一日を無駄の無いように活動に取り組んで下さい。いいですね？」

はい！ という全員の返事が春の空に響く。それはどう考えてもカラ元気で絞り出した声だった。

「それでは、これから十分は休憩の時間にしましょう。その間コンテに目を通して下さい。マーチング未経験者の一年生は明後日までに上級生にコンテの見方を教わって下さい」

一通りの伝達を終えると、失礼します、と滝はその場を去っていった。途端、半数以上の部員達がへなへなとその場に座り込む。

「くあー、この上コンテかあ」

ざらばん紙をパラパラとめくりながら葉月が唸る。正直なところ、この展開は久美子も想定していなかった。曲を二日で仕上げるのも相当の強行ぶりだが、今からサンフェスの本番までは十日も無い。間には連休もあるとは言え、果たして本当に振り付けまで交えた複雑な動きを、僅か数日で完成させられるのだろうか。流星に目も眩むような思いだ。

「先輩、すいません。これの読み方を教えて欲しいんですけど……」

見上げると、すっかり汗だくになった星田が例の紙を手にもちらを伺っている。そう言えば星田はマーチングの経験が無いと言っていた。恐らくコンテに示された記号の意味すらもさっぱり分からず、彼の頭の中はハテナマークだらけになっていることだろう。

「いっよー」

葉月は軽やかに立ち上がり、紙の上の丸を指でなぞっていく。

「この番号の丸が星田君のね。んでしばらく行進して、次のページは楽譜の……」

葉月が星田に色々と説明を加えている間、久美子はぼうつと周りを見渡していた。幸恵はもはや紫色に染まろうかというほど顔色が悪くなっているが、それでも必死に練習に食らいつこうと麗奈にコンテの読み方を教わっているらしい。遙か向こうのステツプ隊の輪の中では、真帆が謎ステツプの踏み方をひとり懸命に復習している。その他の一年生達も、それぞれバタバタになりながらも動作を確認したり、コンテに目を通したりといった具合だった。

その中で一人、雫は立ったまま疲れた様子も見せず、楽譜を読んでいた時のように黙々とコンテに目を通し、どんどんページをめくっている。ふと、久美子は自分でも知らぬうちに、群衆の中に佇む雫を目で追っている自分がいることに気が付いた。昨日幸恵とあんな話をしたせいだからだろうか。それとももしかして自分は、雫を通して過去のあすかの姿を見ようとしているのかも知れない。『特別』だったあのひとの面影を。そう、きつと雫は今の自分よりもずっと『特別』に近い。だからこそこうして意識してしまうのだろうか。久美子の中に様々な感情がぐるぐると渦を巻き、形になる前にどろりと溶けて臓腑の中に紛れ込んでいく。後にはずしんと重たい感触だけが残っていた。

それから一週間が過ぎ。

「ふああ……」

電車の中で久美子は大きな欠伸をする。こここのところ、彼女の一日の睡眠時間は平均五時間を切っていた。前にも思ったことだが、三年生は本当にあれもこれもとやらなければならなさ過ぎて、忙しいどころの話ではない。更に部長としての職責はその仕事量を倍以上にも増やしてくれる。かと言って、それが成績を落とす言い訳にも練習の手を抜く理由にもなりはしない。結果として久美子は、早朝の電車内では参考書や単語帳に目を通し、授業の合間に部活の書類を作り、練習の合間にサンフェスの打ち合わせをし、夜はと言えばこの春から倍増しになった宿題を片付け、それから音楽の勉強をする、といった具合の生活を送っていた。必然的に削るところと言えば睡眠時間、というわけである。

そして今日はもうサンフェス当日、つまり本番の日となっていた。一年生を加えた新生北宇治が、初めて公の舞台上で演奏を披露するのだ。ここでの出来不出来はコンクールには直結しないものの、ここ二年全国行きを決めている北宇治がどんなパフォーマンスをするのか、他の各校もきつと注目している。ましてサンフェスには立華も、つまり佐々木梓ささきあずさも出場するのだ。無様な演技演奏は決して許されない。「ずいぶん眠そう」

隣で本を読んでいた麗奈が久美子の顔を覗き込む。腕に巻かれた時計の針は六時二十分を示していた。今日は大会なので集合時間は早い、二人が普段登校している時間よりはずつと遅い。

「うん、昨日も宿題やってたら寝るの遅くなっちゃって……」

久美子は欠伸を噛み殺し、目元を指で拭った。指先に涙が滲み、すうつと皮膚に吸い込まれ消えていく。

「そんなんで本番大丈夫なの？」

尋ねる麗奈の声は労わりの色を帯びていた。麗奈がこういうきつめの言い方をするのは彼女なりの気遣いの裏返しなのだ、と久美子はすつかり把握していた。

「電車降りる頃には目も覚めると思う」

まどろんだ瞳をぱちぱちと上下させ、久美子は対面の窓を見つめる。ついこの前に進級したばかりだと思っていたら、今はもう五月。三年生になってからどんどん時間の流れが速くなっているような気がする。サンフェスが終わるとすぐにテスト期間に入るし、それが明ければ五月はもう下旬。いよいよ夏が近づいてくるのだ。この窓の外を流れる景色みたいに、目の前の風景がどんどん移り変わってゆく。

「時間がもつとあったらいいのになあ」

ついそんな言葉が久美子の口について出てしまう。麗奈はそれにスンと鼻を鳴らした。

「時間は無限じゃない。取りこぼしたらもう、取り戻せないよ」

麗奈が黒く艶のある髪をかき上げると、久美子の鼻先をふわりと柔かい匂いがかすめていった。いつも思うことだが、どうして麗奈の匂

いはこんないい匂いなのだろう、と久美子は首をひねる。自分だって女子なのに、こんな芳香を醸し出せるものに全くと断言できるほど心当たりがない。もしかして麗奈は自分とは基本的に違う物質で作られているのかも知れない、そんな風にさえ思ってしまう。

「それ、緑ちゃんも似たようなこと言ってたなあ。確か、音楽は一度奏でると消え、二度と取り戻せない。だっけ」

微かな記憶を辿りながら緑輝の言葉を復唱してみると、ああそうか、と久美子は何かに気付いた。こう考えると、人生は音楽にも似たものがあるのかも知れない。生きている間中ずっと、私達の曲は続いている。次々と押し寄せてはあつという間に過ぎ去っていく日々という名の小節は、一度やり過ぐしてしまうともう後戻りは出来なくて、それを後悔してももう取り戻すことは叶わない。だからこそ自分達にできるのは一瞬一瞬の音に集中して最大限の注意を払って、そうして一つの曲を限りなく充実させていくのみなんだ。……などと考えていると、なんだか自分が哲学者か何かにでもなったような気がしてくる。

「だからこそ、今できることは精一杯頑張らなくちゃね」

「うん」

久美子が麗奈に頷いてみせると同時に、音を立てて電車の扉が開く。

「おいーす、おっはよー」

意気揚々と乗り込んで来たのは葉月だ。こちらを見やるなり、葉月はお決まりの敬礼ポーズで挨拶をしてきた。

久美子にとって、サンフェスへの参加は今回で三度目になる。さすがに勝手知ったるものとは言え、一年のうちにそう何度もあるわけではない本番の機会だ。多くの聴衆が自分達の演奏を聴いてくれると思うと緊張も生まれるし、現場の取り仕切りはうまくできるだろうか、フォーメーションにミスは起こらないか、などと色々な不安が頭を駆け巡る。それでも先頭に立つ自分が不安そうにしていれば、部員達にもそれが伝わってしまう。そんな迷いはおくびにも出さず、久美子は毅然とした表情で皆に指示を出していた。

「はい、それじゃあ会場に入ったら更衣スペースで着替えて、それから音出しの時間です。音出しが終わったら真ん中の運動場に集合して開会式、その後は一番の学校から順にスタートします。ここまではいい？」

「はいー」

「じゃあさっそく行動開始です。本番開始まであと一時間も無いので、素早く行動してね」

トラックから下ろした楽器を持って、部員達がぞろぞろと会場へ向かう。さて自分も楽器を出そう、と久美子がケースをがちやがちやさせていると、

「ご苦勞様、部長」

後ろから懐かしい声が聞こえて、はっと久美子は振り返った。

「夏紀先輩ー」

そこに立っていたのは中川夏紀。彼女の隣には吉川優子。この春卒業した吹奏楽部の先輩であり、久美子を部長職に指名した当の本人達だ。

「来て下さったんですね。連絡も無かったですし、サンフェスは無理かなって思っていましたけど」

「ごめんごめん、直前までバイトのシフトが決まらなくてさ。ほら、私一応新人だし？」

おどけてみせる夏紀の姿は、卒業からまだたったの一カ月しか経っていないはずなのに、随分と大人びて見えた。高校卒業後、府内の大学に進学した夏紀は以前は長い髪を後ろで結んでいたのが、今は肩にかかる程度のやや短めなセミロングヘアになっている。飾り気の少ない肩出しのチュニックとタイトなレギンス、という服装はいかにもさっぱりした性格の夏紀らしいと思いつつも、何だか全身から色気が匂い立つような感じもして、そのギャップに久美子は少々どぎまぎしてしまふ。

「ホントこいつ、ギリギリまで私に声掛けなくてさ。ようやく連絡してきたのが昨日の夜、って信じらんないんですケド」

愚痴をこぼす優子の方と言えば、ほぼストレートだったロングヘ

アがゆるふわのウェーブになっている。おしやれなカーディガンとカットソーを組み合わせ、フリルの付いたスカートにストラップサンダルというこちらは、まるでどこかのお嬢様のような雰囲気だ。ちなみに優子も府内進学組ではあるが、夏紀と同じ大学ではない。優子は憧れの香織を追って、彼女のいる大学を進学先に選んだのだった。

「しようがないじゃん、バイトのお鉢が回されたら休日予定でも出な  
くちやいけなくなるし。それにあたしが行けなくなったらアンタは行  
くつもり満々だったでしょ？」

「そりゃあ私は『元』部長ですから。北宇治OBの筆頭として、出来る  
限り可愛い後輩達の応援には来るわよ。それなのに『元』副部長と来  
たらまあ、随分と薄情なことだ」

「あーはいはい、アンタに理解してもらおうと一瞬でも思った私が馬  
鹿だったわ」

卒業しても別々の学校に行ってもこの二人のやり取りは相変わら  
ずで、その事に久美子は内心ホツとしていた。見た目や雰囲気は多少  
変わっていても、この二人はやっぱりこの二人のままなのだ。

「それでどう、今年は何？」

優子に訊かれ、久美子は「うーん」と唸ってみせてから、思ったま  
まのことを素直に述べた。

「悪くない感じだと思います。今年はけっこう実力派の経験者もたく  
さん入部してくれましたし、今回の仕上がりも上々って感じですよ」

正直、この一週間で演奏のクオリティはかなりのところまでまとめ  
られたと思う。当初は苦戦するかと思われたフォーメーションの件  
も案外飲み込みが早く、マーチング初心者の星田ら一年生も三日目ぐ  
らいにはおおよそ自分の立ち位置を理解して動けるようになってい  
た。もつとも、それには葉月をはじめ上級生達の手厚い指導によると  
ころが大きい。

「悪くないわね」

優子は満足気に鼻をふふんと鳴らす。

「部長の仕事も大丈夫？」

「はい、まあ……毎日目も回るくらい忙しいですけど、部員のみんなも

協力してくれてますし、何とかやれてます」

夏紀の問い掛けに、久美子は少しだけ自信無さげに答える。実のところ、優子と夏紀の二人が部長・副部長を務めていたころの北宇治には問題らしい問題はほとんど起こらなかった。この二人自体はガミガミといがみ合っていることも多かつたが、いざ部のこととなるときつちりと一つひとつのことを確実に処理していたし、傘木希美やみぞれといった友人達が二人を的確にサポートしていたお陰で部としてのまとまりはかなり高い水準にあつたと言える。何より全国大会で銀賞という前年の実績が、それを如実に物語っている。その事実はそのだけで久美子にしてみれば十分尊敬に値するものだった。部長になつた今だからこそ、それが良く分かる。

「そっか」

言葉少なに返して、夏紀はにこりと微笑んでみせた。

「あと一年生ですけど、今年は上手い子が沢山入ってくれました。全体的にはかなりレベルアップしてると思います。それと——」

夏紀と優子を前にすると、話したい事が次から次へと話したいことが出てきて止まらなくなってしまう。そのほとんどは至って普通の近況報告ではあるのだが、それ以上にこの二人は部長と副部長経験者であり、また久美子にとって夏紀は最も近い先輩でもあつた。昨年の夏紀の奮闘ぶりを常日頃見ていた久美子にとって、今や夏紀は心から尊敬し信頼できる存在となつているのだ。

「ところで、そろそろ行った方がいいんじゃない？」

もう誰もいないよ、と夏紀に辺りを指差され、久美子はハツと我に返つた。音出しの時間は限られているというのに、その事をうっかり忘れていた。他の部員達は恐らく今ごろ音出しスペースでチューニングや本番前最後の確認をしているところだろう。それなのに部長の自分が遅れるわけにはいかない。

「すいません先輩、私もう行きますんで。後でまた」

「うん。本番見てるから、がんばってね」

「はー」

笑顔で夏紀に返事をして、久美子は駆け出していった。夏紀は手を

振り見送ってから、

「あの分だと、順調に部長やってるみたいだね」

と、安心したようにほうつと息を吐いた。

「何よ。夏紀ってばまだ黄前を部長に選んだこと、気にしてんの？」

「別にそういうんじゃないよ。私だって、久美子ちゃんが一番部長に適任だって思ったから指名したんだから。ただ部長の仕事ってかなりキツイから、真面目な性格のあの子には大変だろうな、って思って」  
「うげ。アンタが後輩の心配するなんて、明日雪でも降るんじゃない？」

優子は自分の両腕を抱きしめ、不気味がってみせる。

「ホントうっせー」

そう吐き捨てる、夏紀は踵を返してスタスタと歩き始めた。残された優子は久美子の走っていった方を見やると、

「しつかりやんなさいよ。アンタは私が、部長に相応しいって思った人間なんだから」

と、誰にも聞こえぬように呟いた。

音出しとチューニングを終えた北宇治の一同は、サンフェスの開会式の場でありスタート地点でもある陸上競技場に整列していた。新生北宇治にとって初の本番が、いよいよ始まる。

久美子は目を閉じて大きく息を吸い、ゆっくり吹き出した後、その目を開いて辺りを見渡した。他の参加校も一様に整列している中、水色の集団が少し奥の方に見える。今やすっかり見慣れたそれは立華高校のマーチング用コスチューム。その先陣に良く見慣れた顔があるのを見つけ、梓ちゃんだ、と久美子は心の中で呟いた。己をじつと見つめるこちらの視線に気付いたわけではないだろうが、向こうも久美子を見て小さく手を挙げた。

梓は立華高校の吹奏楽部員で、久美子とは中学時代の吹部同期でもある。コンクール・マーチング共に全国級の強豪として名を知られる立華において、一年の頃から周りに認められる実力者であり、あの麗奈ですら今の梓の演奏技術には一目置いているほどだ。

そして立華では今、部長となった梓を中心として部内改革が進めら

れている。ここ数年のコンクールでは関西止まりに終わっていた立華は、前三年生の引退を機に座奏にも力を入れる方針に転換し、地元演奏会などにも精力的に参加している。無論、本業のマーチングだってこれっぽっちも手を抜いてはいないだろう。立華にとつても今回のサンフェスは、今までとは一味違うところをアピールする場になるであろうことは間違いないのだ。

「それでは、ただ今より第二十五回、サンライズフェスティバルを開会致します」

キーン、という耳障りなノイズ音がスピーカーから響き、開会のあいさつが告げられる。出場者を代表して宣誓を述べるのは今回一番目の出番となっている立華高校、その部長である梓だ。列から離れ白い壇上に立った梓がマイクの前で高々と右手を伸ばす。

「宣誓！ 私達は音楽を愛する者として、演奏及び演技に全力を尽くし、最高のパフォーマンスを観客の方々にお見せすることを、誓います！」

堂々たる梓の宣誓。会場中に響き渡る割れんばかりの拍手。そんな梓の姿を、久美子は下からじつと眺めていた。どうにもこの一年で、梓はさらに肉付きが良くなったような気がする。胸のあたりは言わずもがな、腰つきから太ももにかけての線はより丸みを帯びて女性らしくなっているけれど、かと言って太ったかと言えばそういう訳では決して無い。日ごろマーチングの練習に明け暮れているからなのか、適度に引き締まった腰回りからはある種の艶めかしささえ感じられる。とりわけ立華のコスチュームである水色のスカートから伸びる白い脚には、同性の久美子ですら思わず呻いてしまうような魅力があった。

どうしてこうも皆スタイルが良いのだろう。楽器の上手さと外見には何か比例関係でもあるのだろうか。嘆息と共に視線を落とし、そこに映る自らの身体をじつと見つめて、久美子はさらに深い溜め息をつく。

「それでは立華高校さん、間もなくパレード開始の時間となりますので、準備をお願いします」

アナウンスの声に従い列に戻った梓はトロンボーンを持ち、部員達に何やら最後の発破をかけている。おおー！ と鬨の聲が立華の一陣から上がり、いざ行進開始という直前、梓はもう一度こちらに顔を向けた。

『が・ん・ば・ろ・う・ね』

口の動きでそう言っているのを、久美子は読み取る。

『も・ち・ろ・ん』

久美子も口パクで梓に返答をする。梓はにっこりと笑顔を浮かべ、そして立華は意気揚々と行進を開始した。ほどなくして、場外を行進ルートから「わあっ」「おおー！」といった歓声が次々にこぼれて来る。「さすが立華。今回もかなり派手にやってるみたいですね」後ろでスーザフォンを担ぐ美佳子が、ひそひそと葉月に話し掛ける。

「当ったり前だよ、立華だもん。マーチングじゃ特に、他の学校とは格が違うよ」

葉月もひそひそ声で返す。

「私達も負けないくらい頑張らなくちゃね。ねえ久美子？」

「そうだね」

後ろの葉月に身を寄せて、やはりひそひそ声で応じる。待ちに待った本番だ。この日のためにたくさん練習を重ねてきた。そして吹部のメンバー全員が一堂に会して演奏できる機会はそう多くない。今日は全力を出し切ろう。皆もどうか、全力を出し切って。久美子は胸の上で握りこぶしを作り、そつと祈っていた。

\*

「みんな、とってもいいパフォーマンスだったよー！」

部員達の前に立った優子が皆にねぎらいの言葉をかける。本番の演奏は大喝采のうちに無事終了し、北宇治の一同も既に部室へと戻っていた。楽器の搬入作業を終えたところで優子と夏紀も学校に到着し、解散前のミーティングの場でOBとしてのコメントを求められた優子がこうして喋っているところである。もつともこの場にいる卒業生は彼女たち二人だけなので、厳密にはOGと呼ぶべきなのだろう

けれど。

「現部長から今年のメンバーは実力派揃いって聞いてたけど、本当にその通りでした。練習時間も少なかったと思うけど、その中で最高の演技演奏が出来ていたと思います」

優子に続いて、今度は夏紀が口を開く。

「今年からはフォーメーションを取り入れたのにビックリしたよ。でも動きもきちんと揃ってて、ばっちり決まってた」

それを聞いた部員達から安堵の声が漏れる。こうしてOB達から掛け値なしの誉め言葉を貰えるというのは、実際どうだったかはさて置くとしても嬉しく思うし、それ以上に及第点は超えることが出来たのだとホッとするものだ。

「これからは夏のコンクールに向けて、いよいよ練習も本格的にきつくなつていくはずですよ。一年生の部員達も大変だと思いますが、一生懸命食らいついて上達して行って下さい。私達からは以上ですよ」

優子と夏紀が一步下がり、二人に代わって久美子は前へ出る。

「それでは明日と明後日は通常通り、朝から練習になります。それ以降は登校日ですが中間テストの期間に入りますので部活は休止です。詳しいことは明後日に話しますが、休止期間中は校内での音出しも禁止になりますので、忘れないようにして下さい」

はい、という部員達の力強い返事と共に本日は解散となった。途端、二・三年生のうち何人かがわつと優子達のところに詰めかけていく。

「優子先輩！ 見に来て下さってとても嬉しかったです！」

「夏紀先輩もありがとうございます！」

「先輩、部長の仕事きつすぎですよ」

勢いに乗じて久美子も泣きついてみたが、わいわいと押しくらまんじゅう状態の中ではまともに声が届かなかつたらしい。そんなこんなで久美子に目もくれぬ優子らが部員達へ応答をしているところに、

「優子先輩」

とやって来たのは麗奈だった。周りの部員達は何かを察して麗奈の為に道を空け、優子もまた神秘的な面持ちで麗奈を見やる。

「ありがとうございます」

麗奈が優子に深々と頭を垂れた。予想だにできなかった彼女の言動に、久美子と優子は瞠目する。

「やだもう。別に大したことないじゃん」

優子は軽くおどけてみせる。ありがとうございます。その言葉の意味するものを理解できるのは、現役生の中では恐らく久美子だけだっただろう。麗奈と優子の間にはかつて大きな確執があり、それを乗り越えて育まれた絆がある。互いの間にもたがる感情を第三者が言葉で説明し切れることはとても難しい。その二人が今こうして顔を合わせ、そしてあの麗奈が優子に感謝の意を述べている。ただそれだけの事なのに、久美子は思わず目頭が熱くなるのを覚えた。

「それより、相変わらずいい音じゃない。今年こそ全国金賞、獲れそう？」

「はい」

優子の問い掛けに麗奈は静かに、しかし強い意志の籠った声で返事をする。

「うん」

優子はゆっくりと頷いてから、しっかりと麗奈に瞳を合わせた。

「頑張つてよね、私達の分まで」

それはきつと、優子や夏紀だけを指したのではなく、あの香織のことも含んでいる発言なのだろう。今は卒業しここを離れて行った先輩達の多くが全国出場、そして金賞を夢見て、血の滲むような努力の毎日をここで過ごしていたのだ。そして今、その思いを果たせるのはここに居る北宇治のメンバー以外にあり得ない。優子は麗奈に自分の想いを託したのだ。

「任せてください」

真剣な表情で麗奈が答える。

「相変わらず熱いねえ、高坂ちゃん」

夏紀は肩をすくめてみせる。その表情には、後輩の頼もしさを感じ取ったらしい満足感が見て取れた。

「さつて、それじゃそろそろ行くっか」

「行くって、どこへですか？」

夏紀の言葉に、緑輝が怪訝そうな表情を浮かべる。

「大会が終わったんだもん。行くでしょ、打ち上げ？ もちろん私たちのオゴリで」

「ん〜ん〜ん、もうお腹いっぱい！」

店を出た葉月がぼんぼんと自分のお腹を叩く。私も、と同意しつつ久美子は店の佇まいを振り返った。今回打ち上げの会場となったのは京阪宇治駅から少し歩いたところにあるお好み焼き屋。相楽たち下級生組が家の都合などで来られなかった事もあり、会は優子らの直属である低音パートとトランペットパートの三年生を中心とした気兼ねのないものとなった。

「すいません先輩、私達までご馳走になっちゃって」

麗奈が申し訳無さそうに言うその隣で、幸恵は『食った食った』とばかりに爪楊枝を口にくわえ満足気にしている。これではどっちが先輩か分かったものではない。

「いいのよ。私達バイトもしてるし、可愛い後輩にOBらしいところも見せとかなくちやね」

突然の増員だったにも関わらず、優子は頼もしげに親指を立ててみせる。ちなみに幸恵がついて来たのはこの機会に麗奈ともっと親密になりたいというのが大きかったらしい。初対面の夏紀や優子の前でも物怖じせず打ち上げに参加してまで麗奈に熱烈アタックを仕掛ける彼女の姿には、久美子も呆れを通り越して感心する気持ちすらあった。

「まあ毎回はちよつと無理だけど、頑張った大会のあとくらいは何かご褒美でもないかね」

会計を済ませた夏紀が店から出てきて、会話の流れに加わる。

「うう、緑また必ずここに来ます」

皆がほくほく笑顔の中、緑輝は一人浮かない顔をして「今度来るまでに練習しておきます」などとぶつくさ垂れ流していた。緑輝が言っているのは片面を焼いたお好み焼きをコテでくるりと裏返す、通称『返し』のことだ。他の人たちがクルクルと返しを成功させる中、緑輝

だけは何故か返しが下手くそでことごとく失敗し、お好み焼きの玉をぐちゃぐちゃにしまつていた。あれは本人も相当に悔しかったらしい。終いには真剣な表情で葉月から返しのコツを教わったり、コテを両手に持つてくるんくるんと空中をかき混ぜイメージトレーニングに励んだりしていた。

「次こそはリベンジです！ コンクールが終わったらまたここで打ち上げしましょう、久美子ちゃん！」

「そんな大げさなことかなあ」

両手を上げて息巻く緑輝に久美子は困惑してしまう。とは言ってもこう見えて、彼女は人一倍の悔しがり屋で根性持ちだ。次にお好み焼きを焼く時にはきつと、きれいにくるりと玉を返す緑輝の姿を見ることが出来るに違いない。

「さて、大分遅くなつてるし、今日はこのへんで解散しよつか」

お釣りを優子と分け合つた夏紀はそう言つて、後輩達の顔を眺めた。

「これからはコンクールに向けてもっと頑張つてね、あたし達も期待してるから」

「はいー」

久美子達の力強い返事が夜空に響く。

「もう遅いから、寄り道せず気をつけて帰ること。次はコンクールの会場で会いましょう。以上！」

最後は元部長らしく、優子の言葉で打ち上げ会は締め括られた。久美子達はせーの、と声を揃え、「ありがとうございました！」とOB二人にお礼をして一同は解散となつた。久美子の家はここから歩いて帰れる距離にある。麗奈の家は逆方向にあるし、葉月達も優子達も駅に向かうため皆とはここで別れて帰ることになる。かくしてそれぞれがそれぞれの行き先へ歩き出し、

「じゃあね、久美子ちゃん」

さばけた挨拶と共にひらひらと手を振る夏紀の後ろ姿。それを見た瞬間、久美子の感情は突然に弾けた。

「あの、夏紀先輩」

「ん？」

呼び止められた夏紀が振り返る。彼女から放たれた微かな香水の匂いを、久美子の鼻は感じ取った。

「先輩は他の先輩達と連絡って、取ったりしてます？」

「え、うん。梨子とか後藤とは普通にメッセージで連絡したりしてるよ。今回のサンフェスは無理だったけど、コンクールの時は夏休みの時期だから来れるんじゃないか、って二人とも言ってたし」

「はあ」

「あと希美とも時々連絡してる。あの子、大阪の大学に進学してけっこう忙しいらしいけど、時間取れたら必ず応援に来るって。きつとみだけでも一緒に来るんじゃない？」

「なるほど」

出てくる名前は皆懐かしいし、また会いたいと思う人ばかりだ。なのだがしかし、本当に聞きたかった名前はその中には無かった。

「後は——」

「あすか先輩とは連絡、してますか？」

久美子は思い切って直球をぶつけてみた。虚を突かれた夏紀は言葉を止め、じっと久美子を見つめる。久美子の真意を凶りかねたのか、あるいは久美子らしいと感じているのか。夏紀の顔には少し困ったような、申し訳なさそうな色が浮かんだ。

「全然、音沙汰は無いよ」

そうですか。返す声のトーンが自然と落ちてしまう。直属の後輩であった夏紀でさえもあすかからの連絡が無かったであろう事は、なんとなく予想が出来ていた。それに夏紀からはあすかに連絡しにくかったであろうという事も。久美子と同様に夏紀にとってもあすかは偉大な先輩であり、尊敬できる『特別』な存在であったことを今の久美子は知っている。だがそれ故に、あすかの敷いた線の内側には夏紀とて容易に入り込めなかったのだろう。もしかしたらあすかと連絡できる一縷の望みがあるかも、と心の中で僅かに期待していただけに、久美子は落胆の色を隠しきれなかった。

「あすか先輩に連絡したいの？」

表情の翳った久美子を見て、夏紀は穏やかに尋ねてくる。久美子は無言で頷き、

「でも、メッセージを送っても既読もつかないんです。アカウントは消えてないんで、携帯が壊れたとかじゃないと思うんですけど……」  
そこで口をつぐんだ。これ以上何かを喋ったところで、ただ夏紀を困らせてしまえばかりだと気づいたからだ。

「すみません先輩、急にこんなこと言い出しちゃって」

「いいよ、と夏紀は首を振る。」

「私も時々、あすか先輩に連絡取りたいって思う事あるからね」

夏紀は既に沈みかかっている夕陽を映す窓辺に、その細い背中をもたれかけた。

「でも、大学に入って改めて感じた。あすか先輩、私達が思ってたよりずうっと高いところに行っちゃったんだなあって」

それは未だ高校を卒業していない久美子には分からない、夏紀なりの感想なのだろう。自分なんかでは手を伸ばしがたい、伸ばしてはいけないようなところにあすかが居る、という感覚。通信技術の発達した現代なら単純なデジタルデータで気軽にやり取りが出来るはずなのに、何故かそれをしてはいけない、とでもいうような敷居の高さを夏紀は感じている。まして今、それら現代文明の利器を使っても、あすかとはコンタクトを取ることが出来ない状況なのである。

「ごめんね。今度来るときまでにあすか先輩に関する情報、何かあったら必ず久美子ちゃんに教えるから」

夏紀の精一杯の気遣いも、久美子には空しい響きとなって溶け去ってゆくばかりだった。力なく『はい』と返事することしか出来ない自分が、何となく、情けなかった。

家に帰った久美子はすっかり脱力し、着替えもせずにはベッドに突っ伏していた。本番で疲れていたのは勿論あるのだが、それ以上に先程の事がずっしりと心に重石を載せていた。

「あすか先輩、今どうしてるんだろう……」

久美子の携帯にはあすかの番号もちやんと登録されている。こちらから電話を掛ければもしかして、あすかは出てくれるかも知れない

い。けれどいきなり生の声でやり取りをするのは正直怖かった。もしもあすかがこの二年間ですっかり別人のように変わってしまったら、その時自分はその頃と変わりなくあすかと喋れるのだろうか？ あるいは自分のことなど何も覚えていないとばかり、他人行儀なやり取りに終始してしまっただら？ そんな不安が頭の中をよぎるからだ。とは言えこんなに誰とも連絡が取れていないというのは、それはそれで気になる。麗奈情報によれば、あの親しかった香織ですら、卒業後はあすかとほぼまともに連絡を取り合えていないというのだから。

「どうするかなー……」

思い切って電話を掛けてしまおうか。そう悩んで脇に置いてあった携帯を手に取ると、そこには『着信あり』の文字が表示されていた。もしかしてあすか先輩から？ 驚いた久美子は慌てて着信元を確認する。

『梓ちゃん』

電話を掛けて来たのは梓だった。ほっとするのと落胆するのとは半々。久美子は着信時刻を確認する。およそ三十分前、ということ。丁度夏紀と二人だけで話していた時だったらしい。久美子はベッドから身を起こし、梓に折り返し電話を掛ける。

『もしもし』

携帯の向こう側から梓の声が聞こえてきた。

「もしもし、梓ちゃん？ ごめんね、電話来てたの気づかなくて」

『別にいいよ。もしかして打ち上げとかだった？』

「うん。OBの先輩が奢ってくれるっていうから、さつきまでお好み焼き屋さんで打ち上げてたんだ」

『それって府道沿いのあのお店？ いいなく。あたしも行きたいと思ってたんだけど暇が無くて、まだ行けてないんだよね』

電話口から聞こえる梓の口調は相変わらずだ。不思議なことに、中学校を卒業してからの方が梓とはずっと仲良くなったような気がする。合同演奏やイベントで顔を合わせる機会が多いせいでそうなったのもあるし、本当の意味で互いをライバルと認め合っているからか

も知れない。何より、中学の時に比べて梓自身が何か変わったように久美子は感じていた。具体的に何がと言われても本人にも説明はつかないのだが、何と云うか以前は他人と関わるのに気を張っているように見えたのが、今はごく自然に他人と触れ合っているような、そんな雰囲気になった気がする。

「それでどうしたの？　こんな時間に」

『ああそれそれ。今日ね、北宇治の演奏見てたよ。今回も凄かったじゃん』

梓の声は幾分興奮の色を帯びている。今回、サンフェスでの立華の出番は北宇治よりかなり早かった。出番を終えた団体には時間的な余裕があったので、北宇治の演奏を見る暇もあったのだろう。

「ありがとう。さすがに立華には負けるけどね」

久美子が謙遜するも、梓はなおも語気を強める。

『北宇治の振り付けもカッコよかったよ。こっちに北宇治の先生が何か相談に来てるって話聞いてただけど、そういうことだったんだね。こっちはもう、やられた！　って感じ』

あはは、と久美子は笑みをこぼす。梓にこれだけ手放しで褒められるなら、曲に行進練習にと努力を重ねたこの日々も無駄では無かったと言えるだろう。

『それにしてもサンフェスも終わったし、いよいよコンクールだね』

「そうだね」

『ねえ久美子』

「ん？」

そこで梓は少しだけ間を置いた。

『今年のコンクールは立華も、本気で全国狙っていくからね』

はつきりと梓は宣言した。それは本人の口から初めて聞いた決意であり、それと同時に、今年の出来に自信を覚えていることの証明でもある。立華はマーチングコンテスト、通称マーコンでは全国金の常連として名を馳せているのだが、こと吹奏楽コンクールにおいては去年一昨年と関西大会止まりで『コンクールでも全国級の強豪』としての存在感もすっかり薄れつつある。その事に梓は少なからず不満

を抱いていた。マーチングだけの立華じゃない、座奏だって全国の強豪校に引けを取らない演奏ができるってところを見せたい、と梓は度々久美子に愚痴をこぼしていた。その梓からこういう言葉が出てくるといふ事は、梓も間違いなく本気でコンクール全国出場を目指している。それも今年は、立華の全員が一丸となつて。

「北宇治だって、負けないよ。今年こそ全国金賞獲るつもり」

負けじと久美子も宣戦布告をする。電話を介して張り詰める互いの緊張感が、心地良かった。

『じゃあ、まずは府大会だね。関西出場目指して、お互い頑張ろうね』  
「うん」

それじゃまた連絡するから。そう告げられたところで、梓との通話は終わった。温まった携帯をテーブルの上へ置き、久美子は再びベッドに仰向けの姿勢で寝そべる。サンフェスに向けての日々は今日で終わり、明日からはコンクールに向けての日々が始まる。その練習は今まで以上に熾烈を極めるだろう。久美子は本番中の雫を思い返す。雫は今日も完璧と評する以外ない演奏をやつてのけ、ドリルパフォーマンスでも一糸乱れぬ正確さで動き続けていた。マーチングでもあれだけの実力者なら、それこそ立華を選んでいてもおかしくなかったはずだ。なのにどうして北宇治を選んだのか？ それはともかく今の雫は同じ部内の仲間であり、コンクールにおいては強力な競争相手でもある。

「負けたくない」

誰にともなく呟いて、自分の身体をぎゅうつと抱きしめる。妙に火照つた自分の身体が微かに震えているのを、久美子は感じていた。

\*

翌日。

まだ学校は連休中だが、既に吹部の一同は音楽室に集まっていた。まずは皆さん、昨日はサンフェス本番お疲れ様でした」

壇上には滝の姿。彼の言葉はまず部員達へのねぎらいから始まった。

「昨日の皆さんの演奏演技には校外の方々からも沢山お褒めの言葉を

いただきました。特に立華の熊田先生からの評価は大変高いものでした。今回の皆さんの成果として、素直に受け取りましょう」

それを聞いた部員達が、ほう、と胸を撫で下ろす。

「しかし演奏面ではまだまだ詰めるべき部分、課題が数多くあります。良い言葉を頂いたからと言って浮かれている暇は私達にはありません。今後の練習も油断なく、一つ一つを着実に身に付け実力向上を図って行って下さい。いいですね？」

「はい。」

部員達が一斉に返事をする。滝の言う通り、今の自分達には油断しているような余裕などありはしない。これからは今まで以上に集中し演奏を磨き上げていかなければ、強豪の集う関西大会の突破、更には全国屈指の名門が揃い踏みする全国での金賞など夢のまた夢ではない。そこに向かって費やせる時間はしかし、決して多くは無いだ。

「それでは今日からは、コンクールに向けた練習を開始します。後ほど各パートリーダーを通じて課題曲と自由曲を配りますが、その前に皆さんに言っておかなければならないことがあります」

指揮台から立ち上がり、黒板を前にしてチョークを手に持つと、滝は何かをそこに書き始める。

「私が北宇治に赴任してから毎年、コンクールに出場するメンバーはオーディションで決定しています。最初の年はA部門の出場メンバー五十五名、そして各パートでソロを務める人も同時に、個別オーディションで決定していました。ですが昨年からはソロパート奏者のオーディションは別に分け、レギュラーに決定した人の中からさらに希望者による選抜を皆さんの前で行うことにしています」

口で説明したことを、滝は分かりやすく図として黒板に書き出す。

「このためコンクールメンバー選出のオーディションは六月の終わり、つまり期末テスト前に行い、ソロ奏者選出のオーディションはテスト終了後に行う予定のホール練習にて、全員の前で行います。オーディションの詳しい内容は後日改めて説明しますが、まずはこの日程を念頭に置き、毎日の練習に取り組んで行ってください」

やはり今年もこれが来た。コンクールのオーディション選抜。学年や楽器キャリアに関係なく実力のみで判断され、足りていないとなれば三年生ですら落ちることもあり得る。その決定に慈悲はない。コンクールで勝つ、そのために『必要』な人材だけが選ばれ残りは振り落とされてしまう。落ちたくなければ必死で練習し周りを押しつけて上達する以外、選択の余地など無いのだ。

「それでは各パートリーダーは後ほど職員室に、自分のパートの楽譜と参考演奏のCDを取りに来てください。一回目の合奏は中間テスト明けに行いますので、今日明日は個人とパートで楽譜を完璧にこなせるよう練習しておくこと。分かりましたか？」

「はい。」

ミーティングを終えた部員達がそれぞれのパート練習場所へと移動していく。久美子達もまた、低音パートの練習場所である三年三組へと向かった。楽譜を取りに職員室へ行った緑輝の到着を待つ間、各自は音出しや基礎練習などをしていた。ふう、と一息ついて楽器から口を離れた葉月が感慨深げに口を開く。

「今年もいよいよ来るねえ、オーディション」

「オーディションって、低音からは毎年何人くらい選ばれるんですか？」

星田は楽器を床に置き、上級生らに尋ねた。丁度ひとしきりの基礎連を終えた久美子も会話の輪に合流する。

「だいたい五、六人ってとこかなあ。他のパートの編成によっても変わるけど」

場合によつて低音の人数が多く取られることはあるが、コンクールではどの学校でも平均してチューフォ・チューバ・コンバスから二人ずつが選ばれることが多い。このうちコンバスは一年の真帆が初心者で、楽器演奏もまだまだおぼつかない状況である。つまり今年も緑輝一人がコンバス奏者としてレギュラーになることはほぼ間違い無い。

チューバに関しては、きつと葉月は確定だ、と久美子は予想していた。それは何も身内びいきという事ではない。実際に葉月は日々の

努力を積み上げ続けた結果、そう断言できるだけの確かな実力を備えている。ではもう一人は？　ということになるが、二年の美佳子と一年の星田は現時点だとどちらが選ばれるか分からない程度の実力差だ。これからオーデイションまでの練習期間が、ともすれば二人の明暗を分けることになるだろう。

そしてユーフォは、正直言って雫の実力があまりにも圧倒的すぎて、もし久美子と相楽と雫の三人のうちから二人と言われれば相楽の選出は相当に難しい。それは相楽本人も薄々分かっているらしく、この頃は時折弱気な発言をする姿も目立ちつつあった。

「今年のレギュラー争奪は厳しそうですね。もう俺、最初からサポートに徹するつもりでハラ括ろうかな」

「駄目だそー相楽、ネガティブ発言は。来年があるなんて思わず、このチャンスを狙っていかないと！」

葉月が眉を吊り上げながら相楽を叱咤する。一方の相楽は、いやいや誤解しないで下さいよ、と両手を振った。

「別にやる気失くしてるわけじゃないですよ。俺、音楽好きですしユーフォも気に入ってるんで。ただ今年はやっぱり一人ヤバいのがいますし、毎年の慣例から見ても、そう簡単にユーフォ三人体制にはならないだろうなって事です」

相楽が教室の端をそつと見やる。釣られて久美子も視線を移すと、そこには雫の姿があった。ああして他人の輪に入らず黙々と自分の練習をこなす姿は、ますます往時のあすかを彷彿とさせるものがある。

「私、葉月先輩と絶対一緒にコンクール出たいです。超頑張ります！」  
「その意気だよ美佳。星田君も負けずに頑張れ！　みんなでコンクール金賞の栄冠を掴み取ろうね」

美佳子と葉月は相も変わらぬテンションの高さである。メラメラと燃える炎を背に負う二人を盗み見た真帆が、そつと久美子に耳打ちして来た。

「凄いですね、加藤先輩と吉田先輩……」

「あの二人はもう、スポ根世界に生きてるから」

そう返して久美子は肩をすくめる。二人とも運動部出身のためか、こういう時のノリは完璧にシンクロしてしまう。あまりにも熱血熱血した二人の世界には、久美子達がついていけなくなる事もしばしばなのである。

「お待たせしました」

その時、がらりと教室の戸を開けて緑輝が入って来た。

「コンクール用の楽譜とCDです」

緑輝は用意しておいたラジカセにCDを掛けながら、葉月達に課題曲と自由曲の楽譜を配っていく。

「はい、久美子ちゃん」

手渡された数枚の楽譜のうち、課題曲は『マーチ・シャイニング・ロード』。木内涼によって作曲されたこの曲は、冒頭からラストまで快活なリズムで爽やかに奏でられるのが特徴的な行進曲だ。そして自由曲は『歌劇「剣闘士」』。こちらはオペラの劇伴を意識して作曲されており、都合四ページに渡る壮大なポリューム、そして音符で真っ黒に埋め尽くされた譜面であった。例年の滝の選曲と同様、これもまた曲としての難度は途方もなく高い。

「こりやまたやり甲斐のある曲が来たねえ。特に自由曲なんか、去年のより難しいんじゃない？」

楽譜としばらく睨めっこをしていた葉月も、この曲を前にして流石に呻きを漏らす。

「緑もそう思います。これは今年こそ、滝先生も本気ですよ」

別に去年までが本気じゃなかったという訳でもないだろうが、今年自由曲の選曲にはいいよもって全国で金賞を取る、という滝の決意が滲み出していた。単に難易度が高いというだけではない。その美しさや情感を十二分に表現し切ることが出来れば、全国金賞常連の超強豪校にも真正面から立ち向かえるだけの音楽に仕上げられるほど魅力的な曲ということである。

「あれ、」

楽譜をなぞっていた久美子の指が止まる。それは自由曲の後半部分。そこに書かれてあるユーフォパートの小節の上には、確かに『S

o 1 o .』と記されていた。今年の自由曲にはユーフォのソロがある。ということとは、オーディションでソロの担当者を選ぶことになる。これを吹くことが出来るのはユーフォのうち一人だけであり、久美子にとってはソロを吹けるか吹けないか、そのどちらかだ。

その時、ラジカセから流れていた演奏が、丁度そのパートのところへ入って行った。反射的にラジカセへと視線を移す。と、視界の端で、雫も同じところを見ているのに久美子は気付いた。ソロ区間の数小節。ユーフォの温かく包み込むような音が鳴り響き、そこに続いて、トランペットのソロが美しく歌い上げていく。

「……………」

久美子は息を呑んだ。ここのユーフォソロはトランペットのソロへと繋がるように構成されている。トランペットソロを吹くのは間違いない。麗奈だろう。つまり、このソロは、麗奈と一緒に吹くことになる。それを認識したとき、不意に今まで丁寧に折り畳まれていた気持ちが解き放たれ、体の内側で猛然と暴れ始めた。

唇がわなわなと震える。強張る全身は真つ赤に燃えるように熱い。ぐっと握り締めた拳の内側では爪が手の平に食い込み、今にも血を噴き出すのではと錯覚するほどだ。

譲れない。これだけは絶対に他の誰にも、雫にだって、譲れない。負けたくない。負けるわけにはいかない！ そう叫びたくなるのを堪えるのに必死だった。

それは久美子が雫の事を、強く明確に『打ち倒すべき相手』として認識した、最初の瞬間だった。

### 三．もがくよアツファンナート

「自由曲の『剣闘士』」はイタリア系アメリカ人の作曲家、F・D・ヴァリアーレが作曲したオペラ用の楽曲を本人が編曲し、一種の交響詩として纏めたものです。その主題は紀元前二世紀から紀元五世紀頃までを中心に古代ローマで行われていた戦う奴隷・剣闘士達の悲惨な日々と、その境遇を変えるため反乱を起こして国と戦い自由を勝ち取るうとする果敢な姿を描いています。曲は全三部で構成されていて、第一部ではどろどろと重厚な曲調が辛く苦しい剣闘士達の生活とそこからの逃亡を、第二部のゆるやかな部分では脱出後の安息と救いの夜を。そして第三部では剣闘士達の自由を勝ち取るための戦いと勝利を喜ぶ剣闘士達の盛大な祝典を、それぞれ表現しています。中でも最大の見どころとなるのは、第三部の戦いのシーンから祝典のシーンへと至る間のあるところにある、ユーフォとトランペットのソロによる掛け合いですね。まるで戦友を互いに労り、明日の勝利と栄光を共に誓い合うかのような協奏は感動のクライマックスです。ちなみに近年『剣闘士』は映画化もされ、DVDも出ているみたいなので、一度観てみるのもっと理解が深まると思います」

時々メモに目を遣りながらも緑輝が流暢に曲の解説を終えると、席に着いていた葉月がぱちぱちと手を叩いた。それに続いて他の部員達も壇上の緑輝へと拍手を送る。

「苦労様、サファイアちゃん！ 大分こなれてきたね」  
「えへへ。みどりですう」

照れながらも名前の訂正はすっかり忘れない緑輝が壇上から降りてきた。こうして緑輝が楽曲の解説を担当するようになってもう一年以上になるが、葉月の言うように最初の頃よりは滑らかに解説が出来るようになった。しかし『初代』であるあすかのそれと比べれば、詳細なあらすじや歴史的背景、さらに作曲家自身の生い立ちや思想観にまで踏み込むかのような解説にはもう一つ及ばない。そもそもあすかがあれだけ語り尽くせたのも、貪欲な探求心とそれによって培われた膨大な知識量の賜物であり、いかに音楽の造詣が深い緑輝と言えど

もそう簡単に追従出来るものでは無いということなのだろう。

「というわけで、今日からはいよいよ本格的にコンクール向けの練習をしていくことになります」

緑輝のパートリーダーらしい言葉に、その場にいた全員が頷く。ただし雫だけは緑輝に目もくれず、いつものように手元の楽譜をじつと見つめながらという態度だった。早速各々が楽器を構えて音出しや基本練習を開始しても、雫はただ黙って楽譜を眺め続けている。

久美子は雫の初見力の秘密が、この綿密な譜読みにあると考えていた。あくまで当て推量ではあるのだが、雫はああして楽譜を見ながら頭の中でそのテンポ、音の形、響きを正確に再現している。まるでイメージ上のもう一人の自分に演奏させるように。楽譜内の指示一つひとつを見落とさず丹念に拾い上げ、それを頭の中で鳴らすことで、彼女は奏でるべき音を自分自身にインプットする。そうしてから初めて実際に楽器を手に取り音として出すのだろう。

ともかく、雫の事ばかりに気を取られているわけにはいかない。雫は雫、自分は自分。各々のやり方というものがあるし、雫の振る舞いをおいそれと真似出来るわけでもない。自分に出来るのは自分なりのやり方を貫き通すことだけだ。そう考え、久美子はいつも通りの基礎練習を開始した。ロングトーン、タンギング、スケール、リップスラー……一つずつ音を確認し、いつも通りの調整をしながら自分のコンディションを探り調整を進めてゆく。それが済んだらいよいよ曲練習。楽譜を譜面台にセットして、まずはメトロノームを既定のテンポより遅めに合わせる。

『剣闘士』の出だしは四分の三拍子、八分の五拍子、四分の二拍子、八分の五拍子……というふうに変拍子が連続していてなかなかリズムが掴みにくい。誤った演奏をしないよう、一拍ごとの音の形をしっかり確認しながら楽譜に合わせて音を出していく。こうして第一歩を一通り吹き切れたかという時、教室の端からガタンと大きな音がした。それは雫が椅子から立ち上がった音だ。そのまま楽器を手に取り、いつものようにスムーズな所作で構えると、雫のユーフォからはさらさらと整った音が流れ始める。

「え？ もう？」

横で聞いていた美佳子が驚きの声を上げる。久美子もすぐに気づいた。さつきまでたどたく自分か吹いていた『剣闘士』の第一部、重厚な出だしから始まるところを雫も吹いている。しかも自分のそれと比べてブレもなく、確信に満ちた音でだ。彼女の演奏は途切れることなく第二部へ移り、柔らかに周囲を包むようなユーフォの音色が教室中に響き渡った。

「すっげえ……」

相楽も手を止め、雫の演奏に聴き入っている。気付けば雫以外の全員が彼女の演奏に注目していた。第二部が終わり、続けざまに第三部へ。先ほどまでの優しい調べから一転、戦を想起させる猛々しい音色へと変わり、兵士の行軍を思わせる刻みを鋭く響かせていく。その音が放つ鋭い殺気はまるで本当に戦場の只中にあるかのように、聞く者の背筋をぞくりと震わせるほどだった。

そして例のソロパート。ハイトーンから始まり場を支配するように広がるその音は、一粒一粒が燦然と輝く宝石のように美しい。繊細なビブラートが生み出す音の波はどこまでも雑味なく、却って澄み切った音をより強調するかのようにたゆたっている。自分だったらこんな美しい響きが出せるだろうか。久美子は自分の顔が強張るのを感じ取った。喉の奥から苦いものがこみ上げてくる。想像の遙か上に行く雫の演奏技術を前に、これまで積み上げてきた自信ががらりと崩れ去っていくような気さえする。そんな久美子の心境を置き去りにするかのように、雫の演奏は怒濤の勢いでもって終盤の祝典へと向かい、華麗にフィニッシュした。

全員が大きな拍手を雫に送った。しかし、誰からも雫を褒め称える言葉は出なかった。あまりにも雫の演奏が完璧過ぎて、何をどう言ったらいいのかわからないという困惑の表情が、そこに幾つも浮かんでいた。

「上手だったね」

久美子も雫に、こんな上辺ばかりの言葉を掛けることしかできなかった。

「ありがとうございます」

雫はいつものように淡々とした振る舞いでお辞儀をし、また自分の席へと座った。

「さあ、私達も負けてられないね。がんがん練習しなくっちゃ！」

葉月が固まりきった場を解きほぐすように号令を掛け、我に返った部員達は再び楽器を構えて演奏を開始する。久美子は誰にも気づかれないよう、唇の内側をぎゅつと噛み締めながら、また譜読みに戻った雫を凝視し続けていた。

ばしやばしや。

教室近くの手洗い場で、久美子はいつものようにマウスピースを洗う。鈍く銀色に光るマウスピースは、年季のせいもあって少しだけ黒ずみを帯び始めているが、それでも毎日手を掛けているだけあって未だキラキラと輝いていた。すっかり綺麗になったマウスピースをハンカチで拭き上げ、それをぎゅつと握り締める。水の温度に均されたマウスピースはひんやりとしていて、自分の手が孕んでいた熱を吸い上げてゆくみたいだった。

頭の内側ではずつと、先ほどの雫の音が響いている。その演奏がいかにか完璧だったかは今更語るまでもない。雫の本当に凄いところは常にブレることの無い絶対的な安定感にある。演奏中の細やかなフレーズの動きや微妙な強弱の変化を、雫は確信的に吹き分けている。それらは決して音楽としての美しさに背いていない。全体の音楽の中で自分の音がどうあるべきか、それを既に雫は見切っている。そしてそこにぴったり当てはまる理想的な音を何度でも正確に奏でるだけの圧倒的な技術が、雫にはあるのだ。

「はあ……」

息苦しさを吐き出すと、どうしても溜め息のような音になってしまふ。誰かが言っていた『溜め息をついた分だけ幸せは逃げていく』という言葉がふと頭に浮かんだ。確かに今の久美子の心境は幸せとは程遠い。雫に負けるわけにはいかない、と決心したばかりのところでの威勢をばつさりと斬り捨てられたせいも、重苦しい敗北感が自分の胃の腑から滲み出て頭の中を染め上げていく。

『あの子には、雫には、勝てないかも知れない』

そんな後ろ向きな思いが、己の心を支配しつつあった。

「ダメだ、こんなんじゃない」

久美子は勢いよく蛇口を捻った。流れ落ちる水を両手で掬い、ばしやりと自分の顔に掛ける。水の冷たさで身も心も引き締めようと思っただが、さて顔を拭こうとしてからタオルを持つてくるのをうっかり忘れてしまったことに気が付く。今の自分はどうにも冷静さを欠いてしまっている。こんなんじゃないいけない。

「黄前先輩、顔が濡れですよ。どうしたんですか？」

途方に暮れつつあった久美子の視界に飛び込んできたのは、見慣れた後輩の顔だった。

「あ、依琉ちゃん」

依琉と呼ばれたその女子生徒、ひやまえる 松山依琉は、その手にオーボエと譜面台を持っていた。吹部二年の彼女はオーボエ・ファゴットパートのパートリーダーを務めている。久美子の世代にはオーボエやファゴットなどダブルリード楽器を担当する生徒がいなかったため、昨午みぞれが引退した後は中学からの経験者であった依琉がパートリーダーに就任したのである。

「ちよつと顔を洗いに来たんだけど、タオル持つてくるの忘れちゃつて」

「それなら、これどうぞ」

依琉は譜面台を床に置くと、肩に提げていたトートバッグの中から一枚のタオルを取り出した。生地の上には人気キャラである『サクスクくん』の柄がプリントされている。オーボエのキャラクターでないのは、彼女が単純にサクスクくんを愛好しているだけなのか、それともオーボエキャラがないので仕方なくなのか、一体どっちだろう。

「ありがとう」

素直にタオルを受け取り、それで顔を拭く。水に濡れてべたべたと気持ち悪かった感触はすっかり消え失せた。

「あとで洗って返すね」

「あ、いえ、大丈夫です。もともと毎日洗ってますし」

でも申し訳ないし。いえほんとに大丈夫ですから。そんな押し問答をした結果、久美子は依琉の好意に甘えることにした。返されたタオルを丁寧に畳んでバッグにしまいながら、依琉が尋ねてくる。

「でも先輩がうっかりするなんて珍しいですね。何かあったんですか？」

何気ない気遣いの言葉に久美子の喉はぐぐつと鳴った。ここで正直なことを言えば、依琉にとってはかえって迷惑かも知れない。万に一つもそうならぬよう、無理やり口角を吊り上げ言葉を紡ぐ。

「ううん、本当に何でもないよ。タオルありがとね、今度何かで埋め合わせするから」

至って軽い口調を保つよう努めつつ、久美子はひらりと依琉の後ろをすり抜ける。

「そろそろパート練に戻らなくちゃいけないから、行くね。それじゃあ」

ほんの少し早口でまくし立て、久美子はその場を後にした。これ以上何かを喋ったらボロが出てしまいそうだった。自分は部長だ。吹奏楽部を牽引する立場として、弱ったところを後輩に見せるわけにはいかない。そう己に言い聞かせつつ練習場所に戻ると、他の部員達は椅子を並べてすっかりパート練の体勢を整えていた。

「もう、久美子戻ってくるの遅いよ」

「ごめんごめん。ちよつと顔洗ってた」

片手を立て、謝罪のポーズを作りながら自分の席に着く。抱え上げたユーフォにマウスピースをセットしフツと息を吹き込むと、管の中の空気が押し出されてくぐもった音が鳴った。

「それでは、今日のパート練を開始しましょう」

緑輝の号令によりパート練が始まる。まずは課題曲からだ。メトロノームが刻むテンポに合わせ、全員で一斉に音を鳴らす。特定の区間まで吹いたところで緑輝は演奏を止め、手元のフルスコアを確認しながらパートメンバーに指示を飛ばしていった。

「チューバ、最初の音の入りが弱いです。行進曲ですから最初から

狙って吹いて下さい」

「はい」

「ユーフォは音の粒がバラバラです。特に二十五小節目からのユニゾンでの乱れはまとまりが無い印象を受けるので、各自音を揃えるよう気をつけてください」

「はい」

「それじゃあ今のところをもう一度、やってみましょう」

一つ一つの問題点を、緑輝は的確に指摘していく。これもパートリーダー就任当初はなかなか踏み込み切れなかったようで遠慮がちに指摘することが多かったのだが、それではパート練習にならないと久美子や葉月に諭されたこともあり、今では随分改善されている。

もちろん、緑輝がパートリーダーだからと言って久美子達は何も言わない、という訳ではない。何か気付いたことがあれば葉月も久美子もお互いに指摘し合うし、時には後輩達から声が上がることもある。そうして互いに注意し合い、曲の完成度を高め合っていくのが今の低音パートの練習体制だ。去年までとは相違点もあるが、この風通しの良さは久美子自身にとつても居心地が良かったし、実際にその方針で日々練習して来た低音パート全体のクオリティは他パートと比較しても中々に高いと自負している。もっとも麗奈の率いるトランペットパートだけは、別格ではあるのだけれど。

「二年生も気になるところがあったら、どんどん意見言っていればいいからね」

そう告げて葉月がにんまりと顔を崩す。これに経験者の星田は素直に頷き、初心者の方真帆はどうしたらいいか分からない、という風に困ったような表情を浮かべた。雫は特に何か反応を示すでもなく、楽器を構えたままで次の演奏開始を待っている。これだけ実力があつたら、少しは周りの不出来に不満を抱いたりしないのだろうか。久美子は少しだけ疑問に思う。

一年生の頃の麗奈がまったく練習しない上級生に苛立っていたり、梓が座奏に力を入れない周囲の面々のことを愚痴ったりしていたところを見るに、極めて高い実力を持つ人からすれば己より実力の低い

存在というのはどうにも腹立たしいものがあるらしい。それに久美子自身も正直言つて、練習をさぼったり手を抜いたりしている人に怒りを覚えた経験も無くはない。流石に表立って言葉にするのは勇気の要ることだけれど。せめて表情に何か、見て取れるようなものでも無いものか。けれど雫は一貫して表情を崩さず、自分の練習に集中し続けている。他人なんてどうでも良くて、自分さえ上手に吹けたらそれでいいのだろうか？ と、そんな邪推すらしてしまう。

「それでは次は自由曲をやりましょう。まずは出だしから——」

こんな調子で、コンクール曲の練習一日目は過ぎて行った。

連休が終わり、学校が始まると同時に一学期の中間テスト期間に入ってしまったため、一週間ほど部活は休止となる。校内でうっかり音出しでもしようものなら生徒指導の教師が飛んできて大目玉を喰らうことになるため、学校で練習をすることは出来ない。このため久美子は自分のユーフォを家に持ち帰り、テスト勉強の合間に宇治川沿いのベンチまで出掛けては毎日欠かさず練習をしていた。無論、楽器を持ち出すところを親に見られると後が面倒なので、こうして練習が出来るのは日が暮れる前の小一時間だけのことである。

風に飛ばされないよう楽譜ファイルを布団干し用の洗濯ばさみで固定し、音符の形を一つ一つ確認しながら曲の練習をする。楽譜を渡された直後に比べて随分スムーズに吹けるようにはなってきたが、苦手なフレーズのところではどうしても誤魔化すようにテンポが走りがちになってしまったため、意識して発音をクリアにしなければならぬ。それにはまず遅いテンポから確実に綺麗な音を出し、徐々にテンポ自体を上げていくのが効果的な練習法だ。

一音ごとに耳を澄ませながら吹いていると、少しずつ自分の音が整っていくのを感じる。そうして次第に美しく吹き上げられるようになる感覚はとても楽しい。だが今の久美子にはその楽しさを十分に堪能している余裕は無かった。そろそろ家に戻らないと、こうして楽器を持ち出して外で吹いているのが仕事帰りの母親に見つかってしまうかも知れない。

「ただいま」

家の鍵を開け中に入る。当然ながら誰もいない。母親はこの時間帯は仕事に行っているため、久美子は気兼ねなく楽器を外に持ち出すことが出来るというわけだ。

まず部屋に楽器を置き、それから洗面所へ。ハンドソープを付けて手で揉むと、大小様々の泡が手の中でぷくぷくと形作られていく。泡は全体でぷっくりと白い塊を形成するも、蛇口から注がれる流水に手を浸すと、それらは水と一緒にひとつ残らず排水溝へと流れ落ちていった。手を拭き、それから鏡に映る自分の顔を見て、久美子はふとあることに気が付く。

「最近ヘアピン付けてないなあ」

それは一昨年の全国大会前日に秀一から贈られた、白いひまわりをあしらったヘアピンの事だ。彼と付き合いだしてからしばらくの間、そのヘアピンは久美子の額を定位置にしていた。しかし最近はどうもかり失くしてしまうのが怖くて、普段の学校や部活に付けて行くことはせず、自室の机の引き出しにしまったままにしてある。最後に付けたのはいつだっただろう。去年のクリスマスか、いや二月のバレンタインデーの時には付けていたような、どうだったっけ？ などと首を捻ってみても答えは出て来そうに無い。久美子が記憶の発掘を放棄して部屋に戻ろうとしたところで、ちょうど玄関の扉が開き、母親が帰って来た。

「ただいま」

「おかえり」

いつもと同じ気だるい声で、久美子は母を迎える。

「ごめんね遅くなつて。これからお夕飯作るから」

スリッパを突っかけ、母はパタパタと台所へ向かった。ついさつきまで娘がテスト勉強もせず楽器を吹いていたのを、当然ながら母は気付いていない。その事に対して抱く罪悪感と仄かな愉悦。これからきちんと勉強するから勘弁して。そんな思いを久美子はこっさり胸の内に抱く。

「ゆっくりでいいよー」

母親の背中にそう声を掛け、久美子は自室へと入った。机の上には

依然として大量の教科書や参考書がうず高く積まれている。テスト勉強の進捗は現状、おおむね六割といったところだろうか。テスト初日の教科は数学B、現代文、それと日本史だ。テストまでの残り日数を考えれば、ある程度は他の教科も手を付けつつ初日の対策を絞り始めた方がいいかも知れない。

「さて、晩ご飯までの間に少しでも進めますか」

気乗りはしないが勉強は学生の本分とも言うし、やるべき事はしっかりやらなければならぬ。テストの成績が悪ければ、両親には久美子の夢もただの現実逃避だと、そう捉えられても文句は言えなくなる。それに万が一補講を受けるとなれば部活へも影響が出てしまう。さすがに部長として、部員に先駆けて補講のために部活を休む、なんて事態は避けたいところである。久美子は渋々と椅子に座り、数学Bの教科書を開いた。

翌週の月曜日から中間テストが始まり、これまでのところ久美子の手ごたえはまずまず、といった状況である。特別良い感触でもないけれど。ともあれこの調子ならば補講は避けられることだろう。テストも残すところ明日の英文法と生物を残すのみ。このうち生物は日頃から平均点以上を確保できているので、家に帰ってから最終確認程度で十分なはずだ。今日のところは英文法に集中して、成績を少しでも伸ばすことに努めよう。そう考えていたところに、くみ姉、と誰かが背後から声を掛けてきた。自分をこの呼び方で呼ぶのは一人しかいない。声の持ち主を頭の中に描き出しながら、久美子は振り返る。

「さっちゃん。テストお疲れ様」

「全くもー、ホントにお疲れだよー」

駆け寄って来た幸恵は久美子の隣に並び、両腕を風車みたいに大きく回した。凝り固まった彼女の肩がぼきぼき、と鈍い音を鳴らす。

「なんかさー、高校入ったらいきなり勉強難しくなってるさあ」

あはは、と久美子は笑いをこぼした。

「それわかる。私も一年の時、同じこと思ったよ」

「でしょ？ 特に数学。一次不等式とか集合とか、もう何のことやら

さっぱり理解できない」

そう言つて幸恵は空中にくるくると指で何かを描き始めた。恐らく何かの数式だろう。

「くみ姉はテスト、どうだった？」

「うーん。まあまあじゃないかな？　一応それなりにテスト勉強はしてたし」

その回答がどうも期待外れだったらしく、幸恵は顔をしかめて肩を落とした。

「ええー、やっぱり三年生になると勉強ちゃんとやつてるのかあ。成績悪いとお母さんにめっちゃくちや怒られるんだよなあ」

「怒られるだけならまだマシかも知れないけどね」

「え、怒られるだけじゃないの」

「うちの学校、赤点が三教科以上あると、補講受けなくちやいけないから」

その残酷な現実を、どうやら幸恵は知らなかったようだ。途端に顔からさつと血の気が引いていくのがわかる。

「補講は放課後に二時間ずつやるから、その間は部活に出られなくなるし。その後の追試で合格点取れなかったらまた補講と追試ってなって、部活やる暇なくなっちゃうよ」

「それは嫌だ。あたし部活出たい！」

幸恵がすぎるような瞳で久美子の腕に巻き付いてきた。それに合わせ、頭の上でアップに留めた髪の毛がポンと跳ねる。こうして見ていると、まるで飼い主に捨てられそうな仔犬みたいだ。

「だったら普段からちゃんと勉強しないとね」

久美子は幸恵を引きはがし、彼女の肩を叩いた。

「まあ、中間はまだ範囲も狭いから何とかなるっしょ。期末は悲惨だよ、範囲も一気に広くなるし、補講になったら夏休みまで潰されちゃうから」

それにコンクール前だし、練習にも支障出るかもだし、と畳み掛けたことで、幸恵もとうとう意を決したようだった。おもむろに深く頷くと、

「あたし、期末から本気出す……」

「それじゃ遅いって」

からからと笑いながら、二人は駅までの道を歩く。春に幸恵が入学して以来、こうして一緒に下校するのは果たして何日目だろうか。既に気温はすっかり夏の入り口を思わせるものになり、時折吹き抜ける薫風が爽やかに髪を揺らしてゆく。その時ふと何かを思い出したのか、あ、と幸恵は振り向いた。

「そう言えばさ、くみ姉」

「ん？」

「あたしこないだ、芹沢さんと一緒に帰ったよ」

芹沢さんと、一緒に、帰ったよ。言葉の意味が理解できず、久美子は一瞬硬直する。あの雫と、幸恵が？

「ええっ!？」

思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。その声の大きさに驚いてか、幸恵がぐいと仰け反る。

「ちよつとくみ姉。声でかいって」

「あ、ごめん」

「一緒って言っても、電車の中で少し喋ったくらいだったけどね。いつも芹沢さん見たこと無かったからってつきり電車使ってないのになって思ってたけど、帰る時間が違ってただけみたい」

それを聞いた久美子の頭に浮かぶ疑問符。サンフェスまでの練習は遅くとも午後七時までには終わっていたし、全体練習なので終了の時刻はどのパートもおおむね同じだったはずだ。にも関わらず、久美子がこれまで雫の下校姿を見たことは一度として無かった。それは本当に電車に乗る時間帯が違っていただけなのだろうか？ あるいは日頃は親に車で送り迎えして貰っていて、その日はたまたま電車を利用しただけなのか？

「それっていつのこと？」

「んと、テスト期間前の最後の練習日。その時芹沢さん、楽器ケース持ってたよ」

なるほど、と久美子は納得する。あれだけの技術を持つ雫の事だ。

自分と同じく勘を鈍らせないようにと楽器を持ち帰って自主的に練習しているのだろう。まだ一年生ということも考えれば、もしかして久美子よりも多くの練習時間を確保できているかも知れない。それにあれだけ上手ければ、麗奈のように親がプロの音楽家という可能性だってある。その上自宅に防音設備があれば夜遅くまでだって練習し放題だ。もし雫がそうだったら……想像するだけで、久美子は激しい焦燥感に全身を揺さぶられてしまう。

「あー、それは無いと思うよ。芹沢さん、普通にマンション住まいだつて言ってたし」

「え、そんなことまで聞き出したの?」

予想外の話に久美子は目を丸くする。

「その言い方、なんか失礼だよ?」

気分を害したのか、ふう、と幸恵は頬を膨らませた。まるまると膨らんだ桃色の肌は、触ったらとても滑らかそうだった。

「電車で同級生と乗り合わせたら、色々喋ったりするじゃん。まあ、あたしの降りるトコまでの、十分かそこらだったけど」

果たしてそんなものだろうか。過去の記憶を掘り下げてみても、自分と同級生相手に最初からそんな突っ込んだ話をした記憶は無い。以前にも幸恵のコミュニケーション能力が高いと感じたことはあったが、まさかあの雫に対してもここまで接することが出来るとは。幼馴染みの成長ぶりに改めて感心する久美子をよそに、幸恵の発言が続く。

「それでね。他の人から聞いた話じゃ無口で素っ気ない子かと思ってたんだけど、ちゃんと話してみたら芹沢さんって意外と普通に色々喋るんだね。家の事もそうだし、学校とか部活のこととか色々話したんだよ」

「へえ」

こうして幸恵から雫の一面を聞かされると、なんだかおへその辺りが妙にむず痒くなってくる。幸恵から聞かされる雫像はどれも、部活で目にする雫の振る舞いからは髪の毛一本分も匂わせぬものばかりだ。日頃近くに居る相手の事を、それより離れた立場であるはずの幸

恵の方がよく知っているというのは、どうにも居心地が悪い。

「それで、学校とか部活についてはどんな話だったの？」

「んー。特に何も無いかな。勉強大変だねとか、練習きついねとか、そんな感じ」

それは主に幸恵から振った話だろうな、と久美子は直感で察した。なんとなくだが、雫は学業の方もたいへん優秀そうな気がしたからだ。

「あ、でも一つだけ、芹沢さんから聞かれたことあったよ」

幸恵は人差し指をぴんと立て、唇の端に寄せた。

「黄前先輩の事、どう思う、って」

「え、私の事？」

虚を突かれ、久美子はびくりと震えた。まさかこの流れで自分の名前が、しかも雫の方から出てくるとは思わなかった。

「うん。でも、くみ姉ってあたしの遠い親戚なんだよーとか、小学校からユーフォやってたらしいよとか、そんな話ぐらいしかなかったなあ。丁度あたしの降りる駅に着いちゃったし」

などと喋っているうちに、気付けば駅の改札前まで来てしまった。ここから幸恵は久美子と逆方向の電車に乗ることになる。もう少し話を聞きたい気持ちもあるが、無理に引き留めることは出来ないだろう。何より幸恵には明日のテストに向けて少しでも勉強しておいて欲しい。赤点三つで補講、などという事態にならないために。

「また今度芹沢さんと帰れたら、くみ姉にも教えてあげるね」

それじゃバイバイ、と手を振って、幸恵は改札の奥へと姿を消した。一人残された久美子は探るように辺りを見回す。どうやら今日は雫と帰宅時間がかぶってはいないらしく、彼女の姿を見つけることは出来なかった。

『黄前先輩のこと、どう思う？』

先ほどの幸恵の言葉が雫の声で再生される。それは一体どういう事なんだろう。逆に雫が自分の事をどう思っているのか、久美子は少し気になりだした。あれだけ上手い雫の事だ。ひよつとして自分の事をふがいない先輩だと感じ始めているのかも知れない。それとも

それは部長として奏者として頼りない、という意味なのか。心に広がる暗がりをそこで振り払うかのように、久美子は改札を通り抜けた。テスト期間が終わり、練習の日々は瞬く間に過ぎていく。六月に入るとそれまで長袖だった制服から半袖に衣替えとなる。梅雨の時期も相まって少しだけ肌寒く感じる日もあるけれど、それはほんの少しの間だけの事だ。

こここのところの部員達はオーデイションに向けて個々の課題に取り組む日々を送っていた。月末に行われるオーデイションでは吹く箇所が予め割り振られてはいるが、一昨年に久美子が経験したように抜き打ちで別の箇所を吹かされることもある。決して油断せず、課題曲と自由曲の両方をきちんと吹きこなせるようになっていなければならぬ。ましてソロを志願するならばレギュラー合格はあくまで大前提、そこからいかに細やかな技術を身に付けられるか、表現力を高められるかが合否の鍵を握ることになるのだ。少なくともそれを正しく理解している者にとって、練習の時間はいくらあっても足りるものではない。

「星田、そこ指回り切ってないよ。リズムちゃんと合わせて」

「はい」

「それと美佳はEのところ、二拍三連の時に音程が崩れやすいから注意して」

「はい」

葉月が後輩達のミスした箇所を次々と指摘してゆく。言われた後輩達はすぐさま返事をして、楽譜に注意点を書き込んでいった。一方で緑輝は初心者我真帆に、楽譜の読み方と演奏方法を根気よく教えている真つ最中だった。

「この『ALLEGRO MARCIALE』っていうのは『速い行進曲風』っていう意味の指示です。なので大体のテンポとしては、このぐらいですね」

たん、たん、たん、と緑輝が机の端を手で叩く。真帆はその拍を首を縦に振る動きで感じ取りつつ、自らの体へと刻んでいく。

「ここでのボウイングはもたつくと音が暴れちゃうので、早めにやる

といいです。それから——」

楽譜に書かれた指示用語は大抵の場合外国語であり、初心者が楽譜を読みこなす上では大きな壁になることが多い。そんな複雑怪奇な用語の意味や演奏上のコツを一つ一つ、緑輝は丁寧に真帆に説明していく。

彼女がここまで真帆の教育に時間を割くのは、なにも自分がコンクールメンバ―当確なので余裕があるからというわけではない。コンクールが終わって三年生が引退すると、北宇治のコンバスの奏者は真帆一人になってしまう。そして、コンバスをここまで密に指導できる人間は、顧問である滝も含めて北宇治には存在しないのだ。それに緑輝の持つ音楽技術と知識を余すところなく真帆に伝授することが出来れば、それは来年や再来年の北宇治のためにもなる。だからこそ緑輝は自分の練習と並行して真帆の教育を怠りなく進めているのである。

「中盤のここ、キッツいですよねー。六連符からの四、三、四連とか、もう金管殺しに来てる」

楽譜を眺めながら相楽が青白い息を吐く。第三部冒頭の戦争のパートでは、金管を主体とした連符の刻みが大量に用いられている。同調して動くトランペットやトロンボーンパートからも泣きの声が上がっているこの箇所だが、しかし連符の刻みを全員で綺麗に揃えて吹くことが出来れば、聴衆には大きなインパクトを与えられるだろう。

「タンギングで乗り切るしかないね。それと相楽君、ダブルタンギングの『トウクトウク』の時、『ク』の音が少し引つ込み気味になってるから、発音気をつけて」

「はい」

久美子の指摘を受けた相楽の表情には、自分なりにはやってるんだけどな、という色が滲み出ている。実際、彼が奏でるその音は、決して大きな破綻をもたらすほど壊滅的という訳ではない。相楽にもそれぐらいの技量はあるのだが、他に参加する者が多いここの部分では僅かな音の乱れが淀みとなって、全体をボヤけさせてしまう可能性が

あった。オーデイションの指定範囲ということもあり、この部分の吹き方にはパート全員かなり注意を払って取り組んでいる。

「あ、そこ葉月ちゃんもです。というかチューバ全体、五連六連の音の形を正確にするよう意識して下さい」

横から緑輝の指摘が飛び、葉月も「はい」と返事をする。その表情は至って真剣だった。

「じゃ、ちょっと注意しながらやってみるから」

気合いを入れ直した葉月が楽器を構える。葉月の連符もかなり研ぎ澄まされてはいるが、流石に六連符ともなると若干なり舌がもつれるらしい。音はぶさぶさになり、砕けたパンのように教室中に散らばる。

「難しいなあ」

葉月が頭をボリボリ掻きながらどうすべきか考えあぐねていると、教室の隅から機械で切り分けたかのように正確な形の音が飛び出した。音の出どころは雫の持つ銀色に光るユーフォだ。それを聴いた葉月が早速とばかり、雫の席へと近寄っていく。

「凄い、そこどうやってるの?」

音楽経験の浅い葉月は自分より遥かに高い技術を持つ雫にも素直に教えを乞う。彼女のこういう上下に拘らない柔軟な姿勢は、全くの初心者だった葉月が僅か二年で急成長した一因でもある。

「トリプルタンギングです」

雫はそう言って楽器を降ろし、口だけでトゥクトウトウトゥ、と素早く三連刻みを二度唱える。

「なるほど。じゃあちよつとそれやってみよう」

ありがとね、と手を立てて雫に礼を言い、葉月は自分の席へ戻った。自分でも一回『トゥクトウトウトゥ』と唱えてから葉月は再び楽器を構え、息を吹き込む。まだまだ不格好だが、先ほどよりは遥かに滑らかな六連符の音がチューバのベルから奏でられた。

「おお、効果抜群」

それを隣で聴いていた美佳子が感嘆の声を漏らす。

「よし、それじゃウチらはここトリプルタンギングで行ってみよう」

「はい」

チューバが一致団結したところに、

「あの」

と、珍しく雫の方から声が掛かった。急にどうした？ とばかり全員が雫を見やる。

「他の楽器と連携する時、ダブルとトリプルが混ざってしまうと音の形が崩れることがあるので、気をつけた方がいいと思います」

雫の表情はやはりいつも通りの平坦さを保っていた。上級生に意見するにはそれなりに勇気が必要とするものだし緊張や高揚もあるものだが、そういった気配を雫からは全く感じ取れない。

「わかった、気をつけてみるね」

言われた側の葉月も特に気にする素振りもなく、につこりと笑顔を返す。それを見ていた相楽も真似をしてトリプルタンギングで六連符を吹き始めた。

「なるほど、こりや確かに吹きやすい」

難問がようやく解けた、といった様子子の相楽を見て久美子の喉がぐっと塞がる。何故だろう、雫のたった一言に、パート全体がぐるりと向きを変えて動き出していくこの光景が、率直に不愉快だと感じてしまっていた。別にこんなところで張り合うことなんて無い、あくまでも雫との競争は演奏技術だけだから、と必死に自分へ言い聞かせる。何より直属の後輩に対してこんな感情を抱いてしまう自分自身の醜さが、たまらなく嫌だった。

「じゃあ時間ですので、今日のパート練習はここまでです。このあとは個人練で、最後に部室でミーティングになります」

一時間ほどのパート練をこなした後、緑輝のこの言葉を合図に場は解散となり、部員達はそれぞれ教室を出ていく。久美子もそろそろユーフォに溜まった水滴を抜こうと、楽器を抱えて教室を出た。

教室から最寄り、廊下の端にある手洗い場でウォーターキーを開放したその時、

「そこ、全然出来てない。もう一回」

棘のある声がどこかの教室から聞こえる。久美子の耳はその声が、

間違いなく麗奈のものであることを察知した。そつと手洗い場を離れ、久美子は声の出どころと思しき戸窓から教室内の様子をこつそりと覗き見る。

「全然だめ。音の形が崩れてばらばらになってる。ちゃんと集中してる?」

予想通り、そこにはトランペットの列の前に立って指導をする麗奈の後ろ姿があった。この位置からでは窺えなかったが、きつと麗奈は険しい表情をしているだろう。彼女の声に孕んだ怒気から久美子はそれを察する。元々が容姿端麗な分、不機嫌そうにしている時の麗奈は本当に怖い。そして麗奈はこと音楽に関して、自分にも他人にも一切の妥協を許さないのだ。

「はい」

返事をしているのは主に一年生の面々。その中に幸恵の姿もあった。どうやら音が合わずに一年だけで麗奈の指導を受けているようだ。その箇所は、今しがた低音パートが練習していた連符のパートだった。

「テンポを緩めても吹けてない。それじゃあ本来のテンポで吹いたらバラバラになるのは当たり前でしょ。ちゃんとスローから綺麗な音で吹けるように練習してる?」

「はい」

返事をする女子部員の声は既にぐじやぐじやの鼻声だ。よく見ると、目元も真っ赤に腫れ上がっている。彼女は今、麗奈のスパルタぶりにこの上ない悔しさを味わっているに違いない。普段はあれだけ陽気な幸恵もまた今は唇をキツと真横に結び、麗奈の射かける言葉の矢に耐え忍んでいた。

「出来るまで何度でも繰り返し返すよ。次の合奏まで吹けてない人は合奏で吹かなくてもいい。わかった?」

「はい」

麗奈の剣幕を見守る他の二・三年生は一貫して黙ったまま、真剣な面持ちで一年生達を見やっている。麗奈の指導は確かに滝並みに厳しいが、それは彼女のレベルから見ても全国で金賞を取るのがどれほ

ど難しいか、ということの表れでもある。自分達の掲げた目標を叶えるにはこの厳しい指導に必死で食らいつく以外に無い。それを十全に理解出来ているからこそ、上級生達も一年生には死に物狂いで這い上がって来て欲しい、と願っているのだろう。

実際、昨秋以降の北宇治吹部で最も高い水準にあるパートはいつだってトランペットだった。麗奈の要求をクリアできれば滝の要求をクリアしたも同然であり、それは一重に自分達の技術向上に繋がる。経験則でそれを分かっているからこそ、上級生達は麗奈の辛辣な指導姿勢に関して余計な口を挟んだりはしないのである。

トランペットのパート練習はまだまだ終わりそうにない。麗奈の意見が欲しい気もしたけれど、今日のところは一人で練習しよう。そう思い、久美子は静かにその場から離れた。

渡り廊下の定位置へいつものように椅子と譜面台を置き、呼吸を整えて楽器を構える。今の久美子の技術的に、曲を曲として吹くことはもう問題なくこなせる段階まで来ている。後はいかにそれを煮詰めるか、表現性を高められるかだ。勿論これは個人レベルの話であって、今後の合奏を通じて周囲とのバランスを取ったり、吹き方を調整する等の必要が出てくることはある。滝による合奏練習が本格化してくるのは来週以降の事だろう。その先にあるオーデイションも見据えれば、一刻も早く自分の演奏力を押し上げていかなければならない。パートの事は緑輝や葉月に任せて、自分は自分の練習にもっと集中しよう。決意と共にピストンを押し込む指が、次に出すべき音に向けて正確に上下していった。

毎年六月五日、地元では『あがた祭り』が行われる。その日は祭りの交通規制に巻き込まれないよういつもより早く部活が終わるため、部員達は皆で遊びに行こう、射的やろう、たこ焼き食べたい、などと各々の予定を話し合ったりしていた。それは低音パートの面々もまた例外ではなく、星田はクラスの友人達と、真帆は中学時代の親友と、それぞれ祭りを見に行く約束をしているらしい。

「芹沢さんはあがた祭り、誰かと行くの？」

楽器をケースに仕舞いながら尋ねた葉月に、雫は無言で首を振る。その答えをおおよそ予測できていたのだろう。葉月は特に話を膨らませるでもなく、そっか、と一言だけで雫との会話を終えた。

「先輩達はどうするんです？」

真帆からの質問に、葉月が真つ先にふふんと鼻を鳴らす。

「あたし、一緒に行く相手がいるんだよね」

「うわっ、マジですか先輩。それって男子ですか」

葉月のしたり顔に驚きの声を上げたのは、意外にもこの手の話題に一番興味が無さそうな星田だった。

「ごめん、それ私い」

悪戯っぽい笑みを浮かべながら美佳子が手を挙げる。なあんだ、と星田は起こしかけた身を元に戻し、そのやり取りを傍で見ていた相楽がにやにやしながら星田をつつく。

「お前、加藤先輩が誰と行くのか気になるのか？」

「気になるっていうか、あんまり先輩達の浮いた話聞かないじゃないですか。彼氏いるとしたら初耳だなあって思ってる」

星田はどきまぎするでもなくおっとりとした笑顔で答える。その如才のない振る舞いに「なんだよつまんねえ」と相楽は舌打ちした。この分だと星田と葉月の急転直下ラブロマンスは無さそうである。

「葉月先輩のことは、私がんばりエスコートしますから」

「よろしくお願いいたしますわ、美佳さま」

美佳子が宝塚の男役のような声色で気取ると、葉月もそれに合わせようやうやしく返す。もはやこの二人はカップル認定ということの良いかも知れない。とは言え正直期待外れなその組み合わせに、やれやれ、という空気が彼女達の周囲にじんわりと広がった。

「緑はいつも通り、妹と一緒にいきますよ。琥珀もお祭り楽しみにしていましたから」

まだ幼いからというものもあるのだろうが、緑輝は祭りなどのイベントは大抵妹と行動するらしい。緑輝は相当に妹想いである。自分がまだ幼かった時の事を思い出し、久美子はくすりと笑みをこぼした。「黄前先輩は誰かと行くんですか？」

真帆は久美子にも話を振って来た。

「うん、ちよつとだけね」

「ええっ、マジですか先輩。それって男子ですか」

「そこで天井かよ」

さつきと同じリアクションの星田にすかさず相楽がツツコミを入れる。その相楽が、今度はこちらにぐるりと顔を向けた。

「で、どうなんです先輩。やっぱデートなんですか」

日頃はこういったことに無頓着そうに振る舞っている相楽も一応、恋愛沙汰の気配は気になるらしい。指で頬を掻きながら、久美子は質問に答える。

「残念だけどハズレ。お祭りには麗奈と一緒に行くことにしてるんだ」

それは嘘ではなかった。一年のあの夜以来、あがた祭りには毎年麗奈と行く約束をしている。ただし自分達が繰り出す先は祭りの中心ではなく、大吉山の登山道を登った先にある展望台だ。初めて行ったときは他に誰もいなかったけれど、その後テレビドラマか何かに展望台の夜景シーンが登場したのがキツカケで一気に人気スポットと化してしまつたらしい。そのせいもあって、去年登つた際には結構な人だかりが出来ていたのが少しだけ残念ではあった。それでも二人にとって、あそこが特別な場所であることには変わらない。

「麗奈、って、トランペットの高坂先輩ですか」

相楽の問いに頷くと、相楽はふーむ、と息を吐いた。

「前から思つてましたけど黄前先輩って、高坂先輩と仲良いですよね。あの先輩、あんま色んな人とつるむイメージ無いですけど」

「私も思つてました。お二人ってどういう関係なんです?..」

好奇心を刺激されてか、美佳子も身を乗り出してきた。

「どういうつていうか、同じ中学出身つていうか」

「じゃあ、中学から仲良かったんです?..」

「そういうわけじゃなかったけど」

「それなら高校入つてからですか? きつかけは?..」

「もう、私と麗奈のことはいいじゃん」

久美子は苦笑いを浮かべつつ二人からの追及をかわす。まるでスキャンダルを暴こうとするリポーターと、そこから逃れようとする芸能人みたいだ。誰かに身辺を探られることの鬱陶しさとこそばゆさ。それが同時に胸から溢れ出てくるような、そんな気味の悪い感触に思わず身悶えしてしまう。

「お先に失礼します」

そうした周囲のやり取りにはまるで興味無さげに、がたりと椅子を引いて雫が立ち上がる。どうやら彼女はすっかり帰り支度を済ませていたらしく、畳んだ譜面台と楽器ケースを手にさっさと教室を出ていった。

「私達もそろそろ解散しましょうか」

緑輝の言葉を合図に、全員が教室の後片づけを開始する。その折にふと、久美子は窓の外から大吉山の方角を眺めた。祭りの夜。皆が浮き立つ夜。今年はどうなるだろう。憂いと期待の入り混じった複雑な思いに、久美子は胸を膨らませていた。

「ごめん、待った？」

「今来たところ」

祭りの灯りに照らされる人々と街をすり抜けやって来た宇治上神社。先に来ていた麗奈は例年通り、白のワンピースに包まれた姿で門の下に立っていた。一方の久美子はと言うと、これも例年通りインナーと夏用チュニックを合わせたものとハーフカットのジーンズ、そしてどこにでもあるようなスニーカーと、いたってラフな格好だ。二年前はあまりの装いの差に気後れしてしまったが、今となつてはこっちの方が却って私達らしい。久美子はそう思うようになっていた。

「じゃ、行くらう」

二人は連れ立って神社の脇を通り抜け、大吉山の登山道へと歩を進める。あの時は楽器を担いでいたため登山の道のりも大変苦労したものだ、今は二人とも手ぶらなので足取りも随分軽い。それに何度か夜登山をしたおかげで、この登山道も既に勝手知ったる道となりつつある。とは言え真つ暗闇の中を進むのはさすがに危ないので、二人とも携帯の懐中電灯アプリーで足元を照らしながらの登山になった。

つづら折れの坂を登ること数十分、やがて東屋の屋根が見えてくる。去年より少し時間をずらした為か、はたまたドラマの匂が過ぎ去ったからか、展望台の人影はまばらで何人かが街を撮影している程度だった。

「とりあえず、座ろつか」

「うん」

久美子は東屋のベンチに腰掛け、麗奈を隣に招く。誘われるままに麗奈がそこへ腰を下ろす。二人並んで山の上から一望する祭りの光景。それを見るのもこれで三度目だ。遠くで囃子の音が鳴っているような気もするし、風と木々の音以外何も聞こえないような気もする。けれど、こうして祭りの喧騒から抜け出して煌々と光る灯りを眺めていると、それ以外の何もかもを剥がし取ってしまったような気分だった。

「きれい」

久美子はちらと麗奈を見る。麗奈は少しだけ顔を赤くして、

「うん」

と俯いた。一時の静寂。気付けば周囲には誰もいなくなっていた。撮影を終えて帰ってしまったのだろう。暗闇の中で麗奈の息遣いだけが、微かに久美子の耳に届いていた。

「もう六月だね」

「うん」

噛み締めるように、久美子は視線を下げる。新入生を迎え入れたのも、サンフェスで会心の演奏を行ったのも、自分の感覚ではつい昨日の出来事のようにだ。それでも暦は進み、あがた祭りの夜が過ぎ行くこととしている。時間の流れはどんどん速まっている。ふと気づけば今日という日を遙か遠くに置き去りにしてしまいくらいに。小さかった頃は全く感じなかったこの速度感。それは今というこの時が充実しているからなのだろうか。それとも人間という生き物は、年齢を重ねると時の流れを早く感じるものなのか。この問いの正解が何であれ、十年後の自分は時の流れをどんな風に感じるようになっていたのだろうか？ それを思ってみたとき、久美子の身はひとりでにぞわりと

震えた。

「寒い?」

麗奈が上目遣いに久美子の様子を伺う。大丈夫、と久美子が首を振ってみせると、

「私は、ちよつと肌寒いかも」

と、腕一本分ほどあつた距離をさらに詰めてきた。久美子の左肩にのしかかる麗奈の重量は、じんわりと穏やかな熱を放って久美子へと移ってくる。それだけで、夜風の冷たさも忘れてしまひそうだった。

「もうすぐオーデイションだね」

「うん」

「トランペットパートはどう?」

「今年是一年の子もやる気があるから、どうなるかわからない。二年からもサポートに回る子が出るかも」

呟く麗奈の顔には僅かに苦渋の色が浮かんでいた。同じパートで共に練習に励んで来た後輩達だ。いかに実力主義を掲げる麗奈と言えど、大事に思う気持ちはあるだろう。けれどコンクールメンバーとして得られる座席の数は限られている。そして実力の無い者は、容赦なく蹴落とされてしまう。それは厳然たる事実であり、だからこそ、昨日まで肩を並べていた仲間が落伍することへの辛さもある筈だ。その気持ちは、久美子の中にも当然あつた。

「さっちゃんはどうなりそう?」

「東中さん?」

その名を聞いた麗奈は一瞬眉をひそめたが、  
「実力だけなら二年の平均レベルかな。オーデイションで選ばれるかは、これからの努力次第だと思う」

と、徹して冷静な評価を下した。音楽に関する麗奈の見立てに間違いは無い。幸恵が憧れの麗奈と同じ壇上に立てるかどうかは現状で五分五分、といったところだろう。

「低音パートは?」

「こっちはチューバが競争になるかどうか、かな。葉月ちゃんはともかく二年の美佳子ちゃんと一年の星田君がトントンの感じだから、こ

れからオーデイションンまででどっちが上に来るかだと思う」

「低音は、実力差が割とはつきりしてるよね」

「うん。コンバスの里中さんは初心者だし、芹沢さんはあの通りの実力だし」

久美子の脳裏を雫の姿がかすめる。雫は既に久美子とほぼ同等の段階、つまり楽譜練習をほとんど終えており、細やかな表現の段階へと踏み込み始めていた。あれだけ色彩豊かな演奏が出来るならば滝の注文にも柔軟に応えることが可能だろう。そんな雫は間違いなくレギュラーに選ばれる、と久美子は見ていた。

「久美子は自由曲のソロ、もう知ってる？」

密着した姿勢からさらに距離を埋めるように、麗奈が小首をこちらに傾げた。

「うん。第三部の途中のとき、トランペットと一緒にだったね」

麗奈も勿論フルスコアや参考演奏は確認しているはずだ。あの箇所がユーフォとの掛け合いになっていることも、とうに知っているだろう。

「ソロ、吹けそう？」

そう尋ねる麗奈に、久美子は即答できなかつた。何か答えねばと思つて口を開いてみても、その先の言葉を発することが出来ない。大丈夫がんばるよ。相手が相手だけに難しいかも。絶対に吹いてみせる。どれも、言えなかつた。どれを選んでも嘘になつてしまひそうだったから。

「私は、久美子と吹きたい」

視線を彷徨わせる久美子を見かねてか、麗奈が少しだけ語気を強める。暗闇の中で、その声はやけに響いて聞こえた。

「私も」

久美子はじつと麗奈の瞳を覗き込んだ。

「私も、麗奈と一緒に吹きたい」

その言葉だけは一切嘘のない、久美子の心からの言葉だった。あのソロを、麗奈と吹きたい。コンクールの舞台上で、全国の会場で、自分と麗奈の音を思いつきり響かせたい。それだけは、痛いくらいに真剣

な気持ちで断言することが出来た。

「久美子」

やにわに立ち上がった麗奈が、展望台の手すりへと歩いていく。つられるように久美子も立ち上がり、おずおずと麗奈の後へと続き、二人で手すりの前へと立つ。

「一緒に吹こう、ソロ」

振り返った麗奈の眼差しには、炎のようにゆらめき立つ意志が宿っていた。その炎に、久美子の全身は一気にぼうつと灼かれてしまう。体中を駆け巡った熱はそのまま胸の奥に留まり、脈打つ血潮の流れる音がずきずきと、鼓膜を強くノックした。

「うん」

久美子は麗奈の手を取り、ぎゅつと握り締める。その温かさに久美子もまた意志を強く固める。吹きたい、じゃない。吹くんだ。あのソロを、麗奈と一緒に。

「久美子、ちよつと痛い」

「あ、ごめん」

ついつい感情がこもり過ぎて、気付けば麗奈の手を握る力が強まっていたようだ。慌てて手を離すと、麗奈は握られた手をさすり少しだけ頬を膨らませたが、やがてくつくつと愉快そうに笑いを洩らし始めた。何だか気恥ずかしくなって、久美子はどうにか話題を変えようとする。

「えっと、そう言えば麗奈の進路って、確か海外の音大だって言ったよね」

「えっ?」

「いつ向こうに行くの?」

急に進路の話が振られたからか、麗奈は少しだけ怪訝そうに眉間に皺を寄せたが、気を取り直すように質問に答えてくれた。

「入学が来年秋の予定だけど、現地の環境に早く慣れたいから、高校卒業したら向こうに行くつもり」

「そっか」

少し湿った夜の空気に、久美子は思わずむせそうになる。卒業した

ら麗奈は海外に行ってしまう。こうして二人並んで過ごせる時間はもうそれほど多くないのかも知れない。そのことを思うだけで、全身をびりびりと引き千切られるみたいだった。まだ麗奈がいるうちですらこうなのに、もし麗奈が本当に向こうへ行ってしまったら、その時自分はどうなってしまうのだろうか。やがてその日が来ることを想像するだけで、怖かった。

「久美子は、進路はどうするの?」

麗奈が長い黒髪を手で掬い、さらりと横に払った。風がほとんど吹かないからだろうか、微かに蒸し暑さを覚える。首筋に汗が垂れているような感触がして、久美子はそれを手で押さえつけた。

「あのね麗奈」

息を一つ、ゆっくりと吸い込む。そしてそのまま、言葉と共に吐き出した。

「私、麗奈と同じ場所に立ちたい」

麗奈の眼は大きく見開かれた。その全身はぴたりと止まり、微動だにしない。

「麗奈と比べたら音楽の知識も技術も、経験も全然無いけど、それでも私は本物の『特別』になりたい。麗奈と同じように」

一息に言って、それから久美子は、自分の肺が全ての息を吐き切ったことに気が付いた。失ったものを取り戻すようにもう一度大きく息を吸い込む。言ってしまった。とうとう麗奈に、自分の本当の望みを。

言われた側の麗奈はまだ硬直しきっている。こちらの言葉が理解できなかったのか、それともあまりに突飛な話で度肝を抜かれてしまったのか。ハッと我に返った麗奈はおもむろに久美子の瞳を覗き返して来た。そこに、同じ道を歩むと久美子が宣言したことへの喜びの色は、無い。代わりに困惑と、ほんの少しだけの不安が混じっていた。

「久美子、それって、音大に行きたいってこと?」

麗奈がおずおずと聞いてくる。その顔色を見て久美子も麗奈の言いたいことを察した。麗奈は多分、自分と同じことを考えている。そ

してそれを、どう伝えるべきか迷っているのだ。

「いいよ、正直に言ってくれて」

出来る限り、声色を柔らかくする。麗奈なら、麗奈になら、何を言われても全部受け止められる。だって麗奈だから。音楽に関しては、麗奈は自分よりずっと正しい。間違いはない。いつか葉月達に話したときとは違う。夢を叶えられるだけの実力と環境を手にしている麗奈だからこそわかっていることがある。久美子もまたそれをわかった上で、麗奈に自分の望みを告げたのだった。だって、それはどうあつても他の何かに取り替えることの出来ない、心からの望みなのだから。

麗奈の視線が辺りを彷徨っている。しかし久美子がじつと答えを待ち続けていることにとどうとう観念して、麗奈は口を開いた。

「じゃあ正直に言う。……相当厳しいと思う」  
「だよね」

振り絞るような麗奈の声に、久美子はあっさりと答えた。音大という進路を考えるにあたり、入学の条件や学費のことなども色々調べてはいた。そしてそれらは今の久美子にとって最大の障壁と呼べるほどのものだった。進路を確定させる期限が刻々と近づいている今、その障壁は文字通り現実味を帯びて、久美子の夢をべったりと黒色に塗り潰しつつある。

二人の間に言葉が無くなった。静かな森のざわめきだけが、二人の間をたゆたっている。沈黙に耐えられなくて久美子は顔を伏せようとした。その途端、今度は麗奈が久美子の手をぎゅっと握り締めてきた。

「もし、久美子が本気なら、」

顔を上げた久美子の目に映ったのは、まっすぐにこちらを見据える麗奈の顔だった。痛いくらいに真剣な、麗奈の形相。それが本気で自分の事を考えてくれている証なのだ、久美子は感じ取る。

「本気でプロになりたいって思うなら、滝先生に相談してみるのが良いと思う」

滝に相談をする。そうだ、滝は音大の出身だ。彼の知人にはプロの

奏者もいればレッスンの専門家もいるだろう。プロへの道を志す上でアドバイスを受けるにはこれ以上ない存在と言える。どうして今までそのことを考えなかったのか？　とさえ言えば、決してそうでは無かった。考えはしたけれども、限りなくプロに近かった人から自分の夢を頭ごなしに否定されてしまうのが怖くて、無意識のうちにその選択肢に封をしてしまっていた。

けれどもこうして麗奈に自分の志望を告げ、そして麗奈の精一杯のアドバイスを受けた今、迷うことなど何も無かった。夢は口にしなければ叶わない。そして、夢を叶えるためにはそれに向けて行動しなくてはならない。行動が伴わなければ夢はいつまで経っても夢のまま、現実にはならないのだ。

「わかった、相談してみる」

久美子は麗奈の手に指を絡ませ、いま一度強くその手を握った。それを弱く握り返した麗奈が申し訳無さそうに俯く。

「ごめん。こんなことぐらいしか言えなくて」

「そんなこと無いよ。ありがとう、麗奈」

辺りの空気がさわさわと動き出した。夜の帳はすっかり落ち、さつきまで遙か遠くだった祭りの華やぎが、何故か今は鮮やかに色を取り戻しているように見えた。

\*

麗奈と別れ一旦自宅に戻った久美子にはその夜、もう一つだけ用事があった。シャワーを浴びて寝るふりをした後、両親が寝静まったのを見計らってそうと寝床を抜け出す。さつきとは別の服に着替え、机の引き出しを開ける。ひまわりの花をあしらったヘアピン。秀一からプレゼントされたこのヘアピンは、ここしばらくの間はこの引き出しの中で眠ったままになっていた。それを前髪に付け、久美子は物音を立てぬよう開けた玄關の戸口から外へと滑り出る。

祭りは今頃『梵天渡御』と呼ばれる行事が行われている頃だろう。この梵天というのはいわゆる神輿のことで、これが移動する際には周辺の家々などは灯りを消し、真っ暗な夜闇の中で神輿を迎える。あがた祭りが暗夜の奇祭などと呼ばれる所以である。表に出た久美子の

耳にも「よいよい、よいよい」という梵天の担ぎ手達によるであろう掛け声と思しきものが、どこからか聞こえてきていた。

その声から遠ざかるように、久美子はまっすぐ宇治川のほとりへと歩いていく。見物客の波をすり抜け、塔の島へと至る朱塗りの橋の手前まで行くと、そこに待ち合わせの人物は立っていた。

「秀一」

久美子が声を掛けると、秀一はゆっくりと首を動かしこちらを見た。

「おう」

いつものように軽く返事をする秀一。夜影のせいでよく見えないが、その表情はいつになく柔らかかった。

「お待たせ。それじゃ、行こっか」

二人は肩を並べ歩き出す。祭りの中心地である県神社やその周辺道路は、他の部員や教師と鉢合わせする可能性もある。特に生徒指導の教師に見つかるのは、時刻が時刻だけになるべく避けたい。そう考えた二人はあえて祭りの喧騒とは逆方向へと歩き出す。大勢の人ごみに巻き込まれて離れ離れにならないよう互いの手を握り合いながら、二人とも言葉は無く、ただ暗闇の街に漂う祭りの余韻だけを嗅ぎ取るようにゆっくりと歩き続けた。

宇治川の上流方面へ向かってしばらく歩くと人の波は徐々に減り、やがて家々の灯りからも遠ざかってゆく。この上り坂の先はダムへと至る道だ。明日は平日という事もあり、学内の関係者もそろそろ撤収した頃合いだろう。ここまで来ればもう声を潜める必要も無いかも知れない。だのに秀一は未だ一言も喋ろうとしなかった。こつちから部活や学校のことなど次々に話題を振っても「うん」とか「ああ」とか、気の無い返事ばかりが続く。やがて会話のタネも無くなり、ひたすら続く上り坂の勾配がもう一段きつくなつた辺りでようやく、「そろそろ引き返すか」

と、そこで初めて秀一から久美子に喋りかけてきた。

おかしい。久美子も流石に何かに気付き始める。あがた祭りの夜、少しでいいから出歩こう、と誘いをかけてきたのは秀一の方からだっ

た。久美子的にもせつかくの祭りの夜を秀一と過ごしたい、という気持ちがあつたため誘いに応じたわけなのだが、その秀一はここまで日常会話程度のことすら一切口にしていない。夜闇のせいで表情こそよくわからないものの、繋いでいた秀一の手は力無く、ただ久美子その場へ繋ぎ留めるためだけにやむを得ず掴んでいるようですらあつた。その態度は恋人同士のそれとは程遠い。かと言って、他の何かに気を取られているという風でもない。ただ一つだけ言える事は、彼は二人きりで過ごすこの密やかな時間を、明らかに楽しんではいないみたいだつた。

「どうしたの。秀一、さつきから何かへん」

家々の明かりが届くようになってきたところで立ち止まり、久美子は秀一を下から覗き込む。自分を見下ろす彼の顔は、全くの無表情だつた。久美子の肌がぞわぞわと粟立つ。幼少期から今まで一緒に過ごしてきた中で、秀一がこんなにも冷たい表情を向けてきたのは、これが初めての事だつた。

「別に、何も」

ばつが悪かつたのか、それとも表情から何かを読み取られたくなかつたのか、秀一はそっぽを向く。

「嘘」

久美子は未だ秀一と握り合つたままの手に少しだけ力を込める。ちやんとこつちを見て、という気持ちをそこへ込めながら。

「もしかして、一緒に屋台とか行けないの不満だつた？」

初めの問いに、秀一は黙つて首を振つた。

「最近あんまり一緒に過ごせないの、嫌だつた？」

次の問いには答えず視線を逸らしたままの秀一に、久美子は堪らず痺れを切らした。唇の裏で歯噛みしていたその隙間から、思い切つて抉るような一言を放つ。

「じゃあ逆に、私と一緒に過ごしたくなかつた？」

秀一の肩がびくと跳ねる。久美子にとってその反応は、頭を横からハンマーでガンと殴られるよりも遥かに大きな衝撃をもたらすものだつた。

「どうして」

二の句が継げず、久美子も顔を伏せる。その顔を鏡に映せばきつと醜くひしゃげていたことだろう。

久美子にとつて秀一と過ごす時間はいつだって、何物にも代えがたい宝物のようなひと時だった。すぐく陳腐な言い回しではあるけれど、そうとしか表現することが出来ないくらい、きらきらと輝く幸せな時間だった。だから今夜だって祭りの屋台なんか巡らなくなつて、神輿なんか見られなくなつて、二人で一緒に過ごせたらそれだけで楽しいし幸せだった。それはきつと秀一もそうなのだろう、と。ところが彼はそうではないと言う。それが何故なのか。どうしてそんなことを言うのか。久美子には一つも理解できなかつた。

「最近や」

しばしの沈黙のあと、秀一が口を開いた。

「思うんだ。俺達、このままでいいのになつて」

いいも何も、悪いわけない。私は十分満足だったし幸せだった。それの何がいけないのか。そう問い詰めたくなる衝動を、久美子は必死に堪え続ける。

「ごめん、上手くまとまらない」

目元を手で覆つた秀一が小さく呻く。その仕草はまるで泣いているみたいだった。久美子はただ唇を噛み締めじつと沈黙に耐える。いま口を開けば、その言葉がとどめになって何もかもを粉々に打ち砕いてしまふそうで、それがたまらなく怖かつた。一度壊れてしまえば、それを修復することは二度と出来なさそうな気がしたから。

「帰ろう」

やがて秀一に再び手を引かれ、久美子は家の方角へと歩き出す。待ち合わせの時にはあんなにうきうきしていた気持ちだが、今はどんよりと暗く重い砂の中に埋もれてしまったみたいに深く沈み切っていた。頭の中には様々な自問の言葉が浮かぶ。何がいけなかつたのか、どうしてこうなつたのか、誰が悪かつたのか、どうすれば良かったのか――それらは何一つとして答えを紡ぐことが出来ず、気持ちと一緒に砂の中へとめり込み、そしてずぶりと消えていった。

とうとう久美子達の住まうマンションの付近まで来たところで、何の予告も無く秀一は繋いでいた手を離れた。あんなに暖かかった秀一の温度が消え失せ、瞬く間に夜の気温に曝された手のひらが、今はもう凍えてしまいそうなほどに冷たい。それをどうにかやり過ぎそうと、もう片方の手で指先をさすってみる。神経がまるで機能していないみたいな感触の無さ。ぎよつとした久美子はその手を強く押さえつけた。

「ごめん」

秀一はもう一度、さつきと同じ台詞を口にした。

「今日は俺が空気ぶち壊した。せつかくの祭りだったのに」

ううん、と久美子は首を振る。それは己の本音とはまるで裏腹な行動だった。

「これからは、どうする？」

絞り出した久美子の声は、ひどく乾いていた。明日から二人の関係はどうなるのか？ なんて事、いつそ聞かない方が良かったのかも知れない。だけど聞かずにはおれなかった。こんな雰囲気のまま何もできずに二人の関係が終わってしまうなんて。そんなのは一番嫌だった。

「これだけは、誤解しないで欲しいんだけどさ」

秀一は久美子の問いに答えぬ代わりに、その両肩をぐつと掴む。

「俺がお前の事を好きだって気持ちには、変わりないから」

え、と久美子は顔を上げる。その時には既に秀一は久美子の肩から手を離し、数歩ほど後ずさっていた。

「それじゃ、おやすみ」

言い捨てるようにしてその場を去る秀一に、最後まで笑顔は無かった。何が何だか訳が分からず、久美子はしばらくその場に立ち尽くしてしまふ。もう何を信じていいのか分からない。そんな心境を脱し切れぬまま重い足取りで真っ暗な自室へと戻り、そのままベッドへと倒れ込む。

久美子にとっていちばん信じ難かったのは、一連の出来事に翻弄された結果、完全に情緒不安定になってしまっている自分自身を認識さ

せられた事だった。動揺し、狼狽し、『好き』だなんて言葉に簡単に浮かされる自分が、一緒くたにそこに居る。ふわふわするような、ぐらぐらするようなその気持ちに、自分で落としどころを見つけないことが出来ない。そうしてすっかりこの状況に打ちのめされてしまっている。

「私、こんなに弱い女だったっけ」

目の前のシートにはいつの間にか小さな滲みが出来てしまっていた。前髪にぶら下がったままのひまわりのヘアピンが何故だか、その時は無性に邪魔だった。

昨夜は結局あのまま一睡も出来ず、いつもの時間に合わせて惰性で家を出てしまった。ほぼ徹夜となってしまったため体はうまく力が入らないし、頭の中もどろりと濁っていて、意識が壊れたテレビみたいにノイズで掻き乱されている。最初は思い切って学校を休んでしまおうかとも思ったのだが、そうになると必然的に部活も休まなければならなくなる。一日休めば勘を取り戻すのに三日かかる、と言われるのが音楽の世界だ。この時期にたった一日でも練習をしないというのは、今の久美子にとっては大きな痛手だった。

駅に着き改札を抜け、いつもの電車に乗る。がら空きの車内。その定位置に麗奈の姿は見当たらなかった。いつもならとつくにシートに座って本を読んだり単語帳をめくったりしているのだが。訝しむ久美子はおもむろに、ポケットから携帯を取り出してみる。

『今日は遅れるから、先に学校行って』

インスタントメッセージには、麗奈から送信された短い文面。麗奈にしては珍しい、などとは考えなかった。あの麗奈が遅刻如きで滝と過ごせる貴重な時間を自ら手放す筈が無い。であれば昨日話した進路の件について、きつと麗奈なりに気を遣ってくれたのだ、と久美子は解釈した。

実のところ、久美子も朝の時間を利用して滝と話をするつもりでいた。授業の合間ではとてもじっくり話してなどいられないし、部活中となると自分の練習も出来なければ滝の時間も拘束してしまう。そ

して部活が終わる頃には学校の閉まる門限となってしまう、生徒は速やかに下校しなければならぬ。このような事情から、滝と込み入った話が出来そうなのは朝一番をおいて他に無さそうだと、久美子は結論していた。

京阪宇治駅から六地藏駅まで、電車に乗っている時間は十分と無い。今にも閉じそうな瞼を必死に上へと持ち上げながら、久美子は昨夜の事を考えていた。秀一の態度。言葉の意味。今日からは普段通りに接することが出来るだろうか。思いは次第にぐるぐると渦を巻いていく。やめよう。ここであれこれ悩んでみても何も解決しない。少なくとも睡眠不足で凍り付いた脳みそでは、いい答えなんて出ない。秀一の事は後回しだ。今はまず、自分のこと。そしてコンクール。そうしてうちにほとぼりが冷めて、秀一とも落ち着いて話ができるようになるかも知れない。そしたら二人でどこかへ出掛けるのもいいだろう。ひとまず前向きに考えて、今はこの事はよそに置いておくべきだ。

そう思いついた頃にはいつの間にか、自分の足は自然と学校まで辿り着いていた。玄関で上履きに履き替えた久美子はまっすぐ職員室へと向かう。みぞれの引退後、早朝練習のために部室の鍵を開けるのは、いつも一番乗りしている久美子と麗奈の役目となっていた。

「おはようございます」

あいさつと共に職員室の戸を開ける。今日初めての一声だったが、思いのほか声は掠れてしまっていた。ひと気の無い早朝の職員室はいつも通り、滝が机に座ってノートパソコンを操作している姿があるだけだ。ヘッドホンを付けているところを見るに、他の強豪校の演奏を聴いてその音を分析しているのだろう。がらんとした職員室には微かにコーヒーマシンの香ばしい匂いが漂っていて、それがまた滝が大人であることを感じさせた。

「黄前さん、おはようございます」

こちらに気付いた滝がヘッドホンを外し、鍵ですね、と机の引き出しに手をかけようとする。その前に、と久美子はそれを手で制した。「あの、先生に相談したい事があるんですけど。いいでしょうか？」

手を止めた滝は少しだけ怪訝そうにしたが、ほどなく、

「構いませんよ。どのような事でしょうか」

と柔らかい笑みを浮かべて久美子に尋ね返した。

「あの、」

久美子はごくりと唾を飲む。こうしていざ滝を目の前になると、腰が引けて今にも逃げ出したくなる気分だ。体調もいまいちな状況だし、いつそ適当にはぐらかして後日に改めてもいいのではないかと、その時一瞬、頭の中に昨晚の麗奈が思い浮かんだ。本気で自分のことを考えてくれていた麗奈。一緒に吹きたいと言ってくれた麗奈。それに応えたい。麗奈と同じ場所に立ちたい。その思いが心の翳りをふうっと吹き飛ばしていく。

「実は私、音大に行きたいって思ってるんです」

えっ、と滝は虚を突かれたように口を開けた。あるいは予想していたものとは違う言葉だったからだろうか。けれどそれには構わず、久美子は続きを述べる。

「でも自分で色々調べているうちに、考えがまとまらなくなってきました。それでその、滝先生は音大出身って聞いてたので、話を聞いてもらえたらと思います」

喋るうちに声の勢いが落ちてきて、最後の方はほとんど呟きみたいになってしまった。それは不安のせいもあるが、寝不足で息を継ぎ切れなかったのもある。滝は押し黙ったまま、久美子の次の発言を待っていた。

「私、それでも音大に行きたいんです」

滝がじつとこちらを見据える。その真摯な瞳には久美子の意図を十全に推し量ろうという気配があった。

「黄前さんは、どうして音大に行きたいのですか？」

いたって落ち着いた、しかし鋭さのある声。久美子は自分でも知らぬうちに拳を固く握り締めていた。その内側ではじつとりと汗が滲み、それとは対照的に、口の中がカラカラに乾いてゆく。

「私、ユーフォニアムが好きです。ずっとユーフォを、音楽を続けていきたいんです。だからプロの演奏家になるために、音大に行きたいん

です」

昨夜と全く同じ熱量でもって久美子は言い切る。滝は僅かに目を伏せ何かを思案し、それから再び顔を上げた。

「音楽を続ける手段は、何もプロだけとは限りません。他の仕事をしながら一般の音楽団体に所属する道も、個人の趣味として割り切る道もあります。私のように教職という形で音楽に携わる事も出来ます。何故、プロなんですか？」

ストレートな滝の問いに、久美子は少しだけ言葉を迷う。取り繕うようなことなら幾らでも言える。けれどここだけは他の言葉に任せられるわけにはいかない。自分の想いを言葉にしなくちゃ、きっと滝には伝わらない。意を決し、久美子は口を開いた。

「演奏者として『特別』になりたいからです」

それがどれだけ本気か。どれほどの覚悟を秘めているのか。久美子は久美子なりに、その想いのたけを言葉へ乗せる。ふう、と短く息を吐いた滝が自分の眼鏡を指で直すと、反射したレンズが鈍く光った。

「黄前さんの気持ちはわかりました。ですが恐らく黄前さんも既に調べている通り、音大への道はそう簡単なものではありません」

そこで滝はいったん言葉を切った。

「まず音楽学部の入試には一般的に、専攻楽器の実技の他に副専攻楽器の実技、楽典や聴音などの試験が課されることになります。副専攻はほとんどの場合、ピアノの実技試験です。程度としては比較的簡単ですが、それでも相応の訓練をしていなければ合格出来るものではありません。黄前さんはこれまでそのような、本格的なピアノのレッスンを受けたことはありませんか？」

滝の一言に久美子の臍腑は抉られる。それは半ば予想通りの質問を投げ掛けられたせいだった。ピアノの経験なんてせいぜい、小学生のころ教室に置いてあったオルガンを遊びで弾いたことがある程度だ。まともな運指も奏法も分からなければ、何か曲を弾ける自信なんてこれっぽっちもありはしない。無言のままの久美子を見て滝はそれを答えと受け取ったのか、言葉が続ける。

「それと学費です。音大は私学が多いですが、一般的な私学より更に倍以上の学費がかかります。加えて自分が使うことになる楽器の購入やメンテナンス費用、レッスンをして下さる講師の先生に支払う謝礼、練習場所の利用料、これらを合わせれば年間にかかる費用はさらにかさみます。受験料まで含めれば親御さんの負担もかなりのものですし、練習時間の確保を考えればアルバイトで学費を賄うのも難しいでしょう。奨学金を受けたとしても微々たる額です。その点について、親御さんと話はしていますか？」

久美子は何も言えぬまま、首を横に振るしかなかった。そもそも両親には音大に行きたいという話すらした事が無い。もし調べた通りに学費の話をすれば、恐らく二人揃って目玉をひっくり返すことだろう。

「それでは相当に厳しい、と言わざるを得ません」

そう告げる滝の声はひどく落ち着いていた。もちろん久美子に当たって、それで引き下がるわけにはいかない。滝に相談をした真の理由は、その相当に厳しい状況の中で少しでも可能性の高い選択肢がどこかに無いかを模索するためなのだ。自分一人では、あるいは素人では見つけられない思いもつかぬ道を、もしかして滝ならば知っているかも知れないと思ったから。

「吹奏楽の成績が優秀な学校を対象に、その卒部生を受け入れる指定校推薦というのがあって聞いたんですけど、それはどうでしょうか」

「指定校推薦ですか」

滝は拳を口元に当て、少し考え込む。

「確かにそういう条件で入学者を取る学部もあります。ですが少なくとも、私が北宇治に赴任したこの二年間は指定校推薦の話はありませんでしたし、進路担当の先生からもそういった話は伺っていません。今年度の募集はまだ分かりませんが、一般大ならともかく器楽専門の音楽学部となると、指定校推薦に期待をするのは正直難しいでしょうね」

「そうですか」

「それに万が一そのような方法で音大に入学できたとしても、音楽に関する基礎的な知識や技術が足りなければ早晩のうちにレツスンについていけなくなり、やがて振り落とされてしまうでしょう。そういう意味でも、このような手段に過剰な期待をするのはあまりお勧め出来ません」

はい、と久美子は力無く頷く。確かに滝の言う通り、音大に入る事はあくまで通過点に過ぎず、目的ではない。入れただけでは意味が無いし、入ってもその後がプロの道に繋がらないのであれば結局のところどうしようもないのだ。実のところ最も可能性があるのではないかと久美子が思っていたのは、コンクールで結果を出し推薦枠に選ばれる、この指定校推薦という手段だった。副専攻や学費の問題は残るが、もし仮に副専攻の条件だけでもかわすことが出来れば、それは音大進学への望みをつなぐ大きな手掛かりとなる。それだけに、滝の極めて冷静で現実的な回答は久美子にとって大きな落胆と失望をもたらすものだった。

「それとこれも既にご存知でしょうが、黄前さんの考えるようなプロになる為には、ただ音大を卒業すれば良いというわけにもいきません。殆どのプロ奏者はプロになる前に大きなコンクールなどで良い成績を収めています。そうして初めて世に実力を認められ、音大卒業生の中でもほんの一握りだけが楽器で食べていけるようになるのです。それ以外の人は私のように他の職に転ずるか、夢を追い続けるか、どちらにしても一筋縄ではいきません」

それは久美子も様々な調査をする中で驚かされた真実の一つだった。音大を卒業しさえすれば何かしら音楽に携わって生きていけるだろう、などという考えは恐ろしく甘いものだったのだ。例えば滝のように学校の音楽教師を目指すとするれば教職のための課程、カリキュラムを組む必要がある。しかし全ての音大が教職課程を取れる体制になっている訳では無い。極端な話、教職課程を取れない音大へ進学してしまうと、その後の選択肢はぐっと狭まってしまうこととなる。

それに音楽という分野は明らかに、他の仕事への潰しが利かないものだ。器楽専攻の演奏者ともなればさらに先鋭化され、プロの演奏家

になれなければ他に道は拓けない、とまで断言することができ。この点においても久美子はとても両親を説得出来そうな気がしなかった。下手をすれば血の滲む思いで必死に全てを注ぎ込んだ数年間を、丸ごと棒に振って終わることにもなりかねない。これを親に話せば当たり前のように猛反対されるだろうし、それより何より、自分の人生がそうなるかもしれないという事実はただ純粹に、久美子を怯えさせた。

「ただ中には音大出身でなくとも、プロの演奏家として第一線で活躍されている方がいらっしゃる、というのも事実です」

「え、」

「もし黄前さんがどうしても音楽の道を志すのであれば、音大ではなく教育学部の音楽学部や芸術大学など、条件として入れそうなところを選んで音楽の基礎から勉強をし直す手もあると思います。こういった学部は試験内容が音大に比べて緩かったり、筆記だけで入学できる場合もあります。少なくとも、今からピアノや聴音のレッスンを始めて合格圏に入ろうとするよりよほど現実的です。入った後のことは黄前さんの努力次第ですし、この場合も当然ながら茨の道になることは間違いありませんが、そういう選択肢は考えていましたか？」

「あ……と、いえ」

どうとも答えられず、久美子は滝に曖昧な返事をした。実のところそれは思いもかけない選択肢だった。そもそも久美子は麗奈のような特別な存在を目標にしていたから、プロになるには音大しかない、と頭から思い込んでいたから、プロになるには音大しかない、と指せるなどは夢にも思わなかったし、そんな方法を調べてみようとするら考えつかなかったのである。

「知りませんでした、そういう例については、後で調べてみます」

「わかりました。正直なところ、私も各音大の入学事情に関してはそれほど詳しくないので、今はあまり良い答えが出て来ません。黄前さんにとって最適な選択が無いから私自身調べてみますし、詳しい知人も聞いておきます」

にっこりと笑みを浮かべた滝に、久美子は自分の心が少しだけ緩む

のを感じる。一貫して厳しい現実を語りつつも、滝は久美子の夢を頭ごなしに否定することはしなかったし、その夢が叶う方向を一緒に探ろうとしてくれていた。単に音大に入れるかどうかではなく、そのさらに先に本当の目標があるという事を滝はきちんと理解してくれている。今はそれで十分だった。

「ありがとうございます。それじゃ私、朝練に行つてきます」

「ご苦労様です。他にも何か進路について懸念があるようでしたら、いつでも相談して下さいね」

はい、と鍵を受け取つて職員室を出た久美子の全身に、どつと疲労が押し寄せる。何だかんだで進路のことを話すのには緊張も不安もあったし、それに加えて体調のせいもあるだろう。本音を言えばもう家に帰つて寝てしまいたいぐらいだったが、授業中うっかり居眠りしないように、と久美子は心の中で己に喝を入れる。それもプロへの道に繋がるかも知れない。今の自分に出来る事は何でも、とにかく精一杯やろう。

「黄前さん、もうお昼休憩終わつちやうよー」

誰かに肩を揺すられ、ゆつくりと目を開ける。寝ぼけ眼をこするとそこには同級生の顔。四時間目の授業が終わった後、お昼を食べる気力も体力も無く、限界を迎えた久美子はそのまま机に突っ伏していたのだった。

時計の示す時刻は既に午後一時過ぎ。次の授業が始まるまでもう数分も無い。おなかが悲鳴のような音を鳴らしているが、流石にこれでは弁当箱を開ける余裕も無さそうだ。次の休み時間に食べることにしよう。そう結論し、久美子は未だ眠気を湛える顔を洗おうと手洗い場に向かった。

練習漬けの毎日ほとんどん過ぎ去つてゆく。次第に楽譜と向き合う時間が増え、部員同士は周りに負けないよう必死にしのぎを削る。合奏での滝の指導は厳しさを増し、そこで見つかった新たな課題にそれぞれが取り組んでいく。時には練習のキツさに涙する者もいれば、後れを取り返そうと必死になって個人練習に没頭し続ける者もいる。

毎年この時期にこんな光景が広がるのはもはや恒例となりつつあった。それでも時間は残酷なまでに進み、六月のカレンダーはもう下旬を示していた。

「それでは、これよりコンクールメンバー選出のオーディションを始めよう」

副顧問である美知恵の号令に全員が背筋を正す。普段は部長である久美子が部員達に指示を出す役目を負っているが、オーディションの時だけは美知恵が一貫して部員への連絡指示、そして合格者の発表を行う。ちなみに今年の北宇治は部員数が八十名を超えているため、オーディションは二日に分けて行うこととなった。一日目が金管と打楽器、二日目が人数の多い木管だ。

「それでは初めにトランペットからオーディションを行う。他のパートの者達はそれぞれ練習場所で待機している。オーディションの終わったパートから次のパートへ連絡をしてもらおうので、呼ばれたパートは速やかに音楽室へ来ること。なおオーディション中、他のパートの音出しは一切禁止だ。わかったな？」

「はー。」

部員達は一斉に返事をする。美知恵は再確認を促すように頷き、続けてトランペットパートの面々に廊下脇へ並べた待機用椅子へ座るよう指示をした。他の部員達がぞろぞろと退室する中、久美子はその波に紛れて麗奈と幸恵の様子をちらりと窺う。麗奈はいつも通り落ち着いた表情で、緊張や高揚は一切見られない。一方の幸恵はがちがちに緊張しているのか、顔を青くして手元のトランペットを強く握り締めている。その手は微かに震え、ふうふうと小さく呼吸を漏らしていた。こうして見ていると幸恵は案外緊張に弱いタイプなのかも知れない。二人とも頑張れ、と久美子は心の中で念を飛ばす。

「ああ、緊張する」

教室に移ってから小一時間。三年三組では低音パートの一同が楽器を置き、その時が来るまで待機していた。あまりの緊張に堪えかねたらしい美佳子が上を向き「ぐへえ」と溜まりに溜まり切った息を吐く。

「普段通りにやれば大丈夫だって。落ち着いていこう」

今年には絶対葉月と一緒に吹きたい、と日頃から口にしていた美佳子にとって、今日のオーディションはまさしく天王山といったところだろう。そんな彼女をなだめる葉月は一年目の頃の面影など微塵もなく、いたって平静を保っていた。数々の大舞台を経験してきた葉月にとって、もはや学内のオーディションぐらいで落ちるつもりなど毛頭無い、という自信がある事がその態度からは見て取れる。とは言え誰であつても油断は禁物。オーディションの場でミスが目立つようなことがあれば、まさかの転落だつて無いとは言切れない。けれど久美子から見ると今の葉月には、そんな心配などまるで無用だつた。

さて雫は、と久美子は彼女の様子をそつと窺つた。現在の雫はユーフォを抱えたまままぶくりとも動かず椅子に座っている。緊張をしているという感じではなく、いつもの楽譜読みもしていない。ただ純粹に集中を高めているらしく、時折ピストンを動かしながらブレスの感覚を確かめているみたいだつた。その所作には少しの迷いもなく、まるでこれから戦に臨む武士のごとく、静かに刃を研ぎ澄ませているような気配すら感じられる。

果たして久美子と言えば、もちろんそれなりに自信はある。テスト期間中も楽器の練習は欠かさなかつたし、楽譜を楽譜の通りに吹ける段階はとつくにパス出来ている。ソロ云々の話はひとまず置いておくとしてもレギュラー落ちはまず無いだろう。それでも流石にいざ滝の前で演奏を披露するとなると、まったく緊張しないという訳にはいかない。もしミスつたらどうしようとか、比較的自信の無いところを指定されたら、という不安だつてある。そんな気配をおくびにも出さない雫や緑輝はこういう状況に慣れ切つてしまっているのか、それとも常人のそれとは全く異なる精神構造をしているのか、一体どっちだろう。

他人の事なんて考えたつて仕方ない。自分は自分。今はまず目の前の演奏に最大限集中することだ。久美子は深く息を吸い込み、そこで息を止めて目を閉じ、ゆっくり少しずつ息を吐き出す。本番前に緊張を殺し集中するためのルーティーン。息を押し出すにつれて高揚

していた気持ち収まり、周囲の雑音を感じなくなる。息を全て吐き切ったところですよつと瞳を開くと、腹の底から再び自信の炎が揺らめき出したのを感じる。

「お待たせしました、次は低音パートです」

丁度その時、オーデイションを終えたトランプペットパートの幸恵が久美子達を呼びに来た。

「じゃあ、行こうか」

楽器と楽譜を持ち、一同は連れ立って教室を出る。久美子が廊下に出ようとしたところで、幸恵はこちらに向かってウインクをしてきた。くみ姉頑張って。そのウインクにはそういうメッセージが込められているような、そんな気がした。

オーデイションの二日間はあるという間に終わり、あとは結果発表を待つのみとなった。すつかり長くなった夕暮れの日差しは少しだけ強く、じわじわと夏の気配を醸し出し始めている。いよいよ夏が来る。あの熱い胸の焼けるような夏が。恐らくこの先の人生で二度と巡ってくることの無いであろう、己の青春と情熱の全てを賭けて挑むあの瞬間が、来てしまうのだ。自宅近くの宇治川沿いを歩きながら、久美子は夜の帳が掛かり始めた空を眺める。薄く引いた雲が沈みゆく陽に焼かれ、昼と夜の境界線は急激なグラデーションに彩られている。その明暗の差はなんとなく、今の自分の心境と似通っているような気がした。

滝によるオーデイションでは自由曲と課題曲の指定箇所以外に、自由曲のソロの部分も吹くよう指示された。もちろん、久美子は自分に出来る限りの最高の演奏をした。しかし一番手だった久美子には後の順番である雫の演奏がどうだったかは分からず、それだけが気掛かりだった。雫は久美子のいる前ではソロの箇所をほとんど吹くことが無かったからだ。もしかすると雫も自分と同じように、滝からソロの箇所を指示されたのかも知れない。だとしたら一体どんな演奏をしたのだろうか。滝はそれを、どう判断したのだろうか。

来月にはソロオーデイションが待っている。雫は、ソロ希望者として手を挙げるだろうか。もしそうになったら雫と真っ向から激突する

ことになる。先輩と後輩のポジション争い。強豪校なら当たり前のことだし強豪校でなければ尚更のこと、コンクールで勝つためには例え後輩でも上手い人が吹くべきだ、と久美子は常々考えてきた。それはかつて麗奈と香織とで色々揉めた際に、当時一年生だった麗奈を實力主義で支持したのと同じ理屈だ。けれどそれ以上に、ソロが曲全体を構成する大事な一要素である以上、ホールに響くべきは最も美しい音色でなければならぬという持論ゆえでもある。

「上手い人が吹くべき、か」

そうだ。何だかんだ言っても結局は単純な話、自分が雫よりも上手く演奏出来ればいいのだ。そうすれば結果は自ずとついてくる。残り一カ月弱、ひたすら自分の演奏を磨き上げ続けよう。今の自分に来ることはそれ以外に無い。

そう思ったところで丁度、久美子の足は自宅のあるマンション前まで辿り着いていた。そこはあがた祭りの夜、秀一とひと悶着あった例の場所。あれ以来、秀一とは何となく気まずい関係が続いている。インスタントメッセージでやり取りをすることも無ければ、学校や部活内での接触も必要最低限しかしていない。二人きりになるとあの夜の事を蒸し返しそうで、それが亀裂を決定的なものにしてしまいかねないのが、怖かった。結果、無意識のうちに秀一を避けて通る自分がある事に久美子は気が付いていた。そうせざるを得ない自分の至らなさが、この上なく歯痒かった。

「それではオーディションの合格者を発表する」

壇上にはクリップボードを手にした美知恵の姿があつた。音楽室には既に部員全員が集合している。オーディションから数日後、いよいよ結果発表の時だ。自信はあっても緊張することは間違いない。忙しなく跳ねる心臓のある辺りを、久美子はきゅっと握り締める。

「呼ばれた者は返事をするように。呼ばれなかつた者はコンクールのサポートメンバーとなる。サポートメンバーは発表終了後、ただちに第二視聴覚室に集合すること」

「おー」

部員達が一斉に返答する。それを合図に、美知恵は合格者の名前を

読み上げ始めた。

「まずクラリネットから。三年、植田日和子」

「はいー」

「三年、高野久恵」

「はい」

順々に合格者の名前が呼ばれ、その度に歓喜と悲痛の声が交々と混じる。そこで名前を呼ばれなかった人は即ちレギュラーの選抜に落ちってしまったことを意味する。木管の合格者発表が一通り終わり、金管はホルンから順に名前を呼ばれていった。ちらりと横を見ると、葉月と美佳子は互いに両手を組んで一心に祈っている。葉月の性格を考えればもしかして、自分の事より隣にいる美佳子の合格を祈ってあげているのかも知れない。

「次、低音パートはユーフォニアムから」

いよいよその時が来た。久美子の心臓がひとときわ高く跳ね上がる。

「三年、黄前久美子」

「はいっ」

名前を呼ばれ、久美子はしつかりと返事をした。同時にじわじわと込み上げてくる喜び。達成感と安堵感。越えるべき最初のハードルは順調に越えることができた。後は、他の皆はどうだろうか。

「二年、芹沢雫」

「はい」

透き通った声が鼓膜を揺らす。雫はいつも通りの無感情さで返事をしていた。彼女もまた自分とは別の意味で合格を確信していたのだろうか。涼しげな雫の態度に、久美子はある種の不敵さにも似たものを見出してしまう。

「以上、合格者は二名。次にチューバ。三年、加藤葉月」

「はいっー」

美知恵の声が途切れることなくチューバの発表へと移ろう。ユーフォの合格者は二名。そこで名前を呼ばれなかった相楽は落ちてしまったということの意味していた。やはり以前に葉月達と話していた通り、ユーフォから三人とも選ばれるなんてことは無かった。

「二年、吉田美佳子」

「は、はい！」

「一年、星田計喜」

「はい」

こちらは予想に反してチューバ三名全員が合格という結果だ。葉月と同じコンクールの舞台上で一緒に吹きたい、と常々言っていた美佳子の念願はひとまず叶ったと言える。

「チューバは以上三名。次にコントラバス、川島緑輝」

「はい」

「コントラバスは以上一名だ」

コンバスはやはり今年も緑輝一人だけが合格者だった。当初に比べれば真帆も緑輝とのマンツーマン特訓を通じてかなり上達して来てはいたのだが、こればかりは仕方がない。緑輝が抜ける来降の活躍とそれまでにより多くの成長とを、これからの真帆には期待したいところだ。こうして低音パートのレギュラーメンバーは全て決したのだった。

その後も発表は滞りなく進み、トランペットパートは三年の麗奈と吉沢、二年から二人、そしてなんと一年の幸恵も指名された。もともと入部当初から一年生の中では上手い方とは思っていたし、つい先日も麗奈は幸恵の腕前を二年生の平均ほどと評してはいたが、ここ一番でレギュラーの座を掴むまでに至ろうとは。そんな思いと共に幸恵に視線を送ると、彼女はこっちと目が合うなり満面の笑顔でこっさりピースサインを送ってきた。久美子も指を二本立て、細めのピースサインを送り返す。

「以上の五十五名がコンクールのレギュラーメンバーだ。それではさつき言った通り、サポートメンバーはこれから第二視聴覚室に集合し、滝先生の話聞くように」

美知恵の一声に流されるようにして、サポートメンバーとなった人たちがぞろぞろと部室を出ていく。久美子はその流れに混じる相楽の姿を目で追った。無然としたその表情には悔しさもあれば、こうなることを予め分かっていたとでもいうような諦観の念も入り混じっ

ているように見える。相楽だつて何だかんだ言いながらもこのところは真剣に練習に取り組んでいたし、徐々に上達を見せてもいた。けれど滝によるオーディションの結果はとても厳正で、その采配に選ばれなかった相楽が今年のコンクールに出ることは適わない。それは雫という完璧超人がいたせいなのか？ それとも相楽の実力が滝の基準にいま一步届かなかったただけか？ 浮かぶ疑問に答えを出すことは、久美子には出来なかった。

「では次に、今ここに残ったレギュラーメンバーを対象に、ソロオーディションの希望者を募る」

そう、ここからが最も重要だ。久美子は歯を食いしばる。今の北宇治はソロパートの担当者をレギュラーメンバーの中から募り、およそ一か月後の部内オーディション、つまり部員全員の前で独奏を行い全員の採択によって選ぶ方式を採っている。望んでいた麗奈との協奏を実現させるためには、このソロオーディションを制さなければならぬ。

「なお、ソロを希望する者がいなかった場合は滝先生の指名によりソロ担当者が決定される。後日異議を唱えることは出来ないため、ソロを希望するならば必ずこの場で手を挙げることに。いいな？」

「はい。」

「それではまずフルートパート、ソロを希望する者は手を挙げる」

久美子の心臓がどくどくと、刻むペースを速めていく。もし、もしも万一ここで、雫がソロオーディションの希望者に手を挙げなければ。そうすれば久美子は自動的にユーフォソロを担当することが決定する。トランペットパートは誰が手を挙げようと、麗奈の演奏力に及ぶことはないだろう。そうなれば念願の麗奈との掛け合いを、コンクールという晴れの大舞台で奏でることが出来る。そうあつて欲しい、と久美子は思っていた。

雫の演奏技術を恐れる気持ちも勿論あつたが、それを通じて雫との間にギスギスした空気を作ってしまうのも嫌だつた。かつて中学時代の自分と当時の先輩とがそうであつたように。もしここで雫が手を挙げてしまえば、その時はどうなるか――。中学時代の先輩や二年

前の香織と同じような立場に置かれた時、果たして自分がどういう行動を取るかは分からなかった。それを思うと、後ろ向きな発想であるとは重々承知しながらも、そんな未来が現実のものにならないようにとただ一心に念じる他は無かった。

「次、トランペットパート。ソロを希望する者は」

ここで真っ先に手を挙げたのは、やはり麗奈だった。他のトランペットパートの面々は誰一人として手を挙げない。……と思いきやただ一人、幸恵が高々と手を挙げている。彼女の予想外な行動に、部屋のそこかしこからにわかになぎわめきが起こった。

「静かにしろ！——ではトランペットのソロ希望者は高坂と東中、以上二名だな」

美知恵はいたって事務的に、麗奈と幸恵の名前をそれぞれボードに書き込んでいく。敬愛する先輩に真っ向勝負を挑むだなんて一体何を考えているのだろう。幸恵の意図がもう一つ掴み切れない。そう思っていたのは久美子だけでは無かった筈だ。

「では次、ユーフォニアムパート。ソロを希望する者は手を挙げろ」  
来た。麗奈がそうしたように、久美子は真っ先に右手を上に掲げる。その意識は挙げた手にも、こちらを見る美知恵にも無い。隣に立っている雫が手を挙げるかどうか、ただそれだけを視界の端で監視し続けていた。お願い。やめて。手を挙げないで。祈るような久美子の思いはしかし、雫に届くことは無かった。雫はゆるりと、しかし高々と真っすぐに、その右手を天に向かって伸ばした。

「ユーフォは二名ともだな」

誰にも気づかれぬよう、久美子はそうつと吐息を漏らす。やっぱりこうなってしまった。薄々はわかっていたし覚悟も出来ていた。自分がソロを吹くためには、この目の前の強敵を打ち倒さなければならない。嫌が応にも、一ヶ月後のオーディションでどちらが上手いか雌雄を決することになる。恐れていた一騎打ちの構図は今ここに、不可避の現実となって久美子の前へと立ちはだかった。

ふと雫を見やると、顔だけをこちらに向ける雫が久美子をじつと見据えていた。その表情はいつに無く血気に満ちているようにも取れ

る。宣戦布告。久美子はそう直感した。

『どちらがソロに相応しいか、ここで決着を付けましょう』

雫の瞳がそう告げているかのように、久美子の目には映っていた。

\*

「音楽が好きだっていう久美子の気持ちは分かったわ。でもだからって、音大なんて」

自宅の居間に母の声が響く。目の前にはただ困惑する母の顔。そして腕を組み目を瞑ったまま、一言も発することの無い父の姿だった。

「ごめん」

久美子が言えたのはそれだけだった。正直なところ、言うのが遅すぎたと後悔していた。もっと早くに志望を打ち明け、それに向けて準備を進めていたら、今頃はもっと将来に希望が持てる状況を作れていたかも知れない。楽しい夢を夢のままにして現実の対策をせずにここまで来てしまったことは、他の誰のせいでもないし何の言い訳もできなかった。全ては自分の考えが甘かったせい。芳しくない反応を見せる両親を目の前にして、久美子はそれをただただ痛感するしかなかった。

「でも私、どうしてもプロの演奏家になりたい。今からじゃ遅いかも知れないけど、この気持ちだけは諦められない」

「そう言われても……。ねえお父さん」

返答に窮した母が言葉を求めるも、父は依然険しい表情で黙ったまま。だがそれも至極当然というものだった。いきなり音大とかプロとか言われて「ハイそうですか」と言えるほど黄前家は裕福な家庭環境ではない。ましてや音楽の専門的な訓練を受けてきた訳でもない娘がいきなり音楽の世界へ飛び込もうとするのを、この両親があつさり受け容れられるわけも無い。姉の一件を間近に見ていた久美子にとって、こうなるのはとっくに見当のついていたことだった。

「とにかく私は、もう少し考えた方がいいと思うわ」

「だから、もう遅いくらいなの。今からだって動き出さなきゃ間に合

わない」

「でも焦って答えを出したって、」

その時、突然椅子を引いて父が立ち上がった。大きな音と共に噴き上がる威圧感。久美子と母は同時に口をつぐみ、ぴりぴりとした空気が瞬く間に居間を支配する。父はそのままずかずかと寝室へ向かった。いつかの時と同じように、勘当同然のことを自分も言い渡されるのだろうか。がたがた震えそうになる自分の腕を鷲掴みにして、久美子はなんとか堪えようとする。

と、そうこうしているうちに父はすぐに部屋から出てきた。その手にはしわしわになった茶封筒が握られている。そのまま席に戻った父は茶封筒に手を入れ、中身を久美子に差し出した。

「これって……」

「お前の名前で作ってあった預金の通帳だ」

開けてみなさい、と言われて久美子は通帳を開く。そこには久美子が今までの人生で見たこともないような桁の金額が記されていた。通帳を強く掴み、久美子はその額面を二度見する。

「麻美子が出たときにな、言われたんだ。自分のことは自分で何とかする。だがもしも久美子が行きたい道を私達に告げる時が来たら、その時はなるべく力になってやって欲しい、と」

その額は久美子が予め調べてあった音大の学資に、十分とは言えないまでもかなりの当てに出来るほどであった。久美子は息を呑む。姉が家を出て行ってから一年半。その間、両親はこれほどの額を自分のために蓄えていてくれたのだろうか。

「もちろん母さんとも相談して、かなり無理はしたが少しづつ貯めておいた。麻美子からも毎月足しにするよう送られてきていた。もう一度言うがこれはお前の名義で作った預金通帳だ、お前が自分のために使え」

鼻の奥がツンとする。目の前の通帳の文字がぐにやりと歪んで、何かを喋ろうにもうまく言葉が出てこない。

「だがな、私達に出来るのはこのぐらいだ。その預金も、お前が自分のやりたいことをするために、よく考えて使いなさい。これ以上のこと

は期待せず、足りない分は自分でなんとかする事だ。いいな」

言葉を発せぬまま、久美子は何度も頷いた。目から止めどなく溢れ出るものを拭ううち、気付けばその両手を顔から離すことが出来なくなっていた。

「それとayingておくが、もし夢が叶いそうにないと思った時は、きちんと見切りをつける。麻美子も自分の夢のために、自分で自分の人生に責任を負う道を選んだ。お前も自分の人生と選択には、自分で責任を持って。好き勝手に生きるためではなく、自分の人生を成り立たせるために、そのお金があると思うことだ。それが、その通帳をお前に渡す条件だ」

父の表情は険しいままだったが、その言葉は久美子の胸の奥深くまで響き渡った。気付けば母も堪えきれず目を潤ませていた。何もない、ごく普通の一般家庭だと思っていたけれど、久美子はそれまで過ごして来たこの家を、一緒に暮らして来た家族のことを、そしてその中にいられた自分の事を、本当に幸せだと思った。

\*

マウスピースから唇を離し、辺りをぐるりと見回す。窓の外ではしとしとと雨が降っている。梅雨ということもあってここ数日は雨が続き、練習場所である教室の中もしつとりと湿った空気になりつつあった。六月も既に過ぎ去り、来週にはもう期末テスト期間。それが過ぎれば夏休み突入とほぼ同時にソロオーディション。そしてその二週間後にはいよいよコンクール京都府大会だ。あまりの時の速さに久美子は目眩すら覚える心地だった。

進路に関して親の承諾を得られたのはちょうど一カ月前、あがた祭りの翌朝に滝に相談をした日の夜だった。それから久美子はずっと、空いた時間を見つけては自分の可能性を賭けられる進学先を模索し続けていた。けれど未だに条件の見合う良い大学は見つからず、そうこうしているうちにもう七月だ。

他の三年生の殆どはそろそろ志望の進路に向けた動きを本格的に開始している。麗奈は言うに及ばず、葉月や緑輝だって既に自分の進路を決め、学校と部活の合間に色々と動いているのだ。それに引き換

え自分など、試験対策はおろかどこに行きたいかすらまるで定まっていない。こんなことで本当に大丈夫なのだろうか。未だまつさらな白紙状態の将来を思うと、流石に暗澹たる心境にならざるを得ない。

ダメだ。一人で楽器を吹いていてもどうも今一つ集中できない。そう決めた久美子は立ち上がり、今日の練習を終えることにした。下校する前にトイレに向かい、お手洗いを済ませてトイレを出たその時、

「……そんな……ダメ……」

久美子の耳に誰かの声が飛び込んで来る。低く抑えられてはいるが、それは女子の声だった。何をしゃべっているかまでは聞き取れず、久美子は足を止めて声の出どころを探る。

「……いいだろ……だって……」

今度は男子の声。その声には聞き覚えがある。というか、他の人と間違えようはずも無い。それは秀一の声だった。久美子の足は無意識のうちにそろりそろりと声の方向へ向かっていく。普段であれば秀一はとつくに練習を切り上げ家に帰っている時間の筈だ。なのにどうして、秀一が学校に残っているのだろう。そして恐らくは秀一と喋っているらしき女子、彼女は一体誰なのだろう。久美子の胸の内にもやもやしたものが浮かび始めた時、再び女子の声が聞こえた。

「それじゃ、久美子の事はどうするの？」

今度はハッキリ聞き取ることが出来た。あの声は、葉月のものだ。それが分かった途端、久美子の心臓はぐしやりと握り潰されたように委縮する。反射的に両手で口を押さえ必死に呼吸を殺し、近くの柱の陰に身を潜める。そうしなければ動揺と混乱に押し出された息の音が、自分の存在を葉月と秀一に教えてしまいそうだった。

「どうって、別にそういう話じゃ」

声の出どころは家庭科室。久美子が隠れた柱の傍にある扉の、その向こうに二人はいるみたいだった。

「じゃあ、どういう事なわけ？」

問いかける葉月の声には幾分剣呑な空気が混じっている。もしかしたら先ほどもまでの会話は、葉月が秀一を咎めていたのかも知れな

かった。しかしして今の久美子にそのことを深く考えている余裕などまるで無い。秀一と葉月が二人で夜の学校に残っている理由は、こうして二人で話し込んでいる事情は、一体何なんだ。かつての葉月の秀一への想いを知っているだけに、そして何より今現在自分が秀一とうまくいっていないだけに、久美子の脳内は今までにないほどぐるぐると高速回転し、その答えを見出そうとする。

「本当に言ったまんまだって。久美子としばらく、距離を置いた方がいいかもって」

そう語る秀一の声。一瞬、目の前が暗転したような錯覚に久美子はぐらりと揺れた。距離を置く？ 秀一が？ 私と？ どうして？ パニックに陥りそうになる中で、久美子はあがた祭りの夜に秀一が言っていたことを反芻する。

『俺達、このままでいいのかなって』

何故秀一がそんなことを言いだしたのかを、久美子はあの夜からこれまでずっと忘れていた。いや、正確にはうっかり考えないよう丁寧に、意識の奥底へとしまっておいたのだった。考えれば考えるほど悲観的な答えしか出てこない。けれど秀一は自分を好きと言ってくれている。だったら自分はどうしたらいい？ そこで思考はループし、どこまで行っても答えが出てこなくなる。部内オーデイションや進路のことを優先的に考えなくてはいけない中、秀一のことにまで気を回す余裕を久美子はすっかり失っていた。それに対する秀一の答えが、これなのだろうか。

「塚本は久美子のこと、嫌いになっちゃったの？」

「そうじゃない。そうじゃなくてさ」

「だったらどうしてなんですか」

ここで唐突に別の女子の声が入ってきた。これは緑輝の声。それに気づいた途端、久美子の全身から緊張が一気に抜け脱力した。そうか、二人きりではなく緑輝もそこに居るのか。たったそれだけの事で思い切り安堵している自分がある。我ながら単純なものだ。と同時にさっきまでの暗い想像はすっかり姿を消し、今は秀一がなぜ自分と距離を置こうとしているのか、そのことだけが気掛かりになってき

た。ひとまず冷静さを取り戻さないと。久美子は音を出さぬよう注意を払いつつ、指の隙間からするすると息を吐く。

「なんて言うか、本人にも話したんだけど。うまくまとまらないんだよ」

葉月と緑輝は秀一の次の言葉を待っているらしく一言も発しない。しばしの沈黙のあと、秀一が再び口を開いたようだった。

「最近さ、久美子めちやくちや忙しそうにしてるだろ」

「そりやあ久美子は部長だもん。滝先生のとこ行ったり書類作ったり、忙しいに決まってるよ」

「楽器の方も、雫ちゃんがいいますから。ソロオーデイションのこととかもありますし」

葉月たちの言い分はまさに凶星だった。久美子は学校に居る間、授業時間を除けばその殆どを、吹奏楽のために費やし続けている。早朝からの練習も休み時間も、昼練も放課後も門限までの居残りも、ほとんどは楽器か部活関係の書類を抱えて過ごす日々だ。休み時間に同級生と楽しくお喋りしたり吹部の人間以外で仲の良い友達と寄り道したり、なんてことは部長になってからずっとしていなかった。

「そう。しかも進路のこともあるじゃん。久美子がどうするかは俺、まだ聞いてないけど」

「ああ、進路ね……」

葉月はそこで言葉を濁した。恐らくは久美子が言っていないことを自分の口から秀一に告げるのは良くない、と考えたのだろう。

「俺はもうずいぶん前から大学に行くつもりだけど、あいつはもしかしたら違うかもって思ってた。そうなったら卒業した後は離れ離れになるかも知れないし」

「つまり、秀一君は久美子ちゃんと一緒にいたいんです？」

緑輝の直球極まりない質問に、秀一は言いにくそうに、

「……ああ」

とだけ、短く答えた。

「じゃあなんで距離置くなんて言い出すのさ。もしそうだったとして、卒業したらそれこそ一緒にいられなくなるんだよっ」

葉月が秀一を諭し始める。こうやって自分の居ないところで自分の話をされるのは何か変な気分だった。別に卒業したからと言って自分と秀一との関係が何か変わるわけでもない、と思っていたけれど、そうか。もし自分が音大に行くとして秀一の進学先と違う地域だったら、その時は秀一とも離れ離れになってしまうんだ。そんな当たり前のことを、こうして他人事のように聞くことで、久美子はようやく咀嚼し始めていた。

「久美子が忙しいのが不満なら、久美子に直接言ったらいいじゃん。もつと一緒に居たいって。久美子ならきつと応えてくれるよ」

「言えるわけないだろ。あんなに頑張ってる久美子に、俺のことも見るなんて」

そう言つて秀一はふつと吐息を零す。その笑いには幾分、自嘲めいた苦々しさがこもっているような気がした。

「二人はさ、中学の時の久美子のこと知らないと思うけど」

そう前置きをしてから、秀一は言葉を紡ぐ。

「あいつ昔はホント周りに流されまくってたんだよな。誰に対してもそこそこ愛想いいし、でも深入りはしないし、適当に合わせて何となく過ごしてる感じで」

「それは……ちよつと分かるかも。久美子、高校入ったばっかの頃もそんな感じだった」  
「だろ」

確かに、以前はそうだった。高校に入つて何か変わりたいとは思つても、吹部を選んだ理由は葉月達に誘われたからだし、部活の中でのいろいろ事件や問題が起こつても、そのほとんどで久美子はただ事態の成り行きを見守ることぐらいしかしなかった。中学の時はそれがもつとひどかった。周囲との軋轢を避けて。何となく居心地の良い場所を作れるように努めて。面倒な出来事は深入りせずにはらへら笑つて流して。誰かがこうしようと言い出せば何となく賛同して。けれど本当に自分がどうしたいか、どうありたいか、なんてことはおくびにも出さずに過ごしていた。それはレギュラー争いで先輩とこじれてしまった過去の教訓から身に付けた、久美子なりの処世術でも

あった。

「でも最近の久美子は部活の事とかでバタバタしてるけど、すっげえ楽しそうだし。何て言うか、自分が本気でやりたかったことがやっと見つかった、みたいな感じで」

秀一はきつと今、少し嬉しそうにしている。久美子はそれを秀一の声の雰囲気から感じ取った。

「しかも放課後は毎日居残りで練習して、家に帰ったら帰ったで宿題やったりとかもあるだろ。日曜も祝日も部活漬けだし。いくら付き合ってるっていつても俺との時間に割ける余裕なんてそんなにあるわけない、それぐらいはわかってるんだ」

その秀一の語りは久美子の背骨にずしんと響くようだった。自分で思っていたよりも、秀一は遥かに自分の事を見てくれている。考えにくれている。そのことが痛いぐらいに伝わってくる声色だった。

「もしここで俺が俺の気持ちを言い出したら、きつと久美子は俺の事も気遣ってくれる。たぶん二人きりで会う時間も沢山作ってくれる。ただでさえ忙しいのにそんな事になったら、あいつ潰れちまう」  
「でも、それで秀一君は良いんですか？」

今度は緑輝が秀一に問い詰めるような言葉を投げ掛ける。

「良いとか悪いとか、簡単には言えない」

それは緑輝への返答というよりは、まるで自らに言い聞かせるような、ひたりと辺りに染み込むかほせい声だった。中の三人はいまどんな表情をしているのだろう。柱の陰に身を潜める久美子には、それを知る術は無い。

「いまの久美子はすごく生き生きしてるし、それは俺もいいことだっと思ってる。応援してやりたい。だけどそうになると二人の時間は全然取れない。正直キツイよ。でも今のあいつにキツイって言いたくない。もし俺がそう言ったら、きつとあいつの時間を奪うことになる。あんな楽しそうな久美子の時間を。そうやってずっとあれこれ考えてるとどうしたらいいか、どうするのが俺達にとって良い事なのか、解らなくなるんだ」

「それで距離を置く、ってことなんだ」

得心した、という空気を帯びる葉月の声が微かにくぐもる。

「確かに久美子、いま部活も進路もどっちも大事な時期だもんね。私達だってそうだけどさ。ここんとこの久美子見てたら、コンクールまでほんとに気の抜けるとこ無いなって感じるもん」

「葉月ちゃん、緑は、」

緑輝は何か言いたげだったが、うまく言葉を紡げず、そのまま黙りこくってしまった。

「別にさ、塚本だって久美子と別れたいとか思ってるわけじゃないんでしょ」

「ああ」

「だったら今はそれでいいじゃん。塚本が色々悩んだまんまで久美子と向き合おうってしちゃう方が、かえって無理が出て苦しいでしょ。それよりだったら少し間を空けた方がいいって私は思う」

葉月の声は普段通りの明るいものだったが、どこか柔らかく包み込むような色合いが浮かんでいる、ような気がした。それは単に久美子の気のせいだったのか。それとも塚本を、緑輝を支えようと、葉月なりに精一杯明るく喋ろうとしていたからなのだろうか。

「それより、もうこんな時間。久美子のユーフォの音も聞こえなくなってるし、そろそろ私達も帰らないとやばいよ」

「そうだな」

ガタガタ、と複数の椅子を動かす音。久美子は方に一つも見つからぬようにとその場で身をかがめた。

「悪い二人とも。いつも相談に乗ってくれてるのに、今日はこんな話で」

「別にいいよ。言っただっしょ？ チューバは影で支えるのが仕事なのだよ、塚本君」

そこで秀一がふふつと苦笑を洩らしたのを、久美子は確かに聞き取った。

「それじゃ、私と緑は少し片付けてから帰るから」

「ああ。じゃあまた明日」

こつこつ、と廊下に秀一のものと思しき靴音が響く。音が次第に減

衰していくところからして、どうやら秀一は久美子の居る位置の反対側へと歩いていったらしい。

「ほーら緑、私達も帰るよ。そんな暗い顔してたら帰り道でつまづいちやうぞ」

教室から再び葉月の声。どうやら一連のやり取りを経て、緑輝はすっかり落ち込んでしまっているらしかった。

「あの、葉月ちゃん」

うん？ という返事と共にきゆうつと甲高い音が鳴る。その場で振り返ったか何か、葉月の靴が床を擦った音のようだ。

「ううん……やっぱり何でもないです」

「何ー、そう言われたら却って気になるじゃん」

言いたい事あつたら言っちゃいなよ、と軽い調子で葉月に促され、緑輝はしぶしぶといった様子で喋り出した。

「本当にこれでいいんでしょうか。緑は何だかスッキリしません」

だって、とか、なのに、とか、緑輝はしばらくもごもごと何かを訴えているようだ。だがその声があまりに小さくて、何を言っているかまではここからだともう一つ聞き取れない。

「いいに決まってるよ」

葉月はそんな緑輝に、あっけらかんとした様子で応える。

「これはさ、罪滅ぼしみたいなものだから」

罪滅ぼし？ 葉月が誰に何の罪を償う必要があるのだろう。久美子は眉間を指で押さえた。もしかすると、葉月の発言の真意は緑輝のもごもごの部分に埋もれているのかも知れない。話の点と点がまったく繋がらず、これでは推理のしようもない。

「さ、帰るよ」

教室からこつこつと響く二つ分の靴音、それが今度はこちらへと近付いて来た。久美子は咄嗟に体を最大限縮こまらせ頭を壁際へと押し込む。ややあつて自分の背後を二人が躊躇もなく通り過ぎていき、やがて足音は階段の方へと遠のいていった。危なかった。すっかり陽が落ちて廊下が暗くなっていたおかげで、どうやら気付かれることなくやり過ごせたようだ。辺りから人の気配が完全に無くなった事

を確認して久美子は立ち上がり、窮屈な姿勢のまままでいたせいですっかり凝り固まった全身を大きく伸ばす。

それにしても、と思い返したのは今しがた秀一たちが繰り広げていた会話である。あの様子から察するに、恐らく秀一は日頃から何かと葉月や緑輝に相談をしていたのだろう。それはそれで色々気になる点ではあるのだが、この際それはいい。久美子にとって一番重要だったのは秀一の本音。そして、それに対して自分がどうするかだ。

秀一の言いたいことは良く分かった。実際久美子にしたって、恋人であるはずの秀一と一緒に過ごす時間を満足に確保できなかった事については気に病む事もあったし、自分自身寂しさを感じるときもあった。けれど秀一は秀一で、現状の久美子があまりに沢山の問題に追われていてそれどころでは無いことを理解してくれている。ここでもし久美子が変わりに気を遣って秀一のために時間を取ったとしても、彼はそれを良しとしないだろう。その点において、現状の久美子には打てる手がほとんど無いという事になる。

それに自分がこの件に関して余計なことを喋れば、秀一はおろか葉月と緑輝にまで気まずい思いをさせてしまう。コンクール前の大事な時期に、自分のせいで部内の人間関係に波風を立ててしまうようなことは極力避けなければいけない。となればこの話は一切聞かなかったことにすべきだ。けれどだとしたらいよいよ自分はどうしたらいい？ という話である。

結局のところ、今回ここで秀一達の密談を聞いたところで、久美子はますますもって自分には何も出来ないという現状を再認識したに過ぎなかった。誰もいない廊下にぽつんと佇む久美子は一人唇を噛み締める。何かを得るには何かを失わなければならない。そんな言葉が脳裏をよぎる。出来ればそんな事はしたくない。そうやってユーフォも部活も進路も恋愛も遮二無二取り組んでいるうちに、気が付けば自分は恐ろしいほど欲張りになってしまっていた。

けれど、ここが限界なのだろうか。拾いたいと思っていた物が指の間からポロポロと零れ落ち始めているような感触がする。もはや何かを諦めなければならぬ段階に、自分は来てしまっているという

のか。闇が迫る校舎の中で、久美子はどっちに向かって進めばいいのか分からぬまま、ひたすら途方に暮れていた。

「では、今のところをもう一度頭から合わせます」

音楽室に滝の声が響く。レギュラーが決定してからの練習はいよいよ熱を帯び、次第に全体合奏の回数も増えていった。明日からは期末テスト期間に入り部活も休みとなる。テスト前最後の合奏という事もあり、部員達はみな気合いを入れて今日の練習に臨んでいた。

「チューバ星田君、このアクセントスタツカートが綺麗に切れていません。これではただ乱暴に息を吐いているだけです」

「はい」

今日の合奏では低音が集中的に注意を受けていた。というのも『剣闘士』は第三部の戦のシーンで、重厚に鳴り響く低音の音が最大限に主張をする必要があるからだ。ここで低音の音が足りないと全体の音が浮ついてしまい、大軍勢がぶつかり合う緊迫感を表現し切ることが出来ない。かと言って、ただ単に音を大きく鳴らせばいいというものでも無い。ばらばらに放たれるだけの大きな音はただの雑音に過ぎず、それは聴衆にとつては耳障りな音でしかないのだ。

「何度も言っているでしょう。ここは低音を充分に聴かせる必要があります。今のように粒立ちが粗くバラバラとした音では全員で合わせた時に輪郭がぼやけてしまい、意図した印象を生み出せません。星田君、一つ一つの音の長さや強弱をきちんと意識して使い分けてください」

「はいっ」

「ここは後日に回します。次、金管の連符」

その声に、該当するパートがそれぞれ楽器を構えた。星田の表情には溢れんばかりの悔しさが滲み出ている。ここ数日の合奏で星田は滝から度重なる注意を受けていた。もちろん星田自身、個人練の時間に課題をこなせるよう必死に練習しているのは久美子も見て知っている。だがそれでも滝の要求するレベルには依然として届いていない。吹奏楽経験者とは言え強豪校出身でもない星田にとって、全国を

意識する水準に一年目から食らいつくのは容易ではなく、ただ己の實力不足と向き合うだけの厳しい状況が続いていた。

そして、それとは別に今、大きな問題が北宇治には発生しつつあった。合奏を止めた滝はスコアをめくりながらその眼鏡を光らせる。

「今のところ、音が乱れています。昨日も注意した点ですがまだ出ていません。いつまでに出来ますか？」

そして滝はある人物の方を向いた。

「川島さん」

滝の瞳が映していたのは、苦渋に満ちた顔付きで立ちすくむ緑輝の姿だった。

#### 四．みつけるフェリチータ

一学期の期末テストが終わり、返却された答案用紙の点数を見て久美子はひとまず安堵する。いかに進路を音楽関係に絞ったとは言えど、推薦という選択肢にもまだ可能性がある以上、学校の成績を大きく落とすのはあまり喜ばしいものではない。ことによっては滝の助言にもあった通り、教育大学の音楽系学部や一般大に進学することも視野に入れたつあった。どんな進学先を選ぶにせよ、それらは全て通過点。本当の目標はそのさらに先にあり、目標に辿り着くためには手段を選んでいられないのが自分の実情である事を久美子は正しく理解していた。

そしてテストが終わった今、夏休みはもう目前に迫っていた。多くの同級生たちは高校生活最後の夏休みに浮き立ったり、塾や予備校の夏期講習を前にうんざりしていたりと十人十色であるが、久美子たち吹奏楽部員にとっては来たるコンクールに向けて大詰め新时期となる。今年のコンクール府大会は八月四日、京都市内のコンサートホールで行われる。夏休み突入から府大会までの期日はおよそ二週間ほど。この間にどれだけ自分達の演奏を研ぎ澄ますことが出来るか、より質の高い音楽を奏でられるようになるかがコンクールの勝敗を分かつと言っても過言ではない。特に今年の府大会はマーチングの強豪として知られる立華高校のクオリティアップがあちこちで囁かれているだけに、北宇治にとっても決して安泰とはいえない状況なのだ。

吹奏楽コンクールは各都道府県の大会を皮切りに、関西・関東といったブロック毎の支部大会、そして全国大会という順にステップアップしていく。地域によっては都道府県大会の前に地区単位でのコンクールが行われる場合もあるが、いずれの場合でもその大会で金賞を取り、さらにその中から選ばれる代表枠に入れば上位の大会へ進出することは出来ない。同じ金賞でも代表枠に選ばれなかったものが『ダメ金』と呼ばれるのはそのためである。久美子たちの悲願である全国大会金賞を成し遂げるにはまず府大会で金賞を取り、さ

らに京都府代表として関西大会へ選出されること。これが最初の関門であり必須の条件だ。それだけに、府大会を前にして演奏の障害とならうる要因は、極力取り除かなければならなかった。

「どうしちやっただの、緑い」

緑輝のおでこを指でつつきながら、葉月が悩ましげに眉尻を下げる。すでに今日の練習も終わりの時間を迎え、部員達は各パートの練習場所となる教室に戻って居残り練習や片付けなどを始めていた。

「すみません」

緑輝は椅子に座ったまましょんぼりとうなだれていた。本日、滝が合奏中に緑輝に注意をした回数には実に八回。普段の緑輝であれば考えられないような回数であり、その内容も演奏表現上の指示どころではなく厳しさを伴うものになりつつあった。テスト期間前から注意されていた箇所は相変わらず修正できておらず、それにつられるように他の箇所も音のずれやミスが目立ち始めていたからだ。

「初めて見ましたよ、緑先輩が滝先生にあんなに言われてるところ」

美佳子も心配そうな表情で緑輝の顔を覗き込む。

「どこか具合悪かったりしますか？」

「ううん。身体の方は何もありません」

首を振ってみせる緑輝だったが、その顔から憂いは全く晴れていなかった。

「自分でも良く分からないんです。上手く手が動かないっていうか、音に乗れない感じで」

そうこぼし、緑輝は深々と溜め息を吐いた。いまいち要領を得ない答えだが、その理由は彼女自身にも不調の原因が掴めていないからなのだろう。

「こんなんじやダメだって解ってるんですけど、どうしても体がついてこなくて、そうしたらどんどん演奏が乱れていってしまうんです」

すみません、と緑輝はもう一度頭を下げた。別に葉月たちだって、緑輝を責めなじるつもりでは無かった筈だ。ただ彼女が北宇治に入学して以降、ここままでボロボロな演奏をするのはこれまでただの一度も無いことだった。演奏面に関しての緑輝の実力は部内でもトップ

クラスであり、こと奏者としては麗奈にすら決して引けを取らない。何しろその麗奈さえも一年の頃から緑輝の実力を認めているぐらいなのだ。そんな緑輝がこれほど壊滅的な不調をきたしているという事実が、他の者達には到底受け入れがたいことであつたに違いない。「緑ちゃん、前に私に『失敗しないようにって考えるからダメ、私の演奏を見よ！　って思えばいい』って言つてたよね。そういう気持ちでやってみるのは？」

久美子なりに言葉を選びながら助け舟を出してみるも、緑輝はやはり首を振る。

「心掛けてみてはいるんですけど、それもダメなんです。こんなこと初めてで」

そうして力無く、緑輝は手元へ視線を落とした。その細く小さな指には最早この時期の風物詩とも言えるであろう白いテーピングがちがちに巻き付けられている。こんな小さな手があんな大きな楽器の長い弦を正確に押さえ切っているのだと思うと、久美子は何か今まで奇跡を見ていたのではないかという心地さえしてしまう。

「ジョージくん、もう緑と気持ちが出合なくなっちゃつたのでしょうか……」

『ジョージくん』というのは緑輝が愛用するコントラバスに付けた名である。そのことから分かる通り、緑輝は日々自分の楽器を己の一部が如く丁寧に、とても大切に扱っていた。日々の練習の前後には必ず丹念な手入れを施していたし、弓に塗る松脂の量もいつも誤りは無く、そのメンテナンスぶりは完璧とさえ言えた。今日だつてそのジョージくんはいつも通り、ピカピカに整えられている。

「そんなこと無いって！　きつとあれだよ。一時的な不調、そう、スランプってやつ」

「スランプ……」

葉月の言葉を反芻するように緑輝が呟く。

「緑、今までスランプになつたことが無かつたから、良く分からなかつたです」

それはそれですごいものだ、と久美子は思う。自分なんか、スラン

プに陥るのはしよっちゅうなのに。周りに気付かれないよう上手に体裁を保つてはいるけれど、一旦こうなるとどんなに練習を重ねても全く上達しないどころか逆に落ちていくような気分になつてしまふ、そんな時もある。しかしそんな久美子だけに、スランプから脱出するための特効薬なんてものは存在しないことも過去の経験からよくよく理解していた。結局のところスランプに陥った際の打開策などというものは、もがき苦しみながらも基礎に立ち返って正しい練習を積み重ねる、それ以外に無いのである。

「とりあえず、今日のところはもう帰ろつか。明後日は終業式だし、時間もあるからそこでみっちり練習して確認していこうよ。いま落ち込んでても仕方ないって。ね?」

葉月は緑輝にとびきりの明るい笑顔を向ける。こういう時底抜けに明るく振る舞う葉月には、久美子も何度か救われたことがあった。御多分に漏れず、この件も葉月に任せておいた方が無難かも知れない。何より久美子自身、緑輝のことを気に掛けていられるような余裕は、正直言つて殆ど無かった。

「お話し中すみません。個人練に行つてきますので、ここで失礼します」

そんな先輩たちのことなど自分には関係ない、とでも言うように雫は席を立ち、楽器と譜面台を持って教室を出て行く。オーデイション後の雫は基本ずっとこうだった。教室で黙々と楽譜読みをしていた彼女の姿はもはや無く、少しでも時間が空けば個人練のために外へと消える。何をしているのか、久美子はどうに気付いていた。周囲に気兼ね無くソロオーデイションの練習を行うためだ。

ソロオーデイションは夏休み三日目、つまりこの日曜日にホール練習の場にて行われることになっている。それまでもうあまり時間は無い。久美子にしたって、他の部員のことより今は自分の練習に集中したいのが本音だ。しかし相手が緑輝ともなれば流石にそうもいかない。彼女は三年間苦楽を共にしてきた仲間であり親友なのだ。その緑輝がスランプに苦しむ姿をあつさりかなぐり捨てて自分の練習に向かえるほど、久美子の協調性は破綻している訳ではなかった。

それに久美子には緑輝のスランプについて、一つだけ思い当たる節もあった。先日の秀一との会話。そこには葉月と緑輝がいた。秀一の話に一応の納得をしていた葉月に対して、緑輝は何か最後まで腑に落ちない様子だった。もしかするとそれが彼女の心にしこりとなって残っていて、演奏の調子を狂わせているのかも知れない。久美子は一年生だった当時、緑輝が似たような理由で落ち込んでいたのを覚えている。緑輝は自分自身に降りかかる問題に関しては全くと言っていいほど揺るぎない精神と技術を持っている。しかし他者が絡んだ場合は話が別で、時として演奏面に支障をきたすことさえあるのだ。——そう考えた瞬間、久美子の胃にぐねりと鈍い痛みが捻じ込まれる。

「悪いけど、私達は先帰るから。皆はじっくり個人練しててね」

久美子達にそう告げて、葉月と緑輝は楽器を片付け教室を去っていった。パートメンバーの半数が居なくなった三年三組は、なんだか酷くガランとしていた。

「じゃあ俺も個人練行ってきます。お疲れ様です」

丁寧に頭を下げ、星田は楽器を持って教室を出て行った。彼もまた、こここのところの合奏では滝に集中的にダメ出しを食らっていた。『どうしても出来ないのであれば、ここは星田君無しで行くしかありません』

先日の合奏中に滝から放たれた一言は、星田の胸に槍となって突き立ったことだろう。そういう時の心情は久美子も他人事とは思えぬほど理解できる。しかしその悔しさを、上手くなりたいという思いを昇華させるには、彼もまた必死で練習して克服する以外に無い。二年前の久美子がそうであったように。だからこそ、悲壮感を負いつつ立ち去らんとする星田の背中に掛けるべき言葉を、久美子は見出す事が出来なかった。

「それじゃ、私も外で練習してくるね。美佳子ちゃんはここ使っていていいから」

「あ、はい。お疲れ様です」

一人残される格好となった美佳子に若干の申し訳なさを抱きつつ、久美子も楽器を携え個人練に向かう。他の者に後れを取っている場合ではない。ソロオーデイションで雫に勝たなければ、本番の舞台で麗奈と一緒にソロを吹くことは出来ない。そして久美子の目指す『特別』にもいつまで経つても辿り着けやしないのだ。そのためにはこれからソロオーデイションまでの五日間、ひと時たりとも油断は許されない。少しでも集中できる場所を。そう思って久美子はいつもの露天廊下ではない方角に足を運ぶ。

校舎裏の一角に椅子と譜面台を置き、そこに座ってユーフォを構える。一人集中して個人練をしたい時、久美子はいつもここで練習を行っていた。そしてその角を曲がった先、ピロテীর手前にある中庭の付近では雫が個人練の場所として一角を陣取っている。久美子がソロ部分を吹き終えて一息つくと、向こうの方角から山彦のように雫のソロの音が聞こえてきた。美しく、そして豊かに響く音。雫の演奏は日を追うごとにぐんぐん磨き上げられている。合奏で滝に指示を受けた箇所も柔軟に取り込み、雫は自身の音をより高みへと導いていた。

それに正比例するかのようには、久美子の心の暗雲は日が経つに連れ厚みを増しつつあった。この演奏に、この音に勝てなければ、麗奈とソロを吹くことは出来ない。絶対に、雫に負けるわけにはいかない。けれどその気持ちも、麗奈と一緒に吹きたいという思いをも、雫の生み出す美しい音色は暴力的なまでに掻き消してゆく。『このままでは雫に負けるかも知れない』という真つ暗でとても鮮烈な予感だけが、じわじわと自分を飲み込みつつあった。その予感を振り払うように、あるいは焦燥感に追われるように、久美子はユーフォにしがみつき黙々と練習を続ける。

「おーっす、くみ姉」

そのとき校舎の角からひよっこりと、トランペットを手にした幸恵が姿を現した。一息つこうと楽器から口を離れたのとはほぼ同時だったところからして、恐らくは話し掛けるタイミングをずっと窺っていたのだろう。ハンカチで口元を拭うと、真鍮特有のくすんだ香りがツ

ンと久美子の鼻腔を突いた。

「さっちゃんも個人練？」

「うん、ソロオーデイションももうすぐ近づいて来てるから。高坂先輩も頑張ってるし」

幸恵は眩しそうな目つきで校舎を見上げた。つられて久美子も視線を上へと送る。そこには麗奈がトランペットを構え、高らかに音を奏でる姿があった。金色に輝くトランペットに反射した太陽光が久美子の目に飛び込む。その眩しさに思わず顔をしかめながら、久美子は幸恵に尋ねた。

「ねえ、さっちゃん。前から思ってたんだけど、どうして麗奈がいるのにソロオーデイションを希望したの？」

顔を下ろした幸恵が、今度は怪訝そうな顔で久美子を覗き込む。

「それって、『どうせ高坂先輩に勝てるわけがないのに』ってこと？」

「いや、そうじゃなくてその。まあ何というか」

核心を突かれ、久美子はしどろもどろになってしまう。実際問題、麗奈の演奏技術は誰が見ても部内随一であり、他のトランペット奏者が追いつける領域に無い。今さらオーデイションをするまでもなく、麗奈がソロの座を射止める事は間違いないと断言出来るだろう。

それだけに、幸恵がソロオーデイションに名乗りを上げたことは久美子のみならず他の部員にとっても理解しがたい行動であり、時折それが話題になることもあった。どうせ勝てるわけが無い。なんでわざわざ先輩に喧嘩を売るような真似をするのか。高坂も内心鬱陶しいと思っっているに違いない。人の口に戸は立てられず、各々が好き勝手を手を述べているのを、久美子も幾度となく耳目にしていた。当の麗奈は大して気にするでもなく『向かってくるなら返り討ちにするまで』とばかり堂々としていたのだが、対する幸恵が何を思っているのか、ここまで明白な実力差を前にして何故それでも麗奈に食らいつこうとするのか、その心理には純粹に興味があった。

「わかってないなー、くみ姉は」

ちつつち、と幸恵は指を左右に振る。

「高坂先輩はあたしにとっての憧れなんだもん。少しでも追いつきた

「いつて思ったら、必死で手を伸ばさなきゃ届かないでしょ？」

「そりゃまあ、そうだけど」

久美子にだって、その気持ちは分からなくもない。憧れをいつまでも憧れのままにしているは、いつまで経ってもそこへ達しはしないのだ。現に久美子自身、そうやって必死に手を伸ばし続けた結果、自分の実力をここまで磨き上げてきたのである。届くか否かはともかくとしても、空に弧を描く月にだって手を伸ばさなければ、今日の自分を大きく超える飛躍は望めない。ただししかし、それにしたって何も麗奈との直接対決という道を選ぶ必要までは無かつたんじやないだろうか。心の底でひっそりと、久美子はそう思ってもいる。

「それに私だってトランペット吹きだし。もっと上手になりたい、誰にも負けたくない、って気持ちはあるよ。例え今は全然ダメでもそういうつもりでやらなくちゃ、いつまでも高坂先輩に追いつけないままだから」

そんなのは嫌、と幸恵は自身のトランペットをじっと見つめた。久美子はほんの少しだけ、幸恵のこの火の玉のような向上心に感心していた。春に入部した頃の幸恵にはここまで貪欲な姿勢は無かつたように思うのだが、これも麗奈の下で厳しい練習に耐え抜いてきた成果なのだろうか。

「私も負けられないように頑張らなくちゃね。今はまず、オーデイションで芹沢さんに勝たないと」

久美子も拳を握り締める。幸恵のそれは憧れへの挑戦であり、言ってみれば必ずしも勝つ必要は無い戦いだ。幸恵には来年もあるのだし、何より彼女の実力では麗奈に到底及ばないことぐらい、幸恵自身が一番良く理解できているだろう。対することたちは現実問題、是が非でも勝たなければならぬ勝負である。言わば雫は『敵』。あれだけの力量を持っている雫を相手に、もはや先輩後輩といった序列など関係ない。例えどれほど勝ち目が薄かろうとも、自分がソロを吹くには雫よりも上手い演奏をする以外に無いのだ。

「勝たないと、か」

幸恵は呟き、こちらから視線を逸らした。

「くみ姉、もしかして雫のこと、敵みたいに思ってたりする？」

久美子は思わず息を呑む。その反応から、自分の見当が凶星を突いたと察知したらしい幸恵が不満げに鼻を鳴らした。

「雫もあたしやくみ姉と同じで、ただ誰よりも上手くなりたいたけなんじゃないかな」

「どういう事？」

聞き返す久美子の声は、自分でもそれと分かるくらい剣呑な色を孕んでいた。幸恵の真意が測りかねる。いつの間にか雫のことを呼び捨てにしているのも少しだけ気になったが、それ以上に幸恵が何を言いたがっているのかがこれっぽっちも理解できなかった。幸恵はただ黙って久美子を睨み続けていたが、結局久美子の問いには答えないことにしたようで、やがて目を瞑り大きく息を吐き出した。

「あたしはそろそろ練習戻るから。くみ姉もソロ練習、がんばってね」

じゃ、とだけ告げて、幸恵は足早に去ってしまった。その場に残された久美子はもやもやとした感情を抱え込んだままになってしまった。雫が誰よりも上手くなりたいと考えている。それはいいとして、その雫が今や久美子にとって最大の障壁となっていてるのは疑いようのない事実だ。負けたくないし負けるわけには絶対にかない。なのにその事で、どうして幸恵がへそを曲げる必要があるのだろう。そもそもユーフォソロのことなど幸恵には全然関係の無い話じゃないか。それとも幸恵はいつの間にか雫とも仲良くなっていて、それで雫の肩を持ってあんなことを言ったのだろうか？

「もう、わけ分かんないよ」

久美子は空を仰ぎ見る。校舎の影に一人取り残され、こうして他人のことをぐちぐち思い悩んで戸惑っている自分自身がとてもみじめに思えた。何にも憚らず天高くその音を響かせる麗奈の姿は眩しすぎて、今は直視できそうも無かった。

\*

コンサートホールの舞台に立って、久美子は精一杯の演奏をしていた。目の前の観客席には部員達の姿。ミスなく演奏を終えた自分に、部員達からは拍手が送られる。そんな自分と入れ替わるようにして

舞台の中央に雫が立った。きゅつと吸い込んだ息を銀色のユーフォニアムに吹き込んだ瞬間、そこから広がる音に部員達の空気が圧倒されていくのを久美子は感じ取る。誰もがその音に魅了されていた。息をするのも忘れ、その演奏に聴き入っていた。雫の演奏が終わり、それを聞いていた部員達の手がさつきよりも大きく、ばちばちと不快な音を立てる。そして採決の時が来た。

「ユーフォソロに芹沢さんが相応しいと思う人」

滝の問いに、部員達は一斉に手を挙げた。幸恵は言うに及ばず、美佳子や相楽、葉月や緑輝、そして秀一や麗奈までもが手を挙げている。その光景は久美子には到底受け入れがたいものだった。どうして。どうしてみんな雫を選んだのか。そこまで雫の演奏は自分より上手かったのか。コンクールで勝つためには自分ではなく雫の音であるべきだというのか。胃の腑から全てを振り絞って叫びたいというのに、何故か声がうまく出てこない。苦しきにもがく久美子を尻目に、滝は部員達を一度見回し、遂に久美子に向かって残酷な結論を言い放った。

「それではユーフォのソロは、芹沢さんで決定です」

\*

「……………うあああああああー！」

叫び声が喉から飛び出す。と同時に、いつの間にか自分がベッドの上に横たわっていることに気が付いた。体は寝間着姿のまま、おびただしい汗でぐっしより濡れてしまっている。目頭がじんわりと熱く、喉がからからになっっている。そこでようやく、久美子はさつきまでの光景が自分の見ていた夢であったことを知った。

枕元の目覚まし時計は三時半過ぎを示している。ベッドに入ってからまだ二時間弱しか経っていないことになるが、夢の感触があまりにもリアルだったせいで、今まで眠っていたなんてにわかには信じられない。こんなに気が立った状況ではとても再度寝付けそうにはなかった。ベッドからずると這い出して、久美子は机の上の楽譜ファイルに手を伸ばす。自由曲、ソロの部分。そこには濃いピンク色の自分の字で、こう綴られていた。

『絶対に麗奈と吹く！』

自由曲が渡されたその日に、決意の表れとして書いた文字。それは日々の練習を経るうちにすっかり色褪せつつあった。月明かりの中で見ると今にも消え行ってしまうようですらある。久美子は衝動的に楽譜ファイルを畳み、それを強く強く抱きしめた。

「いやだ、ソロ吹けなきや、絶対にいやだ」

どうしても声の震えを押さえることが出来なかった。そのぐらい、今しがたの悪夢は久美子の心に強烈な爪痕を刻み付けてしまっていた。

終業式も終わり、ついに夏休みが始まった。梅雨雲はすっかり晴れ、木々の至るところからジリジリとかしましい蝉の鳴き声が聞こえて来る。これが聞こえなくなる頃には既に、北宇治が全国への出場権を得ているか、そうでないかの命運は決しているのだ。そう思うと蝉の声が何だか自分を急ぎ立てているように、今の久美子には感じられた。

「久美子、顔色悪いよ。大丈夫？」

葉月が心配そうに久美子を覗き込む。

「うん、ちよつと今日は寝不足なだけ。何でもないよ」

葉月に心配をかけまいと、久美子は無理矢理に口角を吊り上げる。が、何でもない筈が無かった。七月に入ってからというもの、睡眠時間は今まで以上に削れてしまっている。五時起床からの朝練に始まり、休憩時間は部活関係の書類処理や日程調整に追われ、下校時間ギリギリまで居残り練習をこなし、家に帰ってから学校宿題と音楽の勉強を済ませ、残った時間で進路調査をする。こんな日々の就寝時刻は大体深夜となり、平均睡眠時間はおおむね四時間程度、酷いときには三時間を切ることもあった。

そこに加えてゆうべのような悪夢を見てしまったら、貴重な睡眠時間はさらに削れてしまう。その上色々と思いつくことが日増しに増えてきて、就寝前後ですら気の休まる暇が無い。ここところは恒常的な胃の痛みのせいでまともに食事を摂ることすら出来なくなり、家に帰ってからはお粥ばかりすすっている。それが影響してあんな夢

を見てしまったのだろうか。朦朧とした久美子の頭では、そんなことを考える余裕すら無くなっていた。

「今日はリーダー会議もあるんだから、しっかりしなくちゃダメだよ」  
そう言えばそうだった。今日のリーダー会議では三日後のホール練習に向けての段取り、そして夏休み中の練習日程を確認する予定だった。そしてそれは終業式後の午後一番目、つまりもうすぐ行われることになっている。

「ごめんごめん。それじゃちよつと行ってくるね」

鞆の中から書類を取り出し、椅子から立ち上がろうとする。体にうまく力が入らない。机の端に腕がぶつかった拍子に、久美子はフラリとよろけてしまった。

「危ないっ」

慌てて伸ばされた葉月の腕に、久美子の身体はがっちり支えられる。目の前にはくつきりとした木目。本当に危なかった。あと少しで自分の顔面はしたたかに、硬い机の板面に打ち付けられるところだった。

「本当に大丈夫？ 具合悪いなら保健室行った方がいいんじゃない？」

「ごめんね心配かけちゃって、全然平気だから」

二つの足に力を込め、なんとかその場に直立する。精一杯元気な体を装い、久美子は葉月から逃れるようにばたばたと教室を出た。

正直に言えば、全然大丈夫なんかじゃなかった。堪えがたいほどの疲労感と眠気に襲われている筈なのに神経が昂っているせいで、思考と感情は恐ろしく不安定になっている。ソロオーデイションのことや雫のことを考えて憂鬱になったり、急にあれこれ悲観したり、良く分からない切迫感に苛々し出したりと落ち着かないことこの上ない。葉月の言う通り保健室に行くべきなのかも知れないが、いま休んだら悪夢が本当に現実のものになってしまいそうで、とにかく練習しなくてはという強烈な危機感に身体を突き動かされる。これでは保健室に行ったところで満足に休めそうも無い。今日のところは居残り練習まで耐え切ったらすぐ家に帰って、勉強や進路調査も投げ出して早めに寝てしまおう。そんな風に久美子は考えていた。

「それでは次に、ソロオーデイションについてですが」

その声で久美子はハツとなる。今の声は他の誰のものでもなく、自分自身の口が発したものだ。ついさっきまで話し合っていたはずの内容ですらもほとんど記憶に無い。かと言って寝ていたわけでもなく、つまり自分はほぼ無意識のうちに司会進行役を務めていたということになる。

「どうしたの、黄前さん？」

司会役の発言が急にぶつりと途切れたのを不審に思ったのだろう。サックスパートのリーダーが、久美子の様子を訝しむ。

「ごめん、何でもない」

一言謝罪を入れ、久美子は軽く息を吸う。駄目だ。気を抜いたらすぐ意識が飛びそうになる。

「ソロオーデイションについてですが、当日の朝九時にホール入りをして、一時間の準備の後にいきます。各パートリーダーは十時になったらパートの人達を取りまとめ、第一ホールの観客席に座らせて下さい」

手元の書類の文字が霞んでいる。思っている事と喋っている事が全く同期していない。両肩には重い鉄の塊を背負わされているようで、もはや息をするのも苦しかった。早く、一刻も早く、この時間が終わって欲しい。

「それでは次に、夏休みの練習日程を――」

「その前に、ちよつといい？」

そう切り出したのはフルートパートのリーダー、小田おただった。どうぞ、と久美子は発言を促す。

「あのさ、この機会だしハッキリ言わなくちゃって思うんだけど」

小田は少し言いにくそうにしていたが、やがて意を決したように口を開いた。

「最近の合奏でさ、低音パート、注意されること多いよね」

その発言に久美子はぎくりと背中を震わせる。隣に座っていた低音パートリーダー、緑輝もまた息を呑んだ。

「もう夏休みだし、練習大丈夫？ 私としてはコンクールに向けての

合奏も大事だとは思うんだけど、それよりもまずパートとしての完成度を上げた方がいいんじゃないかな」

小田のその言葉に、他のパートリーダーからも賛同の声が上がりが始める。

「確かにごこんとこの低音、ちよつとやばいよね」

「リズム乗り切れてないことも多いもん」

「うちんどこもパート内でまだ上手く行っていないところあるし、パート練習の時間を増やせるんだったらありがたいんだけど」

秀一と麗奈はその流れには乗らなかつたが、二人の視線はどちらも緑輝に向けられていた。槍玉に挙げられた当の本人である緑輝にそのやり取りが刃となつて襲い掛かり、彼女の全身を切り刻む。

低音パート問題は緑輝自身の不調によるところもあるが、パートリーダーである彼女には低音パート全体の練習指導、その出来に関する責任も押し掛かっている。ところがなまじ自身が不調なせいでも、ここのところ緑輝の指導がやや甘めになっていたのは久美子も薄々気にかかつていた点だった。それが災いして星田の苦闘は言うに及ばず、低音パート内での課題ももう一つ取り残されている状況にある。その事を誰よりも承知しているのは他ならぬ緑輝本人だろう。ただでさえ小さい緑輝の肩はますます縮こまり、リーダー一回の言い分に何も返せぬままじつと耐えるように俯くばかりだ。

「パート練の時間を追加して欲しいんだったら、それは私から滝先生に言ってみるよ。けど低音パートのことばかり言わなくてもいいんじゃない、」

ひとまず場を収めるつもりでそう言ったのだが、それが一人の女子の癪に障ってしまったらしい。彼女はカッと眉を吊り上げ早口気味にまくし立ててきた。

「そもそも低音パートは黄前さんもいるんだから、他人事みたいに言つてられないでしょ。川島さんが調子悪いなら、そのへん黄前さんが何とかしないと」

「そんな」

久美子は大いに狼狽する。これだけ自分のことで精一杯だという

のに。今まで全部緑輝と葉月に任せてきたのに。こんな状況になったからと言っていきなり自分に何とかしろなどと言われたって、どうにか出来るわけ無いじゃないか。

「今そんなこと言い出しても仕方ないでしょ。他所のことをどうこう言つてないで、自分のパートをどうするか、そつちを先に考えないといけないんじゃない？」

流石に状況を見かねてか、麗奈が窘めるように口を開いた。言われた側の女子は一瞬顔を強張らせたが、相手が相手だけに麗奈を打ち負かす理論など捻り出せそうに無いと判断したのだろう。女子はそのまま口をつぐんでしまった。

「でも、今年の自由曲って低音が一番重要でしょ。ホントどうするの？」

このまま落ち着きそうかと思われた火種に、別の者がさらなる油を注いでくる。もうやめてくれ。久美子は心の奥でひたすらに念じていた。既に議場は各々が好き勝手に喋り散らす場となってしまう、およびそ会議の体を為していない。早く会議を終わらせたいのに。じっくり自分の楽器と、自分の音楽と向き合いたいの。いくらそう願ったところで誰に伝わるでもなく、貴重な時間は無意義に流れ去ってゆき、その間にも場の状況はどんどん悪化の一途を辿ってしまったている。

「それでなくたって今年の自由曲は難しいし、低音崩れてたら私達も乗れないしさ」

「もつとクオリティ上げていかないと、全国出場どころか関西だって危なくない？」

「立華もかなり完成度上げてるらしいじゃん。本気でやばいって」

目の前の視界がぐにやぐにやと渦を巻いていく。ぎんぎんと強まる耳鳴りがうるさくて、他の音が何も聞こえない。このままじゃいけない。なにか、この場を収める、何かを、言わないと。そう思っているのに頭の回路は一向に働かず、ぱくぱくと唇を動かすことしか出来なかった。ただただ、今のこの場の空気が、ひどく不快だった。いつそ一秒でも早くこの場から飛び出してしまいたい。そんな思考

が恐ろしい速度で全身を支配し始める。

「みんな、いい加減に——」

秀一が何かを言いかけたところに、ぼそりと誰かの声がした。

「すみません」

それは緑輝の発したものだ。固まり切った自分の脳にも、彼女のいたいけな声が奇妙に響く。

「緑のせいで皆さんに……迷惑をお掛けしてしまって、もう、どうしていいの……」

今にも消え入りそうなその一言が、最後の最後で辛うじて保っていた久美子の理性を、ぶつりと切り落とした。

「……ごしてよ」

さつきまで鈍色に濁っていた意識が真つ赤に染まっていく。まずい。それ以上言ったらいけない。なんて考えすら、全身から湧き上がる獐猛な感情によってあつという間にかき消されてしまった。

「いい加減にしてよ！ みんな勝手なことばかり言ってる！ 一番苦しいのは緑ちゃんだよ。普段からあんなに練習頑張ってる、いつも完璧な演奏で、それなのにスランプで思い通りの演奏が出来なくなってる、本人が一番何とかしなきゃって思ってるはずじゃん。みんな言いたい放題で、緑ちゃんがどんな気持ちでいるか、考えたことあるの!？」

久美子の口は止まらなかつた。久美子ちゃんいいですから、と緑輝に制服の裾を掴まれても、それにすら構わない。溢れる激情に突き動かされ、久美子は椅子を蹴って立ち上がる。

「そんな状況で低音パートの調子も悪くて、みんなも不安なのはわかるよ。わかるけど、そこまで言わなくてもいいじゃない！ 誰にだって上手くいかない時はあるでしょ。緑ちゃんはたまたまそれがコンクール前だっただけで、どうしてそこまでボロクソに言われなきゃいけないの。緑ちゃんが今までどれだけ頑張ってたか、みんなだっけてきたでしょ！」

「久美子」

今度は秀一が久美子の肩を掴んだ。邪魔しないで、と久美子はその手を振り払う。

「正直、私だって不安だし、緑ちゃんがこういう時だからこそ支えなくちゃって思ってるよ。でも皆それぞれ自分の役割をこなすので一生懸命だし、必死だし、何でもかんでも上手くなっていけないよ。なのにどうしてそれを求めるの。どうして皆、それが当然みたいなことを言うの。コンクールで金賞を取れさえすれば、人の気持ちなんてどうだっていいって言うの!?!」

「もうやめろ久美子!」

身体が大きく仰け反って、息が一瞬詰まる。見るに見かねた秀一がどうか久美子を制しようと、背後からその両肩を掴んで思いつ切り引っ張ったのだ。はっ、と久美子が息を吐き出したとき、そこには自分の服の裾を掴んだままで俯き、ぶるぶる震える緑輝の姿があった。

「緑、ちゃん」

呼吸が苦しい。息を吐いて吸う度に、徐々に冷静な自分が戻ってくる。と同時に、己の口から飛び出した発言がとんでもないものであった事を久美子は認識し始めていた。おもむろに周りを見渡すと、誰もがぽかんと口を開けたまま呆気に取られている。皆、久美子のあまりの剣幕にすっかり肝を抜かれてしまっていた。

「わ、私……」

舌がもつれる。言葉がうまく紡げない。胸がむかむかする。なのに、心はずんと重たく冷え込んでいた。久美子の身体から強張りが抜けたのを感じてか、肩を押さえ込んでいた秀一の手の力が次第に緩んでいく。秀一の手による戒めが解かれた久美子はへなへなとその場にへたり込んだ。体に力が全然入らない。さっきまでは自分の体じゃないみたいなのに、勝手に動いていたはずなのに。

「久美子、お前今日はもう帰れ」

秀一は久美子の顔を覗き込んでそう言った。久美子は、秀一の目を見る事が出来なかった。秀一は今の自分を見て何を思っているのだろう。自分は今どんな顔をしているのだろう。麗奈に、皆に、どう思われただろう。何もかも知りたくない。

「皆も悪い。久美子、ちよつと興奮してるから、今日はこのまま部活休ませる。会議の続きと今日の練習は俺がまとめるから、それでいいな

？」

秀一の提案に、全員が揃って神妙に頷いた。麗奈は動揺と心配が入り混じった顔で口を開きかけたが、何かを迷うような素振りをし、やがてその口を静かに閉じた。

「緑ちゃん、ごめん……」

がくがくと震える顎を手で押さえつけながら、久美子がやつと言えたのはそれだけだった。緑輝は俯いたままぶるぶると首を振り、その顔を上げる。

「久美子ちゃん、緑は大丈夫ですから。大丈夫ですから」

その顔は涙と鼻水でぐしゃぐしゃになっていた。緑輝を泣かせてしまったのは、自分だ。久美子はそう直感した。言っではいけない、言うべきではないことを、自分は言ってしまったのだ。この場であることを言うのが緑輝のためになるわけが無かったのに。緑輝が余計辛い思いをするだけの筈だったのに。何で言ってしまったのだろう。寝不足で頭が回らなかったから？ 追い詰められていて気持ちの余裕が無かったから？ 緑輝の泣き顔を見ると、これまで自分がやってきたことの全てがこの結果を招いてしまったという事実を、否応なしに突き付けられている気がした。

「皆も、ごめん」

やつとの思いで立ち上がり、そのままふらふらと教室の戸に向かう。合わせる顔が無い、というのはまさにこんな時に使う言葉なのだろう。久美子は誰にも、麗奈にですら、目を合わせられそうに無かった。

「あれ、会議もう終わったの？ ……久美子、どうしたの？」

教室に戻って来た久美子を見るなり、葉月は何か異変に気付いたようだった。久美子は葉月にも顔向けが出来そうになかった。今日は具合悪いから帰る、とだけ言い残し、自分の鞆を持ってずると教室を出る。

「久美子？ 久美子ってば！」

まるで悪い夢を見ているみたいだった。激しい罪悪感と後悔。出来るなら時間を巻き戻して、さっきの自分を平手で打つてでも止めて

やりたい。けれど過ぎ去った時間はもう取り戻すことは叶わず、ただ己の犯した過ちが逃れようのない現実なのだという分厚い幕のような感触だけが、久美子の全身を包むばかりだった。

虚ろな意識で廊下を歩いていたその時、どこかからユーフォの音が聞こえて来た。それは雫の奏でるユーフォソロの旋律。こんな時でも雫の音色はいつもと変わらずキラキラと眩い光を放っていた。何の濁りもない澄んだ音。今の自分の心境とはあまりにも大違いだ。その落差に、久美子の目眩と嘔気は頂点に達する。

堪らず近くのトイレに飛び込み、そのまま何もかもを体の外へと吐き出した。ぞわぞわと悪寒がするの、体はじつとりと脂汗をかいている。干上がり切った目からポタポタと何かがこぼれ落ちている。その何もかもが気持ち悪くて堪らなかつた。何より耐え難いほど不愉快なのは、何一つとして思い通りにならない、いまの自分そのものだった。

ようやく家に帰り着いたのは、学校を出てから二時間近くも後のことだった。どこをどう歩いてきたのか、その景色もほとんど覚えてはいない。母親はまだ仕事から帰ってきていないようで、薄暗い室内はむんと熱気に包まれていた。久美子は玄関に靴を脱ぎ捨て、そのまま自室へと入る。机の上には母親が置いたらしい自分宛ての郵便物が幾つかあつたが、そんなものはどうでもよかつた。鞆を投げ出した久美子は一直線にベッドへと倒れ込む。頭がガンガンする。ぶつけたわけでもないのに足が痺れて苦しい。空っぽになった胃袋は、細糸で締め上げられているみたいにキリキリと軋んでいた。

ベッドの上で仰向けになり、久美子は大きな嘆息を漏らす。うまくまとまらない意識が、ついさっきの部員達の表情を、緑輝の涙を、秀一の声を、全て鮮明に描き出す。皆の前であんな振る舞いをしてしまったのか。それを振り払いたくて、久美子は布団に無理矢理顔をうずめた。もう何も考えたくない。何もかも忘れてしまいたい。どうしてこんな苦しい思いをしているのだろう。もういつそ、全てから解放されて楽になつてしまいたい。

その時ふと、久美子の脳裏にあがた祭りの光景がよぎった。『特別』になると宣言した麗奈。そんな麗奈と同じ『特別』になりたいと宣言した自分。ソロを一緒に吹こうと誓い合った二人。そうだ、ソロはどうする？ このままでは雫に負けてしまう。練習しなくてもいいのか？ 『特別』になりたくないのか？ 自問の声が、久美子の心を追い詰めようとする。

「もう、いいや」

呟いた己の声はあまりに力無く、乾き切ってしまった。そうだ。自分がこうしている間にもきつと雫は黙々と練習を続けていることだろう。あの子の実力ならばこの僅かな時間の差を決定的なものにしてしまう。そうしてユーフォのソロはあの悪夢の通り、満場一致で雫が選ばれる事となる。そうだ、所詮はそういうことなのだ。

自分は『特別』なんかにはなれなかった。憧れた麗奈とのソロも思い描いた将来も、この手からするりと零れ落ちていってしまう。自分が望んだものを何一つ叶えられぬまま夏が終わり、そして向かう先は希望などひと欠片も見つからない、現実という名の険しい未来。夢を叶えられるのは選ばれたほんの一握りの人だけで、その人達には夢を叶えるだけの実力と環境と権利が、予め与えられている。そこに自分などが入る余地は、初めから一つとしてありはしなかったのだ。

久美子は明らかに絶望していた。ここまで死に物狂いで自分を奮い立たせて来た気力は完全に底を尽き、指一本ですらまともに動かせない。もはや何かを考える事すら億劫だった。このまま消えてしまおう。何もかもを手放して、溶け去ってしまおう。久美子の意識はつぶつぶと、黒い沼の底に沈んでいく。窓の外から聞こえていた蝉の鳴き声も車の音も、一切がそこでフツと消え失せた。

夢を見ていたのかどうかも良く覚えていない。粘ついた意識が最初に捉えたのは、携帯電話が奏でる着信音だった。真つ暗な部屋の中で、スカートのポケットから鳴り響くその音が、久美子を昏い眠りの淵から引き戻したのだ。

電話を掛けてきたのは誰だろう。麗奈？ 葉月？ 緑輝？ それ

とも秀一？ 誰だっがいい。もうどうだっがいいのだ。どのみち電話に出るつもりなど毛頭無かった。いま誰かと会話なんてする気になれない。しばらく黙って無視していればやがて着信音も鳴り止むだろう。そう思って目を瞑ったものの、着信の音はしつこく鳴り続ける。

「ああ、もう」

のろのろとポケットに手を伸ばし、そこから携帯電話を取り出す。着信を切ったら電源を落としてさっさと放り出そう。そしてもう一度眠ろう。眠っている間だけは全てを忘れられる。だからその電話が誰からのものであっても意味なんて無い。そう思い、久美子は液晶の画面に焦点を合わせた。

『田中 あすか』

眩い光を放つ画面の中央、薄暈けた視界の中で、久美子は確かにその名がそこに表示されているのを見た。

瞬間、それまで鎖で縛られたかのように鈍っていた頭が急速に回転を始める。あつという間に意識が晴れ渡り、それまで死に絶えていた全身の皮膚が室内の温度を感じし始める。画面にその名があることの意味を久美子が把握するまで、ほんの数秒もかからなかった。

嘘だ。

何で今、どうして今更。あの人から、電話が掛かってくることなく、ある筈がない。これは夢？ ううん、間違いなく今自分は起きている。でもだったらどうして、今ここにあの人の名前がある？ 何のつもりで？

ぐるぐると螺旋を描き続ける脳がまとまった解を見いだすことは出来なかった。それより何より、久美子は聞きたかった。あの声を。自分をからかうあの調子を。ずっと追いかけていたあの音の持ち主の、たった一言を。バネ仕掛けのおもちやみたいにガバリと身を起こし、改めて手元の液晶画面を凝視する。着信の音はまだ耳障りなほどに鳴り響いている。震える指で着信のスライドロックを解除し、久美子は携帯電話を耳にあてがった。

「……………もしもし」

緊張のせいか、はたまた昼から水一滴さえ口にしていなかったからか、自分の喉はがらがらと掠れた音を鳴らした。向こうからの返事は無い。ひよつとして見間違いだっただのだろうか。そう思った久美子が電話をいったん耳から離そうとした、その瞬間。

『黄前ちゃん？ やっほー、元気してるう？』

記憶の中にある彼女のそれと変わらない不敵な声が、受話口から飛び出した。

「あすか先輩」

噛み締めるように、久美子は彼女の名を呼ぶ。

「ホントにあすか先輩なんですか？」

『そうだよん』

電話口のあすかはあつけらかんと答えた。

『ていうかさー、酷くない？ 何度も何度も電話掛けてるのに全っ然出ないんだもん。練習もそろそろ終わった頃かなーって思ったのに。もうこれが出なかつたら、諦めて寝るつもりだったよ』

「す、すいません」

反射的に久美子は謝ってしまう。そう言えば今は一体何時なのだろう。ずっと寝ていたせいで、久美子はすっかり時間の感覚を失ってしまった。置き時計で確認しようにも、部屋の中は真っ暗で時計の位置すら把握できない。携帯電話を耳から離せば時刻を見ることが出来るだろうが、今はそんなことをする気には到底なれなかった。

『まあ、ちゃんと出たからいいけどね』

あすかの声がかくつくつと揺れる。心なしか、あすかの声は以前と比べて丸みを帯びているというか、ほんの少しだけ当たりが柔らかくなっているような気がした。それよりも何よりも、ずっと聴きたかったあの声が、今こうして自分の耳に響いている。たったそれだけの事実が、久美子には何よりも嬉しかった。

「でもどうしたんですか、こんな急に電話してきて。今まで何度かメッセージ送ったのに、いつも既読も付かなかったじゃないですか」  
ずっと連絡したいと思ってたんですよ、とは流石に言えなかった。けれど少しだけ腹立たしい気持ちも湧いてきていた。この人はいつ

もそうなのだ。こちらのことなんてお構いなしに、ぽんと飛び越えてやって来てはひよいと去っていく。久美子はいつもそれに翻弄されてばかりで、あすかに対してこちらから何かを仕掛け、それがうまくいった試しなど一度として無かったのだ。あすかを部に引き戻そうとしたあの時ですら。

『あーそりゃごめん。めっちゃくちや忙しくってねー。でもその感じだと、まだ読んでなさそうかな』

「何をですか」

『昨日さ、黄前ちゃん宛に手紙送ったんだけど』

手紙。それを聞いて久美子は机のある辺りへと目を遣る。そう言われれば家に帰って来た時、机の上に郵便物が何枚か置かれてあった気がする。それどころじゃなかったので確認もせず寝てしまったのだけれど、もしかしてその中にはあすかからの手紙が紛れていたのだろうか。

『今日ぐらいに着いてるはずだけど、もしかして届いてない？ あ、引越したりして住所変わった？』

「あ、いえ、そんなことないです」

立ち上がって部屋の明かりを点ければ、すぐに確認はできるだろう。けれど久美子の体は動かなかった。あすかとの通話に集中するあまり、体の動かし方をすっかり忘れてしまっていたのだ。

「ちよつと今日は具合悪くて、家に帰ってすぐ寝ちゃってて。まだ確認してなかったです」

久美子はそこだけ正直に言った。事情を詳しく話し出せば今日の一件やこれまでのことを全部あすかにぶち撒けてしまいそうだったし、それはしたくなかった。あすかに気を遣わせたくないという気持ちもあつたが、何より今のみじめな自分の姿を、あすかには見せたくなかったから。

『ありやりや、大丈夫？ もうコンクールも近いんでしょ。練習に影響しちゃうわない？』

「平気です。今日一日寝てたら大分良くなったんで」

『そっか』

そこで一旦会話が途切れる。何かを話さなければこのまま通話が終わってしまいそうな気がして、久美子は頭の中から必死に言葉を探り出そうと努める。

「それでその、手紙の中身って」

『それはまあ、見てからのお楽しみってことで』

何だろう。すごく気になる。もしかするとこの電話を掛けなければいけないかったほどに、その手紙には重要なことが書かれていたりするのだろうか。

『一応手紙がちゃんと届いたか確認するつもりで電話したんだけど、黄前ちゃん体調崩してるんならあんまり長話も不味いか。じゃ、あとで手紙読んどいてね』

「待つてください」

思わず大きな声で、久美子はあすかを引き留めていた。せつかくあすかの声が聴けたのに、せつかくあすかと繋がっているのに、ここで通話を終わらせたくない。もっとあすかと話していたい。その思いだけで、頭の中はいっぱいだった。

「あすか先輩はいま、どうしてるんですか」

『ん?』

久美子の問いに、あすかはどう答えたものか、と少し逡巡したらしい。うくん、と唸るような声を上げて、

『そうだね。今はようやく、自分のやりたい事ができるようになったトコ』

と、意味深なことを口にした。

「やりたい事、ですか」

それは一体何ですか。そう掘り下げたい衝動に駆られるが、文言が口から出てこない。あすかがこういう曖昧な、掴みどころのない物言いをする時というのは、その真意を明らかにしたくないと思っている時なのだ。少なくとも、今はまだ。あすかの気質をよく理解している久美子だからこそ、あえてそこに土足で踏み込むような真似はしない。

『それで折角のメッセージも見ろ暇ないくらい、もー忙しくてさ。ま

あその話は、またそのうちね』

「はい」

『それじゃあね。しっかりとやんなよバイビー』

「あの、先輩」

『何?』

「今度、私の方から電話してもいいですか」

たったそれだけを言うのに、久美子は精一杯の勇気を振り絞った。舐めた唇の端がカサカサに乾いている。あすかの返事があるまでの数秒にも満たないその時間を、久美子は気が遠くなるほど緊張して待っていた。

『もちろん、いいに決まってるじゃん』

じゃあしつかり休んで体調整えること。いいね。おやすみ。その言葉結びにして、あすかは通話を切った。通話時間が刻まれた携帯の画面を、久美子はしばし夢見心地で眺める。あすかの声が耳の中にほわほわとした残滓となって残っている。最後のその声は少しだけ嬉しがっていたように、久美子には感じられた。あすかとの繋がりは失われてなどいなかった。ずっと遠くに行ってしまったと思っていなければ、決してそんなことは無かった。自分から繋がろうと思えば、あすかはちゃんとそこに居てくれる。その確信は少なからず久美子を安堵させた。

少しずつ、体に生気が戻ってくるのを感じる。ベッドから立ち上がり部屋の明かりを点けると、机の上に数枚置かれた郵便物の一番上には『黄前久美子様』と秀麗な字で書かれた飾り気のない封筒があった。シンプルな金色のシールをめくり、中の便箋を取り出す。白色の便箋を広げてみると、そこにはやはりと言うべきか、整った美しい手書きの黒文字だけがびっしりと敷き詰められていた。自分達の年代にありがちな花柄も可愛らしいマスコットも、紙の上には一切描かれていない。そのサッパリした手紙の内容がいかにもあすからしい。苦笑しつつ、久美子はさっそく文面に目を走らせる。

『前略 黄前ちゃんへ 気付けば黄前ちゃんももう三年生なんだね。香織や晴香から黄前ちゃんが部長やってるって聞いてたけど、部長の

仕事はどう？ 思ってたより大変なんじゃない？』

大変どころじゃ無いですよ、と久美子は呟く。まさに今日、とんでもない失態を演じてしまったばかりだ。

『北宇治は今年も全国金賞を目指してると思うけど、毎日練習し通して部活のことも自分の進路もあれこれ考えなくちゃいけないくて、ホントご苦労さんって感じだね。私はそんなの全部放り出して、自分の事だけ考えてたけどさ』

その一文に、久美子は当時のあすかの姿を思い出す。自分の練習時間が削られることを本気で嫌がっていたあすか。麗奈と香織のソロオーディションを心の底からどうでもいいと言い切ったあすか。希美の部活復帰を頑なに認めなかったあすか。当時は不可解だと思っていた彼女の一つ一つの言動も、今ならば理解することが出来る。あすかもあすかなりに自分の置かれた状況と、自分自身の本当の気持ちと戦い続けていたのだ。そして賢明なあすかはその中で、自分が取りうる選択肢を冷静に見極め判断していた。時に周りを切り捨てて。己の感情すらも切り捨てて。そうまでしなければあすかは、自分のしたい事を自由にする権利すら得られなかったのだから。

『だけどさ、最近思うワケよ。もっとこうした方が良かったとか、あの時ああしてれば良かったとか、今さら高校時代を振り返っちゃってさ。だからあの時黄前ちゃんが本気で言ってくれなかったら、多分私はもつとずっと、今でも後悔することになったと思う』

そんな大層な事なんて言ったっけか、と久美子はかつての記憶を振り返る。あの時期は確かちょうど、姉の麻美子の事があったのだった。自分が本当にやりたいと望むその気持ちを押し殺し続けてきた事を、姉はずつと後悔していた。久美子はあすかにはそんな風になつて欲しくないと思つて、その思いをそのまま本人にぶつけた。つまるところ、自分はそれ以前からずっと、あすかに姉の姿を重ねて見ていたのだろう。だからこそ冷徹に振る舞うあすかの事が何だかんだで心のどこかに引っかかっていたし、あすかの本当の思いを、ありのままの姿を知ったことで、あすかの事がもつと好きになれたのだ。懐かしくも鮮烈な感情が蘇ってきて、胸がジンと熱くなる。

『あの時お礼を言い損ねてたこと、今ごろになって思い出して、でも直接言うのもなんか照れるからさ。それでこの手紙を書くことにしたんだ。ありがとうね、黄前ちゃん』

改めて告げられた感謝の言葉に、久美子は何だか体がくすぐったくなってしまう。お礼を言われるようなことじゃない。そもそもあすかを引き戻そうとしたのは半分は部のためだったけれど、もう半分は自分自身のためでもあったのだから。

『そんなわけで黄前ちゃんも、大変なことは多いと思うけど、まだ高校生なんだからさ。変に大人っぽく考えたりしないで、自分がやりたいと思ったことは後悔の無いように思いっきりやり切ること！ 黄前ちゃんならきつと周りにいる人たちがサポートしてくれるから。このあすか先輩が言うんだから間違いない！ 悩んだ時はいつでも相談に乗ってあげるから、気楽に連絡ちょうだいね。あなたの田中あすかより』

最後は少し茶化したようなことを書くあたり、やっぱりあすかはあすかだな、と妙に得心してしまう。しかしあすかは一体全体、どういうつもりでこの手紙を送って来たのだろうか？ よもや自分の荒れっぷりを誰か人づてに聞いたのでは……と考えかけたが、それは有り得ない事だとすぐに気が付いた。そもそもいかに天才のあすかと言えども、今日起こる出来事を予め昨日のうちに察知して手紙を送る、なんて超能力じみた芸当など出来よう筈も無い。今日電話を掛けてきたことと含めて、まったくの偶然と考えた方が理に適っている。そう、全ては偶然の産物。幾つかの物事がたまたま折り重なってこうなったという、ただそれだけの事なのだろう。

それにしても、だ。久美子はもう一度あすかからの手紙を読み返す。まだ高校生なんだから。それはかつて姉が自身の半生を省みて述べた言葉であり、自分があすかに放った言葉でもあった。それがまさか今になってこんな形で自分に返ってくるだなんて、思いもしなかった。

そうだ。自分はまだ高校生なんだ。

世の中の物事と上手に折り合いなんかつけられないし、自分の願望

をあれもこれもなんでも叶えられるわけじゃない。苦悩することもあれば失敗することだってある。部長だから、『特別』になりたいから、という気持ちがいつの間にか自分自身を雁字搦めに縛っていたのかも知れない。『高校生なんだから』というその言葉は、久美子の心に巻き付いていたその義務感に近い戒めを、不思議なほど呆気なくするすると解いていった。そこに在ったものは、恐ろしく純粋で、けれど強く赤く煌々と燃え盛る、自分の想いだけだった。

「後悔だけは、したくない」

久美子は大きく息を吸う。肺に空気が満ちるのを感じると、いつの間にか迷いはすっかり姿を消していた。こんなに晴れ晴れとした気持ちになったのは一体いつぶりだろう。もう逆戻りなんてしたくない。今はとにかく目の前のことに全身全霊で打ち込もう。時間はもうそんなに残されてはいないのだから。例えこの命を、この魂を賭けてでも、心から自分のやりたいと思える事に、己の本心に、忠実に生きよう。いつか、今の自分を後悔しないために。

「おはよう」

久美子が部室の扉を開けると、部員達が一斉にこちらを向く。

「久美子、大丈夫？」

いの一番に血相を変えて近づいてきたのは葉月だった。続けて昨日の会議に同席していたパートリーダー達がぞろぞろと集まり、輪となって久美子を取り囲む。一応昨日は体調不良という名目で練習を休んだことになっている手前、今朝の朝練も休むことにしたため、久美子にしてはかなり遅めの登校となっていた。

「うん。一日ぐっすり寝たら、もうすっかり」

少しだけ恥ずかしいような、いたたまれないような気分になって、久美子は無意識のうちに肩をすくめてしまう。後ろ手につまんだスカートの裾がどうにも収まりが悪いような心地だ。

「黄前さん、あの……昨日はごめん」

「私たち、つい言いすぎちゃって」

パートリーダー達は口々に謝罪の言葉を述べだしたが、それを久美

子は「待って、」手で制した。

「私の方こそ、ついカツとなっちゃって」

本当にごめん。潔く、久美子は深々と頭を下げる。こんなものでは到底足りないかと重々承知していたが、これがいまの自分に出来る精一杯の償いだった。

「それで、昨日は？」

「会議と合奏の段取りは、全部塚本がやってくれたよ」

葉月はそう言って秀一を指さす。そこにいた秀一は少しぼつが悪そうに、鼻の頭を指でぽりぽりと搔いていた。

「ありがとう、秀一」

久美子の謝辞に、ああ、と秀一はぶつきらぼうに返事をした。

「なあ、この後ちよつと話せるか。加藤と川島にも来て欲しいんだけど」

努めて平静を装った口調の秀一。他の部員達は低音パートの練習方針か何か、部に関する話を話し合うつもりだと思ったかも知れない。しかし秀一の表情には明らかに普段のそれと違う緊張の色が浮かんでいた。きっと秀一は何か自分に話があるのだ。それも葉月や緑輝を同席させてまでするべき重要な話が。

「いよいよ」

軽く頷いて、久美子は自分の席に鞆を置く。とその時、トランペットの列に座っている麗奈と目が合った。麗奈は微かに首を傾げて『大丈夫？』と目線で無言のメッセージを送ってくる。久美子もまた無言で『心配しないで』と柔らかく微笑み、

「それじゃ行くこう」

秀一と葉月、そして緑輝を引き連れ部室を出る。この時、緑輝はまだ暗い表情で視線を落とすままだった。

「それで、話っていうのは？」

四人会議の場所に秀一が選んだのは、先日彼らが密談をしていた家庭科室だった。教卓を横から挟むようにして久美子と秀一が向かい合い、その秀一の後ろには葉月と緑輝が並び立っている。傍目から見れば一対三の対立図だが、果たして本当にそうなるかどうかはこの話

の内容次第となるだろう。

「あのさ、別に隠し事するつもりじゃなかったんだけど」

「うん」

「実はこの二人には前から話してたんだ、俺が久美子と付き合ってるってこと」

そう言われて一度、久美子は葉月達を見やった。二人とも叱られた仔犬のようにシユンとうな垂れている。久美子に隠れて秀一と密談していた事実がこうして明かされるというのは、彼女たちにとって決して居心地の良いものでは無かったことだろう。

「それで久美子の好きなものとか、悩んだ時とか、時々相談に乗ってもらったりしてたんだけど。こないだの、あがた祭りの件も」

そこまで言って、秀一は唐突に頭を下げた。

「悪い。そのせいで俺が、川島の調子を狂わせちゃったんだ」

久美子は少しばかり意表を突かれる。秀一が二人に日頃から相談をしていたのは、先日の盗み聞きから推測はついていて。けれど緑輝の不調について秀一も自分のせいだと思いついていたなどは、まるで予想していなかった。

「秀一くん、そんな事ないです。緑の不調は緑のせいですから」

「いや、俺のせいだ」

緑輝が必死に弁解するも、秀一は頭を上げようとしなない。

「俺が久美子とこじれてる話を二人にしたから、それで多分色々悩んじゃまったんだと思う。そのせいで結局川島にも低音パートにも、部全体に迷惑掛けることになっちゃった。全部俺が悪いんだ」

頭を下げ続ける秀一に、それを言ったら私のせいだよ、と久美子は心の中で呟く。あの時あの場で自分にもう少し余裕があったなら、あんな暴拳に出る事など無かった筈だ。緑輝を含む低音パートの問題にだってもう少しうまく落としどころをつけられただろう。それが出来なかったのは、自分の力不足に他ならない。

「それで二人には事情を説明して、この際久美子に何もかも打ち明けることにした。久美子が追い詰められることになったのは、つまり、俺のせいなんだ」

ごめん、と秀一はもう一度頭を下げる。そうじゃないんだよ秀一。久美子がかぶりを振った。自分を追い詰めていたのは自分自身だ。秀一は何も悪くない。もちろん葉月も緑輝も悪くない。それを伝えるために、そろそろ自分も秀一にずっと黙っていたことを一つ白状しなければならぬだろう。

「実は私も、葉月ちゃん達には私達が付き合ってる事、話してたんだ。秀一には言っただけだ」

えっ、と驚きの顔をして秀一が身を起す。この感じだと、どうやら秀一は今の今までその事を知らなかったらしい。

「ホントなのか？」

「うん。でも二人とも義理堅いから、私が喋ったことも秀一から聞かされたことも、どっちにも言わないでいてくれてたみたい」

だよな？ と久美子は葉月に視線を送る。彼女は複雑そうな表情で後頭部の辺りを掻いた。

「いや、俺はてつきり、久美子は加藤や川島には俺らが付き合ってるのを隠したがってるのかなって思ってたんだけど。知られたら気まずいのかな、とかって」

秀一の弁に、思わず久美子はくすくすと吐息をこぼしてしまった。何だろう。何と言うか、似た者同士っていうのはきつとこういうことなんだだろうな、と思う。呆気に取られた秀一の顔がなんだか間抜けに見える、可笑しさを堪えきれない。

「それ、私もおんなじだよ。私も葉月ちゃんや緑ちゃんに私達が付き合ってるって知られたら、秀一的には気まずいかなって思ってた」

「いや、俺はそんな……」

そこまで言い掛けて、秀一はハアッと大きく溜め息をする。その顔は真っ赤に紅潮していた。

「じゃあ何だ。二人とも、俺らが付き合ってるってこと、俺と久美子の両方から聞いてたのかよ……」

「ごめんね」

葉月は申し訳なさそうに顔の前で両手を合わせる。

「あー、あたし達も両方から別々に聞いたから、あーじゃあこれは二人に

言つちやいけないな、つて思つて。もうこれ、緑と二人してお墓まで持っていくつもりだったよ」

秘密が明かされて肩の荷が下りた、とばかりに笑みを浮かべる葉月に対し、緑輝は未だに暗い表情のままだった。

「それはともかくとして」

秀一は咳払いをして、それから改めて久美子と正面から向き合つた。

「こんな形でみんなに迷惑掛けて、久美子もあんなことになって、やっぱり思つたんだ。これ以上久美子に負担は負わせられない、俺が重荷になるわけにはいかないって。だから——」

「秀一」

切迫する秀一が何らかの結論を出してしまう前に、久美子はそれを遮つた。秀一が何を言い出すのかは、先日の三人での密談と今のこの状況からすれば容易に想像できる、けれどそれは久美子の望む未来では無かった。確かに今は忙しすぎて他のことを考える余裕なんて無い。秀一とじっくり向き合えるだけの時間は取れないかも知れない。そのせいで秀一に辛い思いをさせてしまう事は、自分にとつても辛く耐えられないだろう。だけど、それでも。

「もう少しだけ、待つてもらつていい？」

「待つ？」

秀一が眉を寄せる。久美子は続きの言葉を柔らかかに述べた。

「私も今は正直、あれもこれもって全部考える余裕ないから、だから今すぐ結論を出すなんて出来ない。だけど秀一を苦しめたくもないし、離れたくもないよ。だからもう少しだけ私のわがままに付き合つて、待つててくれないかな」

久美子は一度、葉月と緑輝を見やる。次に言おうとしているセリフは、正直ここで言うにはかなり恥ずかしい代物だ。けれどこれを言わなければ、きつと秀一にも自分の気持ちは伝わらない。それに葉月も緑輝も、自分と秀一の為にここまで気を遣つてくれたのだ。彼女達にはこの場に立ち会うだけの権利と資格がある。そう考え、久美子は意を決した。

「私も、秀一の事が好きだつて気持ちには、変わりないから」

久美子のその一言で、秀一の頬はぼうつと桜色に染まった。

「だから、今はとにかく府大会が終わるまでは待つて欲しい。府大会までの間は部活に集中して、それからちゃんと二人で話し合つて、ちゃんと答えを出す。それが今の私にできる精一杯だから」

そう告げて、久美子は秀一の反応を窺った。顔を赤らめた秀一はとても複雑そうな表情をしている。嬉しそうな、何かを考えていそうな、ちよつと困っているような。やがて決心がついたのか、秀一はゆつくりと息を吐いた。

「分かったよ」

その顔には『しょうがねえな』という苦笑にも似た色が浮かんでいた。二人きりの時、久美子が我儘を言ったりつつけんどんに振る舞う時、秀一はいつもこういう顔をしていた。

「どうせここまであれこれ悩みながら過ごして来たんだ。府大会が終わるまでは、しっかり待つさ」

色々吹っ切れたらしい秀一がそこで一度、うん、と頷く。

「けどただ待つてるだけってのもしんどいからさ、部長の仕事で回せる事があるんなら俺にも回せよ。俺だって少しはやれるんだから。昨日見ただろ、加藤も川島も？」

「うん。慣れない仕事ですつかりテンパつて、あたふたしてる塚本の姿をね」

「おまつ、それ今言う事じゃないだろー！」

あつげらかんと葉月に暴露され、秀一は思い切り顔をしかめる。そのやり取りがまた可笑しくて、久美子はあはは、と笑い声を上げてしまった。

「とにかく三人とも、本当にありがとね。私のために色々気遣つてくれて」

「そんな、」

弾かれたように緑輝が口を開く。

「緑、ずっと悩んでました。久美子ちゃんと秀一君、二人の関係がこんな事になってしまつて、これでいいのかなつて。でももしかして、緑

達が間に入ってるせいで余計にこじれてしまってる部分もあったのかもって思っていました。でも二人とも緑の大切なお友達ですから、出来たらずっと仲良しでいて欲しくて。だから、緑達が何か出来るならした方がいいんじゃないかって、ずっとぐるぐる考えてたんです」

緑輝が哀願するような眼をこちらに向けてくる。くりくりとしたその円らかな瞳には、また少しだけ涙が滲んでいた。

「でも、今の二人を見てて思いました。二人は強い絆で結ばれているんだって。だからやっぱり、緑があれこれ悩んでしまった事で、二人にも吹部のみんなにも迷惑を掛けてしまいました」

本当にすみません、と頭を下げそうになる緑輝の肩を久美子は両手で押さえる。

「そんなことないよ」

誰かが自分の事をこんなにも思ってくれている。その温かさに、久美子は心の底から救われる思いがした。

「ありがとう。緑ちゃん」

「久美子ちゃん」

「私と秀一はもう大丈夫だから。緑ちゃんもこれからは、自分のことに集中して」

「そうだよ緑っ」

そこに葉月が飛び込んできて、久美子と緑輝の肩を両腕でがばりと抱きかかえる。

「私らにとつては今年が最後のチャンスなんだからさ。もち行くでしょ？ 全国」

「全国……」

葉月の腕に締め付けられ、緑輝が少し苦しそうに呟きを漏らす。そう、久美子達にとつて全国金賞の栄誉をこの手にできるチャンスはもはやこの夏一度きり。それも必ず行けるなんて保証はどこにも無い。持てる力を全て尽くしたとしても、他校がそれより良い演奏をして代表権を獲得したらそれまで。これを逃したら、次のチャンスが訪れる事はもう永遠に無いのだ。

「約束したじゃん私達。必ず全国行って金取ろうね、って」

「そうだよ。だからもう何も迷わないで、コンクールまで全力で頑張ろう。そうしたらきつと結果もついてくる。ね？」

なだめるように、久美子は緑輝の髪を優しく撫でる。明るい栗色の髪は猫っ毛で、手のひらにくしゃくしゃと絡まり甘い芳香を漂わせた。まるで幼い少女のようなその髪の柔らかさに、久美子はいつまでも触れていたい気分だった。

「……はいー」

緑輝にようやく笑顔が戻ってきた。秀一はそんな久美子達の様子を腕組みしながら満足げに眺めていた。

「さて、無事に一件落着いたところで、久美子はいよいよ大勝負だな」「うん」

久美子は頷く。今日は夏休み初日。そして明後日はホール練習、つまりソロオーデイションの日である。残りたったの二日間で昨日休んでしまった分の遅れを取り戻しながら、ソロを勝ち取るために最後の大詰めをしなければならぬ。残された時間はあまりにも少ないけれど、それを理由に諦めるような真似は、もうしたくなかった。恋人に、親友達に報いる為にも、麗奈の為にも、何より自分自身の為にも、今の自分が為すべきは目前の勝負に全力で挑む事だけだ。

「やれるだけはやってみせるよ」

それは秀一への返答なのか、はたまた自分へ向けたものだったのか。発言こそ謙虚なものだったが、久美子の中には不思議と強い自信が泉のごとく湧き上がっていた。今の自分になら何でも出来るという、確固たる自信が。

二日間の練習時間はあっという間に過ぎ去った。丸一日の休養は久美子の演奏面にほとんど影響が無かったばかりか、休む前よりも明らかに調子を伸ばしていた。それは秀一との事や緑輝の悩みが解決したことで久美子自身の気持ちも晴れたからなのか、単純にぐっすり寝たことで体調が良くなったからなのか、それともあすかのお陰なのか、それは分からない。緑輝もまたあの日を境にスランプから脱出できたようで、瞬く間に演奏の腕は元通りとなった。低音パートの練習

はいつも通りの光景を取り戻し、久美子も雫も各々の音を万全に仕上げたところで、ついにその時はやって来た。

「それではこれより、ソロ奏者のオーデイションを始めます」

二日間借り切ったホール練習。その場所で、薄暗い観客席の中央に立つた滝が声を張る。

「なおフルート・オーボエは複数の希望者がいませんでしたので、事前の告知通りフルートは小田さん、オーボエは桧山さんにそれぞれ担当してもらいます」

「はい」

「既に音出しも終わっていると思いますので、サククスソロから順に行っていきましょう。それではよろしくお願いします」

ホール内の静謐な空気が、久美子の緊張を否応なしに増幅する。観客席には大勢の部員達が中段から後方の座席にまとまって座り、久美子を含めたオーデイションに参加する数名の部員達は前方の席に、楽器持参で着座していた。壇上にはこれから演奏をすることになるサククスパートの二名の他、副顧問の美知恵が立っている。希望者の演奏後にはどちらがソロに相応しいかを全員の挙手によって決定することになるのだが、その挙手を壇上から数える役目を美知恵は担っていた。

もしも挙手が同数あるいは僅差だった場合には、これもまた滝の判断に委ねられることとなる。そういう場合選ばれるのは、昨年の例で言えばその年で引退となる三年生が大半だったのだが、だからと言ってそれも絶対という訳では無い。あくまでも滝が適格と判断した人が選ばれるのであり、そうでなければ挙手数で上回っていても合格できないという可能性も、その実例もある。久美子がここでソロの座を確実なものとするためにはつまり、誰もが良いと認める演奏を披露し部員全員の挙手数で雫に圧勝する、それ以外に無いのである。

「——以上、サククスパートのソロは広田ひろたさんで決定です。では次に、トランペットパート」

「はい」

麗奈と幸恵が揃って返事をする。楽器を携え壇上へと登る麗奈の

姿はきらきらと輝いていた。彼女瞳は至って真剣そのもので、集中はしているけれども決して余裕を失ってはいない。その根底にあるのは絶対の自信。麗奈のこういう姿を見る時、久美子はいつも『特別』とはかくあるべし、というビジョンを麗奈に重ねていた。その瞬間が、たまらなく好きだった。

対する幸恵はと言えば、こちらはかなり緊張の色合いが濃かった。元があたり性ということもあるのだろうが、目の前にいるのは滝を含めた北宇治の部員全員、隣に立つ勝負の相手は憧れの存在である麗奈、自分はまだひよっこ同然の一年生。これで緊張するなという方が無理だろう。それでも深呼吸の後に決然と前を見据える幸恵の姿は、これまた久美子の眼に凛々しく映って見えた。

「それではまず、高坂さんからお願いします」  
「はい」

麗奈が楽器を構える。少しだけ足を開き、上体をリラックスさせて音も無く息を吸い、そして麗奈は手に持った金色のトランペットを十全に震わせる。その響きは一瞬でホール全体を圧倒した。出だしから聴衆を貫く真つすぐで伸びやかな音。甲高く放たれるファンファーレ。仄かに寂寥感を抱かせるビブラート。全てを完璧に吹きこなし、麗奈は楽器を下ろす。

「ありがとうございました」

堂々と一礼する麗奈の所作は完璧に整っていた。まるで全てが予定調和で出来ているみたいだ、と久美子は思った。

「それでは次に、東中さん。お願いします」  
「はいっ」

滝に返事をして一步前に出る幸恵の足は、明らかに竦んでいた。これほどの演奏の後に自分が吹かされる、そのプレッシャーは計り知れない。幸恵はゆつくりと長く息を吐き出し、それからゆつくりと楽器を構えた。微かに呼吸を整える音がベルから漏れ聞こえる。一度目を閉じ、次に開いてから、幸恵は自分の音を奏で始めた。

久美子は彼女の音に神経を集中させる。決して幸恵の演奏は下手ではない、どころか、この数週間で格段の上達ぶりを見せていた。高

い目標を見据えて練習を重ねてきたからだろうか。その音は実に研ぎ澄まされていたし、音程もきちんと担保されている。音の鳴りも充分で、一般に言うところの『上手い』と評される水準には達していた。比較対象が麗奈でさえ無ければ。

「ありがとうございます」

演奏を終えた幸恵が、ぎこちなく頭を下げる。

「それでは、採決を行います。高坂さんがソロに相応しいと思った人」  
滝に問われ、多くの生徒が一齐に手を挙げた。前方に座っている久美子にはその全容は把握できないが、恐らくは自分を含めたほぼ全員が手を挙げていることだろう。と思つて隣を見ると、雫は手を挙げていなかった。結果の分かり切っている勝負にいちいち挙手をするのも面倒だったのかも知れない。それとも他に何か理由が、例えば友の勝利に一票を投じる肚積もりでもあったのか。

「はい、もう下ろして結構です」

美知恵の数え上げを待たず、滝は部員達の手を下げさせる。そもそもこれだけ圧倒的多数が手を挙げているなら、既に結果は見えたも同然だ。

「皆さんの判断と同様、私も高坂さんの演奏は際立って優れていると感じました。一つひとつの音の精度が高く、微細な表現の違いがきちんと出来ています。東中さんの演奏も素晴らしかったです。この点で高坂さんと大きな差が開いています。今後の練習を通じて高坂さんから多くを学んで下さい」

「はい」

壇上の麗奈は少し頬を赤らめている。敬愛する滝に褒められたことを純粹に嬉しがっているのだろう。一方の幸恵はと言えば、勝負から解放され清々しい顔つきになっていた。ほんの少しだけ、麗奈に勝てなかったという悔しさを滲ませつつも、何かに納得したような面持ちで幸恵はホールの天井を見上げている。

それはともかくとして、挙手の後にはこうして滝の寸評が入る。これもソロオーディションが現在の方式になってからは恒例の事であり、オーディション後も部員のモチベーションを保てるようにという

滝の配慮によるものであった。逆に拳手に不審な点、例えば組織票のようなものが働いていると滝が判断した場合はこの時点で異を唱えられてしまう。勝敗を分かつものは純粋に『より良い音』。それだけなのだ。

「以上、トランペットパートのソロは高坂さんで決定です。それでは最後、ユーフォ」

「はい」

返事をして、久美子と雫が同時に席を立った。背筋をわざわざと熱い滾りが駆け上ってゆく。心臓がどくどくと跳ね馬のように脈動している。全身に緊張の波が満ち満ちて、そのまま自分の体を破って飛び出していきそうだ。けれど頭の中は、不思議なほどに落ち着いている。いよいよだ。泣いても笑ってもここで勝負が決まる。

壇上から降りて来る麗奈と、久美子はすれ違いざまに目が合う。その瞬間、麗奈は小声で一言だけを告げた。

「待ってるから」

それは一体どういうことなのだろう。麗奈が待っているのは、コンクールと一緒にソロを吹く瞬間？ それとも麗奈と同じ高みへ来ること？ その真意は分からない。けれど今言えるのは、麗奈は自分の実力を認めてくれている。期待してくれている。それに応えるには、今というこの瞬間、自分に出来る最高の演奏をすることしかない。

『任せて』

そう答えるつもりで久美子は頷く。麗奈はそれを見て、くしやりと顔を綻ばせた、ように見えた。

照明を注がれた壇上の真ん中に立つと、客席にいる部員達の顔はほとんど分からなかった。最前列付近の席に座っている麗奈や幸恵の顔だけは、なんとなく認識することが出来る。それをゆっくりと眺めている余裕までは流石に無かったけれど、その時の久美子には目の前の視界がやけに広く感じられた。緊張している筈なのにリラックスもしている。それでいて、気持ちは目の前の演奏に向けてしっかり集中している。その感覚は実に奇妙で、久美子がこれまでに体験したことのないものだった。

「では、黄前さんからお願ひします」

「はい」

滝に返事をして、久美子はユーフォを構える。三年間ずっと一緒に過ごして来た相棒。毎日丁寧に入れをして、磨き上げて、今日もその調子は万全だった。このオーデイション中も久美子はずっとユーフォを懐に抱き、温もりを失わぬよう注意を払っていた。そのお陰か、ふつと息を通したユーフォの感触はいつも以上に自分自身と溶け合っているように思える。

ゆつくり深く息を吸い込み、唇を震わせ、最初の音を出す。出だしのハイトーンを音を崩さぬよう、それでいて弱い音にならないよう、絶妙な加減で吹き鳴らす。ビブラートを豊かに利かせ、ベルから放たれる自分の音が会場中を包み込むことを意識しながら、久美子は自分の音を響かせる。脳内に浮かんだのは、いつか大吉山と一緒に吹いた時の麗奈の姿。二人で練習を重ねた日々。そして、コンクールの舞台で二人の音が絡み合い響き合うイメージ。それらを大事に、そつと音で包み込むように、久美子は旋律を紡ぎ上げていった。だってこのソロを吹きたいと思った一番の理由、それは、

『そこに麗奈がいてくれるから』

最後の音を吹き切り、マウスピースから唇を離す。ホール中に残響が溶け込み、やがて静けさを取り戻したのを見届けてから、久美子は思いを込めて一礼した。

「ありがとうございます」

演奏の手応えは十二分だった。それどころか、今までで最も良い音を奏でられたと思う。あとは雫の演奏がどうであるか。正直ミスを期待できる相手ではない。雫の演奏はいつだってパーフェクトで、それはこの大一番でも決して揺らぐことはないだろう。大丈夫、自分の持てる全てはもはや出し尽くした。後は結果を待つだけだ。自分を信じて。久美子は胸に抱いたユーフォの管を、ぎゅうつと握り締める。

「それでは芹沢さん、お願ひします」

「はい」

雫が一步前へと進み出る。幸恵と違い、その動きに緊張や委縮の気配は無い。まるでいつも通りとでも言うようにゆつくりと楽器を構え、深く息を吸い込んだ雫は出だしのハイトーンを鳴らした。久美子の全身がビリビリと震える。何度も聴いた雫の音。優しく、時に力強く、変幻自在のその音は目まぐるしく色を変え、美しいメロディをホール中に響き渡らせていった。

久美子は部員達の様子をそつと窺う。明るいステージからでは、暗い観客席の様子はハッキリとは判らない。それに距離もあるのでおぼろげではあるのだがしかし、部員達もまた雫のその音に圧倒されているらしいことは何となくわかった。ついさつきまで己のベストを尽くせた達成感でいっぱいだったのに、胸中は瞬く間に不安の荒波に翻弄されてしまう。大丈夫。大丈夫。何の根拠もないけれど、きつと大丈夫。雫の演奏が終わるまでの間、久美子は何度も何度も自分自身に、そう必死に言い聞かせ続けていた。

「ありがとうございます」

演奏を終えた雫が淡々と頭を下げる。二人の演奏は終わった。後は部員達による裁定が下るのを待つのみだ。ばくばくと全身を駆けずり回る血流の音が、はつきり耳に届くような気さえする。プレッシャーに耐えかねて、己の視線が少しずつ下に落ちていくのを久美子は感じた。ダメだ、逃げちゃいけない。『特別』になるなら、麗奈と並びたいのなら、ちゃんと前を向くんだ。自分の演奏の、その結果を、受け止めるために。

「それでは、採決を行います」

ぎゆうと唇を噛み締め、久美子は無理矢理に顔を上げた。

「黄前さんがソロに相応しいと思った人」

滝のその一声で、座席に座る部員達が続々と手を挙げていく。思ったよりも多くの人が手を挙げたことに、久美子は胸をじりじりと焦がされるような気分だった。正確な数は判らないが、おおよそ半数ぐらいの部員が手を挙げているだろうか。久美子の横に立った美知恵がそれを指差して数えていく。

「では次に、芹沢さんがソロに相応しいと思った人」

先ほど手を挙げなかった部員達が手を挙げていく。誰が手を挙げたのか、などといちいち確認をするだけの余裕などまるで無かった。どっちだ。どっちが多い。自分か、それとも雫か。頭の中はそれだけで一杯だった。

「松本先生、お願いします」

美知恵が滝に頷きを返し、カツカツと靴音を響かせながら舞台の前面に歩み出る。久美子は息を呑んだ。どうか、どうか勝てますように。久美子はただ無心に祈る。それが何に對してなのかは分からなかった。いつかの時と同じような、何度も味わったようなその感覚は、恐らくこれまでの人生の中で最も大きく、最も重いものだった。「それでは結果を発表する」

美知恵が次に口を開くその瞬間、その口の一つ一つの動きがポラロイド写真のように、久美子の脳内へくつきりと焼き付けられていった。

「ユーフォのソロオーディション、黄前久美子、四十五票。芹沢雫、三十八票」

久美子は我が耳を疑う。勝った？ 自分が、雫に、勝ったのか？

今にも腹の底から込み上げようとする高揚感は、しかし同時に、別の正体不明な感覚によって抑制されていた。そうだ、まだ勝敗が本当に決まったわけじゃ無い。煮え切らない感情の裏で、あるいはそのお陰か、種々の情報が頭の中で整理されていく。こういうケースの場合、裁定を下すのは得票数でも学年の序列でも無い。

弾かれたように、久美子はホール中央の滝を見た。結果を受けた滝がゆっくりと舞台へ向かって歩いてくる。

「票数では黄前さんが、七票リードですね」

滝は喋りながら階段を上り、舞台へと登壇した。この状況での決定権をいま握っているのは、そう、顧問である滝その人だ。滝はどちらがソロに相応しいと感じているのか。最後に微笑むのは一体どちらだ？ 久美子の口の中は、限界まで張り詰めた緊張のせいでカラカラに干上がっていた。

「普段ならここで私の意見と判断を話すところですが、今回は皆さん

に尋ねます。先ほど黄前さんがソロに相応しいと手を挙げた皆さん、すみませんがもう一度挙手をお願いします」

滝の眼鏡が光る。再度挙手を求める、その意図するところは何なのだろう。足の裏から立った怖気が髪の毛の先までぴりぴりと駆け抜けてゆく。雫を支持した部員らは滝の行動を訝しんでいるのか、ひそひそと小声で何かを話している。この時間があまりにも狂おしい。手を挙げた部員達の中からめぼしい人物を見つけたらしく、滝は一人の部員に向かって手を差し伸べた。

「フルート小田さん。あなたは何故、黄前さんの方がソロに相応しいと感じましたか？」

指名を受けた小田がその場に立ち上がる。そして滝の方をまっすぐ向いて、こう述べた。

「正直、黄前さんと芹沢さん、どっちの演奏もすごく上手で迷いました。それでも黄前さんに手を挙げたのは、黄前さんの音がトランペットの高坂さんの音にぴったり合ってるって、そう感じたからです」

え。久美子は呆氣に取られた。今回ソロパートの練習を始めてからこれまで、自分の音が麗奈の音に合う、そんな感覚を久美子は一度も持ったことが無かった。考えてみれば自由曲が決まってから今日までずっと、二人だけでこのソロを合わせたことも無い。これまで自分は目の前にいた雫のことばかり考え練習に明け暮れていたが、するところつまり自分は自分でも知らぬうちに麗奈の音を意識しながら吹いていたのだろうか。そしてそれが観客である部員に、少なくとも小田には伝わったと、そういうことなのか？

「わかりました」

滝は小田を着席させる。そして振り返り、久美子と雫の二人をそれぞれ一瞥した。

「芹沢さんの演奏は技術的に、非常に高いレベルを持っていました。多くの部員達が挙手したことからも分かる通り、黄前さんと拮抗していたと思います。この点だけを見ればどちらがソロに選ばれても不思議はなかったでしょう」

照明の光の下、滝は一瞬だけ優しい瞳を見せた。

「ですが黄前さんの演奏はそれに加えて、後に続く高坂さんの演奏へと繋がる音の表現が出来ていました。私が聴く限り、黄前さんと芹沢さん、二人の演奏で最も大きな差異となっていたのはこの部分です。それを感じ取った人も黄前さんに手を挙げたのだと、私は思います」

そして滝が振り返り、今度は部員達に向かって頷く。

「私は黄前さんがソロに相応しいと判断します。この判断に異論のある人は、この場で挙手をお願いします」

そこで手を挙げる部員は、誰一人としていなかった。この瞬間、ソロオーディションの勝敗は決した。

「それでは、ユーフオのソロは黄前さんで決定です」

瞬間、心の中にあつた抑制が次第に薄まり、それと同時に今度こそ、強烈な高揚感がじわじわと頭の中に沁み出してくるのがわかった。やった。やった。私、ソロに選ばれたんだ。コンクールの舞台で、ソロを、吹けるんだ。麗奈と、麗奈と一緒に！ 会心の思いに久美子は拳を握り締める。一刻も早くこの喜びを、下で待つ麗奈と、仲間達と分かち合いたい。そう思いながら隣に立つ雫の顔を覗き見た途端、それまでの喜びなど一瞬で吹き飛ばされてしまうほどの衝撃に、久美子は胸をぐざりと貫かれた。

いつも冷静沈着な雫。何を言われても表情一つ変えない雫。ついさつきだって素晴らしい演奏をやり遂げたにも関わらず、何事も無かったような振る舞いを見せていた雫。そんな雫が、あの雫が、その整った顔を思い切り歪めていた。小さく細い肩は小刻みに震え、目から溢れ出したものが彼女の足元にぼたぼたと落ち、檜の床に黒い染みをいくつも作り出す。自分の内なる感情を必死に押し殺すように、雫はそこに立ち尽くしたまま、声も無く嗚咽していた。

初めて感情を露わにした雫の姿を目の当たりにして、久美子は言葉を失った。いま雫に話し掛けるべきではない。慰めだろうが労いだろうが、話し掛ければとんでもないことになってしまう。己の本能がそんなふうには、警告を発していた。

その後、雫は幸恵によってホールの外へと連れ出され、しばらくしてから二人で戻って来た。ホールでの合奏練習は滞りなく進められ、

その時にはもう雫はいつも通りの雫に戻っていて、奏でる音もいつも通り美しく乱れの無い音だった。それでも結局その日の練習が終わるまで、久美子は雫と会話をすることは無かった。

「びっくりしたよねー。あの芹沢さんが、まさか泣くなんてさ」

ホール練習の帰り道、葉月が大きく唸りを上げる。

「オーディションで負けちゃったのが、よっぽど悔しかったのかな」

「かも知れません。雫ちゃん、中学時代はオーディションで負け無しでしたから」

傍らを一緒に歩く緑輝もまた葉月に同調している。久美子は麗奈と共に少し後ろをとぼとぼと歩きながら、雫の涙の理由を考えていた。悔しい？ 確かにそれはあっただろう。仮にあの状況で自分が負けていたとしたなら、やっぱり恐ろしく悔しいと感じただろうし、涙を流していたと思う。あるいは自分が負けた理由を受け入れられなかった？ それもあり得る。客観的な評価としても、自分と雫との間にほとんど明確な実力差など無かったことに疑いの余地は無い。それは雫だつて解つていたと思う。それ故に、僅かな表現力の差で負けたということに、雫は納得し切れていないのかも知れない。

かく言う自分だつて、本当にあの演奏で雫を制することが出来たかと問われれば、正直その実感は乏しかった。オーディションでの演奏が今の自分に出来る限りなくベストな演奏であつたことは間違いないし、決定の瞬間は勝てた喜びが大きかったのでそんなことを考える余裕も無かった。けれど雫の涙を見て驚き、沸騰していた思考もその後の合奏を経て冷却された今となつては、少し違う。いくら麗奈の音に合わせた演奏が出来ていたとは言え、それが勝利の大きな要因であつたとは言えないのではないか？ それからずっと、何だか雲の上にもも立っているかのようなふわふわとした心境で、久美子はひどく落ち着かなかつた。

「いいんじゃないの。久美子の音の方が芹沢さんより優れてるって滝先生が判断した、それが事実なんだし」

久美子の隣を歩いてきた麗奈が、前方でやいのやいのと交わされていた葉月達の間答に割って入る。

「それよりも、これからはコンクールに向けて全体の音を高めていかなくちやいけない。私達はそれに集中しなくちや。違う?」

麗奈の口調にはほんの少しだけ、その話題を早く終わらせるべき、という意図が滲んでいるように感じられた。それを葉月達も察したのか、「あ、」と口に手を当てた。

「そうだね。明日もホール練習だし、これからは集中してやってかないとね」

葉月の言う通り、明日の練習もホールを借り切って朝から夜まで行われることになっている。府大会前のホール練習はこれが最後。ここで音の響きや感覚を十分に掴んでおかなくてはならない。貴重な時間を雑念で疎かにしてしまうような余裕は、今の北宇治には無い筈だ。久美子の個人的感情はさておくとして、気持ちの切り替えが大事という趣旨の麗奈の弁に嘘偽りは無い筈だ。

「じゃ、私達ここで。二人ともまた明日ね」

「明日も頑張りましょう、久美子ちゃん麗奈ちゃん。ではー」

別れの挨拶と共にJR宇治駅の改札をくぐった葉月と緑輝を、久美子と麗奈は手を振って見送った。本来久美子達は途中で別れて各々の家に向かう方が早く帰り着けたのだが、電車に乗る葉月達を見送るために少しだけ遠回りした格好である。久美子達の楽器はホールに置いたままだが、麗奈だけは自宅で練習をするために、今日もトランペットケースをその手に提げていた。

「私達も帰ろうか」

麗奈が先に駅舎の階段を降りてゆき、久美子もその後を追う。茶つぼ型のポストを横目に駅前広場を抜け、二人はそのまま真っすぐ宇治橋の方角へと歩みを進める。言葉少なに通りを歩いていくと、前方に宇治橋西詰の交差点が見えてきた。麗奈の家は宇治川を挟んで久美子の家とは対岸側にあり、今日はいつもの京阪宇治駅ではなくJR宇治駅側から来ているため、この橋のたもとで二人は別れることになる。

「それじゃ、また明日ね」

麗奈と別れ、久美子は自宅方向への横断歩道を渡ろうとした……の

だが、何故か麗奈がそれについてくる。

「あれ？」

「今日はちよつと、遠回りして帰りたい気分だから」

どういふ風の吹き回しか、と尋ねる暇も無いままに、結局二人して交差点を渡り切つてしまった。ここから久美子の家までは『あじろぎの道』と呼ばれる川沿いの散策道を抜けていくのが一番近い。普段は一人か、ごくたまに秀一と歩くこともあるこの道だが、考えてみれば麗奈と歩く機会はあまり無かつた気がする。いや、ひよつとして初めてかも。この三年間、麗奈と二人で色々な景色を見たり色々なところに行つたように思つていたけれど、実は自分の家のすぐ傍に麗奈のいない光景がまだあつたかも知れない、と久美子は少しばかり虚を突かれる思いがした。

「落ち着くね」

麗奈がぼつりと漏らす。微かに昼間のお茶の匂いが残り香となつて漂っているからなのか、あるいは家の近くだという安心感からなのか、確かに久美子の心も凪いでいた。木々のトンネルに覆われた細い道を抜け宇治川を左手に見ながら進んでいくと、やがて川面の光に照らされた石造りの塔が見えてくる。あの塔がある島は文字通り『塔の島』と呼ばれていて、島へ渡る朱塗りの橋まで来ると、流石に麗奈とは完全に逆方向へ歩き出すことになる。何となく、静謐な空気にも後押しされて、麗奈に訊くなら今だと久美子は直感した。

「ねえ麗奈」

「ん？」

歩みを止めずに麗奈が応える。

「私、本当に芹沢さんの演奏に、勝てたのかな」

尋ねながら、久美子は麗奈の挙動を窺う。ついさつき『コンクールに集中するべき』という麗奈の発言があつた手前、もしこの質問に麗奈が不快感を示すようだったらすぐに撤回するつもりでいた。麗奈は質問には答えぬまま、少し先を歩いていく。件の朱塗りの橋まで来て、やはり聞かなければ良かったかと久美子が後悔し始めたところで、麗奈は唐突に立ち止まつた。

「私は、久美子の演奏の方が良かったって思ってる」

麗奈から出たのは、ただその一言。けれど久美子にとって、その一言には他のどんな言葉よりも、胸を打たれる思いだった。麗奈は音楽に関してはいつだって厳正で、その判断には久美子が見る限り間違いが無い。その麗奈が、自分を評価してくれた。それは久美子にとってこれ以上ない回答であり、何にも代えがたい勲章だった。

「ありがとう」

ようやく本当の意味で、久美子の表情が和らぐ。麗奈もまた安堵したように笑顔を浮かべた。さらさらと淑やかな宇治川のせせらぎが、二人の間に流れる時間を満たしていく。

「全国で響かせよう。私達の音」

そう告げる麗奈の挑戦的な瞳にあてられて、久美子は今にも膝から崩れ落ちてしまいそうだった。私はこの高坂麗奈と一緒にソロを吹くことが出来る。その実感がひたひたと、久美子の体に注がれている。その味はとても甘美で豊潤で、勝利の美酒を飲んだ時の気分とはこういうものなのか、と思わずにはおれなかった。もつともお酒なんて一滴も飲んだことが無いので、本当の味など想像しようもなかったのだけだ。

「うん、響かせよう。全国で」

久美子は麗奈に歩み寄り、その右手をそつと掴む。そしてゆるりと持ち上げ、指を絡ませるようにきゅつと握った。握られた麗奈の指にも力が込められる。互いの決意を確認し合うように。ソロに選ばれたその喜びを、互いにそつと噛み締め合うように。

そのまましばらくの間、二人は言葉もなく手を握り合っていた。夜闇に浮かぶ月からこぼれる光だけが、二人の姿をふわりと蒼く包んでいた。

「サックス、フォルティシモの音が粗いです。ただ大きな音を出すのでなく、もつと音を引き締めて下さい」

「はい」

「それからフルート、音の形がぼやけています。以前から何度も注意

している点です。縦の線とアーティキュレーションを揃えて、集中を切らさないように」

「はい」

翌日のホール練習においても、滝の指導は相変わらず厳しい。ソロオーディションが終わったからと言って浮かれている余裕は全く無く、昨日の麗奈の言葉通り、いよいよコンクール本番に向けて最大限に集中する時が来ていた。

「チューバ星田君。この箇所はいつまでに出来ますか？ 今の演奏のままでは、コンクールの本番にはとても出せるものではありません」  
「はい……」

「返事ではなく返答を下さい。いつまでですか？」

強い口調で滝に責められる星田の表情は、この上ない苦悶に歪んでいた。緑輝の復調後、低音パート全体の完成度も飛躍的に伸びてきてはいるのだが、星田が引つかかっている例の部分だけは未だに解消されないままだ。星田としても個人練で必死に取り組んでいる部分ではあつたし、葉月や美佳子も星田のために特別レッスンやアドバイスを行ってはいる。少しずつではあるが上達もしていた。だがどうしても滝の要求を超えるところまでは届いておらず、星田にとっては苦しい時間が続いている。しばらく待っても答えを出せない星田に見切りをつけたのか、滝は星田にこう言い放った。

「今週一杯までに吹けるようになって下さい。出来なければ、府大会ではここを吹かずにやり過ぐす他はありません。星田君、いいですか？」

「……っ、はい」

やや迷っていたものの、最終的に星田は決然と首肯した。半ばやけくそなのかも知れないが、星田にだって意地はあるだろう。是が非でも吹いてやる、という彼の思いは久美子にも良く理解できる。そしてその思いが無ければ、今までの自分という名の殻は決して打ち破れやしないのだ、ということも。

「それでは次に移ります。第三部の中間から、全員で」

はい、と返事をして久美子はすかさず楽器を構えた。この一刻一刻

が自分達の音を磨く大事な時間だ。一つずつの指示は微々たる変化しかもたらさなくても、それが積み重なっていけば音のクオリティは大きく変わる。だからこそ、一つ一つの指示にしっかりと対応してものにして行かなければならない。それを繰り返していった先に出来上がったものがコンクールでの結果に繋がるのだ。ほんのひと時だって無駄には出来ない。流れゆく音符と示される滝の要求を確実にこなしながら、久美子は自分の音に集中していった。

かくて二週間後。早朝の部屋にまだ人影はなく、しんと静まり返った空気は仄かに熱を帯び始めていた。窓から差し込む朝日が宙に舞う埃を映し出し、それを少しだけぼうつと眺めてから、久美子は楽器ケースに収まった自分のユーフォをつつと指で撫でる。昨日、久美子の手でぴかぴかに磨き上げられたばかりの金メッキ、正しくはクリアラツカー仕上げの管体。それは今日も歪みなく、真正面にいる久美子の顔をぎらりと映し出している。ピストンオイルも注したし、チューニング管用のスライドグリスもきちんと塗った。何一つとして問題はない。全ての手入れが万全であることを確認して、久美子はケースの蓋をぱたんとは閉じた。と同時に、昨日の滝との会話を思い出す。

\* 「ちようど良かった。実は進路の件で、黄前さんにお話ししたいことがあったんです」

昨日の早朝、いつものように部屋の鍵を取りに行った久美子に、滝は開口一番それを告げてきた。

「私、外で待つてようか？」

話題が進路のことだったからか、麗奈が遠慮して席を外そうとするのを「いいよ」と久美子は留めた。

「黄前さん。志望先の大学ですが、もう目星はついていますか？」

「それは……」

滝の質問に久美子は言い淀む。実はこのところ、毎日の練習と自宅での勉強を優先していて、志望先の調査についてはやや遅れ気味に

なっていた。本来であれば調査の時間も大切にすべきではあるのだが、コンクール直前のこの時期はさすがに練習を優先したかったし、かと言って以前のように睡眠時間を犠牲にするのは避けるべきだと久美子は結論していた。それでも一応、今の自分の条件に適う志望先を既に幾つかリストアップしてはいる。だがそこから自分の目指すプロの道へと進む事が遙か険しい道のりであると容易に予想できたが故に、本当にそこを第一志望とすべきか今ひとつ判断に悩んでいた、というのが本音であった。

そんな久美子の様子を見て、滝も状況を把握したとばかりに喉を鳴らした。

「でしたら、まずはこの資料に目を通してみてください」

滝は机の本立てから大判の封筒を抜き出し、久美子へと渡した。中の資料を取り出してみると、そこには大きく『千束大学 Senzoku University』と書かれたパンフレットなどがある。裏面にある所在地などの情報を見るに、どうやら関東にある私立大学のようなのだ。

「あれから音楽関係の教育をしている知人などに色々話を伺いましたね。私ではどうにも進路関係の情報には疎いところがありましたから、主に黄前さんの条件に見合いそうな大学が無いかどうか、調べてもらっていたのですが」

久美子はパンフレットの一枚目をめくってみた。そこに『教育学部 総合芸術学科 音楽表現専修』という文字を見つける。

「それです」

滝もそのパンフレットに書かれた文字を指した。

「これって、音楽の先生になるコースじゃないんですか？」

久美子は訝しんだ。自分の希望進路は音楽教師ではなく、あくまで演奏者としての道だ。一見すれば音楽の課程であることに変わりはないものの、先頭に書かれた教育学部という一文にはどうしても引つかる部分もある。もっとも先日の滝の話にもあったように、教育学部からでも音楽の勉強をしてプロになるという道も、必ずしも無いわけではないのだろうか。

「概ねはそうなのですが、こちらの大学が今少し面白い事になっていくそうでした」

続きをどうぞ、と滝に促されるまま、久美子はさらにパンフレットのページをめくっていく。

「こちらの音楽表現専修コースは元々は、音楽表現を研修して現場での教育に活かす、つまり私のように音楽の教師や音楽系クラブの顧問になる人材を養成する、という方向性でした。ですので当然プロを嘱望する人達の為の進路ではありません。が、しかし、このコースで学んでいた学生が昨年開かれた国内の新人音楽コンクールで上位入賞したのだそうです」

ええっ、と久美子は驚く。これには麗奈も目を見開いていた。

「勿論そのコンクールも、入賞者はプロとしての活動に道が開ける大きなものです。大学側もこれを受けて、今年度からはさらに器楽専攻の志望者を広く募り、教育以外の様々な場面で活躍できる人材を養成する方針になったそうです。次のページを見てください」

さらに一枚ページをめくると、そこには件の専修コースを受け持つ教授陣の写真と名前、経歴などがずらずらと記されている。その一番最後、『客員教授』の項目に目を移したとき、久美子は思わず声を上げた。

「滝先生、これって」

驚きと興奮を隠しきれない久美子に、滝は大きく頷いてみせた。

「いかがでしょう。この方なら黄前さんの志望を叶えるにあたり、この上ない指導者たりえると私は思います。現役のユーフォ奏者であり、プロへの道にも多くの知見があるはずです」

滝の言わんとするところがようやく久美子にも飲み込めた。確かにこの人ならば、自分の憧れに限りなく近い位置にあることは間違いない。ユーフォを始めて間もない時からずっと、それは自分にとって指標とも言うべき音だった。この人が書いた本も、出したCDも、今でも自室の本棚にいくつも並んでいる。それにその音は自分にとって『特別』の体現者と言える、あの人とも繋がる音なのだ。

「詳細な入試要綱もそちらに同封してあります。後で詳しく読んでい

ただきたいのですが、基本的には総合大学の教育学部ですので、音楽面でも本格的な音大ほどハードルの高い試験内容ではありません。今年から大学の方針が変わりますので志願倍率などは分かりかねますが、黄前さんの努力次第では届きうる条件が揃っているかと思いません」

信じられない。ほとんど奇跡だ。パンフレットを持つ久美子の手がわなわなと震え出した。こんなこと、願ったってそうそうあることじゃない。それに、ほとんど絶望しかなかった進路の問題にいま、一条の光が差し込んでいる。一気に大きく展望が開けようとしている。そのことだけでもう、充分過ぎるほどの僥倖である。もちろん入ってからだって学ばなければいけないことは山ほどあるだろうし、艱難辛苦の連続には違いない。それでも、夢を賭けるにはここしか無いと断言できるだけの材料が今、久美子の目の前には存在していた。

「ありがとうございます、滝先生。家に帰ってからじっくり読んで、検討してみます」

久美子の顔はすっかり晴れやかなものになっていた。それを見た滝もまたふわりと微笑みを浮かべる。

「いえ。このくらいのことしか出来ず、申し訳ありません」

「そんなこと無いです。滝先生のおかげで何とかなるかも知れませんが」

「そうだといいのですが。ああそれと、もし受験に際して専門家の指導を仰ぐ必要がある場合には、いつでも私に相談して下さい。地元在住で非常に優秀な先生に何人か心当たりがありますので、紹介できるように尽力します」

滝の懐の深さ、そして人脈の広さには本当に頭が上がりません。久美子はもう、彼に足を向けて寝られそうに無かった。

「良かったね、久美子」

隣に立つ麗奈もまた笑顔で久美子を祝福してくれた。ありがとう麗奈。言葉にならない感謝の気持ちを精一杯込めて、久美子は麗奈の手を両手で包むように握り締める。麗奈がすぐ傍に居てくれたからこそ、久美子は夢を諦めずにここまで来ることが出来た。麗奈という

目標が居てくれたからこそ、久美子もまた『特別』を目指して走り続けられたのだ。その存在の貴さは到底、他の何かに替えて語れるものではない。

「不思議ですね」

何が、と久美子は振り返る。呟いた滝は少しだけ遠い目をしていった。

「夢に向かって一生懸命に全力で挑み続ける黄前さんの姿は、妻に少し似ている気がします。……おっと、これは失言でした」

ついうっかり洩れてしまった、とばかりに滝は慌てて口を手でふさぐ。久美子の胸はどきどきしていた。それは滝の言葉に心を動かされたから、では無い。後ろに立っていた麗奈の全身からこちらに向けて、恐ろしく真つ黒なオーラが急速に漏れ出てくるのを感じたからだ。

「クミコオ……」

「あつ、もう朝練行かなきゃ。それじゃ滝先生、またよろしくお願いしますーす」

今の麗奈を相手にするのは得策ではない。そう悟った久美子は滝から素早く鍵を引つたくと、麗奈のオーラから逃れるようにそそくさと職員室から抜け出した。その日の練習が終わるまでずっと、久美子はくれぐれも麗奈と目を合わせることの無いよう、注意深く振る舞わなければいけなかった。

\*

あの後家に帰ってから、久美子は件の資料を穴が開くまで眺め回し、そして講師陣の名前も一人ずつインターネットで調べていった。その一つ一つの要素は大学側の本意が見て取れる内容であったし、自分の条件と目的にも合致している。副科にピアノまたは声楽が課されるのは他の音大と変わらなかったが、特別推薦の条件として『全日本吹奏楽コンクールなどで過去優秀な成績を収めたことがある者』という項目があることも久美子は確認していた。そしてこの特別推薦枠では、試験の一部に免除があるということも。これを当てにしているわけではないが、現状の久美子にとって夢を実現するための手段の一つ

としては極めて無視しがたい要素だ。

「後は、やるだけだよね」

久美子の意志は一つにまとまった。今は府大会のことに集中する。他のことは全て、それが終わってから考えればいい。将来のことも、秀一とのことも、後で考える時間は幾らでもある。今やるべきことはコンクールで最高の演奏をすること。それだけだ。少し前まであんなにも悩み苦しんでいたのが嘘のように、久美子の心境はすっきりと澄み渡っていた。

ゆつくりと立ち上がり、楽器ケースの把手を掴む。ついにこの日が来た。三年間の努力も、自分達の目標も、まずはこの最初の関門を越えられなければ話にならない。勝負の時は迫っていた。久美子は深呼吸をし、それから手元の楽譜ファイルを開く。しわくちやになった透明のファイルに入れられた、課題曲と自由曲の楽譜。

『絶対に全国金賞！』

何度も書き足したその字が、久美子の感情を一層昂らせた。

楽器の積み込みを終え、バスに乗り込む前の最終点呼が行われる。ここからA部門出場者、すなわちコンクールメンバーはバスに乗り、サポートメンバーの面々は忘れ物がないかをチェックしてから電車で会場に向かうことになっている。サポートメンバーは本番の舞台への打楽器や譜面台の搬入作業もあるから、出番は無いけどその割には慌ただしいんだよ……と、これはサポート経験者の葉月の弁である。

「バチ全部積んだー？」

「こつちOKです。楽譜カバー大丈夫ですか？」

「さっきトラックに載せました。数も確認済みです」

サポート組の慌ただしい声がそこかしこから漏れ聞こえる。コンクール出演者は長袖の冬服に服装を揃えているので一見して区別をつけられるが、気持ちの上ではレギュラーもサポートも皆一丸となって目指す結果に向かっていくことに変わりはない。何にせよ今は夏の真っ盛りであり、例えば早朝と言えども既に高まりつつある気温の影で、コンクールメンバーは噴き出る汗を拭いながら点呼に応じてい

た。来年ぐらいからはいい加減コンクール用の衣装を作る予算でも下ろして欲しいものだ、と久美子は切に思っていた。

「すみません、お待たせしました」

遅れて滝がやって来ると、女子部員達の間から「きやあつ」と黄色い声上がる。普段あれだけの毒舌に晒されて半ばうんざりしている吹部の部員でさえ、年に数度も拝むことの出来ない滝のタキシード姿には耐性が無いらしい。久美子の脇に立つ麗奈もまた、滝のその姿には何度見ても胸をきゆうつと締め付けられているようだった。

「それでは出発の前に、サポートメンバーから皆さんへ、渡したいものがあります」

そう言うサポートの面々は、紙袋から小さな巾着袋のようなものを取り出した。お守りらしきその表面には刺繍で『金賞祈願』としたためられている。それを見たレギュラーの一同から、わあつと歓声が上がった。

「これでもう金賞は間違いありません！ 各パートごとに配っていきますので、本番はこれをポケットに入れて私達の想いも込めて演奏してくれると嬉しいです」

早速お守りがコンクールメンバーへと配られていく。久美子達には低音パートの相楽と真帆から、直接お守りが手渡された。

「俺達の分まで頑張って来てください」

「ありがとう」

葉月は受け取ったお守りを手で吊るし、まじまじと眺める。くるりと裏返ったその面には『葉月先輩ファイト！』という文字が記されていた。

「これ、相楽と里中ちゃんが手縫いで刺繍したの？ 頑張ったねー」

「いえ。私達サポートは、これぐらいしか出来る事ないですから」

謙遜する真帆と相楽の指にはいくつか絆創膏が貼られていた。こうしてサポートメンバーがお守りを渡すのもはや毎年の恒例行事となりつつある。受け取る側としては何度受け取ってもありがたいと思うものだし、同時に彼らの分まで最高の演奏が出来るよう努めなければ、と身の引き締まる思いだ。ここまでしてくれた彼らに無様な

演奏や残念な結果を見せるわけにはいかない。

「毎日練習もしながらお守りまで作ってくれて本当にありがとう。みんな、拍手！」

久美子が手を鳴らすと、それに合わせて他の部員達も一斉に拍手でサポートメンバーを讃えた。

「では、出発の前に」

滝はこほんと喉を鳴らした。

「部長から皆さんへ一言、お願いします」

滝に促され、久美子は皆の前へと立つ。コンクールの朝、出発前に部長の挨拶が入るのも北宇治の伝統的な光景の一つだ。久美子は小さく息を吐き、それから部員一同を見渡す。部長の職に就いて早九カ月あまり。この間いろいろな事があった。あまりの激務ぶりに辟易とすることもあったし、部員同士の衝突の仲裁に走り回りもしたし、なかなかまとまらない案を無理矢理にでもまとめなければいけない局面もあったし、部員達に激昂してしまう場面もあった。思い返せば本当に不甲斐ない部長だったな、などという思いが胸の内に去来する。

「まず、みんな今日までたくさんたくさん練習を重ねてきました。大変な事も多かったと思うけど、今日はいよいよ本番です。今までやって来た事を全部演奏に換えて思いつ切り楽しみましょう。そして関西大会への代表権を、必ず勝ち取りましょう」

「はいー」

「それと、今日までこんな私に皆ついて来てくれて本当にありがとう。今日で終わりにするつもりじゃないけど、ここまで支えてくれた事、感謝しています」

久美子は深々と頭を下げた。ありがとう、という気持ちと共に、この素晴らしい仲間たちと最高の結果を手にしたという願いを込めて。

「それではご唱和下さい。北宇治、ファイトおー！」

「おー！」

部員全員の、やや控えめな関の聲が響く。まだ早朝なので大声を出

せば近隣の住民に迷惑が掛かってしまうためだ。こういう呼吸を体得しているのも、ある意味北宇治が場数を踏んで来た証拠と言えるだろうか。

「それじゃバスに乗って移動しましょう。会場に着いたらすぐ楽器をトラックから降ろして、音出しスペースに移動するので、はぐれないよう行動して下さい。サポートメンバーは最後のチェックをしてから、ホールで合流になります。その後の楽器の搬入作業、よろしくお願いします」

「はいー」

久美子の号令で部員全員がそれぞれ動き始める。興奮、緊張、英気。各々が見せる十人十色の表情。彼らの脳裏には今、これから迎える本番の光景が描き出されているに違いない。どんな舞台になるのだろう。どんな演奏が出来るのだろう。久美子はこの時、コンクール本番を前に、初めてこう思った。

『本番が来るのが待ち遠しい』

演奏が出来ることの喜び。ただ純粋にそれだけが、久美子を埋め尽くしていた。

北宇治高校を出発したバスは三十分近くをかけてゆつくりと京都市内に入り、そして遂にコンクール府大会の会場であるコンサートホールへとやって来た。サポートの部員達がそこへ合流すると、早速トラックから楽器を積み下ろす作業が始まる。久美子もまた、トラックの荷台に立って陣頭指揮を振るう秀一から自分の楽器ケースを手渡された。

「ほら」

「うん」

久美子の腕にずしりと重みが増えられる。いよいよ本番だ。早く、早く吹きたい。多くの聴衆の前で演奏がしたい。バスに乗っている間中もずっと、久美子の心を占めていたのはその思いだった。その時ちようど、コンバスのソフトケースを抱える緑輝と目が合う。

「緑ちゃん」

久美子は緑輝に駆け寄り声を掛けた。

「調子はどう?」

「はい、お陰様でばっちりです! ジョージくんもきつといい音を奏でてくれると思います」

緑輝は澆刺とした笑顔を浮かべ、抱え込んでいたソフトケースの表面を指でなぞった。この分なら緑輝はもう心配ないだろう。現にこの二週間、緑輝の演奏は以前と変わらず完璧の一言に尽きるものであった。

「ね、緑ちゃん」

「はい?」

「今は『私の演奏を見よ!』って気持ちになれてる?」

そう問い掛けると、緑輝はさも当然と言うがごとく拳をぐっと握り締めてみせる。

「はい! 新生・緑の演奏を、今日はホール中のお客さんにばっちり聴かせます!」

この強気。めらめらと燃える瞳。やっぱりこれだ。緑輝はこうでなくてはならない。

「久美子ちゃんは どうですか?」

「ん、」

逆に問われた久美子もまた、緑輝に熱い視線で返す。

「実は私も、今日はちよつと思ってる。『私達の演奏を見よ!』って」  
そうして二人顔を見合わせ、ふふつと笑みをこぼした。

「あつ、先輩!」

その時、部員の一人が大きな声を上げた。何かと思つて声の方を振り返ってみると、声の出どころはトランペットパートの三年生・吉沢のようだ。そして彼女の視線の、その先には。

「みんな、久しぶり。調子はどう?」

「元気だった?」

その姿をちらと見るなり、久美子は思わず駆け出していた。麗奈も同じことを思ったらしく、丁度二人が鉢合わせしたところで声の主達の元へ辿り着く。

「晴香先輩、香織先輩、来て下さったんですか」

そこに居たのは、久美子達も良く知る北宇治のOB達。二年前の元部長・小笠原晴香。そしてもう一人、かつて麗奈とトランペットソロの座を賭けて争った相手、中世古香織だ。ありがとうございます、と久美子が言うと、二人は照れくさそうに互いに顔を見合わせた。

「香織がどうしても行きたいって言うからさ。まあ私も元部長として、皆を応援したかったし」

晴香は謙遜するように肩をすくめる。彼女は髪型も佇まいも、二年前のそれとほとんど変わっていないかった。どこか朴訥とした雰囲気を感じさせるところがまた晴香らしいとも言える。

一方の香織は、高校の頃より少し髪を伸ばしていて、ぎりぎり肩には届かない程度のセミロングヘアとなっていた。在学中から既にマドンナと呼ばれていた彼女の容姿は、それから二年経つてさらに妖艶さを増しているようにも見える。聞くまでもなく大学でもきつと、彼女のマドンナ的な立ち位置は変わっていないことだろう。

「黄前さんの様子を見ようと思ってね」

「私の、ですか？」

あすかや夏紀ならばともかく、直属の先輩でも無かった香織がどうして自分のことを気に掛けるというのだろうか？ 香織の意外な発言に、久美子は思わず眉を寄せてしまった。

「ごめん久美子、香織先輩に話したの、私」

「ああ、」

申し訳無さそうに謝る麗奈を見て久美子も察する。終業式の日、久美子が激昂し早退してしまった例の事件。きつとあの日に麗奈は香織に連絡を取ったに違いない。あの時の久美子の状況は、二年前に香織が置かれていた状況とも通じるものがあった。麗奈は自分では答えの出せない何かを求めて香織に相談し、そして香織は久美子のことを気に掛けこうして本番当日の様子を見に来てくれたと、そういう事なのだろう。

「ありがとうございます香織先輩。それとすみません、心配かけてしまつて」

「気にしないで。それに、もう大丈夫それでホツとした」

香織はにっこりと微笑む。やっぱりこの人には敵わない。自分など勝敗が決する前でさえ、あれほどまでに打ちのめされたというのに。香織は熱望したソロが吹けないという残酷な結果も潔く受け入れて、卒業のその日までいつでも優しく後輩達に振る舞っていたのだ。彼女からソロの座を奪い取った麗奈にさえも。その度量、いや心境を思うと、今すぐ香織の前にひれ伏したい気持ちにすらなってしまう。

「北宇治の部長やるのって本当しんどいもんね。私の時はあすかっという化け物がいたから、もう本当泣きたくなるくらいしんどかったけど」

昔のことを思い出したのか、晴香が頬杖をついて吐息を漏らした。「本当ですよね。なってみて解りましたけど、部長ってホントにしんどいです」

久美子も包み隠さず本音を吐露する。きつとこんな事が言えるのは、そしてそれを理解してもらえるのは、後にも先にも晴香だけだろう。晴香もまた苦笑に唇の端を歪めたが、すぐに表情を元に戻した。「それで、今年はどう？」

「はい、もう全員ばっちり仕上がってます。あとは本番で最高の演奏をするだけです」

自信たつぷりに久美子は宣言した。この二週間、それこそ血の滲むような追い込みをした甲斐もあって、演奏の完成度は飛躍的に高まっている。自分自身、去年と比較しても決して引けを取っていないと認識していた。後はそれを十全に、本番の舞台で発揮するだけだ。

「かおりせんぱは~~~~い」

その時、向こうの通りから黄色い歓声が聞こえてきた。こんな場違いな声でその名を呼ぶ人物は、久美子の知る限り一人しかいない。

「ヤバイヤバイヤバイヤバイ。今日の香織先輩もマジエンジェル！」

群衆を掻き分け猪のように突撃してきたのは、やっぱりというか何というか、平常運転の吉川優子だ。

「優子ちゃんも来たんだ」

晴香が気圧されたように体を仰け反らせる。当の優子はというと、

他の人になんて構ってられないとばかりに香織へびったり張り付いていた。確か彼女は香織の後を追って同じ大学に入ったはずなのだが、ひよつとして大学でも毎日この調子なのだろうか？　だとすれば何となく、ほんの少しだけ香織が哀れなような、そんな気持ちが久美子の中に沸き上がる。

「ちよつと、勝手に先走るな！」

人いきれの隙間から這い出るように、今度は中川夏紀が姿を現した。突っ走る優子を全速力で追い掛けてきたのか、夏紀はぜいぜいと荒く息を切らしていた。

「夏紀先輩」

久美子が近寄ると、夏紀は息をつきながら手を挙げてそれに応える。そして一瞬、何かを思い出したように動きを止めた。

「ごめん久美子ちゃん、あの後、あすか先輩に連絡しようと思ったんだけど、私——」

夏紀が何を言おうとしたのかは、彼女が喋り出す前に判っていた。だからその言葉を遮って、久美子は彼女に報告をする。

「私、あすか先輩とお話、できました」

それを聞いた夏紀の目と口は大きく開かれた。ぱくぱくと上下する唇は言葉をうまく紡ぐことが出来ず、一度大きな嘆息を漏らしてから、夏紀が改めて問うてくる。

「本当？」

「はい、電話ですけれど。あすか先輩、元気そうでした」

久美子の報告に、夏紀はまだ息を荒く吐きながらもゆつくりと天を仰いだ。そしてひと度、大きく息を吸ってからその息をたつぷりと吐き出す。全身の筋肉が弛緩したように少しの間俯いた彼女は、

「そっか、良かった」

と、安堵の笑顔に向けた。その笑顔の隙間に見える、ほんの少しの寂寥感。きつと夏紀もあすかと話したかったに違いない。もしかしたら久美子に対して一抹の嫉妬心みたいなものもあるかも知れない。けれど夏紀はそんなことはおくびにも出さなかった。やっぱり夏紀先輩は強い人だ、と改めて久美子は思う。彼女や香織のみならず、今

目の前にいる先輩達の一人ひとりがあまりにも偉大な存在のように映った。果たして自分は後輩達に、そのような目で見てもらえるほどの先輩となるものなのだろうか。

「夏紀い、いたー?」

「こつちだよ希美、みぞれ」

夏紀が手を挙げて応えた先を久美子も見やる。そこから手を振りながらこちらへ近づいて来たのは傘木希美、それと鎧塚みぞれだった。この二人は吹奏楽のために大阪の大学へ進学していたのだが、母校の、いや久美子達の本番を応援しにわざわざ京都まで来てくれたのだろう。「久しぶり」と朗らかな笑顔を覗かせる希美に対し、みぞれはほとんど表情を変えずにいた。

「もう、先月あたりから優子がうるさくってさー。『コンクールは皆で応援しに行くよ』って張り切っちゃって。ホントは向こうでサークルの練習もあつたんだけど、無理言つて休み貰つてきちゃった」

「ありがとうございます、希美先輩」

「いいよいいよ。こんなこと言ってるけど実際、私もみんなの演奏楽しみにしてたし。今日の本番がんばってね」

希美は白い歯を覗かせ、ゆるく結んだ拳を突き出す。久美子もそれに応え、握り拳でコツンと返した。

「頑張つて」

隣にいたみぞれも同じように小さな手を握りちよこんと構える。拳というよりもそれは、猫の手の真似をしているようでもあった。

「来てくれてありがとうございます、鎧塚先輩。嬉しいです」

みぞれの拳にもコツンと返すと、みぞれは少しだけ気恥ずかしそうに俯いた。この二人もまた相変わらぬようだったが、さてしかし、と久美子は思う。

今は希美と同じ大学にいるし、少なくとも高校の時のようなトラブルは起こっていないささそうだ。いざとなれば優子とも連絡を取り合えるだろうし、その点で今のみぞれはとても安定していると言える。もしかしたら大学で新しい友達も出来ているかも知れない。この二年あまりでみぞれが精神的にもだいぶ成長したのは久美子も認めると

ころではある。それでも未だこれだけ希美を心の支えにしている彼女が大学を卒業する時、つまり希美と離れざるを得ない時、みぞれは一体どうなってしまうのだろうか。その事を思うと胸にちくりと棘が刺さった。

「ところで後藤先輩と梨子先輩からは、連絡ありました？」

「ああ、あの二人ね」

葉月の質問に、夏紀はやや気の毒そうな視線を返す。

「それなんだけど、後藤がどうしてもバイトの休み取れなくて、府大会は来れないってさ。梨子もおんなじみたい。その代わり関西大会の時なら行けるから『絶対に金賞取って関西まで行って欲しい』だつて」

そうなんですか、葉月と美佳子がしばしの間しよげ返る。でも、と、すぐさま葉月は顔を上げた。

「逆に考えたらさ、是が非でも関西進出して、次こそ二人に演奏聴いて貰わなくちゃって、そういうことだよね」

「ですね」

「おっし美佳！ 今日からもう後藤先輩達に聴かせるつもりで、チューバは百二十パーセント全力で吹くよー！」

「はい！ 任せて下さい、葉月先輩！」

またしてもこの二人はスポ根世界に突入してしまった。真夏の熱気のせいもあるが、厚手の長袖を着込んだ今この状況下だと、二人には申し訳ないが暑苦しいことこの上ない。頬をだらりと滑っていく汗を久美子は制服の袖でぐいと拭う。

「みぞれ先輩〜」

その時みぞれの元へと飛び込んできたのは、みぞれの直属の後輩であった依琉だ。みぞれが三年生の時に一年生として入部した依琉はみぞれの薫陶を受けてめきめきと頭角を現し、今や北宇治に無くてはならない敏腕オーボエ奏者となっている。そんな依琉にとってみぞれは偉大な師匠であり、今でも頼れる先輩として心の中で大きなウエイトを占めている事だろう。息を弾ませながら、依琉はみぞれと向かい合う。

「先輩、私今日がんばりますから、最後まで見守っててください」

不安と緊張を無理矢理押し殺したような迫真ぶりの依琉に、みぞれはごく僅かに口角を持ち上げて頷いた。あの表情の変化を読み取れるのは、おそらく現役生の中では久美子と依琉だけであろう。他の者にはみぞれの所作は、いつもの無表情で機械のように首を動かしたとしか思えなかったに違いない。みぞれにとつても依琉は直属の後輩であり、己が持つオーボエ奏者としての技術と知見を惜しみなく注いだ存在でもある。彼女が多少ながら心を開くことの出来る数少ない存在の中に、依琉も加わっていることは間違いないみだだった。

こうして部員達とOB達は、ほんの僅かなひと時を談笑や激励のやり取りで過ごした。だが今は本番前、あまりゆっくりもしていられない。久美子はポケットに仕舞ってあった腕時計をちらりと確認する。「そろそろ時間です。皆、移動して下さい」

「はい」

もう間もなく音出しスペースに移動をして最後の音出し、その後はチューニング室に入って最終確認となる。音出しスペースから先は出演者以外立ち入り禁止となっているので、一般入場である香織らOBとはここで一旦別れることとなる。

「それじゃ夏紀先輩、行ってきます」

「うん。いい演奏、期待してるよ」

夏紀から差し出された拳に、久美子は自らの拳を重ねることで応えた。希美達とも交わしたそれは、夏紀から自分に受け継がれ皆へと広まった激励と宣誓の儀式。せつかくこうして先輩達が自分達のために応援に来てくれたからには最高の演奏を聴いてもらいたい。そして努力の成果を見届けて欲しい。そんな思いを込めてコツンと拳同士を鳴らし合ったあと、夏紀達に見送られた久美子は部員達を引き連れて会場内を移動する。

音出しスペースでは北宇治以外にも、これから出番を迎えるいくつかの団体が音出しを開始していた。久美子はまず楽器を構えロングトーンを開始する。今日最初の音はいつもと変わらず伸びやかで、タングングやスケールの調子も特に問題は無い。これならいい演奏が

出来そうだ。

その後も音出しを続けながら、久美子は隣でユーフォを吹いている雫をちらりと見やる。ソロオーデイションのあの日から一貫して、雫はあの日の涙が嘘だったかのようにまた鉄の仮面を被って振る舞っていた。演奏に關しても全く申し分無く、盤石と呼ぶに相応しいほどの安定ぶりだった。

ただほんの少しの相違点として、あるいは久美子がそう感じているだけかも知れないが、雫が時折自分に向けていたあの獲物を狙うような気配はこのところ無くなったような気がする。加えて日頃の練習でもどこか覇気がなく所在無さげにしているように、久美子の目には映っていた。正面切って先輩にソロ対決を申し込んだ挙句敗れてしまった、その事に肩身の狭さでも感じているのだろうか。とは言っても別に、久美子や他の低音パートの面々も雫の事を邪険に扱ったりなどはしていない。相楽や美佳子もその他の一年組も、むしろ雫が居心地の悪さを覚えないようにと気を回して彼女に接していたぐらいだ。

それに、同じ立場であるところの幸恵はそんな素振りなど全く無いどころか、むしろ前にも増して麗奈に懐いている様子ですらある。いやいや、デリカシーに乏しそうな幸恵と違って雫はとっても繊細なのだろう。例え周りの誰かがそんな風に言わないとしても、雫自身が肩身の狭いをしているという事もあり得るに違いない。だから遠慮がちになっている、という訳でも無い感じはするのだが。それともひよつとして他に何か、彼女なりの懸念や心痛でもあるのだろうか？『もしかして雫のこと、敵みたいに思っていたりする？』

いつかの幸恵の言葉が久美子の胸に引つ掛かる。少なくともソロオーデイションのその時まで、久美子にとつての雫とは打ち倒すべき敵であり、目の前に立ちはだかる最大の障壁だった。この子を、この演奏を越えなければ、自分の夢を叶えることは出来ない。そういう存在だった。しかし今、ソロオーデイションの勝敗も決し、改めて同じ目標に突き進む仲間として雫を見た今、久美子の内にそういった敵愾心のようなものはすっかり無くなっていった。その曇りなき視線で改めて雫を見た時、果たして雫とは一体どんな人物なのだろう、普段

どんなことを考えているのだろうか、といった疑問がふつふつと湧き上がりつつある。敵じゃないとすれば、そうなのであれば、雫は自分にとってどんな存在なのだろうか。反対に、雫にとって自分はどんな存在として思われているのだろうか。そこがほんの少しだけ気掛かりだった。

「はっはっは、北宇治の諸君お久しぶり。息災だったかね？」

音出しの時間もあと少しというところで、突然に響く妙に馴れ馴れしい、しかし聞き覚えのある声。一同は声の持ち主へと視線を注ぐ。そこに居たのは水色の制服を着た女子。立華高校のフルート担当、西条花音じょうかのんだった。

「ちよつと花音、さっさと先行かないでよ」

遅れてやって来たのはその双子の妹、オーボエ担当の西条美音さいじょうみおん。もはや立華高校の名物姉妹として有名なこの二人とは様々な演奏会で交流を持っていたために、北宇治の面々とも浅からぬ面識があった。

「だって北宇治がいるのが見えただもん」

「あ、ホントだ。皆久しぶりー。ってそうじゃないでしょ」

「えー。何がー？」

「コンクール本番前なんだから、もうちよい落ち着けて言ってるの」「べつに、今更って感じじゃない？ バタバタしたって結果が変わるわけでもなし」

「あのね、私達もう三年生なんだよ？ 後輩も居るんだし締めるところ締めてかないとじゃん」

「あーはいはい分かった分かった分かりました。ねー聞いてよ黄前ちゃん、最近美音が小姑みたいにうるさくい」

「何よ小姑って。聞いてよ黄前ちゃん、最近花音が私の言う事聞かない」

こうして二人揃うと始終かましいのもいつもの事だ。と言って、この二人が有名なのはお喋りだからというだけでは決して無い。演奏やマーチングでのパフォーマンス、それらの技術が二人揃って並外れた腕前だからこそである。現に姉の花音は一年の時から、妹の美

音も昨年から、競争の激しい立華で他を押しつけコンクールメンバーに選ばれるほどの実力者だ。日頃は賑やかに馴れ合う間柄でも、コンクールのような大舞台では強力なライバルへと変貌する。その最たる例がこの西条姉妹なのである。

「立華も音出しに来たんだ」

「うん。出番も近いからねー」

「もうすぐ梓達も来ると思うよ。つと、噂をすればなんとやら」

花音と美音が振り返ると、そこには名瀬あみかの姿があった。彼女のその手にはトロンボーンが握られている。昨年まではコンクールメンバーには参加していなかったが、どうやら今年はその座を射止めることに成功したらしい。ふわふわと長い癖毛は相変わらずで、その体格とも相まって彼女の愛くるしさをより一層際立たせている。

「緑ちゃん、皆も、お久しぶり」

あみかは大きく円らかな瞳をぱちんと閉じて、砕けた笑顔を作ってみた。この人懐こい笑顔は彼女の最大の魅力であり、恐らくは持って生まれたその愛くるしさを、久美子はほんの少し羨ましくも思っていた。

「今年は私、約束通りコンクールのレギュラーになれたよ」

「わあ、凄いですあみかちゃん。きっと沢山頑張ったんですね」

緑輝もまたふわりと笑顔を浮かべてあみかを祝福した。あみかと緑輝は以前から仲が良い。お互いマーチングではカラーガードを担当しているため触れ合う機会が多いとか、学年も同じで身長体格も近いとか、色々理由はあるのだろう。けれど何より、二人の持っている雰囲気極めて似通っているからだ、と久美子は密かに思っていた。実際こうして二人並んできやいきやい言ってるのを傍から見ていると、まるで仲良しの姉妹みたいですらある。

「梓ちゃん、北宇治の皆も揃ってるよー」

声を張ったあみかが手を振る。その先には整然と列を成して歩いてくる立華の本陣があった。先頭を切って歩くは立華の部長、梓だ。少し後ろには戸川志保や的場太一といった、お馴染みの面々も揃っている。

「梓ちゃん」

「久美子」

久美子は自分から梓の元へと駆け寄る。梓もまたこちらに気付くと、列から離れ久美子に近づいてきた。

「どう、立華の調子は？」

「超ばっちり。今年は去年より完成度高いと思うよ。北宇治は？」

「こつちも万全。みんな今年の立華は油断出来ないってかなりライブ視してたから、そのお陰もあるかな」

「そうなんだ。全国二年連続出場の北宇治にもコンクールでマークされるって、何だか畏れ多いね」

にんまりと、梓が白い歯を覗かせる。謙遜。その笑顔の意味を久美子はそう受け取った。現実には梓だけではなく、背後に控える立華のメンバーからもこれまでに無いほどの覇気が漲っている。『立華と言えばマーチング』という今までの定評を覆し、コンクールでも立華の名を全国に轟かせる。かつて久美子に豪語した梓の目標が決して口ばかりのものではなかったと言えるだけの手応えが、きつと今の彼らにはあるに違いない。

「今年は北宇治の諸君にガツンとかましてやる予定だから、覚悟していてね」

「あ、ずるい花音。それ私が先に言おうと思ってたのにー」

花音の挑発めいた発言に美音も乗っかる。

「こういうのは先に言ったもの勝ちなんですー」

「いつ誰がそんなの決めたのよ。私だって北宇治には負けたくないんですけどー」

「はいはい。それじゃあここは立華部長として、私が皆の声を代表するってことで」

双子のやり取りに梓までもが加わって来た。半分はおふざけだろうが、もう半分は本気の宣戦布告だろう。何より彼女達の全身から放たれる鋭気がそれを雄弁に物語っていた。刃物の切っ先を向けられた時のような危なさを感知した久美子の首筋が、さっきからびりびりとざわついている。

「あ、太一。ネクタイ曲がってる。直すから動かないで」

「おお、悪い」

そんな梓達の後ろでは場の空気もお構いなしに、志保が太一のネクタイをせっせと直してあげていた。彼女の世話焼き女房ぶりも、果たして相変わらずのようだ。

「お二人さん、やっぱ仲良いねえ」

葉月がニヤニヤしながら声を掛けると、途端に志保は耳まで真っ赤になって俯いてしまう。「変な事言うなよ！」などと太一は慌てふためいているが、実のところこの二人はどういう関係になっているのだろうか。

「もうさ、この二人ったらいつもこんな調子なんだもん。いい加減やきもきするよねえ」

梓がじれったそうな目線を太一たちに向ける。もし付き合ってるのならいつそ堂々と交際宣言でもしてしまえばいいのに。と思い掛けたがしかし、そんな事を今の自分が言えた義理ではないことに久美子は気が付く。下手に蜂の巣をつつけばこつちが刺される結果となりかねない。そう考えた久美子は曖昧に愛想笑いを浮かべ、これ以上この話題に立ち入らないことにした。

「じゃあ私達も、そろそろ音出し始めるから。北宇治はもうすぐ本番でしょ？」

「だね」

「頑張ろうね本番。そんで一緒に関西に、全国に行こう」

「うん。行こう」

梓の瞳がきらきらと、溢れんばかりの闘志に揺れている。彼女の瞳を正面に捉え、久美子は大きく頷いた。北宇治と立華、どちらにとっても全国出場を目標とするならば、府大会や関西大会は是が非でも勝ち上がらなければならない。例え全国出場の切符を手に来るのがどちらか一校だけであったとしても。その結果、もう片方を蹴落とすことになるとしても。久美子は既に心の中で誓っていた。

私達は行く。全国に、必ず。

最後のチューニングを終え、北宇治の一同は舞台裏へと移動をす

る。前の出番の団体が演奏しているのを真つ暗な舞台袖で聞いているこの時間は、いつだって緊張のピークだ。破裂しそうになる胸を押さえ、久美子は目を閉じて大きく息を吸い込み、そしてゆるゆると限界まで吐き切った。本番前に集中を高める久美子独自のルーティーン。これを行うことでざわついた思考が一瞬で止み、凝り固まった全身が程良く弛緩してゆく。

落ち着きを取り戻した久美子は周囲の様子を伺う。待機している部員達の何人かは不安そうな表情を浮かべ、あるいは良い演奏が出来ますようにと天を仰いで祈っている。大丈夫。私達ならきつと、最高の演奏が出来る。久美子は心の中で、一人一人に励ましの声を掛けていった。誰にも聞こえなくてもいい。いざ本番の舞台上がれば、自分達に出来ることはたったの一つだけ。今まで練習して来た事の全てを音に替えて聴衆へ届ける、それ以外には無いのだから。

「いよいよだね」

ふと小声がして隣を見やると、そこには麗奈がいた。凜と張り詰めた空気を身に纏う麗奈の姿はいつ見ても勇ましく、美しい。戦の女神というものがこの世に体现したら、それはきつとこんな姿をしているのではないか、と久美子は思う。

『特別』の具現。概念を顕在化するもの。自分もこうなりたい、と久美子はずっと麗奈の背中を追い掛け続けてきた。その麗奈と今日、この大舞台で、初めて肩を並べ共に音を奏でる。今までのように多くの音に混じって合奏をする、という意味ではない。このコンサートホールに自分と麗奈の音だけが響くその瞬間、二人は確かに、たった二人きりの対等な存在として音を鳴らし合うのだ。改めてそう考えると、頭の中にびりびりと痺れる何かが溢れ出るのを感じる。

「緊張してる？」

麗奈が少し腰を傾け、上目遣いにこちらの顔を覗き見る。うん、と久美子は素直に頷いてから、

「でも大丈夫。麗奈がいるから」

と微笑んでみせた。この緊張も、不安も、『高坂麗奈』という存在が傍に居てくれるだけで、全ては喜びに塗り替えることが出来る。麗奈

と一緒に吹きたいと、二人の音を奏でたいと願った思いを、最高の場所、最高の形で実現できるのだ。これに勝る喜びなどあろう筈も無く、そしてそれを塗り潰せる恐怖もまた、ある筈が無かった。

「それなら良かった」

麗奈もまた久美子にはにかみを返す。なんて綺麗な時間なんだろう。いま舞台の上で演奏をしている団体の音も、周囲に居るはずの部員達の存在も、もはや久美子の意識には入り込んで来なかった。目の前にいるのは麗奈。聞こえるのは麗奈の声。ただそれだけ。このまま時を止めてしまいたい。そして何度も何度も繰り返しこの時を再生して、いつまでも優く優雅なこのひと時に耽溺していたい。突如としてそんな衝動が体の奥底から沸き起こる。

けれど、それじゃダメだ。私達の求めるものはこの尊い時間よりも先にある。たった十二分間の舞台の上に立って。私達の音を奏でて。全国に勝ち進んで、金賞を取る。今年こそ必ず。そのために今、私達はここに居るんだ。

「ねえ麗奈」

久美子は握り拳を作り、胸の前に構える。

「最高の演奏、しようね」

その拳を見つめて麗奈は一瞬動きを止めたが、やがて視線を久美子の瞳へと移し、

「当然でしょ」

コッソ、と自らの拳を重ね合わせた。ひんやりとした舞台袖の空気の中で、麗奈の熱が自分の手に宿るのを、久美子はそのとき確かに感じ取っていた。

「続きまして、プログラム二十六番。京都府立北宇治高等学校。課題曲、Ⅱ。自由曲、F・D・ヴァツリアーレ作曲、『歌劇「剣闘士」』。指揮は滝昇です」

アナウンスの声と共に、舞台の照明が一齐に久美子達を照らす。会場中からもたらされた拍手の波。その熱気。いつもより僅かに固い椅子。檜の舞台が醸す独特のにおい。微かに中空を舞う埃。拍手の後に音を潜める聴衆の動き。何度も見て来たこの光景。何度見よう

とも決して飽きる事の無い光景。それは自分が高校三年生になった今、より特別なものであるように思えた。

指揮台に立つ滝はいつもと同じように柔和な笑みを湛えていた。大丈夫だ。自分達ならやれる。きつとこの舞台で最高の演奏が出来る。滝の笑みが自分達に、そんな自信を与えてくれているような気がした。部員達をぐるりと一望した滝が滑らかに両手を構える。それを合図に全員が楽器を構え、時が来るのを待った。ふた呼吸の後、滝の手が空中に弧を描くのに合わせて、部員達は一斉に息を吸い込む。

滝の手が真下に振り下ろされると同時に、トランペットが快活なファンファーレの音を吐き出した。それに寄り添うようにしてトロンボーンやユーフォが重なり、厚みのある音がホールを揺らす。行進曲において最も重要、と何度も滝に指摘されていた出だしのセクションは完璧に決まり、やがて木管の華やかなメロディが舞い始める。その裏でチューバは行進のリズムを刻むように、その低い音を唸らせていった。木管のメロディがもう一巡し、その裏をユーフォが副旋律で駆け巡る。久美子は自らが捉えるべき音を確かに放っていることを確認しながら、自分の担当箇所であるフレーズを優雅に軽やかに吹き切った。久美子と雫、二人の副旋律は全体の音に艶やかな華を添えてゆき、やがて場面は金管によるユニゾンへと転化していく。

トロンボーンを主体とする力強く迫力ある音。それらは幾つものベルから同時に飛び出し反対側の壁を射抜いてゆく。高音中音ばかりが浮つくことの無いよう、三人体制のチューバも重厚な音で金管の動きを補助する。そして盛り上がりから一転、満ち潮が引くように曲調は穏やかなものとなり、今度は木管が主体となるセクションへ移行する。ここはテンポ感を間延びさせないように、と滝に何度も注意された箇所だ。ここでのユーフォの担当区分はメインのメロディだが、決して主役を張らず音量を控え、木管の柔らかい音色にそつと寄り添うよう慎重に一つ一つの音を奏でる。隣にいる雫の音も合わせて、少しの乱れも無い伸びやかなユーフォの音がメロディに溶け込んでいく。

自分のすぐ後ろでは、秀一のトロンボーンがメロディを保持するよ

うに音を刻んでいる。フルートとグロッケン音がひらりひらりと宙を舞う蝶のように飛び交い、そこにトランペットやシロフォン等が混ざり、穏やかな進行から少しずつ動きのある曲調へと切り替わってゆく。打楽器奏者が打ち鳴らすクラベスの音は規律的な響きをもたらし、チューバの大きな音を合図に曲は更に盛り上がった。一つ一つの箇所の細やかな音の形、ダイナミクス調整に気を付けながら、どこまでもテンポを崩さぬよう意識を集中させながら。全員が軽やかに美しく駆け抜けたところで滝の手が止まり、課題曲の演奏は終了した。

コンクールの演奏は課題曲と自由曲に分かれるが、その合間に聴衆の拍手は無い。打楽器の奏者が素早く位置取りと準備を終え、全員の体勢が整ったのを確認して、滝は再びその腕を高く掲げた。何度も何度も練習した自由曲の入り。部員全員、そのタイミングをもう体が覚えていている。

滝が腕を振り下ろすその一拍で、低音パートを中心とした分厚い音が一齐に解き放たれホール中を席卷した。バスドラムや大銅鑼が雷鳴のように轟き、折り重なる変拍子の波に乗って木管が妖しげに音を揺らめかせていく。課題曲の爽快なマーチから一転、自由曲冒頭のおどろおどろしい曲調は、あたかも地獄の景観を思わせるかのようだ。下から這いずる重低音が聴衆の心と体を存分に揺さぶったところで曲は序章から次の場面へと移り、一転して疾走感と緊張感に包まれたものとなる。

木管・金管ともに素早い音が連続するこの区間は『音の速度感を意識するように』と、かねてから滝に注意されてきた。短く切り詰めた音をただ荒く吹くのでなく美しい鋭さで吹くことには部員全員苦心していたが、それもここ二週間の追い込みで既にモノに出来ている。トロンボーン奏でる大袈裟なグリッサンドから曲調はさらに緊迫感を増し、種々の音が混じり合って、舞台の上はさながら大洪水の様相を呈していた。もしほんの僅かでも瑕疵があったならがらと崩れ破綻してしまいそうな音の一つ一つは、奏者達が限りなく精密にコントロールし在るべき場所へと収められていた。曲の進行に合わ

せてダイナミクスはどんどん大きくなり、第一部の終幕と共に最大級の音量がこれでもかとホールを揺らした。

第二部はその流れのまま、フルートとオーボエのソロから始まる。他の楽器の音が止み、小さく抑えられたフルートのか細げな音色が、暗闇に舞う小さな灯火の如くゆらゆらと漂う。そこにチューブラーベル、いわゆるチャイムの音が重なり、主旋律がオーボエのソロへと継承された。甘やかな音色が舞台上の隅々にまで広がってゆく。依琉の奏でるオーボエの音は流石と言うべきか、みぞれの薰陶を受けただけあって、極限まで磨き上げられた彫像のような美しさと情熱を完璧に表現し切っていた。

次第が増えていく木管の音。第二部のアピールポイントである静寂と安らぎが情感豊かに広がっていく。曲の主題をホルンが滔々と吹き上げると、木管が麗しいトリルを伴ってさらに主題を盛り上げ、それに伴い曲は徐々にテンポを速めていった。第二部のピーク、金管全体によるファンファーレが鳴り響き、最後は木管の柔らかなハーモニーとウインドチャイムの流れ星を思わせる煌めきに飾られて第二部が締め括られる。

続く第三部は激しい戦闘の幕開けを想起させる、ティンパニーの低く微かな入りから始まった。打楽器が一つずつ増えていく度に音は段々と大きくなり、再び金管の重低音が唸りを上げると同時に木管は奇怪に蠢く音を鳴らしていった。場を断ち切るようなトランペットの一閃で場面は一気に転換し、二つの軍勢がぶつかり合うように、激しい音が方々から奏でられる。

その先に待ち構えるは金管全員による連続連符のセクション、雫がトリプルタンギングを提案した箇所だ。パート内でも何度も何度も練習し、今では葉月も美佳子もこの連符を吹きこなせるようになっていた。星田は結局期限までに間に合わせる事が出来ず、この箇所では楽器を構えたままで音を出さないよう命じられてしまった。彼にいつか挽回の時は来るだろうか。などと考える暇もなく、金管全員で繰り出す連符は全てジャストのタイミングで合わせられ、機械の駆動のような精密さで織り成された。

難所を抜けても休むことなく曲は次の場面へと転じる。再び変拍子の連続で移ろう不安定なリズム。その上を木管が鮮やかに走り抜け、サクスのソロが不気味なまでに上下する難解な演奏をこなしていった。怪しい曲調を経てチューバからユーフォ、トロンボーン、ホルン、トランペット、そして木管の各パートへと、次々に引き渡されていくベルトーンのバトン。いよいよ第三部も終盤。全員でのベルトーンが完璧に重なって計算通りのデイソナンスを描き、それがすうっと掻き消えたところで、ついにその時はやって来た。久美子は音を立てずに息を吸い込み、そしてユーフォニアムを力強く抱きしめる。行くんだ、出すんだ、私の音を、私達の音を！

久美子のユーフォから暖かく美しいハイトーンが零れ出した。その音は辺りにじわりと広がり、観客席へと溶け込んでいく。一音一音に久美子は己の持つ全てを注ぎ込む。視界には、指揮をする滝の姿。その後ろで舞台の明かりに照らされる観客の顔。それらはもはや意識の外側にあった。それでも滝が刻む指揮の通りに、音は正確なテンポでもって奏でられる。豊かに響き渡ったユーフォの音色は、今まで奏でてきた音の中で最も美しく、最も自分の理想に近い音だった。

響け。響け私の音。この音が、このホール中の人達に、それすらも飛び越えて、あすか先輩にも届くように。もつと響け！ 言語にならない久美子の願いは全て音へと換えられて、ベルから解き放たれてゆく。やがて久美子の演奏を継ぐようにして麗奈のソロが始まった。長い曲の中でほんのひと時、二人の音は重なり合い混じり合い、一つの音となる。席は離れているはずなのに、まるで麗奈がすぐ隣にいてくれるみたいな、そんな錯覚。ホール全体に遍く響き渡る二人きりの音色に、久美子は存分に酔いしれた。

ユーフォのソロパートはここで終わり、次のパートに移るまでしばし休符が続く。自分のソロは考えうる限り、最高の出来だった。けれどその喜びを噛み締めるのはまだ早い。曲はまだ終わっていないのだから。復活した伴奏と共に、麗奈のトランペットの音色が天使の羽毛のようにホールを包み込んでいく。リタルダンドを経て麗奈の音に力が籠ると共に伴奏のクレッシェンドが始まった。いよいよこの

曲のクライマックス、祝典のパート。激しく忙しない音の形を、久美子は正確な形と音量で吹いていく。ああ、もうすぐ曲が終わってしまう。もっと吹いていたい。何度だつてこの曲を吹きたい。麗奈と、北宇治の皆と、何度だつて！ そんな思いを込め総員で響かせ鳴らす大音声のフェルマータ。最後に滝が振り下ろした一拍で自由曲は鮮やかに締められ、北宇治の演奏は終了した。

滝が手のひらを持ち上げるのに合わせ、久美子は自然と椅子から立ち上がっていた。会場の隅から隅まで溢れんばかりの大きな拍手が久美子達を囲む。はあはあ、と荒い息を吐きながら、久美子は思った。やっぱりこの舞台は最高だ。ここで終わりになんてしたくない。チャンスがある限り、何度だつてこの舞台に立ちたい。その思いが胸の中で、ぐんぐん膨らんでいた。

演奏を終えた団体は舞台の上手にある通路から、再び演奏者用の控室へと戻っていくことになる。暗く細い通路を歩くうち、久美子は胸に渦巻く己の感情を次第に抑えきれなくなっていた。まずい。こんなところで泣いちやだめだ。今は堪えなくちゃ。そう思っている。目から零れだした大粒の涙がぼろぼろ溢れ出るのを止められない。嗚咽を堪えるぐずぐずという鼻音は、とうとう目の前の葉月を振り返らせてしまった。

「わっ、久美子どうしたの」

「何でもない」

精一杯強がってみせたものの、如何せんぐしゃぐしゃの泣き顔では説得力などまるで無い。葉月は慌てたように自分のポケットを探り始めた。ハンカチか何かを探していたのかも知れないが、中々見つからないようでしどろもどろになっている。

「どうしたんですか？ 演奏、何かおかしいなところありましたか？」

緑輝も心配そうな顔で覗き込んできた。先頭を歩いていた低音パートが立ち止まったことで以後のメンバーがどん詰まり状態になってしまい、突然の大渋滞に見舞われた後方の一団からは「どうしたの」「何かあったの」と困惑の声が上がり始める。

「ごめん、ほんと、何でもないから」

涙声を必死に抑え込みながら、久美子はまだ慌てている葉月に「とにかく行こう」と促した。まだ泣くには早かったのに、どうしても今までのことが次から次へと頭の中に浮かんできて、それを切り離すことが出来なくなってしまうた。

今日このステージで最高の演奏が出来たのは何のお陰だったのか。重ね続けてきた努力。滝の指導。仲間達のに恵まれたこと。雫にオーデイションで勝てたこと。絶望に暮れた日々。秀一が存在。どれもこれも思い入れがあり過ぎて、言葉にすることなんて出来ない。その全てが胸の中で急速に化学反応を起こし、そしてとうとう爆発してしまったのだ。

涙に濡れる目頭を一生懸命ごしごし拭いながら、久美子は葉月達の後ろ姿に引つ張られるようにして通路を歩く。そうだ、まだ結果は出していない。例え自分達がどんなに素晴らしい演奏をしたとしても、他校がそれよりも優れた演奏をすれば北宇治が落ち、次の大会には進めないかも知れない。それがコンクールだ。全てをやり切った後は、結果を見届けなければいけない。私達が関西大会に行く、その結果を。

ようやく涙を拭き終えた久美子はそこで、雫がこちらを見ていることに気が付いた。相変わらずの無表情ながら、その瞳は自分に何かを訴えたがっているようにも見えた。しかし雫が言葉を発することは無く、久美子もまたその事を特に疑問に思わぬまま、北宇治の部員達は控室へと戻って行った。

楽器をケースに収め、それらをトラックへと積み込んだ後、久美子は真つ先にホールへと向かった。立華の演奏順は自分達より三つ後。北宇治の出番終了から控室への移動、楽器積み込みまでに要した時間を考えれば、そろそろ出番の時を迎える頃合いである。本来なら部長として部員達に連絡事項などを伝える役目も久美子にはあったのだが、今回は秀一がその代役を引き受けてくれた。

『ここは俺がやっておくから、お前は立華の演奏を聴きに行つて来いよ』

そう言ってくれた秀一の横顔はいつにも増して精悍で、自分の胸のときめきを抑えるのにはだいぶ苦労させられた。

コンクールでは演奏中、聴衆がホールへの出入りをすることは原則として禁止されている。次にホールの扉が開けられた時、ちょうど立華の一つ前の団体が演奏を終えたところだった。どこか座れる席は空いてないか、と久美子がきよろきよろしながら通路を歩いていくうち、

「久美子、こっちこっち！」

と小声で自分を呼ぶ声が聞こえて来る。誰だと思つて声の出どころを見やると、なんと葉月、緑輝、麗奈が既にそこへ座っていた。座席一つ分の空きを確保して。

「どうしてここに居るの？」

そつと近づいて、久美子は小声で葉月に尋ねる。

「だって立華だもん、やっぱり演奏聴きたいっしょ。今年どうなってるかってね」

「連絡はどうしたの？ 秀一は？」

「塚本の連絡なら三十秒ぐらいで終わった」

久美子の疑問に麗奈があっけらかんと答える。

「ひとまず立華の演奏がもうすぐだから、皆は結果発表までホールの傍に居ろつて。勝手な外出は禁止。以上、だって」

なんともざつくりとした、清々しいまでの短さだ。さつき秀一に感じたときめきから一転、久美子は呆れ返つてしまう。とは言つても、これが自分だったら律義に長々と連絡事項を語っていたかも知れず、そうなると思つたのみならず北宇治の全員が立華の演奏を聞き逃してしまう可能性さえあった。ここはとりあえず秀一の粗忽さ、もとい気遣いに感謝しておくべきだろう。

「ほら、久美子ちゃんも早くこっちへ。もうすぐ始まりますよ！」

緑輝に催促され、久美子は確保してもらつた席へと滑り込む。直後、会場が再び暗転し、ホール中にアナウンスの音が響いた。

「続きまして、プログラム二十九番。私立立華高等学校。課題曲、I。自由曲、ベルト・アッペルモント作曲、『トロンボーンのためのカラーズ』。指揮は熊田祥江です」

\*

「凄かったね」

「うん」

ホールから出てきた四人は一樣に呆けたような顔をしていた。空調の効いたホールから解放され、むわっとした熱気が籠るロビーから覗く空には、びつくりするほど大きな入道雲が浮かんでいる。

立華の演奏は、自分達の演奏こそ今大会最高の出来だと確信していた久美子の考えを一瞬で吹き飛ばす、爆弾低気圧みたいな素晴らしきだった。特に自由曲に関しては何名にも『トロンボーンのための』とある通り、まさに梓のためにあるような曲だ。ほぼ全編を通じてトロンボーンの高難度なソロが編み込まれたこの曲を、梓は全て完璧な演奏でやり切ったのけた。けれどそれ以上に特筆すべきは、立華の他のメンバーの演奏が恐ろしく洗練されていたことである。

昨年までの立華の座奏を元氣一杯で突き進むマーチングさながらのものだとすれば、今年の立華は冷静さや計算高さが加味され、全体としての音楽表現は数段も深みを増していた。その中でも際立って優れていたのはやはり、梓率いるトロンボーン部隊の演奏だろう。梓の水準に負けず劣らず、理想的な音色やダイナミクス、ハーモニーをあみかや志保らが難なくこなしていたのは、久美子達にとって十分に驚嘆すべき事態だ。

なお余談ながら、『カラーズ』は本来コンクール自由曲の枠には到底収まらないほどの長尺な曲のだが、立華のベテラン顧問である熊田先生のカットの賜物か、その構成は全く不自然さを感じさせないものとなっていた。これもまた、音楽としての完成度をさらに高める一因であった事は言うまでもない。

「この勢いで立華が関西大会に来たら、超強力なライバルになること間違いなしだね」

そう呟く葉月の声には張りが無く、まるでどこか遠い国で起こった出来事の話をしているみたいなお口ぶりだ。久美子も実のところ、立華の面々がこれほどまでに腕を上げているとは思っていなかった。噂には伝え聞いていたものの、格段に上達したという立華の演奏を実際に聴いたわけでは無かったので、多少心にゆとりを抱えていた部分が

無かったと言えば嘘になる。それ故に、本番の舞台で存分に鳴らされた立華の音にはすっかり度肝を抜かれてしまった。そのあまりの凄さに、あれが立華の演奏であることも、その立華とこの府大会での代表権を争っているという事実さえも、にわかには信じがたいくらいに。

「これで北宇治と立華、二校とも関西大会に進出できたら今年こそ決戦ですね！ 緑、わくわくしてきました！」

そんな中で一人、緑輝はごうごうと気炎を吐いていた。そう言えば緑輝は元々こういうメンタリテイの持ち主だった。音楽に関しての緑輝は戦闘民族か何かのように闘争本能の塊と化してしまう。それは彼女が完全に元の調子を取り戻した証とも言えるのだが、あんな演奏を聴いた後でもやる気をますます漲らせられる緑輝の胆力が、ちよつとだけ羨ましい。

「相手が立華だって勝たなくちゃ。私達は、全国で金賞を取るんだから」

麗奈もまた決意を新たにするかのようには、その瞳を静かに燃やしている。ああ、やっぱり麗奈はすごい。麗奈の中ではもう既に全国に行った後のビジョンしか描かれていないんだ。麗奈の横顔を眺めながら久美子はそう思った。府大会を勝ち上がることも、関西で立華と戦うことも、もしかしたら全国で金賞を取ることすらも、麗奈にとつては全て予想の範疇であり通過点でしかない。私もそうありたい。今はまだ全然届かないけれど、いつかじゃなくて必ず、追いつくんだ。麗奈に。この領域に。そして、もう一つの憧れに。

眼前に広げた手を、ぎゅつと強く握り締める。そしてその手で自分の胸をどんと叩いた。じんじんと響くその衝撃の余韻は、自分の中に残っていた不安や迷いを覚悟へと変えた、気がした。

出場校の演奏が全て終わり、審査員による数十分間の協議の時間を経て、ついに結果発表の時が訪れた。北宇治の一同も既にホール内に入り、その時に備えて待機中である。自分達の居るホール左側の対極、右側には、青い制服の一団が陣取っていた。北宇治と立華、どち

らの陣営も両手を組み顔を伏せ、発表の瞬間に備えて一心に祈り続けている。

「来たっ」

誰かの声がして、久美子はホール上段へと目を向けた。三人ほどの係員達が抱える大きなロール紙。そこには今さつきまで行われていた自分達の演奏、その結果が記されている。彼らがロール紙を階下に向けて解き放てば、否が応にも全ての結果が突き付けられるのだ。ここで金賞を取れなければ、その後に発表される関西大会への代表権もまた有り得ない。そうだ、金賞の欄に北宇治の名が無かったらおかしい。私達は全国に行くのだから。呟く久美子の手の甲に、己の爪がぎりりと食い込む。

「わあ、」

紙が大きく広げられ、そこに書かれた文字を全員が目で追った。銅賞。銀賞。そして、金賞。他のいくつかの学校に紛れて金賞の欄に書かれていたのは『北宇治高校』と『立華高校』、両校の名前だ。

「やったあー」

ホールのあちこちから歓喜の声が溢れ出す。その狭間で久美子はほうと一つ息を吐いた。そう、ここは抜けて当たり前。問題は其次、関西への代表権。もしここで北宇治の名を読み上げられなければ、自分達の夏はその瞬間に終わってしまう。正念場はここからだ。

ふと隣を見やると、麗奈も同じことを考えていたのか、こちらをじっと見据えていた。二人で頷き、そして互いに手を取り合う。行くんだ、必ず、全国に。心臓は次第にどくどくと早く大きく鼓動を打っていく。ひんやりと冷えたホールの中に居るはずなのに、全身からはねっとりとした汗が瀑布のように溢れ出ている。繋がれた二人の手は固く、指先一つだつてびくりとも動かない。ただその瞬間を、久美子は固唾を呑んで待った。

「この中より、関西大会に出場する高校は——」

係員の声に、その場の全員が押し黙る。久美子と麗奈は同時に顔を伏せ目を瞑った。祈れ。祈るんだ。こうして祈るのももう何度目になるのか、今は計算する気にもなれやしない。何に祈っているのかさ

え解らなかつた。だけど、祈るんだ。関西に行ける事を。そして、全国金賞を懸けた戦いが、まだ続く事を。

「神様っ」

小さく呟いたのはきつと葉月だろう。久美子の心臓は今にも張り裂けそうなほどぎゅうぎゅうと締め付けられていた。もうすぐ結果が出る。出てしまう。どうか、北宇治を。北宇治の名を。

久美子の、いや北宇治吹奏楽部全員のその願いは、

「二十六番、北宇治高等学校」

そのたつた一言で大きく弾けた。

「うわあああああ！」

周囲から一斉に上がった歓喜の声。喜ぶ者。感極まって泣く者。周囲と抱き合う者。様々な声色がそこには入り混じっていた。久美子は反射的に麗奈を見る。麗奈は汗だくの顔でこちらを見るなり、にかりと会心の笑みを浮かべた。さすがの麗奈と言えど、やはり発表の瞬間は緊張で胸が張り裂けんばかりだったのだろう。

「やったね、久美子」

「やったよ、麗奈」

久美子と麗奈は結んでいた手を一度解き、そして二人で互いの手をぱんと打ち鳴らした。麗奈と、仲間達と勝ち取った、京都府代表の栄冠。今年で三度目の筈なのに『もう慣れた』なんてことは無かった。何度味わってもこの瞬間はやっぱり堪らない。最高に気持ち良い。強烈な快感と、舞い上がる高揚感。びりびりと痺れる頭を手で押さええる久美子の目にはもう一度、光る涙の粒が溢れ始めていた。

## エピローグ

外の景色には夜の帳が下りはじめ、もうすっかり薄暗くなっていた。暦の上では立秋を過ぎる頃であり、ということは夏の盛りも間もなく終わりを迎えようとしている。日の入りは次第に早まりつつあり、合奏を終えて下校前の居残り練習を始める時間帯ともなると、こうしてとつぷりと日が暮れてしまうのだった。

コンクール府大会で無事関西大会への出場権を獲得した北宇治は、さらなる演奏力強化のため休み無く練習に明け暮れていた。今年の京都府代表は北宇治、立華、そして洛秋の三校。洛秋も関西大会常連の強豪校であり、油断ならない相手であることには間違いないのだが、恐らく今年の関西大会で最大の脅威となり得るのは立華だろう。立華にはマーチングコンテストに向けての練習もあるとは言え、北宇治とは比にならないほど膨大な時間を日々の練習に費やしていることは、以前に梓から聞いて知っている。府大会であれだけの演奏に仕上げてきた以上、関西大会までの三週間あまりでさらに磨きを掛けてくることは間違いない筈だ。

自分達も浮かれずに、気を引き締めてかからねば。意を決した久美子は今日も居残り練習をするために、いつもの渡り廊下へと向かっていた。

「関西大会、かあ」

誰にともなくひとりごちて、久美子はこれからのことを思い描く。関西大会が終わる頃には夏休みも明け、学校は文化祭だの中間テストだのといった行事が相次いでくる。全国大会はその後にあり、どうやったって久美子達三年生はそこで仮引退の時期を迎える。まだ仮とは言っても、そこを区切りに吹部は今の二年生を中心に据えた新体制で動き始めるわけであり、事実上の引退であることには違いない。そしてその数か月後にはこれまたどう足掻いても、久美子は自分の行くべき進路を決めなければなくなるのだ。

久美子に残された高校生としての時間は残り少ない。かと言ってこの前のように日程を詰め込み過ぎて、自分をだめにしてしまっ

元も子もない。残された時間の内で無茶はせずに、するべきことに向けて、最大限の力を振り絞る。考えてみればまるで矛盾だらけなのだ。それが上手く出来なければ望みは一つも叶わぬままだ。

『時間は無限じゃない。取りこぼしたらもう、取り戻せないよ』

いつぞやの麗奈の言葉がふと脳内に浮かぶ。当たり前前の事のようにでいて、それを意識しながら生きていくのはとても難しい。だからこそ、一瞬一瞬を大事に生きて行く必要があるのだろう。取りこぼしてしまった事を、後になってから後悔しないために。

そんなことを考えつつ渡り廊下へ出る扉に手を掛けたところで、久美子は渡り廊下に先客がいることに気が付く。薄く引かれた夕暮れの闇に溶け込むようにして、小さな人影がそこに座り込んでいた。風に撫でられさわさわと揺れる短く切り揃えられた黒髪。誰なのかを判別できた訳では無いのだが、久美子には何となく分かっていて。扉を開け、人影の元へと近づき、その名を呼ぶ。

「芹沢さん？」

びくりと肩を震わせ、それからゆっくりと向けられたその顔はやはり、雫のものだった。泣いていた、という訳でも無いのだろうが、彼女の表情はいつに無く物憂げで、周囲の暗さのせいもあってかとても儂げに見える。

「黄前先輩」

恐らく雫から初めて名を呼ばれたせいで、久美子は少々どぎまぎしてしてしまう。

「ええと、こんな時間にこんな所でどうしたの？」

なるべく自然に声を掛けながら、久美子は抱えていた椅子と譜面台をその場に下ろす。ユーフォニアムは流石に地べたには置きたくなかったので胸に抱いたままだ。校舎の窓から洩れる蛍光灯の明かりに照らされたベルがざらりと突き刺すような光を放つ。立って雫を見下ろす自分と、すっかり恐縮したかのように蹲る雫。この構図を客観的に見たら、まるでいじめの現場か何かみたいだ。もう夜遅くで周りに生徒達の姿が無かったのは不幸中の幸いと言えたかも知れない。「すみません。少し頭を冷やしました」

それはどうということなのだろう。誰かと喧嘩でもしたのだろうか。まさか、幸恵と？

「違います」

久美子の勘繰りに、雫はかぶりを振る。

「急にいろいろ、分からなくなってしまうって」

分からなくなった。雫の言葉を久美子も小声で復唱する。そう言えば、雫が何故北宇治に入ったのか、その理由を久美子は一度も聞いた事が無かった。幸恵と会話した中にもその事に関する言及は無かったと思う。これほど上手ければそれこそ立華なり洛秋なり、府内の強豪校からは引く手あまただったに違いない。それらを蹴って北宇治を進学先に選んだからには相応の理由があつた筈だ。少なくとも家から近いとか、成績的に入れるのがここだったとか、そういう程度の低い話ではない何かが。

「芹沢さんって、どうして北宇治を選んだの？」

その疑問は半ば無意識のうちに、久美子の口を突いて出てしまった。途端、雫は苦い物を口に含んだ時のような、とても気まずそうな顔をする。しまった。最近はどうつかり口を滑らせないよう気をつけていたつもりだったのに、肝心なところでやらかしてしまった。

「えっと、もしかして滝先生の指導に憧れて？」

久美子は頭の中からそれらしい理由を必死にほじくり返し、軌道修正を試みる。

「それも少しはあります」

少しなのかよ。久美子の肩がぐくりと下がる。他に何か理由らしい理由は無いか。いかにもというような、そんな理由は。

「本当は立華とか洛秋に行きたかったけど、学費とか大学進学を考えて北宇治を選んだ、とか？」

その言葉にも雫は首を振る。そして少しだけ、悲しげな瞳でこちらを見つめた。まずい。いっこうに見当がつけられない自分に雫は呆れてしまっているのかも知れない。重苦しい沈黙が続いて、久美子はどんどん焦りの念に掻き立てられる。雫が北宇治を選んだ理由。だめだ、さっぱり見当たらない。

そもそも久美子は雫の考えを類推できるほど、彼女の事を知っているわけでは無かった。というよりほとんど何も知らなかった。雫がどんなところに住んでいるのか。どんな家族構成なのか。いつからユーフォニアムを、音楽を始めたのか。雫がどんなことが好きで、休日はどんな風に過ごしている、友達はどれくらい居て——そんな、直属の先輩なら知っていて当たり前であろう後輩の身の上のことを、久美子は何も知らない。雫について知っている事と言えば幸恵と同じ方角に帰る事、そして毎朝早起きしてランニングをしていること、この二つくらいだ。

あたふたする久美子をよそに、雫はそつと目を伏せる。とりあえず何かを言わなければ。思い立った久美子が口を開きかけた時、それより先に雫が語り始めた。

「私、小学四年生の時に音楽を始めたんです」

小四の時。それを聞いて久美子は意外に思う。自分の知っている音楽の上手な人達は麗奈然り、あすか然り、大抵はもつとずっと幼い頃から楽器を始めているケースが多かった。なのでてつきり雫も小さい頃から何らかの英才教育を受けているのでは、と今の今まで睨んでいたのだが。

「ひよつとして、学校の音楽クラブとかで？」

「はい」

雫は小さく頷く。

「クラブには、同級生だった子に誘われて入りました。最初は他にユーフォをやる子がいなかったから、当時の先生にユーフォをやってみないか、って勧められたんです。それまで音楽をやったことは無かったですけど興味はありましたし、とりあえず吹いてみようって思っ、それでユーフォを始めました」

思いの外、雫からはすらすらと言葉が出てくる。それを聞きながら、以前に幸恵と下校した折に彼女が話していたことを、久美子は記憶の底から引っ張り出していた。

『芹沢さんって、意外と普通に色々喋るんだね』

別に幸恵の言を信じていなかった訳ではないのだが、こうして実際

に雫と一対一で会話をしてみるとなるほど、口を開いた彼女はいたって普通の少女だった。無口で不愛想、みたいだに思っていたのはひよつとして自分の先入観、ただの思い込みだったのかも知れない。

「他に家族で誰か、楽器をやったとかだったの？」

「いいえ。私一人っ子でしたし、親はあまり音楽に興味が無かった人達なので」

知られざる雫の音楽歴と家庭環境。それは驚くことに、姉妹の有無という点を除けば、久美子のそれとほとんど全く一致していた。

「けど私が音楽を始めてから、親は色々協力してくれました。練習用の教本やCDを買ってもらったり、朝練用にお弁当を作ってくれたり、練習で帰りが遅い時は学校に迎えにも来てくれて。応援してもらってる分、頑張らなくちゃと思つて毎日練習しました。クラブが休みの日は楽器を家に持ち帰つて、近場の公園で吹いたりして」

うなじの辺りが妙にひりひりする。誰よりもあすかに似ている、と思つていた雫のその境遇は、むしろ自分にこそ近かった。以前に幸恵から少しだけ聞き出していたものの、あの程度の情報では想像すら出来なかったし、出来たとしてもそれを信じることも難しかっただろう。彼女もまた音楽的に恵まれた環境の中で腕を磨いてきた訳では無かったのか。そう思うと、雫に対して微かに親近感が湧き始めるのを感じる。

「私も小四の時、音楽クラブに入つてユーフォ始めたんだよ。最初はお姉ちゃんの影響でトロンボーンやりたかったんだけどね」

「それ、幸恵からも聞きました」

雫の顔が少しだけ綻んだ、ような気がした。平素あんなに凜としている雫がこんな表情を見せることもあるなんて。そのあまりの柔らかさにあてられて、久美子の心臓がきゅつと締まる。

「毎日練習を頑張つたおかげで、中学に入る頃にはかなり上達もしていました。その頃は楽器を吹くのが本当に楽しくて、無我夢中で吹いてて、部内の上手な先輩の演奏を勝手に手本にしてたんです」

そう語る雫の横顔を眺めながら、久美子は自分の中学時代を思い出す。自分もそうだった。二つ年上の先輩は、中学に上がりたてだった

自分に優しくしてくれて、仲良くしてくれた。すごく良い先輩だと思っていた。だから練習だって人一倍頑張って取り組めたのだ。あの日、あの時まででは。

「そして中学一年の時、コンクール前の部内オーディションで、ソロを吹くように指名されました」

雫の目つきが僅かに霞む。久美子にも似たような経験がある。先輩を差し置いてレギュラーに選ばれた、中一の夏。その日から先輩の態度は変わった。

『あんたさえ居なかったら、コンクール吹けたのに！』

先輩に放たれたその一言は、今でも鼓膜に焼き付いて離れない。あの日を境にして先輩との関係は断たれ、結局修復も出来ぬまま先輩は卒業してしまった。それは苦い記憶として今でも久美子の心の奥底に封印されている。そんな経験を、もしかして雫も味わってきたのだろうか。吹奏楽の超強豪である聖女出身の彼女だけに、その可能性は十分に考えられることではあった。

「その時、その先輩に言われたんです。『芹沢さん、いつも練習頑張ってたもんね。芹沢さんが努力して来た成果だって分かっているから、私も安心してソロを任せられる。私の分まで頑張っただけね』って」

「え、」

久美子は溜まった息を短く漏らす。その流れだけは自分と雫とで、大きく異なる展開だ。

「私、嬉しかったんです。こんなに上手い先輩が自分を見てくれる。認めてくれる。もつと上手くなればもつと沢山の人が自分を認めてくれる、と思っただけ、それからますます練習に打ち込むようになりました」

そう語る雫は、なんだか活き活きしていた。そうか。もしかしたら自分だって、あの時先輩が違う反応をしてくれていたなら、もつと違う自分になれていたのか。目の前にいるこの子のように、上手くなることももっと早い時期から前向きになれたかも知れなかったのか。別に今更あの先輩を恨むなんてことはしないけれど、久美子は少しだけ悔しかった。先輩の態度に負けて周囲の空気を窺うようになってし

まった、過去の自分自身が。

「中学三年に上がった頃には、部内で他の子には負けなくらい上手になってました。けれど目の前に目標が無くなって少し物足りないような気持ちもありました。そんな時、たまたま参加した地区の定期発表会の演奏で、すごく理想的なユーフォの音に出会ったんです」

「去年あった演奏会だね。さっちゃんも参加してたって言ってた」

はい、と頷きながら、雫は少し視線を彷徨わせる。

「その音は温かくて、どこまでも伸びていって、ものすごく上手で。あ、私もこんな風に吹きたい、この人の演奏を超えるような演奏がしたいって、心から思いました」

「わかる、その気持ち」

久美子の脳裏にあすかの姿が浮かぶ。久美子にとってのあすかは今でも別格の存在であり、彼女が奏でた音の一つ一つは今なお指標たり得るものだ。他に上手い人はひよつとして世界中にたくさんいるかも知れなくとも、その音色は、あすかのユーフォが紡ぎ出す響きは、きつとずっと久美子の憧れであり目標であり続けることだろう。

「それで、その音の持ち主って誰なの？」

久美子はそれまでの会話の流れから、ごく自然にその質問をしたつもりだった。ところが訊かれた側の雫は何故かそこで言い淀んでしまった。言うべきか、言わざるべきかというように、口をぱくぱくと上下させるばかりで、その喉からは一向に音が出てこない。

「芹沢さん？」

急に具合でも悪くしたかと心配になって、久美子はしやがみ込み雫の顔を覗き見る。互いの前髪が触れ合うほどの距離。雫は一瞬ちらりと久美子の瞳を見て、それからぱつが悪そうに、その顔を背けた。

「……先輩です」

「へ？」

「黄前先輩です。あの時、演奏会で聞いたユーフォソロの音、とっても綺麗でした」

理想の音が、その人が、わたし？ 雫が？ あの雫が、私を？ どういうこと？ 久美子の頭脳はそこで、完璧に活動を停止してしまっ

た。

「私、先輩の音に近づくために北宇治に行こう、って決めたんです。中学のうちには先輩の音を思い浮かべながら毎日必死に練習しました。OBの先輩や顧問の先生には他の学校を勧められましたけど、進路は北宇治一本に絞って、それで北宇治に入りました」

雫は未だ顔をこちらに向けない。けれど、彼女の顔が恥ずかしさを堪えるようにくしやりと潰れているのを、久美子の目ははつきり捉えてしまった。今の話を総合すれば、雫が北宇治を選んだ真の理由は自分のユーフォの音に憧れたからだという事になる。そう言われれば、と久美子は思い出した。あの日、あの発表会でソロを吹いたのはトラペットの麗奈だけではなかった。滝からの指名でユーフォのソロを吹いたのは、そうだ、自分だ。夏紀が気前良く後押しをしてくれて、本番でソロを吹いて、その音を雫が聴いて、自分に憧れて北宇治に入学した。順番としてはこうなる。そしたら何だ。雫はそれからずっと、今の今まで、他でもない私を追い掛けながらユーフォを吹いていたということだったのか！

「芹沢さん……」

何をどう言うべきか、言葉に迷う。何だろう、こっちも猛烈に恥ずかしい。というより羞恥心と罪悪感がない交ぜになったような、そんなとても複雑な心境だった。無邪気にあとを追って来る後輩を、自分は一方的に倒すべき敵と見做して扱ってきたというのか。だが、いやだからこそ、これまで久美子は雫にこんな話を聞くことも無かったし、彼女の事をほとんど何も知らないままだったのだ。無意識であれ敵と考えていた雫との間には、自分でも知らぬ間に壁を作っていたのだから。

『ずっと憧れてました！ 私を弟子にして下さい、師匠！』

入学式の日、幸恵が麗奈に言い放ったあの言葉が突然ぶわりと全身に降りかかってくる。ごめん麗奈。幸恵に絡まれる麗奈を内心面白がっていたあの時の自分を、胸ぐら引っ搦んでばんばん叩いてやりた。お前に麗奈を笑う資格なんか無いぞ、お前もそのうち同じ目に遭うことになるんだぞ、って言ってるやらない。

それに、幸恵にも後で謝らなければいけないさそうだ。雫がこんなことを考えていたなんて初めから知っていたなら、きつと雫が敵とかどうとか、そんなやり取りで幸恵との関係をぎくしゃくさせる必要も無かったに違いない。やっぱり私、まだまだだな。そう思うと同時に、あれほど追い詰められ苦しめられた筈の『芹沢雫』という存在に今、久美子は堪えがたいほどの愛くるしさすら感じ始めてしまっていた。「上手くなれば人は自分を認めてくれる。だからオーデイションで勝てれば、きつと黄前先輩にも認めてもらえる。そう思って来ました。けどソロオーデイションで先輩に勝てなくて、これじゃ先輩に認めてもらえない。その時初めて、今まで自分がやって来た事は全部間違ってたのかも知れない、って思ったんです」

雫の声色がそこでまた暗く沈む。自分を認めてくれる。その一言にハッ、と久美子が思い返したのはサンフェス前の練習の景色だった。雫が早朝ランニングをしているという話を本人から聞かされて、それに自分が何かを言った時、雫の様子がいつもと何か違ったような気がしていた。あの時自分は、何と言ったんだっけか。

『芹沢さん頑張ってるんだね』

いや違う。確か……。

『芹沢さん、すごいね』

こうだ。その時雫から感じ取ったひとかけらの違和感。その正体は何だったのか、今となってはもはや明らかだ。あれは、あの時の雫は、照れていた。憧れの人に面と向かって己の努力を褒められて、自分をひとつ認めてもらえたと感じた雫は、内心嬉しがっていたのだ。眉一つ動かさぬ彼女の鉄仮面ぶりにすっかり騙されていた。あのみぞれの表情変化ですら微細に読み取れると自負していた自分なら、冷静によくよく観察していれば、雫のそんな感情の機微にだって気付けなかった筈は無いのに。

痛恨の極みだった。後輩を勝手に敵と認定して、雫本人が何を考えているのかなんて、今までこれっぽっちも考えてきやしなかった。そして今、その事で雫は深く傷付いている。落ち込んでいる。それは雫の一方的な思い込みに過ぎない事なのかも知れない。例え演奏など

上手くなくなつて、こんなに自分の事を慕ってくれる後輩だと初めから解っていたなら、自分は雫の事を認めてもつと可愛がつていただろう。しかし恐らく、それだけでは雫は満足しないのだ。この子にだつて自分と同じように『誰にも負けたくない、誰より上手になりたい』という願望がある。きつと雫はそれを認めて欲しかった。音楽が好きで、ユーフォが好きで、誰よりも上手になりたいと願っていて、実際に上手くなってゆく芹沢雫という存在を、憧れの人である黄前久美子に認めて欲しかったのだ。

けれどそれを示すチャンスだつたソロオーディションでの対決に敗れてしまったが為に、雫は認めてもらう為の機会を失つたと感じてしまっている。ならば今、自分はどうするべきなのだろうか。何を言えば雫は納得するのか。どうすればいい？

久美子はしばらく逡巡していた。もう個人練のことや関西大会のことなど、すっかり頭から抜け去ってしまった。今はとにかく、目の前に居るこのひたすら不器用で、けれど可愛くて可愛くて仕方のない後輩の事をどうしてあげるべきか、考えなくてはならない。

ひとしきり悩んだ後、「よし」と決意して久美子は立ち上がる。

「芹沢さん……雫ちゃんに、私から一曲贈るよ」

え、と雫が顔を上げた。突然の久美子の行動に、雫は訳が分からなといった面持ちだ。

「雫ちゃんならすぐ吹けるようになると思う。だから、良く聴いててね」

そう前置きして久美子はユーフォを構え、一つ息を吸い込んだ。そして、あの曲を奏で始める。あすかからこの曲を託された折『今度は黄前ちゃんが後輩に聴かせてあげて』と言われていた。その機会はなかなか訪れないままで、ひよつとしたら自分が卒業すると共に北宇治から失われてしまうかも知れない、と内心腹を括つてもいた。けれどこうしてこの曲を託すべき時と相手が、ついに訪れた。あすかとの約束を一つ果たせたように思えて、安心したような、何か寂しいような。そんな万感の想いも込めて、久美子は一つ一つ音を鳴らしていく。

演奏が終わった時、気付けば雫は立ち上がっていた。その表情から

憂いはすっかり取り払われ、蕩けたような顔でこちらを見つめている。

「どうだった？」

マウスピースから口を離し、久美子は雫に尋ねる。

「すごく、すごく綺麗な曲でした。温かくて、優しく、切なくて。先輩の気持ちが全部、音に混じって響いてるみたいで」

「でしょ」

無垢な反応を見せる雫の姿に、久美子の顔もひとりでにやりと会心の笑みを形作る。

「私、この曲は知らなかったです」

知らなくても無理はない。だって世に出回っているものではないから。でも、と久美子は前置きをして、

「これは私にとって、とっても大事な曲。名前はね——」

その名を告げると、雫は驚いたように目を見開いた。自分の演奏とその曲名から、何を伝えたかったのかを雫に感じ取って欲しい。伝わって欲しい。久美子はそう願った。

「作曲した人の事は色々あつて言えないんだけどね。私が憧れてる先輩から譲り受けたんだ。今度は雫ちゃんがこの曲を、誰かに吹いてあげてね」

もう一回聴く？ と尋ねると、雫は「お願いします」と返事をした。

久美子は再びユーフォを構え、もう一度、今度は少しゆっくりと、その曲を吹き上げる。

あすかが奏でていたその曲の音色は本当に美しく、切なくて、温かくて、この世界に存在する全ての感情を音に替えて演奏しているよな、そんな豊かな音色だった。今の自分はその音色に少しでも近づけているだろうか。それは分からない。けれど少なくとも、今この曲を吹いている自分は、雫に伝えたいものを伝えるために吹いている。言葉にしまえばとても安っぽい、でもとても大事なこの想いを、余すところなく伝えるために。

空には既に満天の星空が散りばめられていた。校舎の明かりも一つずつ消えてゆき、ほとんど真っ暗な空間には雫の吐息とユーフォの

音色だけが広がり場を包み込んでいく。久美子の胸の内は、今にも溢れんばかりの感情で爆発しそうだった。こんなにも可愛い後輩の事を、これから自分をもっと大事にしていかなければいけない。そして願わくば、雫にこの音と想いを、受け継いでいって欲しい。

『響け！ ユーフォニアム』

その願いを、全ての音に込めて。